

湖西線關係遺跡調查報告書

本文編

滋賀県教育委員会

湖西線関係遺跡調査報告書

本文編

1973. 5

滋賀県教育委員会
滋賀県文化財保護協会

序 文

比叡山塊と琵琶湖にはさまれた狭長な大津北郊は、崇福寺跡や南滋賀町磨寺、あるいは滋賀里百穴など多くの史跡や埋蔵文化財を包蔵した文化財の一大宝庫であります。

ところが、昭和49年に完成をめざす国鉄湖西線が、江若鉄道の廃線敷に沿って敷設されることになり、滋賀里縄文遺跡をはじめ、いくつかの埋蔵文化財が破壊の危機にたつことになりました。

このため本委員会では、文化庁と協議を重ね、当地域にかねてより想定されてきました「大津京跡」の推定地域として、滋賀里縄文遺跡を含む錦織から穴太にまたがる3.4kmを全域調査する運びとなりました。

本報告は、二年間にわたる調査、整理の集大成であり、調査委員、調査員の絶大なご努力の賜ものにはかりません。

この報告書が有效地に利用されますとともに今後の文化財保護の高揚に幾分なりとも益するところがあれば幸いであります。

おわりに、調査委員会各位、ならびに格別のご協力とご支援をいただきました関係機関、調査員その他地元の方々に深く感謝の意を表する次第であります。

昭和48年3月

滋賀県教育委員会

教育長 柳原太郎

例　　言

1. 本書の構成は時代別におこない、第1章 縄文時代、第2章 赤生時代、第3章 古墳時代、第4章 飛鳥時代以降とした。このうち第3章では6世紀末までを扱い、以後を第4章としたが、これはあくまでも便宜的な分断にすぎない。
2. 本文中の数ページにわたる表は、関連する各章末へ一括挿入した。
3. 遺物番号の表示は、本書の図版・図面・表・本文を通じて統一した。まず、各章の時代区分にしたがって縄文時代をA、赤生時代をB、古墳時代をC、飛鳥時代以降をDとし、さらに遺物の種類によって木製品をW、石器・石製品・玉類をS、骨角器をB、土製品をC、瓦をR、古錢をMとした。なお、土器については種類別表示の記号を除いた。以上、2つのアルファベット記号の組合せによって、遺物の時代と種類を示し、その後に個々の遺物の整理番号を付した。たとえば、BW10は赤生時代の木器の10であり、C20は古墳時代の土器の20である。
4. 本書の執筆者および執筆分担は以下の通りである。

田辺昭三　序章、終章

加藤　修　第1章、第3章・2・(4)・土器

丹羽佑一　第1章・1・(4)・Aのうち、精製土器の部分を分担執筆

吉川義彦　第1章・1・(4)・B・石器、第3章・2・(4)・石製品

高谷美由紀　第1章・1・(4)・A・晩期以前の土器

太田芳美　第2章・1・(1)、第3章・1・(1)、……井守と共に執筆

井守徳男　第2章・1・(1)、第3章・1・(1)、……太田と共に執筆

萩本　勝　第2章・1・(2)、第3章・1・(3)・ⅢE区の調査

福岡澄男　第2章・2、第3章・1・(2)・立地、IV区の堅穴住居址群、小結、(3)・IVB区南半の調査、同2・(1)、同(2)

松沢　修　第3章・1・(2)・小結、同(3)・IVD区の調査、VA区の調査、VD区西の調査
VD区東半の調査、2・(3)・6世紀後半の土器、小結、第4章1、2・(1)、同
(2)・瓦、鐵貨、金銀製止め具、鐵器・銅器・鰐羽口、

永田信一　第3章1・(3)・IVB区北半の調査

野元晴範 第3章・2・(3)・ⅢE区下層の土器, IVB区下層の土器, ⅢE区上層の土器, 小核,
江口千恵子 第3章・2・(4)・木器, 第4章・2・(2)・木器,

5. 第4章末の〔「大津京」関係文献目録〕は、西田弘『湖都大津』所収の文献目録に、
井上満郎および永田信一製作の文献目録を加え、これを石田利子が検討・整理したもの
である。

6. 本書の構成、編集については田辺が立案し、編集実務は主として加藤が担当した。
最終的な調整・校正は田辺・加藤が共同で行った。

湖西線関係遺跡発掘調査報告

本文目次

序 章 発 挖 調 査 の 経 緯

1 調査にいたる経緯	1
2 調査の経過	2

第1章 縄 文 時 代

1 滋賀里遺跡の調査	11
(1) 研究の歩み	11
(2) 遺跡の立地	11
(3) 墓址と貝塚	13
(4) 遺物の検討	33
A 土 器	33
B 石器・骨角器・木器・土製品	31
2 各 地 区 の 調 査	43
(1) I F 区の包含層	43
(2) 他の地区出土の縄文式土器	44

第2章 弥 生 時 代

1 遺 跡 の 調 査	113
(1) 方形周溝墓	113
(2) 溝跡・その他	116

2 遺跡の検討	119
(1) 方形周溝墓出土の土器	119
(2) 各地区出土の土器	120
(3) 石器・木器	122

第3章 古墳時代

1 遺跡の調査	133
(1) 方形周溝墓	133
(2) 壴穴住居址	135
(3) 溝跡・その他	138
2 遺物の検討	147
(1) 方形周溝墓出土の土器	147
(2) 壴穴住居址出土の土器	147
(3) 各地区出土の土器	148
(4) 木器・その他	152

第4章 飛鳥時代以降

1 遺跡の調査	193
(1) 溝跡・獨立柱建物の調査	193
(2) II H区の調査	194
2 遺物の検討	196
(1) 土器	196
(2) 瓦・木器・その他	199

終章 —総括にかえて— 211

「大津京」関係文献目録 222

挿 図 目 次

挿図 1	Ⅲ C 区墓址 81 号集竹墓実測図 (製図 吉川)	15
2	突起の種類 (製図 桃野)	22
3	凹底に認められる使用痕 (撮影 森)	25
4	樹皮紐で補修した鉢 (A250) (撮影 森)	26
5	滋賀里 II ~ V 漢鉢、壺、鉢、壺、壺 (東北・北陸系土器) (製図 丹羽)	27
6	Ⅲ C ・ Ⅲ D 区出土の石器実測図 (実測・製図 吉川)	38
7	Ⅲ D 区出土の弓 (AW19) の弓弦部 (撮影 森)	41
8	Ⅲ C 区出土の樹皮巻きの把手 (撮影 森)	41
9	Ⅲ D 区出土の火鉗臼と火鉗杵 (撮影 森)	41
10	I 区 1 ~ 3 号溝実測図 (製図 吉川)	117
11	各地区出土の石器実測図 (実測・製図 吉川)	123
12	I 区 1 号溝出土の鍛冶実測図 (実測・製図 福岡)	124
13	IV 区 9 号住居址実測図 (製図 福岡)	136
14	IV D 区遺構実測図 (製図 吉川)	141
15	V A 区 18 号溝東北辺内の杭列 (撮影 荒木一紀)	143
16	V A 区 19 号溝の溝内セクション (撮影 荒木)	143
17	V D 区西半 4 号溝 (方形四溝) 東南辺と溝内セクション (撮影 荒木)	145
18	V D 区西半 5 号遺構内の土塗出土状態 (撮影 荒木)	145
19	Ⅲ E ・ IV B 区出土の手づくね土器実測図 (実測・製図 野元)	150
20	V A 区 1 号住居址出土の弔柱・用途不明木器と V A 区出土の琴柱実測図 (実測 江口, 製図桃野)	153
21	各地区出土の鉄轆車実測図 (実測・製図 吉川)	154
22	各地区出土の砥石実測図 (実測・製図 吉川)	155
23	各地区出土の玉類実測図 (実測・製図 吉川)	156
24	Ⅲ E 区出土の石製模造品・子持勾玉実測図 (実測・製図 吉川)	156
25	各地区出土の土鍤実測図 (実測 加藤, 製図 松沢)	157
26	V D 区西半大溝内の板・枕材の出土状態 (撮影 荒木)	193
27	南滋賀寺出土の瓦 (撮影 西田 弘)	199
28	II H 区出土の金銅製止め具実測図 (実測・製図 松沢)	200
29	比叡山中腹より「大津京」推定地付近を遠望 (撮影 森)	211
30	抜歯人骨 (Ⅲ C 区 163 号土塗墓) (撮影 森)	212
31	弓 (AW18) の出土状態 (撮影 森)	214
32	6 世紀後半の建築材出土状態 (IV B 区開析谷中の褐色粗砂層) (撮影 森)	217
33	溝の腰岸用石材と建築材 (7 世紀前半, V D 区東半 6 号溝) (撮影 荒木)	218

表 目 次

第1表	土壌内出土の土器型式	16
第2表	突起の種類	23
第3表	滋賀里遺跡の晩期土器組成	26
第4表	滋賀里遺跡出土晩期以前の土器型式	20
第5表	石斧の観察	32
第6表	石鎚の出土層位	33
第7表	石鎚の型式別比率	34
第8表	石鎚の型式別重量	34
第9表	遺跡出土石匕・石錐・不定形石器の観察	35
第10表	石錐の重量及び出土層位	36
第11表	砥石・敲石・石劍類の出土層位	37
第12表	出土石器・玉類の観察	39
第13表	Ⅲ C区墓址主要な遺構の観察	51
第14表	滋賀里遺跡出土の晩期縄文式土器の観察	60
第15表	滋賀里遺跡出土の骨角器の観察	105
第16表	滋賀里遺跡出土の木器の観察	108
第17表	滋賀里遺跡出土の土製品・紡錘車の観察	111
第18表	弥生時代の石器	122
第19表	方形周溝墓内弥生式土器の観察	127
第20表	各地区出土弥生式土器の観察	128
第21表	竪穴住居址の観察	163
第22表	土錐の分類	158
第23表	方形周溝墓内土師器の観察	166
第24表	竪穴住居址出土の土器の観察	167
第25表	各地区出土古墳時代土器の観察	169
第26表	古墳時代木器の観察	185
第27表	古鏡の種類	200
第28表	飛鳥時代以降の土器・陶磁器の観察	202
第29表	飛鳥時代以降の木器の観察	208

序 章 発掘調査の経緯

1 調査にいたる経緯

1967年の分布調査 山科を起点に、琵琶湖西岸を北上して寄掛にいたる国鉄湖西線の建設事業がはじまつたのは、1964年のことであった。

滋賀県教育委員会では、この瀬西様が「大津京」推定地、滋賀里縄文遺跡など、既知の重要遺跡地内を通過するため、建設工事の着工にさきがけ、1967年に国庫補助事業として、既知の遺跡の範囲確認と路線にかかる新遺跡の発見とを目的とした分布調査を実施し、その結果をまとめた。¹⁾

発掘調査の準備 われわれが発掘調査を予定した範囲は、1967年に実施した分布調査の結果にしたがい、さらにその後の新知見を参考にして決定した。

調査予定範囲は、大津市錦織から同穴太までの南北約3.4kmとし、東西の範囲は路線幅の10m前後に限定した。

この調査範囲の決定にあたって最も重視したのは「大津京」推定地であり、従来考察されてきた有力な宮跡推定地のすべてを含むよう留意した。しかし、発掘調査の実施にあたって、調査対象地内の埋蔵文化財については多少にかかわらず全て調査することを原則とし、これを実行した。

発掘調査は、まず遺跡の規模を、より正確につかむために、調査範囲全般にわたる緻密な遺物分布調査、ボーリング調査、試掘調査を実施することとし（第一次調査）、次いで、第一次調査の結果にもとづき、重点的な発掘調査を実施することとした（第二次調査）。なお、第一次調査で特に遺構や遺物の確認できなかった地点については、旧地形を復原するための土層調査を行うことにした。

発掘調査の期間は、滋賀県教育委員会、日本鉄道建設公団とわれわれ調査団との間で、再三にわたる協議の結果、1971年3月より1972年3月までの13ヵ月間とし、1972年4月から1973年3月までの1ヵ年間を発掘資料の整理と報告書作成の期間とした。

上記の調査計画にしたがって、調査費は次のように決定した。

第一次発掘調査費	20,000,000円
第二次発掘調査費	36,000,000円
整 理 費	18,000,000円
*人骨取りあげ費	1,000,000円
*整理室建設費	2,000,000円
計	77,000,000円

(*印は発掘調査及び整理作業の進行過程で追加されたものである)

発掘調査を担当する調査団は、調査委員(5名)、調査団長(1名)、調査員(15名)、調査補助員(30名)をもって編成したが、発掘調査の進行過程で調査員および調査補助員には大幅な出入りがあり、当初の予定よりもはるかに大規模なものとなった。調査委員および調査団の構成については、次節に掲げた通りである。

2 調査の経過

調査の方法 今回の調査は、鉄道線路敷内という限定された範囲について実施したため、調査の方法に関してさまざまな配慮が必要であった。

調査範囲は、先に述べた通り錦鏡から穴太までの南北約3.4kmに及ぶが、東西幅は路線数の約10mに板限された。ちょうど、湖西の平野部を幅10mのトレンチで南北に継続するかたちとなる。調査対象地のこうした条件を生かして、調査の目的を十分に達成するためにはどのような調査方法をとるべきか、それがわれわれにとって先決の問題であった。

われわれは、まず調査範囲全体を南から北へむかって、Ⅰ～Ⅴ区に地区区分した。各区の境界は条里推定線上にのる川や道路に求めたので、南北の距離は各区ごとに一定でない。この各区を、さらに100mごとに小区分し、南から順にA、B、C……とした。但しⅠ区のみは調査範囲の拡大を想定して北から南へA、B、C……とした。小区分した範囲はこれを1mごとに細分して最小単位とした。したがって、調査地内における南北の位置表示は、例えば「Ⅲ C-50」(Ⅲ区の基点より北へ250mの地点)となる。

また、東西の位置表示については、調査予定地の西端から、さらに西へ寄った地点を仮の基点とし、西から東へ数字とアルファベット2文字の組合せによって、順に1mごとに区分した。すなわち、基点を1 a aとし、東へ1mごとに1 a b, 1 a c, ……1 z z, 2 a a……となり、東限はない。ただ、この場合基点の設定と、そこから調査地点まで定点を移すこととが技術的に困難なため、現実にはⅡ A-0 0の地点を東西線の2 a aと定

発掘調査の進行状況

地区 年月	I E F	I A l D	II A l C	II E l H	III B	III C 南	III C 北	III D	III E	III F	IV A	IV B	IV C	IV D	V A	V B	V C	V D 西	V D 東
1971																			
2																			
3																			
4																			
5																			
6																			
7																			
8																			
9																			
10																			
11																			
12																			
1972																			
1																			
2																			
3																			
4																			
5																			

1. 縄文時代 2. 弥生時代 3. 古墳時代 4. 飛鳥時代以降

め、ⅡA-2 a a-00の点を実際上の基点として、全区の割付けを行なった。

上記の約束にしたがって、南北、東西の位置表示を組合せることによって、調査範囲内の全ての地点を1m×1mの単位で位置づけることが可能となった。例えば、「ⅢD-2 a z-50」は、Ⅲ区の基点より北へ350m、東西線の基点としたⅡA-2 a a-00の点から東へ25mの地点ということになる。

以上のように、今回の調査でわれわれが採用した地点表示法は、やや複雑であり、しかも東西の位置表示にアルファベットを用いたため実距離がすぐに判明し難いなどの難点をもっている。しかし、この地点表示法を採用することによって、今回の調査対象地を含む湖西平野の全ての地点を記号で表示することが可能となり、また既知の遺跡や今後の調査による新遺跡の記録にも適当であると考え、敢えて採用した。

なお、本報告書中の地点表示は、複雑化を避けるため、原則として南北の区分（例えばⅢE区）のみに限った。

発掘調査の経過 発掘調査に着手したのは1971年2月末であった。

調査の進行状況については、およそ別表の通りである。発掘調査は、一応1971年6月を目途に第一次調査を完了し、引き続き第二次調査へ進むこととしてスタートした。しかし、用地問題などからみ当初の予定通りに進行させることができなかったため、臨機の处置をとて調査を進めた。そのため、予備調査と本格的調査とが並行して行なわれた期間もあった。

第一次調査は、主として旧江若鉄道敷を対象にして実施した。この旧江若鉄道敷と湖西線予定地とは、Ⅱ区北部とⅣ区南部とで重なっているが、大半の地区では多少の間隔をもってずれている。しかし、両者の最大間隔は50mをこえないので、新路線予定地がずれているところでも旧江若鉄道敷内で遺構や包含層の存在を確認し、その結果を参考にして、第二次調査で新路線予定地の調査を行うこととした。なお、新路線と重複しない旧江若鉄道敷の遺跡については、例えばⅢB～ⅢD区のように、縄文晩期の遺物包含層を確認したが、その上面で止め、本格的発掘調査を行なわず、そのまま埋め戻したケースもある。これは、当面遺跡が破壊されることはないと判断したからである。

第二次調査の進行過程で、多くの遺構遺物を検出したが、その中には各期にわたる大量の植物遺体があった。また、滋賀里遺跡の調査では、人骨、鳥・獸・魚骨、貝類、植物遺体、木器、石器などの各種遺物が出土した。これらの遺物については、それぞれ専門研究者の鑑定・指導を受け、その成果の一部は本文中或いは付論文として本報告書中に収録した。

発掘調査にあたって、遺構や遺物の検出に意を注いだことはいうまでもないが、同時に調査地全体の旧地形を復原するための土層調査を実施した。必要個所に $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッドを設定し、ほぼ -4m まで掘り下げる、層序と各層内の混入遺物とを観察し、各層の堆積年代を推定した。Ⅱ H区では、 -4m でなお奈良・平安時代の遺物を含む個所もあったが、そのような場合はさらにハンド・オーガーを用いてボーリング調査を実施し、 -4m 以下の堆積状態まで観察し、旧地形復原の資料とした。

滋賀里縄文遺跡をはじめ予想をこえた遺構・遺物が検出されたため、発掘調査は1972年5月末まで延長した。この15ヵ月間にわたる発掘調査に参加した調査員および調査補助員の延人數は、11671人に達した。

整理と保存 1972年6月から、発掘調査にひきつづいて出土遺物と調査記録の整理を開始した。

整理作業は、一応時代別に分担を決め、各時代の主担当者を以下の通りとした。

縄文時代	加藤 修	弥生時代	福岡澄男
古墳時代	福岡澄男	飛鳥時代以降	松沢 修

このほか、整理作業に専従し、整理作業の一部を責任分担した者は、以下の通りである。梅川光隆、江口千恵子、岡戸恵子、寿福 澤、高谷英由紀、永田信一、丹羽佑一、野元晴範、萩木 勝、宮地美千代、桃野真晃、吉川義彦

調査と整理の進行過程で、事前の協議にもとづき、われわれは調査地全域の中で6カ所の遺構について保存を要望したが、日本鉄道公団側の了解によって、要望地点の全てを保存することになった。すなわち、高架路線の橋脚の間隔をひろげ、或いは設計変更によって橋脚の位置を移動することで、遺構を保護したのである。保存した遺構は次の6カ所である。

地 点	保存範囲
Ⅲ C区開折谷の木器（縄文晩期）出土地点	22.0m
Ⅲ C区墓址（縄文晩期）	35.0m
Ⅲ D区貝塚（縄文晩期）	22.0m
IV B区方形周溝墓（古墳時代）	19.0m
IV B区方形周溝墓群（弥生時代）	19.0m
VC区堅穴住居址群（古墳時代）	22.0m

なお、Ⅲ C区墓址のうち、建設工事の諸事情によって破壊の止むなきにいたった人骨を

伴う土墳墓3個所については、これを土壤ごとに切取って保存することにした。人骨を土壤ごとに取上げることは、これまで試みられた例がなく、技術的に極めて困難なため、奈良県立文化財研究所技官沢田正昭氏の直接指導によってこれを実施し、成功した。

保存の決定した各遺構については、石灰を用いてその位置を明確にしたのち、埋め戻した。出土遺物と記録類の整理は、1973年3月末をもって一応終了したが、検討の余地を残した問題は多く、今後、再検討の機会を持ちたい。

出土遺物の総量は、調査の最終段階で平箱2000箱をこえた。整理作業終了後、これらの遺物は湖西線高架下に新設した整理室へ仮りに保管し、管理の難かしい木器類などは、近江風土記の丘資料館へ保管を依頼した。だが、このような遺物保管の現状はあくまで暫定的な措置にすぎないので、今後、早急に各種遺物の万全保存体制と必要な施設の建設が実現するよう要望したい。

調査団の構成 2年間にわたって実施した湖西線関係遺跡の調査は、日本鉄道建設公団の委託により、文化庁の指導を受けて滋賀県教育委員会が主催したものである。また、発掘調査にかかる事務は、これを滋賀県文化財保護協会が行った。

遺跡の発掘調査及び整理作業を直接担当したのは、湖西線関係遺跡調査団であり、調査の計画、実施にあたって調査委員会の指導を受けた。以上の関係諸機関及び調査団の構成は、次の通りである。

日本鉄道建設公団	総裁	篠原武司
	理事	松田鉄也
	用地部長	渡辺武男
	同課長	伊藤四郎
	同係長	貝林淳一、豊福源、勝又昇
	大阪支社長	長野逸人、藤田雅弘
	用地部長	廣瀬敏夫、木下忠義
	同第一課長	前川広義
	同第三課長	大角朋伸
	同担当	竹内友一、小野豊、神本伸一、
	湖西線部長	浜田正巳、荒井満雄
	同第一課長	井内友雄
	同係長	井角幸一

大津鉄道建設所長 加藤仁敏

株式会社熊谷組所長 佐藤純一

株式会社奥村組所長 赤星博生

滋賀県教育委員会 教育長 柳原太郎

次長 磯田英夫

文化財保護課長 井上佐助

同 課長補佐 大槻俊一郎, 松井清

同 庶務係 清田秀平, 駒井明美

同 紀念物係員兼専門員 高橋曾一

同 技師 丸山亮平, 近藤 淳

滋賀県文化財保護協会 藤村真治, 松井静三, 北川顯治, 井上 剛, 茶野英恵子,
田中志美, 早藤弘美

調査委員 小林行雄(京都大学講師)

沢村 仁(奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部遺構調査
室長)

柴田 実(滋賀県文化財専門委員, 関西大学教授)

田辺昭二(平安高校教諭)

坪井清足(奈良国立文化財研究所平城跡発掘調査部長)

調査團 団長 田辺昭二

副団長 西田 弘

調査員 市川良子, 井守徳男, 江口千恵子, 太田芳美, 岡戸恵子, 加藤 修, 柴田 稔, 高谷美由紀, 玉村登志夫, 中島正善, 永田信一, 野元晴範, 丹羽佑一, 状本 勝, 鈴岡澄男, 松沢 修, 宮地美千代, 本多八郎, 桃野真晃, 安田幸一, 安田竜太郎, 吉川義彦

調査員（写真担当）荒木一紀，牛嶋 茂，森 哲

補助員 大阪工業大学：大槻博芳

　　大谷女子大学：川本弥生，清田 良

　　関西学院大学：異 朋子

　　京都大学：泉 拓良，井上裕正，梅川光隆，遠藤直孝，大朝利治，新川登茂宣，百々順一，松下 潤，森 隆二

　　京都女子大学：石山利子，石丸美枝，一の瀬尚子，上園恵子，奥田紀美子，小崎竜子，勝木聰子，加藤千栄子，篠村敦子，川端恭子，米崎嘉良子，小上泰代，佐々木澄江，鈴木聰子，沢 仁美，大東妙子，高橋妙子，立石彰子，田中伸子，辻本悦子，中川喬代，布山彰子，野尻真理，馬場千以，平野美智子，平松久美子，福井美恵，藤沢佳子，藤本和美，前川典子，村上すみ子，村木裕子，森 洋子，柳川真理子

　　京都産業大学：恩田季代巳，甲斐寛，河相俊平，河野智子，寺田行犬

　　近畿大学：大谷 隆，甲谷善久，後藤哲也，小松茂樹，榎原正博，坂口公美子，城富次男，玉置昌志，花原康生，守分大治，安井幸雄，横田豊幸

　　国学院大学：池田大助，伊藤 潔，江見正己，榎本善繁，貝羽忠榮，勝田琢也，千田 潤

　　東海大学：石川絹子，小田村宏，尾野知潤子，笠間英二，柏葉成人，黒見理恵，鈴木久祐，菅田薰，長谷川達，平方幸雄

　　奈良大学：板倉玲子，加藤徹，志道和直，白石敬器，鈴木久男，城山弘子，竹原布佐子，玉田隆，田中順子，中野雅美，宮脇 薫，伊藤 実

　　仏教大学：中川真澄

　　立命館大学：石田実，岩田 隆，浦上雅史，尾上 実，

木下保明、木村芳子、河野敬一、妹尾直子、長谷川清、
 山崎 博、山本裕宣
 龍谷大学：岡田洋一郎、片岡道太郎、鈴木広司、松本
 雅正
 寺橋 滌、田中 均、中島志郎、中村 敦、渡辺 春、
 中学・高校生：大津・打出中学校、大津高校、京都・成安女子高校、
 京都西高校、大阪・浪速高校、京都・平安高校

* * *

発掘調査にあたって特に指導・助言をいただいた方々は、以下の通りである。

池田 次郎（京都大学教授）
 石田 志朗（京都大学助教授）
 市原 寿文（静岡大学教授）
 井上 満郎（奈良大学助教授）
 井本 伸広（京都教育大学助教授）
 小野山 節（京都大学文学部助手）
 金子 浩昌（早稲田大学講師）
 龟井 節男（京都大学教授）
 小宮 恒雄（横浜・港北ニュータウン埋蔵文化財調査団）
 佐原 真（奈良国立文化財研究所飛鳥資料館学芸室長）
 沢田 正昭（奈良国立文化財研究所技官）
 清水 芳裕（東北大大学院生）
 田中 琢（文化庁記念物課）
 部出比呂志（京都大学文学部助手）
 寺門 之隆（大阪市立大学助教授）
 德丸 始朗（大阪門真高校教諭）
 那須 孝悌（大阪市立科学博物館）
 藤岡謙二郎（京都大学教授）
 水野 正好（大阪府教育委員会）
 山田 治（京都産業大学助教授）
 横山 浩一（奈良国立文化財研究所飛鳥藤原発掘調査部長）

なお、発掘調査期間中の炊事は、寿賀節子、小楠志津代、山本静子、松田るみ子、後藤幹子、中川恵美子の諸氏に、また現場事務は増田保子氏にお願いした。このほか大津市職員（故）加賀美謙、同市教育委員会水田正一郎氏には種々の協力をいただき、また、地元大津市在住の多くの方々が、人夫としてこの発掘調査に参加された。

註 1) 『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』滋賀県教育委員会 1968年

2) これまでの研究による「大津京」推定地は、ほぼ大津市街地、同栗津、旧滋賀村地内の三ヶ所である。このうち旧滋賀村説は、さらに数説にわかれ、同村内の内裏推定地に関する見解は一定しない。

第1章 繩文時代

1 滋賀里遺跡の調査

(1) 研究の歩み

滋賀里遺跡の発見 戦時中、海軍飛行場に付属する兵舎建設のために、付近一帯は地ならしがおこなわれ、それによって包含層が露出したものと思われる。戦後、この兵舎の撤去によって再び地表にあらわれた包含層が、地元の蒐集家塙本權右衛門氏によって発見された。¹⁾

1948年の調査 旧海軍施設の農地開拓に先がけて、1948年（昭和23）の初頭に京都大学考古学教室は滋賀里遺跡を調査した。その結果、複合扇状地上の小さな開析谷が発見され、その谷内の堆積土より、縄文式土器・石器・玉類・骨角器などの遺物が歯骨・木の実などの自然遺物とともに出土した。この調査の責任者の一人坪井清足氏は出土した土器を検討して、主體となる一群の土器を滋賀里式と命名して晩期初頭に位置づけた。以来、滋賀里遺跡は近畿地方縄文晚期の標識遺跡とされてきたが、今回の調査によってさらに充當な資料が得られ、滋賀里縄文人の生活を復元する手がかりをつかむことができた。²⁾

(2) 遺跡の立地（図版1、第1・2図）

自然環境 大津北端の瀬西地域には、比叡山系の土砂を運ぶ流れによって、数多くの複合扇状地が形成されている。³⁾ この複合扇状地の接合部には大小の開析谷が発達し複雑で不安定な地形となっている。滋賀里遺跡はこの様な複合扇状地の裾部に立地している。遺跡は海拔95mに位置し、我々が調査した区域以東の地は、戦時中よりの地ならしによって、現状ではほとんど地形に起伏が見られない。

琵琶湖を前面にひかえた当遺跡の東南方の瀬田川畔には著名な石山貝塚や螢谷貝塚があり、更に最近、南方1.5kmの地点に北大津駅遺跡が発見され、縄文時代前期の包含層が確認され、早期の押型文土器も出土している。一方、比叡山塊を越えて、西方の京都盆地に

は早期から晩期におよぶ修学院・一乗寺・北白川の諸遺跡が展開している。特に、主要な食料源の一つをこの比叡山塊に求めた滋賀里縄文人は、京都盆地側の縄文人ととの間に密接な接触があったものと考えられよう。⁶⁾

扇状地と開析谷 滋賀里遺跡は比叡山塊より琵琶湖に向かって東西にのびる扇状地上に立地するが、調査によって得られた旧地形の復原によれば、南北約100m幅の扇状地の高みに晩期の墓址が発見され（ⅢC区墓址）、この高みの北と南にはそれぞれ開析谷が形成されている。この内、高みの北方にある開析谷（ⅢE区谷）の北向き斜面には晩期の小貝塚が形成されている（ⅢD区貝塚）。扇状地の高みは削平を激しく受けていることを考えると、墓址と貝塚との間に、住居址があったことが確実に推定される。このように、今回の調査によって、扇状地の高みに基盤を据えた晩期滋賀里縄文人の生活の跡が、一つの単位をなして発見された。

扇状地の高みの南方の開析谷（ⅢC区谷）には、流れる位置を変えながらも基本的には北西から南東方向に流れる3つの流路がある（第6図）。この内の主要な流れは上層から順に黄褐色砂層・第2ビート層・黄灰色砂層・灰白色砂疊層からなり、これらの流れ堆積と淀み堆積との互層堆積によって、この谷はほぼ埋っている。第2ビート層・黄灰色砂層・⁷⁾灰白色砂疊層からは、後期から晩期の滋賀里Ⅴまでの土器が出土し、最上層の黄褐色砂層からは、後期から晩期終末の滋賀里Ⅴまでの土器が出土している。これらの層からは石器や土偶などの土製品も出土しているが、弓などの木器や瓶・輪輪などの漆器の出土が注目される（図版8）。木器原材はⅢD区貝塚下層のビート層から多数出土したが、ⅢC区のこれらの層からも少量出土している。また、第2ビート層はカシ・シイ・トチなどの木の実と木の葉がびっしりと堆積したもので、かつて滋賀里縄文人が生活していた時代には、遠跡周辺が森林におおわれていた景観がわかる、豊かな自然資源の一端が知られよう。⁸⁾

この主要な堆積が谷を埋めつくした後に、これを切って淡青灰色砂層の流れがあり、その流路は南方にずれ、調査した範囲を越えて更に南に続いている。この層からは後期から晩期終末の滋賀里Ⅴまでの土器が出土している。更に、主要な流れのやや北方に流路をかえて、灰白色粗砂層の流れがあり、この層からは弥生第1様式の甕の破片が1片確實に出土しており、3つの流れの内では、この灰白色粗砂層の流れが弥生前期にまで下ることがわかった。耕土下の青灰色細砂層とその下層の第1ビート層からは遺物が発見されなかつた。

扇状地の高みの北にあるⅢE区の開析谷については、その一部を貝塚の項で、またその

主要部は第3章において取り扱っている。

遺跡の範囲（第2図） 今回の調査によって、南北約100mの東西にのびる扇状地の高みに晩期の墓址が確認され、この高みの北斜面に貝塚が形成されていることから、墓址に隣接して住居址の存在が推定された。またこの高みの南・北両側の開折谷には晩期を中心とした遺物の包含層があり、特に木器・漆器が出土したことは注目される。今回我々が調査できたのは滋賀里遺跡のごく一部である。特に東西の調査幅が約10mに限定されていたため、滋賀里遺跡の全体の規模を考えるには、今回の調査ではぼ明瞭になった遺跡の南北の拡がりを東西方向に及ぼす必要がある。¹⁰⁾ 特に西方の山側には相当広く続くことが推定され、¹¹⁾ 旧海軍施設建設の際の削平もそこまで及んでいないことから、遺跡の保存状態はより良好であるものと確信される。

滋賀里遺跡は海拔95m上に位置し、現在の琵琶湖の平均水面は海拔85mであり、約10mの比高差がある。しかしながら、¹²⁾ 1885（明治18）年測量の地図や石山貝塚での検討結果や現存する小字名などを総合するならば、近世以降に湖岸線の大幅な後退があったことがわかり、滋賀里縄文人が生活していた時代には、湖水が現在の海拔90m付近にまで入り込んでいたものと考えられる。従って、遺跡の東側への拡がりは西側より少ないと推定される。

（3）墓址と貝塚（図版2～8、第3～6図、第13表）

墓址の構成（第3図、第13表） 扇状地の高みの南半部に南北約34mにわたって縄文晩期の墓址が発見された。扇状地の高みは北部ほど旧地形で高くなっているが、戦時中以来の削平によって36号・47号・52号土塚を結ぶライン以北では、耕土下にいきなり土壠が現われており、墓址は更に北方に拡がっていた可能性もある。一方確認できた最南端の土壠と南方のC区の開折谷との間は20mあり、扇状地の縁辺部にあたっている。この部分には古墳時代の自然流が東西・南北に錯綜して、縄文包含層を切っているが、もはや墓址は続いておらず、他の遺構も発見されなかった。

土壠のベースとなる土層は扇状地の一般として均一のものではないが、基本的には無遺物の青灰色泥砂層であり、墓址の南半部では中津式の土器片を含む黄褐色粗砂の流れがベースとなるところもある。このベースとなる土層の上に晩期の滋賀里Vを最も新しい土器として含む黒色泥砂層が堆積している。既に述べたように、36号・47号・52号土塚を結ぶライン以北ではこの層は削平されており、以南の地区でも建築物が建てられていたのでこの層の上半部は攪乱されている。また、墓址内には南北方向に古墳時代の自然流が走り、

包含層や遺構を破壊している。

総数にして300近く発見された土壙の内、明らかに土壙墓といえるものが44例、人骨こそ残っていないがプランから判断して土壙墓と考えられるものや、人骨片がありながらも小形の規模のものなどが37例、壇棺墓が25例あった。また、26号・27号の土壙中に動物の骨片があったが、その種類や埋葬されたものか混入したものなど明らかではない。墓址の南端には2つの特殊遺構がある。273号は現代の溝によって南半部を破壊されているが、一種の石組み遺構であり、その内に2個体分の甕が破片で出土している(図版5・第5回)。この甕はいづれも滋賀里¹⁴⁾に属し、黒色泥砂層が堆積する以前の遺構と考えられ、火を使用した痕跡はない。この遺構から西に2mのところにある270号では、円形土壙内に花崗岩の細長い石が垂直に立って発見された。

発見された墓址の内、213号・227号・259号・290号の壇棺墓や、83号・149号・173号・236号の土壙墓は黒色泥砂層を切り込んでつくられたと考えられるが、これらの例を含めて、遺構の確定な発見は、ベースとなっている青灰色泥砂層の上面でしかできなかった。

土壙墓(図版3・4、第4回) 土壙の平面は長方形で、最大の規模は207号の1.5m×0.9m、最小の規模は257号の0.8m×0.6mであり、1m×0.7mの規模が平均的な土壙の大ささといえる。土壙の深さは20~30cmであるが、先述の様に黒色泥砂層を切り込んだ土壙のある点を考慮する必要がある。遺体は全て屈葬されており、その内には仰臥タイプと横臥タイプがある。216号と217号とはごく接近した時間内に葬られた男女と考えられ、一方が仰臥タイプで他方が横臥タイプであるので、この2つのタイプは時間的な差異とはなり得ない。また、106号は足の組み方が特殊であり、頭部と脚部との下に掘り込みがあり、遺体を板の上にのせたか、或いは棺に入れて葬った可能性があり注目される。

墓標のような地上施設といえるものは発見されなかった。長期間にわたる墓址で、しかも墓標などがない結果として、土壙墓の切り合いが生じている。この点に関して集骨葬の存在に注目したい。81号は小円形の土壙に、頭蓋骨を上に置いてその下に他の骨を集骨しており、1体分の骨が全て集骨されているかどうかは今後の検討にかかっている(図版4、押図1)。236号は黒色泥砂層を切り込んで作られており、頭蓋骨以外の骨が3つのブロックにわかれて數体分集骨されている(図版4)。特にこの236号の集骨は、新しい墓壙造営に際してつぶされた古い墓壙の人骨を改葬した可能性がある。

216号と217号のように近接した時間内に葬られたものは土壙の長軸が大体同じ方向をとっている可能性がある。この観点から土壙墓を見るならば、確然とした一定の方向性はな

いにしても、北東方向に頭部をもつくる一群と北西方向に頭部をもつくる一群とが多く、時間的な差異となる可能性がある。

甕棺墓（図版5、第5図）

発見された25例の甕棺の内、8例は古墳時代の流れや現代の削平によって破壊された底部のみの残欠であり、時期のわかるものは滋賀里ⅢからⅣにおよんでいる。甕棺として使用された土器の内外面には有機物やススの付着がみられ、日常生活で使用していた土器を甕棺に転用したものといえる。また甕棺として

使用する時の穿孔は基本的には認められず、103号甕棺・230号甕棺など数例に体部下半以下を打ち欠いて使用したことが認められる。

墓址全体の中での甕棺墓の分布には若干の傾向が認められる。第1には、最北端にある71号から162号を結ぶ北西～東南方向のラインより以南に甕棺墓が分布し、そのライン以北にはないこと、第2にはこの甕棺分布地域において、多くは单棺墓であるが、230号・269号・290号の3例では甕棺の口縁部を別の土器の大きな破片でおおっており、255号のように大洞系の甕を棺とし、浅鉢片で蓋した例など、单棺以外の甕棺墓が墓址南部の東部に集中していることである。273号石組み遺構の存在とも考え合わせ、墓址内での特殊な意味をもつ地区の想定も可能であろう。

主要な葬法である单棺墓は、103号のように体部下半以下を打ち欠くものは掘り方内にほぼ垂直に据えられているが、完形品を使用する一般的のものは掘り方内に斜方向に据えられている。この場合、掘り方の底面も甕棺の長軸にあわせて傾斜している。また多くの場合、掘り方の底面と甕棺との間には数センチの間隙が認められる。これに対して、230号・255号・259号・290号では別個体の土器の大きな破片で蓋をしており、特に新生児が葬ら

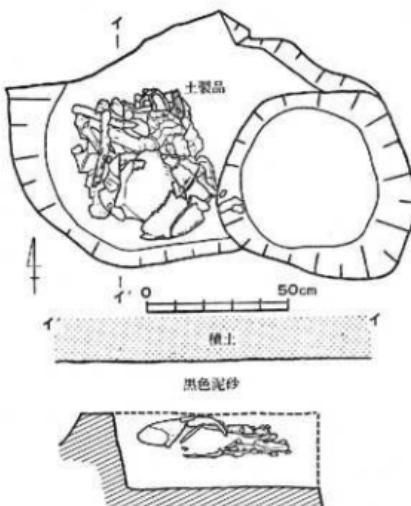


插圖1 III C区墓址81号集骨墓実測図

れていた255号は、使用している土器の組み合せから、この被葬者の特殊な位置づけが暗示される。これら4例ともに、掘り方内に甕を斜方向に据えているのは、単棺墓の場合と同じである。甕棺内に骨の残存していたものは4例あり、この内172号の人骨は壮年男性¹⁵⁾、他は新生児～小児骨との鑑定をうけた。更に問題となる点は、255号の新生児は全ての骨が納められていたが、他の3例では頭蓋骨を上に置いて2～3本の四肢骨を下に納めているだけであった。一般に甕棺内の骨の残りはよくないので、慎重に結論する必要があるが、この3例の場合人骨の一部を納めた可能性が強い。

墓址の年代と問題点 甕棺墓は墓址の年代を推定する手掛りを与えてくれる。甕棺に使用されている土器の型式は滋賀県Ⅲ～Vにおよび、滋賀県Ⅰ・Ⅱのものはない。おおよその年代はこれによって推定できるが、甕棺墓と土墳墓との切り合い関係によれば、滋賀県Ⅰ・Ⅱの土墳墓の存在の可能性もありうる。土墳内に含まれる土器片の検討（第1表）と、土墳墓中に頭部を東北におくものと西北におくものとのグループがある点とを総合すると、頭部を東北におく土墳墓が西北におく土墳墓よりも古い可能性がある。一方、土墳墓には黒色泥沙層を切り込んで土壇をつくる例もあり、滋賀県Vにまで下る土墳墓が考えられる。従って今回の調査部分では、滋賀県Ⅲ～Vの時期に継続的にいとなまれた埋葬が主体をなし、土墳墓に限ってはより古いものの存在を認める余地があるといえよう。

第1表 土 墳 内 出 土 の 土 器

土 器	土 墓 番 号													
滋賀県Vを含むもの	36 47 164 146 188 192 194 213 227 258 284													
滋賀県IVを含むもの	30 31 39 51 52 66 72 86 91 101 104 106 116 129 130 133 166 141 149 159 170 177 180 183 187 197 198 206 232 242 243 247 262 264 268 271 272 274 275 277 281 286 290 292													
突帯文（滋賀県IV～V）は検出されなかったものの	50 59 64 69 71 73 84 88 93 95 98 103 105 117 126 134 135 137 140 158 163 168 169 171 173 175 182 184 190 193 195 199 207 208 209 210 211 214 215 216 217 218 219 223 225 226 230 231 233 236 237 238 240 241 248 249 250 256 257 261 266 270 273 276 279 282 283 285 287 288													
總員調査の土器しか検出されなかつたもの	42 138													

被葬者と葬法との間に一定のルールがあることは十分予測されることである。土墳墓の多くは成人を葬っているが、幼児や小児を葬るものもあり、一方甕棺墓も全てが幼児・小児を葬るものとは言いかねない事実は、年令による葬法の差異という問題では片づけられ

ない。土塚墓と甕棺墓という埋葬形態の差異を問題にする前に、一体分の埋葬と人骨の一部を選択して埋葬する場合との差異に注目する必要がある。事実に即して言えば、一体分の埋葬には一般的の土塚墓と255号甕棺墓があり、選択的な埋葬には236号集骨墓と3例の甕棺墓があげられる。選択的な埋葬の内、236号集骨墓は改葬された可能性が強く、3例の甕棺墓の性格が問題となろう。

副葬品を伴う埋葬例ではなく、土塚の規模に大きな差のないことなど、従来の縄文時代の墓制のあり方と軌を一にしているが、装身具を伴う埋葬例が81号と207号とに見られた。¹⁸⁾ともに粘土を漆で練り固めて作った可能性のある朱塗りの土製品であり、81号の所見では、¹⁹⁾有孔の扁平な腰飾状のものと考えられる(挿図1)。

貝塚(図版6~8、第6図) 晩期の墓址が立地する扇状地の高みは、住居址の存在が推定される空白部を経てⅢE区の開析谷に傾斜している。この扇状地の高みの北斜面に晩期の小貝塚が形成されている。この小貝塚は開析谷の中央部をはしる古墳時代以降の流れによって削られ、また斜面の中程より上方は駆除時の削平によって既に消失している。²⁰⁾

この北斜面に貝塚が形成される以前に、第3ピート層から第1ピート層にいたる、砂層とピート層との互層堆積がこの谷を埋めている。各層からは後期を主体として晩期も含む土器が少量出土し、かなり短かい期間にこの谷が埋まった状況を知ることができる。また灰褐色砂泥層では出土する土器の傾向は同じであるが、その包含量が多く、獸骨なども出土しており、後期の包含層の二次堆積と考えられ、付近に後期の生活址のある事を示している。貝塚が形成される直前に、この谷は一時湿地状態となっており、その時の堆積が第1ピート層にあたる。この層からは水器群が出土し(図版7)、その種類は豊富で、弓・石斧柄及び未製品・櫛状木器・木槍・火鉢臼と杵・蓋胎漆器片・木柵・などがあるが、圧倒的に多いのは原材である。しかも凹地の中にあたかも井戸枠のように原材を組んだ状況や(図版7-2)、住居址の柱材とも思われる全長4mの3本の丸木があたかも隠されていたように木口をそろえて出土していることなど、湿地を利用した原材の貯木場が付近にあった可能性がある。²¹⁾この層から出土する土器は滋賀県を主として後期も少量含み、石器類や効能車も若干出土している。

貝塚は基本的には灰褐色泥土層と上層の黒色砂泥泥土層とに分層でき、緻密な意味での貝層は、大小のブロック状をなして黒色砂泥泥土層の内に散在するだけである。この黒色砂泥泥土は平均して30cm~50cmの堆積で、均一な堆積ではない。²²⁾ほぼ中ほどの-30cmのレベルに集中して、セタシジミを主体としてナガタニシ・イケチ・ウガイ・イボカワニ

ナが大小のブロックをなして発見された²⁴⁾(図版6-1)。下層の灰褐色泥土層には貝類はないが、魚のウロコが層をなしたブロックや、魚骨を多量に含む灰のブロックなどが観察された²⁵⁾。両層ともシカ・イノシシを主体とする獸骨が多く出土し、鳥骨・スッポンなどや糞も出土している。

灰褐色泥土層の土器は滋賀里Ⅱを主体として滋賀里Ⅰや後期の土器を少量含み、黒色砂泥泥土層は滋賀里Ⅲ～Vの土器を主体としている。両層からは石器・骨角器・土製品・紡錘車など豊富な遺物が出土した。

(4) 遺物の検討

A 土器(図版22～45、第17～39図、第14表)

観察の視点 綱文時代の後・晚期は単に土器相に共通点があるだけでなく、遺跡の立地や生産用具のあり方など生活様式を規定する要素からして、それ以前の時期と区別される。土器編年上の区分が社会生活の変革と対応している好例といえよう。しかしこれから扱う晚期という時期概念は、今のところ土器相上の区分概念にすぎない。山内清男氏は、三叉文の成立する広義の亀ヶ岡式土器が、東日本はもとより中部地方や近畿地方にいたる各地で移入されたり模倣されている事実から、後期の土器と区分される晚期の土器を設定した²⁶⁾。この点は土器研究上の柔軟として評価されねばならないが、一方において、東日本とは異質な土器を主体とする西日本の土器研究が進むにつれて、従来の晚期という大時期区分の規定の弱味が出てくる。この弱さの由来するところこそ、文様研究中心の従来の視点であり、土器の組成・製作技術・文様などの検討をふまえた土器の時間的変化を先ずとらえ、その横えのひろがりまたは接触を問題としていかねばならない。

従来近畿地方の晚期の土器は、滋賀里式、丹治式、樋原式、船橋式の4型式に細分されている。今回の調査によって滋賀里遺跡から出土した土器は、この全型式に及んでいる。しかしながら、従来の型式設定では不充分なところが多くあり、今回の整理にあたって、仮に滋賀里Ⅰ～Vの型式をもうけることにした。各型式とⅢD区貝塚の層序との対応は、ピート層がⅠ、灰褐色泥土層がⅡ、黒色砂泥泥土層がⅢ～Vである。この内、黒色砂泥泥土層の上器を型式学的に検討した結果、貝ブロックのある-30cmを境として、-40cm～-50cmに主体的なものが滋賀里Ⅲで、-30cm以上に主体的なものが滋賀里Ⅳ～Vとに分けられる。しかし、製作技術や器形の変化のないものは区別することができず。この点は滋賀里ⅣとⅤの区分に関して更に深刻である。今回検討の対象としたのは、層位的関係の明

らかなⅢD区貝塚出土の土器を中心に据え、ⅡC区墓址やⅢC区関折谷出土の土器は、欠²⁹⁾を補う必要のあるものにとどめた。特に数量的操怍はⅢD区貝塚出土の土器に限定した。個々の土器の観察結果は、土器の観察表に一括したので参照されたい(第14表)。

製作技術の検討(図版45) 土器の製作は、粘土ひもを積み上げて人体の形をつくる成形の段階と、その内外面をととのえて仕上げる調整の段階とに分けられる。文様の施文や突起・突帯のはりつけは、調整がすんだ最終段階におこなわれている。

(1) 成形手法 山内清男氏の指摘のように、滋賀里遺跡出土の土器も粘土ひもを積み上げて成形されており、観察できた限り巻き上げ成形はない。粘土ひもの幅は各型式間で差³⁰⁾ではなく、幅1.5cm~2cmとなっている。接合面はヘラ状のもので平坦面をつくり、多くの場合その平坦面に沈線状の凹みをつけており、山内清男氏の指摘する下段は凸、上段は凹³¹⁾という模式のように単純ではない。

次に胎土の問題にもふれておく必要がある。深鉢や壺のような大型品は、1~5mm大の砂粒(長石が多い)を含むが、用途の異なる概して小型の浅鉢・椀類には微少な砂粒しか含まれていない。しかし、滋賀里Ⅳに出現する浅鉢G₂には大きな砂粒が含まれており、滋賀里Ⅰ~Ⅲの浅鉢・椀類は胎土を選択している可能性がある。

(2) 調整手法 原則的には、浅鉢・椀類と深鉢・壺類とは調整手法を異にしている。浅鉢・椀類に認められる調整手法は巻きとナデである。浅鉢・椀類の場合、基本的には深鉢・壺類と相反して内外面ともに平滑な仕上げをおこなおうとする意図をもっている。滋賀里Ⅰ~Ⅲにはいわゆる黒色磨研土器が盛行するが、滋賀里Ⅲ以降鉢B₂や浅鉢G₂・G₄などのナデ調整によるものが共存し、特に滋賀里Ⅳで出現する浅鉢G₂は、数量的にも浅鉢の主体をしめている。丁寧に磨研して瘤べ焼きするという浅鉢・椀類の製作上の規制が、滋賀里Ⅲ以降弱まりはじめて滋賀里Ⅳでほとんど失われることが指摘できる。

深鉢・壺類に認められる調整手法には、卷貝調整(図版45-1)、削り調整(図版45-4・5)、二枚貝調整(図版45-2)、ナデ調整(図版45-3・6)などがある。内面の調整は各型式ともヘラ状のものによって水平方向にナデ調整(図版45-8・9)され、滋賀里Ⅰ・Ⅱでは卷貝調整をほどこした後に、また滋賀里Ⅲでは二枚貝調整の後にナデ調整するものもある。内面の調整は外面のそれにくらべて丁寧におこなわれており、土器の使用目的との有機的な関連がみられる。

外面の調整手法の内、主体的なものに卷貝調整と削り調整があり、器形と密接な関係が認められる。滋賀里Ⅰ・Ⅱの深鉢類には卷貝調整がみられ、器形とともに官窯式の深鉢

の延長線上にあるといえる。これに対して滋賀里Ⅱに出現し、滋賀里Ⅲ以降深鉢にとって代る壺頸には、ヘラ状のものによる削り調整がみられる。この様な調整手法の変化は、滋賀里Ⅰ～Vまで継続する唯一の器形である深鉢Gにも反映し、滋賀里Ⅲ以降巻貝調整から削り調整に転換している。

深鉢・壺頸の巻貝による調整の一般的な手法は、口縁部または頸部付近を水平方向に調整し、以下底部に向って左上りの斜方向に1～2段、更に垂直方向に2～3段の調整をおこなっている。調整の方向をよみとれるものがないが、次に述べる削り調整と同じであると推定される。

削り調整とは、1～1.5cmの幅にヘラ状のもので器表を削る手法をいうが、胎土中の砂粒が移動した軌跡からその方向がよみとれる。³⁷⁾一般的な手法は、体部を2～3段にわけて底部から口縁部の方向に削り上げ、頸部近くになると左上の斜方向となり、頸部付近では時計廻りの水平方向に削る。使用する原体の差こそあれ巻貝調整の手法と全く一致しており、むしろその手法を原体を替えて踏襲しているという方が正確であろう。滋賀里Ⅲの壺頸には、器壁が限界近くまで薄く削られているものがあるが(図版45-4)，滋賀里Ⅳ～Vでは全般に軽い削り調整となり(図版45-5)，更に滋賀里Vには、大阪府船橋遺跡出土の土器にみられるような鐵維束状の原体による条痕もみられる(図版45-7)。

二枚貝調整には、A85やA191のように体部外面にほどこされる少数例もあるが、一般には口縁部外面にほどこされる。この調整手法は滋賀里Ⅱに出現し、滋賀里Ⅲ以降かなりみられるが、滋賀里遺跡では主体的な調整手法ではない。全てが二枚貝によって調整されたものとはいえないまでも、山口県岩田遺跡の4類、岡山県黒土遺跡のH類、愛知県吉胡貝塚の「晩期中頬」⁴¹⁾にみられるハイガイ条痕に類似するところがある。海浜に面していない滋賀里遺跡の性格上、海に面した地域との交渉が推測される。

ナデ調整も主要な外側調整手法で、口縁部や文様帯の部位におこなわれるほか、体部に巻貝や削り調整がおこなわれたのちに、ナデ調整を重ねるものがある。このような二次的な調整でなく、体部外面をナデ調整のみで仕上げるものがある。特に滋賀里Ⅲ以降この種の土器が多くなり、粘土ひもの難目が残るほどの軽い調整である。ナデ調整の原体は明らかでないが、A192のように皮状の原体でおこなわれたと考えられるものもある(図版45-3)。

文様の検討 滋賀里遺跡出土の晩期の土器には文様のある土器とない土器とがあり、両者の比率は各形式によって変化している。深鉢・壺頸についてみれば、滋賀里Ⅰで有文

と無文の比率が25% : 75% (計測個体数128), 滋賀里Ⅲで18% : 82% (計測個体数288), 滋賀里Ⅳで1% : 99% (計測個体数753), 滋賀里Ⅳ～Vでは有文のものはない (計測個体数353)。⁴²⁾

一方浅鉢・鉢・碗類についてみると, 滋賀里Ⅰで47% : 53% (計測個体数47), 滋賀里Ⅱでは44% : 56% (計測個体数173), 滋賀里Ⅲで14% : 86% (計測個体数203), 滋賀里Ⅳ～Vでは有文のものではなく (計測個体数257), 深鉢・壺類と同じ傾向を示している。⁴³⁾大洞系や北陸系土器の搬入品を除いて, 滋賀里遺跡の土器製作は滋賀里Ⅲ以降無文化の方向にむかっており, 滋賀里Ⅳ・Vにおいて完全に実現されている。

(f) 深鉢・壺類の文様 深鉢類の内では, 文様で飾られる器形が深鉢A～Cに限られている。晩期の全時期に継続する唯一の器形である深鉢Gには, 終始文様がないとの好対称をなしている。しかし有文の深鉢にも明らかに煮沸に使用したものがあり, 文様の有無に意味があるとすれば, 土器の用途以外の面で検討されねばならない。波状口縁をもつ深鉢Cのように, 波頂部直下の空間を各種の文様構成でうめるものがあるが, 深鉢類の文様の主体は口縁に平行する沈線文である。この沈線文には2本単位と3本単位とが認められる。3本単位の沈線文は滋賀里Ⅰにはかなりみられるが, 滋賀里Ⅰ・Ⅱを通して, 2本単位の沈線文が主体をしめる。この点は, 半截竹管による2本単位の沈線文が滋賀里Ⅱに出現して, 滋賀里Ⅲに及ぶことからもうなづけよう。

沈線文の施文具としてはヘラ状の原体が主体をしめるが, 一部に巻貝頂部による沈線文がある。また巻貝の頂部や底部を利用した刺突文や円棒状のものによる刺突文は, 滋賀里Ⅱに出現しⅢに及んでいる。巻貝が文様の施文具として使用されるのは滋賀里Ⅱまでといえる。

壺類には文様で飾られるものがほとんどなく, 製作技法の検討結果とあいまって機能主義的な性格が認められる。ごく少數の文様例は, 半截竹管による馬蹄状の刺突文か円棒状の刺突文であり, 前者は岡山県原遺跡や同県前池遺跡に類似がある。⁴⁴⁾⁴⁵⁾

(g) 浅鉢・碗類の文様 施文手法には, 陽刻による文様表現と陰刻による波紋があり, 前者に大洞系土器と北陸系土器の一部が, 後者に北陸系土器と当地域の土器がそれぞれ属している。陰刻による表現は2地域の土器に分かれてみられ, 各々施文方法が異なっている。北陸系土器はヘラ状施文具を器壁に対して垂直にあてており, 一方当地域の土器は口縁を上にした器壁に対して斜め下からあて, それぞれ沈線をひいている。この方法は滋賀里Ⅰ～Ⅲに継続してみられ, 特に滋賀里Ⅱ・Ⅲにみられるいわゆる樋原式文様に顕著である。この樋原式文様は, 沈線にみられる陰刻表現の伝統を継承しながらも, 二角形のくり

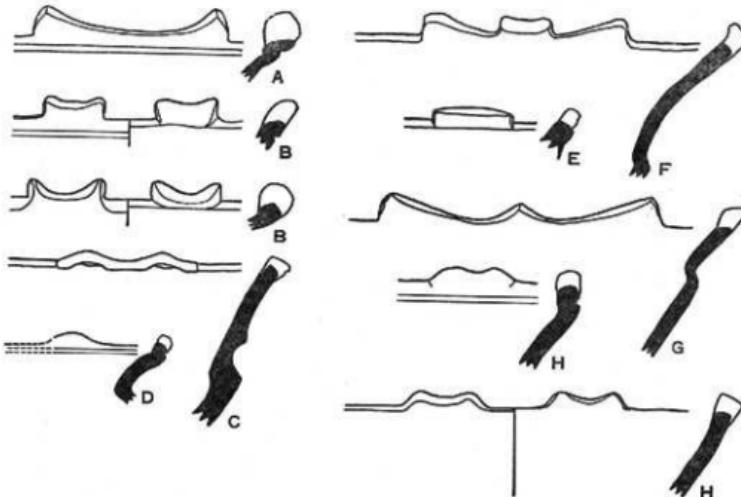
込みをもちいて陽刻表現を採用している。なお少數ではあるが、A372・A373のように櫛状の施文具による例が滋賀里Ⅱに認められる。⁴⁵⁾

文様には、山形沈線文、山形反転沈線文、平行沈線文、櫛原式の文様などがあり、山形沈線文と山形反転沈線文とは浅鉢類に、他の3種の文様は浅鉢・鉢類にほどこされる。

滋賀里Ⅰの浅鉢C₁にみられる山形沈線文は、滋賀里Ⅱの浅鉢A₄・同F₁の山形反転沈線文へと、形態の変化とともに受け継がれている。また山形沈線文は、変形山形沈線文をも生み出し、滋賀里遺跡に固有の文様といえよう。⁴⁶⁾

櫛原式文様は滋賀里Ⅱに出現し、滋賀里Ⅲにまで統一しているが、両形式を比較して顕著な差異は認められない。滋賀里ⅡのA124と滋賀里ⅢのA427とを比較すれば発展してゆく文様をみてとれるが、この文様を構成する諸要素（三角形のくり込み、沈線、刻み）はバラバラではあるが滋賀里Ⅱに出現しており、また一方では、これらの諸要素がセットとして施文された土器が主体をしめるという現象は、滋賀里Ⅱ・Ⅲを通して観察されず、刻み目の欠落など不完全なものが相当数あった。⁴⁷⁾

(4) 突起と刻み目 口縁部に突起のつくる器種は壺・浅鉢・鉢類に限定されており、滋賀里Ⅱの壺A92に出現し、滋賀里Ⅲで浅鉢・鉢に拡がりをみせ、滋賀里Ⅳ・Ⅴでは壺類には



挿図2 突起の種類

突起のつくものがなくなり、浅鉢・鉢にのみ继续している。突起はA～Iの9タイプに分類され(図2、第2表)、この内、A～Hは西日本一帯に多くの類例が見られ、C・Iは東北・北陸系土器との関係も推定される。突起の起源に関しては東北・北陸系土器との関係だけでは説明しきれない。突起がかなりみられる滋賀県には急激に波状口縁が退化減少しており、A137のように波状口縁が退化して小突起化したと考えられることも考慮する必要がある。この点に関連して突起が何ヶ所につくかという問題がある。破片が小さくて正確にわかるものはほとんどないが、滋賀県の盛A62やA205では明らかに1ヶ所にしかついていない。器種をとらず、突起のつく土器の個体数は少なく、突起をもつ土器の意味が問題となろう。

第2表 突起の種類

タイプ	個体数	特徴	器形	備考
A	6	・軽枕状突起 ・断面円形ないし稍円形	・浅鉢 A ₁ ・A ₃ ・A ₇ ・E ₄ (滋賀県III～)	奈良県橿原遺跡・大分県 田村遺跡に類例がある
B	5	・リボン状突起 ・断面は円形ないし稍円形	・浅鉢 E ₁ (口縁端部外面に 沈線をもつもの)(滋賀県 III～) ・鉢 E ₁ (滋賀県II)・J (滋 賀県III)	奈良県橿原遺跡・大分県 大石遺跡・長崎県深浦遺 跡・宮崎県松浦貝塚に類 例がある
C	5	・2つあるいはそれ以上の半 円形突起 ・断面は隅丸方形	・浅鉢 A ₁ ・A ₃ ・A ₈ ・E ₈ (滋賀県III～) ・盛 C ₁ (滋賀県III)	奈良県橿原遺跡に類例が ある 滋賀県IV・Vの面W (A 609)もこのタイプに入る か
D	11	・半円形ないし山形の突起 ・断面は方形	・浅鉢 A ₁ ・A ₈ (滋賀県III) ・鉢 B ₂ ・B ₈ (滋賀県III～) ・盛 E ₂ ・F ₂ (滋賀県III)	
E	14	・方形ないし舟形の突起 ・断面は方形	・浅鉢 A ₁ (滋賀県III～) ・鉢 B ₂ ・B ₈ (滋賀県III～) ・盛 D ₁ ・D ₂ ・E ₁ ・E ₂ ・ F ₂ ・G ₂ (滋賀県III)	岡山県原遺跡に類例が ある
F	3	・Aタイプの中央に方形突起 (Hタイプ)を付加した突 起	・浅鉢 A ₁ (滋賀県III～) ・盛 E ₂ ・G ₁ (滋賀県III)	奈良県橿原遺跡・大分県 田村遺跡に類例がある
G	1	・Aタイプの中央に山形突起 (Dタイプ)を付加した突 起	・浅鉢 A ₁ (滋賀県III)	奈良県橿原遺跡に類例が ある
H	13	・方形あるいは山形に近い形 をとり、中央部を凹ませた り、沈線を施したりする ・断面は方形	・浅鉢 A ₁ ・A ₃ ・A ₇ ・H ₄ (滋賀県III～) ・鉢 B ₂ (滋賀県III～) ・盛 D ₂ ・E ₂ ・F ₁ ・G ₂ (滋 賀県III)	岡山県船津遺跡・大分県 大石遺跡・鹿児島県黒川 遺跡に類例がある A585は大泊系のB突起 に近い A228はAタイプに近い
I	1	・アルファベットBの反転形 の突起 ・断面は半円形	・鉢 B ₈ (滋賀県III～)	大泊系土器は個体数から 除外

甕類を主体として一部深鉢Gなどの口縁部上端面に、刻み目がほどこされるものが認められる。滋賀里Ⅱの甕の小破片4例に出現を認めることがあり、専用されるのは滋賀里Ⅲ以降であり、突起の出現と展開の動向と軌を一にしている。滋賀里Ⅲの甕類で、刻み目のあるものとないものの比率は13% : 87%であり、滋賀里Ⅳ～Vでも25% : 75%となっている。滋賀里Ⅲは從来の編年上丹治式の内容に近い。しかし滋賀里遺跡では滋賀里Ⅲ以降刻み目手法がみられはするが、その個体数は少なく、一般的な特徴とはなり得ない。この点でも突起のつく土器と同様の問題をはらんでいる。

刻み目には大きく3種類のものが認められる。ヘラ状の原体の端面を利用して幅狭に文字どおり刻むもの（刻み目A）（図版45-12・14）、その平坦面を利用して押し引きによって刻む菱形のもの（刻み目B）（図版45-15）、同じく平坦面を利用して長梢円形のもの（刻み目C）（図版45-13）。刻み目Bタイプには、二枚貝状のものを押し引いた菱形のもの（刻み目B'）（図版45-10）もある。滋賀里Ⅱの4例は全てAタイプの刻み目で、発生的にはこのタイプの刻み目が古いことが考えられる。滋賀里Ⅲ以降この4種が併存するが、Bタイプが量的には主体をしめ、滋賀里Ⅳ以降突带上にも応用されている（図版45-7）。刻み目B'は滋賀里Ⅲに出現し滋賀里Ⅳでより多くなってはいるが、菱形の刻み目の内で、BタイプとB'タイプとの比率は90% : 10%であり、量的には少ないが、二枚貝調整の存在とあいまって、西日本全般に共通する二枚貝状の原体の使用が認められる点に注目したい。⁴⁹⁾

用途の検討 (1) ススの付着 深鉢・甕類は煮沸や貯蔵用に使われたと考えられるが、その内湯沸に使用した深鉢・甕類の口縁部外側付近には、ススまたは吹きこぼれの付着が認められ、火が直接あたる下半部には付着が認められない。また内面にも有機物の付着がしばしば認められ、内面の底部中央からやや上方にはじまり、幅約20cmほどの帶状に有機物が付着している。深鉢・甕類の多くのものが、文様や突起の有無に関係なく、煮沸用に使用されたことがわかる。

一方浅鉢・鉢・椀類にもススの付着する例が観察される。ススの付着する土器の割合は、⁵⁰⁾滋賀里Ⅰで42%、滋賀里Ⅱで22%となり、時期が下るにつれて減少するようである。器形との関係からは、滋賀里Ⅰの浅鉢B₁・B₂・C₁ 梗A₁に、滋賀里Ⅱの浅鉢A₄・B₂・D₁ 梗A₁・A₂・A₄に付着例が多く、梗は全般に、浅鉢では特定の器形にススの付着が多いといえる。深鉢・甕類のススの付着が外面上半部に限られているのに対して、浅鉢・鉢・椀類のそれは、外側全体や内面にまでも及ぶものがあり、そのかわり有機物の付着は全く認められない。朱塗り土器もまた例外ではない。このように浅鉢・鉢・椀類のスス付着は、深

鉢・壺類のあり方とは異っており、他にその因を求めるべきではない。

(v) 底部使用痕 深鉢・壺類の底部には、凹底、とがり気味の丸底、平底の3種類があり、滋賀里Ⅰ～Ⅲでは凹底が主体をしめ、滋賀里Ⅱ・Ⅲに出現した丸底は滋賀里Ⅳで主体をしめ、滋賀里Ⅴでは円盤はりつけの平底が主体をしめる。

ここで問題となるのは凹底の底部である。一般に滋賀里Ⅰ～Ⅲの凹底の凹面は丁寧にナデ調整され⁵¹⁾ている。その凹面を観察すると、何か物体に当たって器壁が剥落しているものが

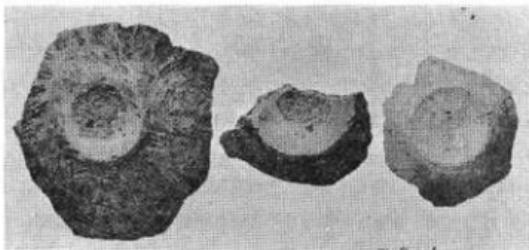


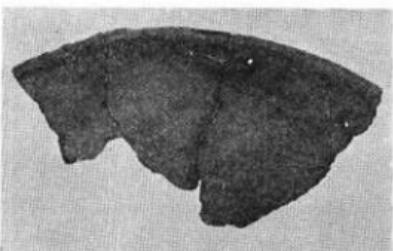
図8 凹底に認められる使用痕

多いことに気付く。更に、中央部だけでなく凹面のほぼ全面に剥落が及び、もとのナデ調整面が端部にしか残っていないものも存在する。凹底の総数569の中で、ナデ調整面の完全に残っているものは23%、凹面の中央部に剥落のあるものが60%、ほぼ全面に剥落のあるものが17%である。特に凹面中央部の当りが激しく、もとの器壁の半分以上もくい込んで剥落しているものがあり、大体中央部に直径約2～3cmほどの剥落のあるものが多い。

この様な現象は、煮沸時における土器の固定方法との関係で生じるものと考えられ、凹底に対応して凸出するものの上に土器がすえられたことが推定される。剥落面の観察によれば、単純な磨擦による器表の剥落とは考えられず、火を受けた凸出物に何度も擦えられた結果、器表から徐々に剥落したようであり、使用される回数が多いものほど、深く、ひろく器表が剥落していったことが考えられる。

丸底や平底の出現は、このような煮沸時の土器のすえ方に変化のあったことが予測されるが、丸底や平底のものには使用痕らしきものは認められなかった。住居址などの確認ができなかった今回の調査では、具体的な施設との対応はつかめなかった。

(v) 補修孔 北陸系の鉢(A250)は、器壁の割れ目をはさんで両側に孔を穿ち、この孔に樹皮を芯として同じ樹皮を巻きつけて作った紐を通して結合した状態のまま発見された(図4)。この種の孔が従来いわれているように補修孔であることを実証した。樹皮紐が孔にとおっている例は他にも1例あり、補修の実体の一端が明らかとなつた。



挿図4 樹皮紐で補修した鉢（A250）

いことはいうまでもなく、単なる修繕ということ以外に理由を求める必要がある。

組成の検討 滋賀里遺跡出土の晩期の土器の基本的な組成は、大型の深鉢・壺類と小型の浅鉢・鉢・碗類とからなり、これに散量の注口土器・高杯・壺と、少量の東北・北陸系土器が加わっている。滋賀里Vの内容が不明確であるが、器種と機能との関係は弥生式土器にくらべて未分化である。

基本的な組成である深鉢・壺類と浅鉢・鉢・碗類との組成比率は、各型式ともほぼ一定

第3表 滋賀里遺跡の晩期土器組成

時期	土器の系統	土器組成 ()内は個体数
滋賀里I	滋賀里	深鉢(129) 浅鉢(29) 鉢(1) 壺(17)
	北陸系	深鉢(3) 浅鉢(1) 鉢(1) 碗(1)
	滋賀里	深鉢(255) 壺(32) 小壺(3) 浅鉢(107) 鉢(7) 碗(58) 注口土器(4)
滋賀里II	北陸系	深鉢(2) 浅鉢(3) 鉢(2) 碗(3) 壺(1)
	東北系	中壺(2) 碗(1) 注口土器(1)
	滋賀里	深鉢(133) 壺(618) 小壺(4) 浅鉢(136) 鉢(31) 碗(36) 壺(1) 注口土器(3)
滋賀里III	北陸系	深鉢(3) 鉢(3)
	東北系	壺(4) 小壺(8)
	滋賀里	深鉢(60) 壺(293) 小壺(3) 浅鉢(212) 鉢(27) 碗(18) 壺(2) 注口土器(4) 高杯(1)
滋賀里IV・V	北陸系	深鉢(3) 壺(2) 浅鉢(1) 鉢(1) 碗(1)
	東北系	小壺(12) 鉢(3) 壺(3)

※ 滋賀里IV・Vの浅鉢212の内、確実にこの時期の特徴をもつものは54であり、他は滋賀里II・IIIに属する可能性が強い。

※ 東北・北陸系の土器に関しては、滋賀里III～Vについて、各々の時期に対応するものかどうか断定はできない。

この種の孔が穿たれている土器は、深鉢・壺・浅鉢・鉢・碗とほとんどどの器種に及んでおり、これらが全てA 250例のように補修孔であるならば、補修してまでその土器を使用しつづけなければならなかつた理由が問題となる。特に、深鉢・壺類では補修によっては本来の機能を果せないことはいうまでもなく、単なる修繕ということ以外に理由を求める必要がある。

組成の検討 滋賀里遺跡出土の晩期の土器の基本的な組成は、大型の深鉢・壺類と小型の浅鉢・鉢・碗類とからなり、これに散量の注口土器・高杯・壺と、少量の東北・北陸系土器が加わっている。滋賀里Vの内容が不明確であるが、器種と機能との関係は弥生式土器にくらべて未分化である。

基本的な組成である深鉢・壺類と浅鉢・鉢・碗類との組成比率は、各型式ともほぼ一定

第3表 滋賀里遺跡の晩期土器組成

時期	土器の系統	土器組成 ()内は個体数
滋賀里I	滋賀里	深鉢(129) 浅鉢(29) 鉢(1) 壺(17)
	北陸系	深鉢(3) 浅鉢(1) 鉢(1) 碗(1)
	滋賀里	深鉢(255) 壺(32) 小壺(3) 浅鉢(107) 鉢(7) 碗(58) 注口土器(4)
滋賀里II	北陸系	深鉢(2) 浅鉢(3) 鉢(2) 碗(3) 壺(1)
	東北系	中壺(2) 碗(1) 注口土器(1)
	滋賀里	深鉢(133) 壺(618) 小壺(4) 浅鉢(136) 鉢(31) 碗(36) 壺(1) 注口土器(3)
滋賀里III	北陸系	深鉢(3) 鉢(3)
	東北系	壺(4) 小壺(8)
	滋賀里	深鉢(60) 壺(293) 小壺(3) 浅鉢(212) 鉢(27) 碗(18) 壺(2) 注口土器(4) 高杯(1)
滋賀里IV・V	北陸系	深鉢(3) 壺(2) 浅鉢(1) 鉢(1) 碗(1)
	東北系	小壺(12) 鉢(3) 壺(3)

※ 滋賀里IV・Vの浅鉢212の内、確実にこの時期の特徴をもつものは54であり、他は滋賀里II・IIIに属する可能性が強い。

※ 東北・北陸系の土器に関しては、滋賀里III～Vについて、各々の時期に対応するものかどうか断定はできない。

している。個体数の比較によれば、滋賀里Ⅰでは71% : 29%，滋賀里Ⅱでは63% : 37%，滋賀里Ⅲでは78% : 22%，滋賀里Ⅳ・Vでは77% : 23%となる。また、東北・北陸系土器の比率は、各類式とも土器全体の2~4%をしめるにすぎない。

基本的な組成は各型式間で変化が認められないが、一方では器形の消長がみられる。滋賀里Ⅰ・Ⅱでは、宮窓式の伝統を受け継ぐ深鉢類が盛行しているが、滋賀里Ⅲに出現する壺類は、滋賀里Ⅲ以降深鉢にとって代わって主体をしめる。ここで注目されるのは深鉢Gで、深鉢が急激に衰退する滋賀里Ⅲ以降もかなりの量をもって継続しており、他の深鉢や壺類と使用上の区別があったことが考えられる。一方、浅鉢・鉢・楕円類は深鉢・壺類の変換とややざれをみせ、滋賀里Ⅰ以来の器形が滋賀里Ⅴで消失するものが多く、かわって浅鉢G₂のような黒色磨研土器でないものが、滋賀里Ⅴ以降主体となっている。

東北・北陸系土器の観察によると、滋賀里Ⅰに八日市新保

⁽⁶⁾ 遺跡の土器、滋賀里Ⅱに八日市新保・御経塚跡の土器と大洞B・同BC系土器、滋賀里Ⅲに八日市新保・御経塚・勝木原

⁽⁶⁾ 遺跡の土器と大洞B C系土器、滋賀里Ⅳ～Vに御経塚・勝木原遺跡の土器と大洞B C・同C₁系土器に各々類例を求めることができる。この内には搬入品と模倣品との2種類の存在が考えられるが、いづれにせよその機能が問題となる。第3表からは次の事柄が認められる。

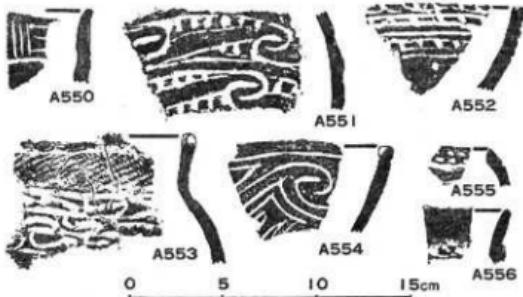


図5 滋賀里II～V 深鉢・壺・鉢・楕・壺・壺（東北・北陸系土器）

1. 当遺跡の同一形態の土器と比較すると、一般的に東北・北陸系土器はその数量が極めて少ない。
2. 滋賀里Ⅰの鉢、滋賀里Ⅲ・Ⅳの小壺、滋賀里Ⅳ・Vの壺などにみられるように、東北・北陸系土器の数量が、当遺跡の土器に匹敵あるいは上まわる場合がある。
3. 滋賀里Ⅱに伴う北陸系の壺のように、滋賀里固有の土器にみられないものがある。
4. 当遺跡の土器組成と東北・北陸系土器のそれとを比較するとき、滋賀里Ⅲを除いて北陸系土器の組成は、当遺跡のそれに近い。一方東北系土器の組成は、北陸系土器の

それにくらべて近似性が認められない。

5. 北陸地方固有の土器組成と、滋賀県遺跡出土の北陸系土器の組成との間に大きな差異は認められない。一方東北地方固有の土器組成と当遺跡出土の大潟系土器の組成とはかなり異なる。

東北系土器は、それが搬入品であれ模倣品であれ選択的に受け入れられ、稀少的な価値をもって土器組成を補完する位置を与えられたと推定され、一方北陸系土器に関しては、その組成に類似性がみられる。このことから、北陸の土器生産が東北系のそれに対して、当遺跡の土器生産により近かったことを反映するものであろう。

晩期の土器編年 滋賀県Ⅰ・Ⅱは後期の宮窯式の伝統上にあり、卷貝調整による深鉢と、独自の文様を展開する黒色磨研製の浅鉢・椀類とに特徴があらわれている。特に浅鉢・椀類の文様の展開は滋賀県Ⅱで頂点に達し、七宝文も出現している。深鉢類では滋賀県ⅠとⅡとの間に、口縁部の内傾度や卷貝条痕が器面に残る度合いにおいて差異が認められる。一方、滋賀県Ⅲに少量ながらも削り調整や二枚貝調整による変形が出現し、宮窯的伝統に対する新しい動向の芽ばえが認められる。

この新しい動向は、滋賀県Ⅲにおいて宮窯的伝統にとってかわって主体の座をしめ、卷貝調整手法や深鉢は少しが残存するが、主体は削り調整による変形によってしめられる。浅鉢・椀類は、七宝文を継続させつつも文様をもつものが減少し、無文化の方向にふみ出している。器形の変化が少ないのはこの器種の性格からくるものと思われるが、文様の減少や突起のつくものの出現など、従来この器種のもっていた固有の特徴をこえて、土器全般の傾向に近づきつつある。

滋賀県Ⅳでは宮窯的伝統は全く消えうせ、西日本に共通する色彩で塗りつぶされる。器類には滋賀県Ⅲにみられたバラエティーがなくなり、丸底で口縁部に突帯をもつ定形化した器形が主体をしめている。この時期の浅鉢・椀類には滋賀県Ⅲのものが残る可能性もあるが、新たに平底の浅鉢 G₂₋₃ が出現し、主体をしめている。この浅鉢は黒色磨研製ではなく、つくりが悪くなる傾向が認められ、文様をもつものは全く見られない。

滋賀県Ⅴは土器数が少なく、内容がはっきりとせず、2条の突帯をもつ平底の底類の存在がわかる程度で、浅鉢・椀類が存在するかどうかは不明といわざるをえない。

従来の近畿地方の晩期の土器編年との対応関係から、次のことが指摘される。⁶¹⁾ 丹治遺跡出土の土器には、卷貝調整の深鉢と、削り調整らしい変形があり、また壺の口縁上端面に刻みをもつものが多いことから、滋賀県ⅡとⅢとの土器が混在しているようである。植原

遺跡の報告書で攝原式と命名された七宝文で飾る浅鉢・碗類は、滋賀里Ⅱ（もしくは滋賀里Ⅲ）にあたり、奥帶のつく碗類は滋賀里Ⅳに属しており、この2群の土器は明らかに時期を異にしている。従って今後、従来いわれてきた攝原式という型式概念を使う場合には注意が必要であろう。

滋賀里Ⅱに次ぐ滋賀里Ⅲにおいて展開される新たな動向には、基本的な土器の組成は変わらないとしても、碗類にみられる機能主義的な性格や、浅鉢・碗類の無文化など、それ以前の土器の規制を打ち破る方向性が認められる。この動向が滋賀里の内で自生的に展開されたものかどうかの問題は残るが、少なくとも、滋賀里Ⅲに出現する碗類には、それ以前の深鉢との形式的な関連はほとんど認められないし、二枚貝を原体とする二枚貝調盃の存在など、他地域からの影響のもとに起ったことが考えられる。

この新たなる動向は、滋賀里Ⅳにおいて宮海的伝統・規制をほぼ完全に消去し、若干の地域色をもちながらも、⁶⁰⁾西日本一帯から東海地方におよぶ齊一的な特徴となってあらわれている。この共通の土器文化圏に含まれる地域に、弥生文化が最初に定着しているのである。

晩期以前の土器（同版43、第33・37～39図） 滋賀里遺跡出土の土器は晩期に属するものが主体をしめているが、後期を主として古い時期の土器も出土している。その内でも多く出土している層には、ⅢE区闇折谷の黒褐色泥土層・茶褐色砂疊層、ⅢD区只塚地点の具塙形成以前の堆積である黄白色粗砂層・綠灰色細砂層・第2ビート層・黄灰色砂層・第3ビート層・黒褐色泥土層・灰褐色砂泥層・黄灰色泥砂層、ⅢC区墓址の一畝の基壠のベースである黄灰色砂疊層・青灰色砂層などがある。ⅢC区墓址のベースの層は後期の中津式を純粋に包含するようであるが、他の全ての層は含む上器の傾向が同じで、後期の土器を主体としつつもかならず数種の晩期の土器を含んでいる。

後期の土器では中津式が他を圧して多く、厚手の白っぽい色調のものや、やや薄手の黒っぽく堅緻なものがある。文様は、磨消繩文技法を駆使して角ばった構成と曲線的な構成とがあり、沈線にも、結節沈線や沈線内に刺突を施すものがある。1片ではあるが、瀬戸内地方にみられるような網文のかわりにヘナタリによる条痕をつけ、沈線で両したものもある（A519）。

中津式以外は少量であるが、福田KⅡ式・津雲A式・稻口式・元住吉山式・宮滝式と、後期の全時期におよんでいる。また関東地方の堀ノ内Ⅱ式・加曾利B式の土器も微量ながら出土している。

第4表 滋賀黒遺跡出土の晩期以前の土器

時期・形式	土器番号	備考
早期	A468	・III D区灰褐色砂泥層出土
中期	A469 A470	・III E区黒褐色泥土層出土
中津式	A342 A343 A500～A522	・A342・343・522はIII C区墓地ベース出土 ・A503・504・506～508・512～520はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A510・511・521はIII D区黒灰色泥土層出土 ・A505・509はIII D区黄灰色泥土層出土 ・A500～502はIII E区黒褐色泥土層出土
福田K II式	A471 A474 A477 A478	・A471・474・478はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A477はIII D区黒灰色泥土層出土
津雲A式	A344 A346 A405 A472 A473 A475 A479～A483 A476 A486	・A472・473・475・479～482・346はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A344・483はIII D区黒灰色泥土層出土 ・A406はIII D区ピートII層出土 ・A486はIII D区ピート混入砂層出土 ・A476はIII E区黒褐色泥土層出土
船口式	A487	・A487はIII D区灰褐色泥土層出土
崎ヶ鼻式	A345 A347	・III D区黒灰色泥土層出土
郷ノ内II式	A488～A490	・III D区灰褐色砂泥層出土
加曾利B式	A491	・III D区灰褐色砂泥層出土
元住吉山式	A494～A496	・A495・496はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A494はIII D区ピート混入砂層出土
宮越式	A349～A352 A492 A497～A499	・A350～352・492・497～499はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A349はIII D区黒灰色泥土層出土
後期の形式不明	A523～A549	・A523～529・533・534・536・539・540・543～546・548・549はIII D区灰褐色砂泥層出土 ・A538はIII D区黒灰色泥土層出土 ・A542・547はIII D区ピート混入砂層出土 ・A532はIII D区ピートII層出土 ・A537はIII D区黄灰色砂泥層出土 ・A535・541はIII D区ピートIII層出土 ・A530・531はIII E区黒褐色砂泥層出土

後期以外では、早期の押型文土器1片と中期の土器2片が出土しているだけである。

晩期以前のこれらの土器は、開拓谷への流れ堆積層より出土したものばかりであるが、滋賀里の扇状地に縄文人が生活の基盤を求めたのは後期初頭であり、以後晩期終末まで一貫して生活が続けられたことがわかる。たまたま今回の調査地点では晩期の墓址・生活址しか確認できなかったわけで、後期の生活址も山寄りの地点に存在することは確実である。⁶⁶⁾

B 石器・骨角器・木器・土製品(図版44~56, 第40~49図)

石 器(図版46~49, 第40~44図) 滋賀里遺跡のⅢ C, Ⅲ D区から、2000点に近い多数の石器が検出された。石器を出土する主な層はⅢ C区墓址黑色泥砂, Ⅲ C区開拓谷黄褐色砂, Ⅲ D区貝塚黑色砂混泥土・灰褐色泥土層等である。各層内における土器と石器の対応関係、層相互の関係についてはⅢ D区黑色砂混泥土・灰褐色泥土層を除けば明らかではない。黑色砂混泥土層と灰褐色泥土層は層位的にも土器型式の点からも明らかに差があり、一部の石器の形態はこのような差異と軌を一にしている。しかしながら、黑色砂混泥土層は石器の出土量が他に比べて卓越しており、他の層は数量がこの層の半数にも満たず、特に異なる特色もないので石器は一括して扱った。

(1) 石斧(図版46, 第40図) 石斧は体部の仕上げの違いから打製、敲打製及び磨製に分類し、磨製石斧は形態、大きさにより三分した。当遺跡では、一般に乳棒状石斧と呼ばれているものは全て敲打製に含まれ、この型にはAS10, AS12のような変種も存在する。敲打製の石斧には特異な刃つぶれ痕を有する例のある事が愛知県馬見塚遺跡で報告⁶⁶⁾され、当遺跡ではAS11がその例と同様の特徴を有する(図56-5)。この石斧は層位的には縄文時代の遺物であると断定できないが刃部の損傷は他の型の石斧には稀なもので、この石斧の用途が他の型の石斧とは少し異なる事を示すものである。

乳棒状の石斧の断面は円形に近い形を呈するものが多く、偏平な断面を有するものはここでは2例しか発見されていない。これに対し、大型の磨製石斧で刃部の形が始刃を呈するものは、例外なく横断面が偏平で梢円形を呈する。磨製の大型・中型の石斧は大きさや幅に大小の差異がありながら断面の厚さが2~3cmで、弥生時代の石斧に比べるとやや偏平な感じである。

小型磨製石斧は、刃部に残る使用痕から手斧として使用されたと考えられ、木器製作の主要な工具であったと考えられる(図版45-6~9)。縱の断面を見ると刃の中心が片側に寄って、片刃に近い断面を呈するものが多いが、AS4のような例外もある。打製石斧の出土例は少いが、使用痕を明瞭に残すものがある。AS2の刃部には、図版56-4に見るような長い使用痕が背面に残っている。使用痕は斧の長軸に対して少し傾きをもっている。セミヨーノフの論文によると、土掘具に特徴的な使用痕であるが、柄の装着法が今日の鍛と同一ではないと考えられる。土掘具はAS10を含めて僅か4例を数えるだけである。AS13はこの遺跡の石斧の中では特異な存在で、所謂方柱状石斧に似た外観をしている。体

第5表 石斧の概要

種類	石器番号	出土層位	材質	形態の特徴
打	AS 1~3 他に類似 1あり	※AS 1はⅢD 黒色砂泥 土層, AS 2 はⅢD灰褐色 泥土層。 ※AS 3はⅢC2 38号土坑から 出土。	※AS 1とAS 3は粘板岩, AS 2はホル ンフェルス 岩。	※AS 1とAS 2は分離形石斧に類似した形 態で刃部が広がっている。 ※AS 3は刃部が欠損し、体部の上部がくび れている。 ※この他は、短握端石斧の破片である。 ※AS 2は明瞭な使用痕がある。
製	石 打 AS 13 AS 15 斧 石 他に類似 10	※AS 10はⅢD ビート層, A S 11はⅢC灰 白色砂層, A S 12・13・15 はⅢD黒色砂 泥土層。 ※ⅢC黒色泥砂 層からも出土 している。	※AS 10~12は 輝緑斑状石斧 中の玄武質熔 岩製。 ※AS 13は粘板 岩, AS 15は 安山岩製。	※体部を敲打整形し刃部を研ぎ出している。 ※乳様状石斧のように断面は円に近いが、全 長は短く、刃部が最大幅となる。 ※AS 10は「く」の字形に曲る石斧か、刃部 には石斧の長軸に対して傾いた長い使用痕 を残している。 ※AS 11は頭部の極く一部が強留しただけの 一応完形品。刃部は使用によると考えられ る溝齒がある。 ※AS 12は片面だけ敲打仕上げで、敲打によ る抉りが3面に認められる。 ※AS 13は棒状の石斧、四隅に抉りがある。 ※AS 15のような乳棒状の石斧はすべてこの 類に含まれる。
磨	始 刃 AS 9, AS 224 石 斧 類似 14	※AS 9はⅢD ビート, AS 224はⅢD黑 色砂泥土層 ※ⅢD黒色砂泥 土層からの出 土が多いが ⅢC黒色泥砂 層からも出土 している。	※AS 9は結晶 片岩, AS 224 は安山岩製。 ※輝緑斑状石斧 中の玄武質熔 岩製のものも あるが、多く は安山岩製。	※刃部は両面から研ぎ出し、断面は扁平な梢 円形を呈する。厚さと幅の比は2:1前後。 ※AS 9は打撃による形状の跡を少し残して いるが、入念に研磨されたものが多い。 ※AS 224は刃部の片側の溝齒が他の側より 多い。
製	定 角 式 石 斧 類似 2	※AS 14-225は ⅢC墨色泥 砂, AS 16は ⅢD灰褐色泥 土, AS 221は ⅢD黑色砂泥 土層, AS 225 はⅢC黒色泥砂 層からの各層か ら出土。	※AS 14は砂 岩, AS 16・ 225は安山岩, AS 221は蛇 紋岩製。 ※他は安山岩 製。	※全面入念に研磨、所面は少しふくらんだ長 方形、各稜線は羽歯。 ※AS 14は扁平な乳棒状石斧とも考えられる が、全面研磨、断面の形からこの類に含め た。 ※AS 225は当遺跡で発見された石斧の中で 最大の幅を有し、復元すると、最大の石斧 になると考えられる。
斧	AS 小 型 磨 製 石 斧	※AS 4・6・ 8はⅢD黒色 砂泥土層, AS 5・7は ⅢC黒色泥砂 層, AS 222・ 223はⅢE耕 土。	※AS 4・6・ 8は蛇紋岩, AS 5・6・ 223は安山 岩, AS 222は 粘晶片岩製。	※全面入念に研磨、一般に定角式石斧の新 型が多い。 ※AS 7-8は片刃に近い両刃で使用痕がある。 ※AS 4は揆形で断面はカマボコ形。 ※AS 223, AS 4はこの類では最大のもの で、AS 4は重量70gである。最小はAS 7で重量19.5g。 ※AS 222は蛇紋岩を小型化した形、AS 223は風化が激しい。

部は打撃により成形し、片側は自然の平坦な面を利用している。体部中央の凹凸には敲打調整された抉りをつくり出している。刃部は破損しているので正確な原形の推測は困難であるが、残存部の形から考えて、片刃に近い両刃であったと考えられる。

磨製石斧の材料には安山岩が最も多く使われ、輝緑凝灰岩層中の玄武質熔岩、蛇紋岩、砂岩なども使用され、打製石斧の材料にはホルンフェルス、粘板岩等を使用している。定角式石斧の比較的小さいものや小型磨製石斧には蛇紋岩がしばしば用いられ、大型の石斧は安山岩が多く、結晶片岩を使用しているのは A S 9 の一例だけである。

(c) 石器 (図版47-1, 第41図) 当遺跡から発見された石器の数は1000個を越え、縄文時代の遺物包含層から出土したものは700個余である。出土数はⅢ D貝塚地区が最も多く、黒色砂混泥土層から425個、灰褐色泥土層から87個の石器が出土している(第6表)。
出土数量と土器型式との対応関係などの点から、Ⅲ D区の包含層を中心に分類、及び種々の計測を試みた。石器の形は5型式に分類し、各々平基式、凹基式、円基式、突起式及び尖基式で、ここでは、それを I ~ V の文字で表現し、I類はさらに a ~ c に細分した。

I 類: A S 33~38・55

II a類: A S 50~59・61~93・95~104・112~114

II b類: A S 29~32・49

II c類: A S 39~48・60・110・111

III 類: A S 107・108

IV 類: A S 18~27

V 類: A S 94~105・106

第6表 石器の出土層位

出土層位	石器番号(A S)
Ⅲ D 黒色砂混泥土層 (表面~-30)	17 22 27 36 38 39 44 46 52 53 60 65 66 71 75 78 79 80 81 82 84 85 87 88 90 92 93 94 99 103 105 106 107 108 110 111 112
Ⅲ D 黒色砂混泥土層 (-40~-50)	31 42 43 45 47 55 57 58 62 64 68 72 100 101 114
Ⅲ D 灰褐色泥土層	40 41 49 50 59 76 85 89 91 102
Ⅲ C ピート層	51 74
Ⅲ C 黒色泥砂層	19 20 23 24 25 26 29 34 35 54 60 63 67 69 95 96 97 113 226
Ⅲ C 黄褐色砂層	30 48
Ⅲ C 灰白色砂層	18 21 28 32 33 37 56 61 70 77 83 98 104 109

A S 17・18・28は一応完形品と考えられ使途不明であるが、A S 28は『極原』で石鎚に含められている。⁷³⁾

石造の形は基本的に三角形であるから、石造の頂点と最大幅を結ぶと図上の三角形ができる。この三角形と実際の外形式とは必ずしも一致せず各型式により差異がある。因にⅡ類の石造にこの三角形を当ててみると、Ⅱa類は先端の角度と三角形の頂点の角度に大きな差はないが、Ⅱb類は先端の角度の方が大きく、Ⅱc類もⅡb類に似た傾向を示し、Ⅱa、Ⅱb類は基部の抉りが三角形の内側へ入るが、Ⅱc類は入らないものの方が多い。内側へ入り込むものは少ない。Ⅲ類はこのようにしてa～cに細分したが、図上に想定した三角形と外形との関係は分類上のものであって、製作の際に意識されていたかどうかは断言できない。このような三角形は長さと幅に規定され、一般に長さと幅の比は2:1～1.5前後で、Ⅳ類、V類は少し異り、V類は他に比べて細長い形で、長さと幅の比は約2.5～5:1である。

第7表 石鹼の型式別比率(%)

各層別の石鐵各型式の全体に対して占める比率を第7表に示したが、Ⅱ類が各層で80%を越え、なかでもⅡa類が卓越した數値を示し、晩期の最も一般的な形である事が明らかになった。重量は第8表に、各型式を層毎に最大、最小、平均の数値を示した。Ⅱ類の石鐵は1g前後の重量のものが多く、Ⅰ類はⅡ類よりやや重く、Ⅲ・Ⅳ類では平均値が倍に近い数値を示している。Ⅴ類の石鐵は鉛文晩期の石鐵の中では最も大きく、重い事が明らかである。このようなⅤ類やⅣ類の石鐵は、灰褐色泥土層からは検出されていないため、濱賀Ⅲ～Ⅴの時期に出現したものと考えられる。黒色砂混泥土層内では、この

第8表 石鐵の型式別重量(単位g)

第9表 石匕・不定形石器・石錐・その他の観察

種類石器番号	出土層位	材質	形態の特徴
AS 石 115~122	※AS 115~117・118- 120はⅢD黒色 砂混泥土層。	AS 118はチャ ート, 他はすべ てサスカイト製。	※AS 115・121は縦形石ヒで階段状の剥離底 がある。 ※AS 116・117・119・120・125は大剥離面 を有する。
AS 227 ヒ	※AS 116はⅢD茶 褐色砂泥層。 ※AS 119・122はⅢ C黒色泥砂層。 ※AS 121はⅢC淡 青灰色砂層。		※AS 118は小さく、入念な調整をしている。 ※AS 119・122は横長剥片を使用している。 ※AS 116・122は片面を主に調整している。
AS 不 定 形 石 器	※AS 123はIVB耕 土, AS 124・134- 139はⅢC黒色泥 砂層。 ※AS 125~128-131 -136-141-228はⅢ D黒色砂混泥土層 ※AS 130~141, 132-138-140 はⅢD灰褐色泥土 ※AS 130はⅢC灰 白色砂層。 ※AS 135はⅢE表 採。 ※AS 137はIV A耕 土。	サスカイト製。 AS 130・137は チャート製, 他 はサスカイト製。	※AS 123はナイフ状の石器, 刃部は両面か ら調整しているがAS 123の刃は鋭くない。 ※AS 124は使途不明, AS 127のようなもの の未成品か。 ※AS 125は階段状剥離底を残す。 ※AS 137-138-228はナイフ状の石器, AS 228は両面から入念に刃部を調整している。 AS 137は旧石器か。 ※AS 126~128・130~134・140・141は横長 の剥片を使用し, 片面から刃部を調整して いる。AS 128・130・140・141は両面から 調整。 ※一側縁を刃部として使用しているのが多 い。
AS そ の 他	※III D黒色砂混泥土 層。 ※AS 142はⅢD灰 褐色泥土層。 ※AS 143・144はⅢ D黒色砂混泥土 層。	サスカイト製。 サスカイト製。	※削器の一種と考えられる。使用痕は認めら れない。 ※AS 133は一部自然面を残す。 ※AS 142は石核と考えられるが, AS 143は 不明。AS 143の刃縁部状の所に使用痕は ない。 ※AS 144は自然面を残し, 兩側から剥離し て刃部状にしている。刃端と考えられる場 所に階段状の剥離底が認められる。
AS 石 236・237	※III C黒色泥砂層	蛭 石	※人工的な加工は施されていない。 ※蛭石は前西地方には見られない石である。
AS 石 145~156 AS 229- 230・231 232・233 錐	※AS 145~147-151 はⅢD黒色砂混泥土層。 ※AS 148はⅢD灰 褐色泥土層。 ※AS 149-152~156 はⅢC黒色泥砂層 ※AS 229-230-231- 232・233はⅢ E・ Ⅲ D区表採。	AS 233はチャ ート製, 他はサ スカイト製。	※つまみのあるものと棒状のものがある。 ※先端は欠損しているものが多く, 完形品は AS 230・233等極く僅かである。 ※AS 145はつまみの部分に自然のくぼみが ある。

層の性格上土器との対応関係は明らかにできないが、IV類・V類の石器がこの層の浅い深さにしか見られない事は、土器の在り方と軌を一にするものであろう。

当遺跡の石器はサヌカイトを用いて製作され、チャート製は1%程度である。大剥離面を有する石器は、黒色砂混泥土層に於いて全体の28%で、内側に大剥離面を残すものは極く僅かである。火割離面を残す石器は横長剥片を使用している事が確認できる。石器の大半に階段状の剥離痕が一、二箇所認められるがこれが全面に及ぶものはない。

(イ) 石七・不定形石器・石錐 (A S 115~A S 156) (図版47-2, 第42回)

A S 125は彎曲した縁を有する一種の刀器と考えられるが、使用痕が残っていないので内側と外側のどちらを作業に用いていたのか判定できなかった。刀器は形一定しないものが多く、これらは一刃を刃部として使用している三角形または四角形を呈するものと、ナイフ状のものとに分類できる。不定形石器は大剥離面を有するものが多く、横長剥片の一端を調整して刃部としている。両端は片面の調整が多いが、A S 144は両面から調整し、大きな階段状の剥離痕が一箇所だけ認められる。

石錐は遺跡全体から28個検出されているが、使用による磨滅の痕跡を残すものは発見されていない。

第10表 石器の重量及び出土層位

	番号	重量 (g)	出土層位
磨	158	15.2	III D 黒褐色泥土層
	159	11.5	" 黒色砂混泥土層
	160	28.0	" 黒褐色泥土層
	161	19.5	" "
	162	24.5	" "
	163	18.5	" 黒色砂混泥土層
	164	8.5	III C 溝内灰白色砂層
	165	29.0	III D 黒褐色泥土層
	166	45.5	" 黒色砂混泥土層
	167	35.5	III C 黄灰色砂層
打	168	60.0	III D 黒色砂混泥土層
	169	41.0	" "
	170	74.0	" "
	171	51.5	" 黒褐色泥土層
	172	85.5	III C 黑色泥砂層
	173	28.0	III D 黒褐色砂泥層
	174	95.5	III D 黒色砂混泥土層
	175	105.5	III C 黄白色砂層
	176	119.0	" 黑褐色砂層
	181	218.5	" 黑色砂泥層
182	205.0	III D 黒色砂混泥土層	

※ 本文に記載するのは光沢に近くJ・K文時代の遺物と考えられるものがだけを記載した。
※ 削削痕のみで既往してこれらの性をもつてると考えられるものはない。
※ A S 225は砂岩石ととしては最大で60.0g

(ロ) 石錐 (A S 158~176・181・182) (図版48-1, 第43回)

1. 第43回 磨製と打製に分類でき、技術の違いだけでなく、重量の点からも、一般に磨製石錐は小型で軽く、打製石錐は大型で重い。重量は第10表に示した。石錐は綫長が普通であるが、A S 171のように少し横に長い例もある。石錐の材料には安山岩、砂岩、ホルンフェルス、粘板岩、サヌカイト (A S 172) 等の手頃な大きさの河原石を使用している。

(ハ) 亂石・石皿 (A S 177~181・189) (図版48-2, 第43回) 亂石は151個出土している。乱石はA S 179~181のように、作業の結果生じた凹みや平坦な研磨面を有するが、A S 177は少し奥より周縁に作業面を有

している。材料は安山岩が多く、砂岩も使用されている。

第11表 砥石・敲石・石劍・石刀類の出土層位

出土層位	石器番号(AS)
III D 黒色砂泥土層	180 191 194 196 197 198 199 200 206 240 241 244~247
III D 灰褐色泥土層	178 179 187 203 205 242
III D 灰褐色砂層	192 195
III D 青灰色砂層	193
III D ビート層	208
III C 黑色泥砂層	202 204
III C 灰白色砂層	201 209

石皿(AS 189)は安山岩製で僅かな凹みを有している。凹みの部分は滑らかで、この凹みは磨滅によってできたものである。滋賀県遺跡では深い凹みを有する石皿は発見されていないが、AS 189のような特徴を有する石片は10片を数える。

(e) 石冠(AS 185) (図版48-2, 第43図) Ⅲ C区墓址の黒色泥砂層から出土しており、造形に伴うものではない。平面形は橢円形で、体部に横方向の浅い凹みが帯状に一周している。表面は平滑である。

(f) 敲石類(AS 183~184, 186~188) (図版48-2, 第43図) アバタ状の敲打痕を右の側面に帯状に有するもの、敲打による凹みを有するもの、及びこの両方の特徴をもつものを敲石とした。AS 188はこの特徴の他に磨石として使用された痕跡もあるが、このような種々の作業の痕跡の時間的関係は確認できない。AS 188は磨石としては最も代表的な形態をしており、最も顕著な磨滅の痕跡を残し、一部は光沢を帯びている。

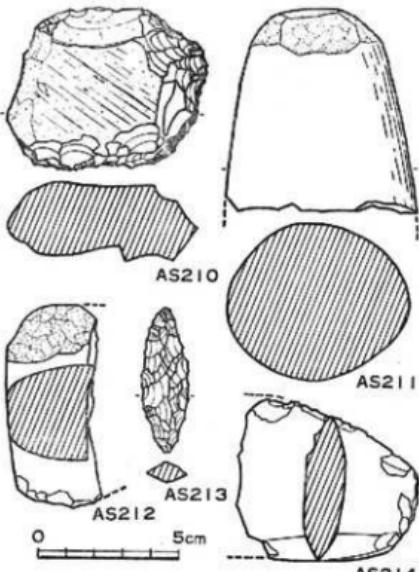
敲石は片手で操作できる程度の楕円体のものが多く、玢岩、花崗岩、安山岩及び熔結凝灰岩などの岩石を素材としている。堅田直氏は凹みのある石を石器製作の工具、石槌であるという見解を発表しているが、この見解について同様の実験を試みた結果、同様の結論が得られ、賛同できるものである。堅田直氏は凹みの中に斜に走る列状の打痕があると指摘しているが、これは滋賀県遺跡の敲石にも見られ、また溫原遺跡、吉胡貝塚出土の敲石⁷⁹⁾にも見られ、特異なものとは言えない。このような作業面に残る打痕は、細長く舟底状を呈するものが多く、石の長軸に対して右上りに傾いている。石が小片のため長軸のはっきりしないものや、石の長軸に直角なものも少数存在する。

敲石に残る凹みは剥片の調整作業等によって生じたもので、凹みが右上りなのは右手に石槌を持って剥離作業を行った結果と考えられる。凹みのある石の中でも、片手で容易に操作できる石は敲石として使用され、持ちにくい石（AS187）や重量が1kgを越えるような大きい石は、作業の際の台石として使用された可能性がある。凹み石は石器製作の工具である事は明らかになったが、凹みのある石の全てが工具と言うわけではなく、打撃や研磨によって入念に丸く調整された凹みを有する石は、石槌とは別の用途が考えられる。ここではこの種の凹み石は発見されなかった。側面にアバタ状の敲打痕を有する石も石器製作の工具とすれば、凹みを生じない程度の弱い打撃痕の集積と考えられるが、他の用途が⁽²⁾あったのかもしれない。

(イ) 石剣・石刀・石棒 (AS190~209) (図版49, 第44図) 諸刃の石剣はAS190だけで、他は一側縁を刃部とする石刀である。刃部は両面から研ぎ出しているが、刃は純く実用的の利器とは考えられない。これは全ての石剣・石刀に共通の特色である。AS195は一部破損し

ているが完形品で、石棒か石刀の再生品かも知れない。AS199は刃部が内側するもので、当遺跡ではこの一例のみである。AS200は背部にV字形の溝が刻まれ、上端は装飾のための溝の所で破損している。AS207は打製の完形品であるが、研磨する前の未成品と考えられる。AS208と209は結晶片岩製の石棒で、AS191も同様の石材を使用している。石刀や石剣はホルンフェルスを使ったものが多く、粘板岩製のものも見られる。

(ロ) 小結 滋賀里遺跡から検出された剥片は非常に多く、重量にして百数十キログラム程度になる。剥片はサヌカイトが90



挿図6 III C・III D区出土の石器実測図

第12表 石器・玉類の調査

石器番号	出土層位	石材	備考
AS 210	III D 黒色砂泥土層	サスカイト	自然石を軽く打ち欠いて刃部状にしている。打撃を加える事によって生ずる細かい傷が刃部状の所にある。
AS 211	III E 掘 土	安山岩	始刃石斧か? 弥生時代の石斧の可能性が強い。
AS 212	III D 黒色砂泥土層	"	頭端は削り落があり刃部は刃つぶれが激しい。石斧の被削品を再利用したタサビか?
AS 213	III C 黒色泥砂層	サスカイト	小單の石斧か? 入念に剥離、削除してある。V類の石器に含まれるか?
AS 214	" "	安山岩	両面から刃部状に研ぎ出している。刃は鋸く、実用利器とは考えられない。使用歴は強認できない。
AS 215	" "	結晶片岩	磨製管玉
AS 216	III D 黒色泥砂層	"	自然石に多少手を加えた粗雑な磨製の管玉
AS 217	III D 灰褐色砂層	ホルンフェルス	全面剥離。表面には研磨の際の擦痕が残り、剝離には縦状の溝がある。飾貝か?
AS 218	" 黒色砂泥土層	"	" "
AS 219	" "	"	全面入念に研磨。表面は光沢を帯びている。上端と下端が横方向へわずかにふくらむ。
AS 220	" "	"	穴は自然のままに。外側を鏝に研磨。部分的に研磨が足りないため自然面が残っている。

%を占め、残りの10%は花崗岩、安山岩、ホルンフェルス、粘板岩、チャート等である。大量の剥片の存在は当遺跡で石器が製作された事を示すものである。石器や刃器にはサスカイトが使用され、打製石斧・石劍類はホルンフェルス、粘板岩等の当遺跡の近くに産する石を主として用いている。軽石及び結晶片岩や蛇紋岩製の石器と剥片と共に当遺跡で検出されたが、これらの岩石は瀬戸内地方に産しないもので、石器と石材の产地との関係が問題である。

当遺跡の石器でV類と称しているものは奈良県山原遺跡や愛知県馬見塚遺跡にも同様のものが見られる。福原遺跡の石器は材質が滋賀県遺跡のものと同じサスカイトであるが、馬見塚遺跡の石器は黒雲母安山岩を使用している。形態も良く似ており、石材も安山岩を使用しているのだが、使用されている安山岩の違いから、V類の石器は黒雲母安山岩を使用している地域からの搬入ではない事が明らかである。滋賀県遺跡に於ける石器の変遷は、石器を除いては判明しなかった。石器は滋賀県I～IIとIII～Vの時期には形態の上で差異が認められる。滋賀県I～IIの時期にV類の石器は見当らないが、滋賀県III～Vの時期にはV類の有茎錐やV類のような比較的大型の石器が見られる。

石器の製作については注76で触れたが、石槌を使用した剥離作業が行われていた事は、敲石の存在から明らかで、石槌を使用して打撃を加えるのはラットフォームなどの除去には極めて有効なものである。また石槌で加える打撃の方向の不正確さが階段状の剥離痕

を生ずる主な原因と考えられる。完成した石器にも階段状の剥離痕が認められるから、石器製作の大半の工程に石槌を使用していた可能性がある。

滋賀遺跡出土上の石器は生産用具、日常生活用具、その他に大別できる。発見された石器の組成を見ると石錐61%、敲石7%、石斧6.5%、砥石7%、石錐2.5%、石刀類6.5%、石匕等の刃器1.5%、石錐1%，その他7%となつた。数字は概要を示すものであるが、石錐が圧倒的に多い事が明らかである。石斧の中で打製石斧は3例で、打製石斧と同様の機能を持つと考えられるものを含めても4例を数えるのみである。このように打製石斧が少いのは、日常生活の中で、打製石斧を使用するような作業の比重が、それ程大きいものではなかったためではないだろうか。晚期の遺跡の一つのあり方として直視する必要がある。

骨角器（図版50・51—1、第45図、第15表） 滋賀里遺跡出土の骨角器は全てⅢD区貝塚から出土し、狩猟用具と考えられる根バサミ・牙鑿・弓箭と、漁撈用具と考えられるモリ・ヤス・針・釣針とが圧倒的に多く、その他には角鉗、ヘラ状製品、装飾品などがある。出土した遺跡の性格から、骨角器の多くは破損しており、原材や加工中の未製品も少なからず出土している。さきに灰褐色泥土層は滋賀里Ⅱに、黒色砂混泥土層は滋賀里Ⅲ～Vに比定したが、この点を考慮すると、根バサミに形態上の差異が認められる。根バサミBタイプが全て黒色砂混泥土層から出土しているのに対し、根バサミAタイプは灰褐色泥土層に確実な例があり黒色砂混泥土層にもおよんでいる。この事から一つの可能性として、Aタイプの根バサミがより古い形態となることが考案される。

骨角器と材質との関係は有機的に結びついており、材の性質に応じて使い分けられている。ニホンジカの骨角の利用が他の多く、生産用具のほとんどがこれによつてしまれている。根バサミは全て鹿角でつくられており、角鉗や装飾品を除けば鹿角の利用は根バサミに集中している。ニホンジカの中手・中足骨や肋骨は、骨の緻密層が強くて弾力性があり、この性質を利用してモリ・ヤス・針がつくられている。

食用に供された量からはニホンジカに劣らないイノシシの骨の利用は少なく、牙や趾根骨の利用に限られている。イノシシの牙のエナメル層は強靭であり、これをうまくとり入れて釣針、ヘラ、牙鑿などがつくられている。イノシシの利用はこの牙が主体であるが、腰飾や特異な形態の装飾品は、イノシシのグロテスクな形状の趾根骨を巧みに利用している。

製作技術からみれば、骨角器の製作も木器と同様に、1次加工と2次加工とに分けて考

えられる。1次加工は原材料を得る作業であり、骨や鹿角がある長さの単位に切り離すことから始まる。この作業は、鋭い刃物で材の堅硬部に刻み目を入れ、おし切るか割って切断している。更にこの単位材を縦割りする場合もある。

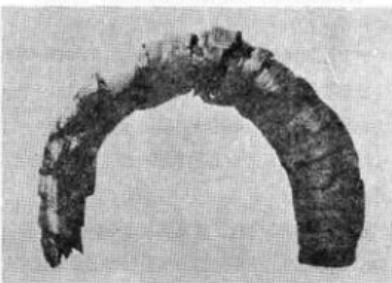
2次加工は製品を原材料からつくり出す作業である。モリ・ヤスや針などの未製品と思われるものの観察によれば、その端部を尖がらしたり丸棒状のものにするには、削るかまたは細かい縦割りによって原材料の端部をとがり気味に作り、次に荒い磨きが原材料の長軸方向に対して直角かやや斜方向におこなわれて、大体の形をつくり上げている。この荒磨きの擦痕は、仕上げの磨きがかけられてもなお骨角上に明確に残っている。最後に仕上げの細かい磨きが原材料の長軸方向にそっておこなわれる。この仕上げの磨きは、痕跡としてつかめないほど平滑なものもあるが、明らかに、荒磨きとは使用した道具が違っている。骨角器の製作には主として石器類が使われたことが考えられるが、具体的にはつかめなかつた。

木 器 (図版52～55、第46～48回、第16表) III D貝塚地点の貝塚形成以前の堆積であるビート層と、III C開拓谷の黄褐色砂層・第2ビート層・黄灰色砂層から多くの木器と原材料が発見されたことは一大収穫であった。この内、III Dビート層出土のものは、滋賀里Ⅰに時期を限定して考えられるが、晩期内での時期差を問題にできる段階ではないので一括して扱うこととした。

木器は、その用途から4種に分類できる。狩猟具として弓、木槍が、工具として石斧柄が、日常用器として木椀、漆塗り木椀、籠胎漆器、杓子形木器、火鉗臼・杵が、装身具として漆塗り横、漆塗り胸輪がそれぞれ認められる。用途不明の木器の内では、柾状木器の機能が問題となろう。AW7は明らかに



插図7 III D区出土の弓 (AW19) の弓頭部



插図8 III C区出土の樹皮巻き把手



插図9 III D区出土の火鉗臼と火鉗杵

半製品であるが、AW6のように端部を扁平につくらないAW5が完成品であるかどうかが用途を決める上でポイントになる。材質の鑑定を済ませていないが、この櫛状木器は石斧柄と同じカシのような堅硬な材から作られている。

籠胎漆器を含む漆の広範な活用が確認されたことは特筆すべきであろう。骨角器にも漆を塗る例があり（AB36）、土製品にも漆を用いた可能性があるが、容器類や装身具類を中心として弓なども含む木器類にその主体が認められる。漆に混ぜる顔料は未分析であるが、黒色と朱色との2色の漆があり、一般的に容器や装身具には朱色が、弓には黒色が塗られ、AW15の弓では2色が使い分けられている。漆塗りの木器の性格に関して、弓類のように、漆塗りのものが主として生産活動以外の場で使用されることも考えられるが、AW13の朱漆塗りの木梳のように、朱塗りの黒色磨研土器柄と材質こそ違え同じ効果を発揮しており、両者間には全く共通した目的を考えることができるのではないか。

木器を上まわる多量の原材料は、木工技術を考える上で重要である。原材料の加工は4段階に分けられる。まず、切りだした原木の枝をはらって70cm～120cmの長さの単位に切断した丸木材を基本とし、逐次これを紙方向に半削りして、 $\frac{1}{4}$ 円周材、 $\frac{1}{2}$ 円周材、 $\frac{3}{4}$ 円周材を得る。当然のことながら、径の大きい丸木材の場合にはその中央部に板材をとっており、 $\frac{1}{4}$ 円周材の中にはその残りの部分のものも含めている。このような各様の原材料をつくりだすのが木器製作の第1次工程であり、丸木を一定の長さの単位に切断するために大型の石斧を使用したことが認められる（図版56-1）。半製品が出土している石斧柄や櫛状木器では、丸木材→ $\frac{1}{4}$ 円周材→半製品→完成品という製作過程をたどることができる（図版56-3）。このような原材料を貯木場にたくわえておき、必要に応じて木器をつくったと考えられよう。

木器製作の2次加工は荒削りとみがきによっておこなわれている。石斧柄や櫛状木器の半製品には、小形磨製石斧を手斧として使用したと考えられる削り痕が明瞭であるが、その完成品にはみがきがかけられて、加工痕は観察できない。AW18の弓の側面に認められる擦痕によれば、このみがきにも荒みがきと仕上げの細かいみがきとがあったことがわかる（図版56-2）。

弥生文化の定着による生産様式の変化は、それに対応する木器を生み出し、木器製作に使用される工具の変化は、木器製作の能率を向上させた。しかしながら、これらの本実は弥生文化の定着にともなう社会変革によって生み出されたことであり、滋賀里遺跡出土の晩期の木器にみられる木工技術は、基本的には弥生時代にひきつがれていることが認めら

れよう。この点に関して、AW14の木挽がロクロを使うことなく、削り技術だけによって仕上げられている事実は、弥生文化の横軸ロクロの存在を再検討する必要があることを示唆している。

土製品・紡錘車（図版44・51、第49回、第17表）　滋賀里遺跡出土の土製品の内、特に注意を必要とするものは、粘土を漆で練り固めてつくられたと考えられる3例の土製品である。一見した限りでは焼成品と見誤るものであるが、断面の観察によれば胎土は火を受けていない。全体の形態のわかるものはないが、2種類のものが出土している。1種はAC10で、中空の円弧状をなし、この構造は樹皮を芯として同じ樹皮をその芯に巻きつけたものに、粘土を漆で練り固めたもので巻いてある。元来は中空でなく、植物質の芯の大半が腐蝕したものであろう。他の1種は芯などのない扁平な製品で、ⅢC墓塚の墓頭中から2例出土し、その内81号土壙出土のものは、一端に孔のある腰飾と考えられる。この土製品の構造は成分分析の結果をまちたい。

紡錘車には実際に紡錘車として使用されたものかどうか疑わしいものもあるが、周囲を打ち欠いてほぼ円形につくり中央に穿孔しているものを第1基準とし、更に円周端面を磨いているものや、孔の周囲に同心円状の擦痕のあるものを第2基準とした。第1基準のものが34例中25例をしめ圧倒的に多いが、この内には紡錘車として疑わしいものも含まれている。第2基準のものは9例あり、より紡錘車としての可能性が強いわけであるが、この内4例に同心円状の擦痕が認められ、使用痕となる可能性がある。しかしこの擦痕のある例は少なく、孔の向面にこの擦痕のある例も1例あり、残された問題は多い。⁸⁶⁾

2. 各 地 区 の 調 査

(1) I F区の包含層（第33図）

I区では弥生時代の溝が発見されたが（図版10）、この内の3号溝の肩になっている褐色泥土層より滋賀里Vの甕（A360～A363）が出土している。溝の肩になっている土層の内、最上層は弥生第5様式を含む暗茶褐色砂利混泥土層で、この褐色泥土層はその下層にあたる。褐色泥土層はその内に有機化した部分を含む不均質な堆積で、晚期の土器はこの有機化した部分より出土し、泥土質の部分からは微量の後期の土器片も出土している。このような状態は、滋賀里Vの包含層が2次堆積したものと考えられ、調査地点より西方の山寄りの高みに、この時期の生活址の存在が推定される。⁸⁷⁾

I F区出土の滋賀里Vの土器は、滋賀里遺跡の同時期の上器にくらべると、外面の調査手法においてナデ調整が多い点が指摘される。

(2) 他の地区出土の縄文式土器（第33図）

今回調査した各地区より少量の縄文式土器が出土している。II E・II F・II G・IV B・IV D・V B・V Cの各地区の開拓谷または再開拓谷中の堆積に含まれるもので、現在の地表面より2m～3mの深さの砂層や砂疊層から出土している。多くの土器は時期すらわからぬほど磨滅てしまっているが、V C区で元生吉山式の鉢が、V B区では滋賀里Iと考えられる深鉢（A359）が、それぞれ確認されている。これらのことから、調査地点の西方に、滋賀里遺跡以外にも縄文時代の生活址の存在が推定される。

註 1) 遺跡の発見のいきさつやその後のことなどについて、皇子山中学校教諭西田弘氏より教示を受けた。

2) 1948年の調査地点が、今回の調査地区のどこに対応するのか、具体的には明らかでない。滋賀里遺跡に関しては以下の文献に紹介されている。

坪井清足「滋賀県大津市滋賀里迷跡」（『日本考古学年報』1）1951年

坪井清足「縄文文化論」（『岩波講座日本歴史』1）1962年

3) 松下進「日本地方地質誌 近畿地方」1953年

京都新聞社編『比叡山—その自然と人文』1961年

4) 坪井清足他「石山貝塚」平安学園考古学クラブ 1956年

5) 1971年の夏に湖西線の北大津駅建設のための整地作業中に発見された縄文時代から平安時代におよぶ複合道路である。同年の夏に滋賀県教育委員会によって調査され、縄文前期の包含層、古墳時代（4世紀から5世紀）の住居址、7世紀末の東西・南北溝、奈良時代以降の孤立性建築址、井戸などが発見された。

6) 京都市史編纂所『京都の歴史』1 学芸書林 1970年

7) 地質学的用語としてのピート層は泥炭層という意味であり、この点からすれば本報告書中に使ったピート層という用語は正しくない。木の葉層あるいは木屑層というのが正確な表現に近いが、便宜的にピート層という用語を使用した。

また、本報告書中の層の命名は土の粒度によって粘土・泥土・砂・礫と区分し、それに肉眼で観察できる色調を加えておこなった。また砂質泥土、泥土質砂は各々砂泥、泥砂と略した。

淡正雄・井尻正二『日本列島』1958年

8) 晩期の土器を滋賀里I～Vに分別した。詳しくは土器の項参照。

9) 木の実の鑑定は、京都大学理学部大学院・那須孝鶴氏におねがいした。また、このIII C区間

折谷の第2ピート層とⅢD区貝塚下層の第1ピート層の花粉分析を、那須氏と大阪府立門真高校教諭徳丸始輔氏におねがいした。

- 10) ⅢCの開折谷の南限についてはつかんでいない。
- 11) 潟西線予定地のやや西方にある旧江若鉄道敷では、発掘調査はしなかったが、広範な晩期の包含層を確認している。
- 12) 銀文時代早期の瀬田川の川床は、大体現在の消抜90mであることが述べられている。
坪井清足他『石山貝塚』平安学園考古学クラブ 1956年
- 13) 滋賀里遺跡の周辺の小字名には以下のものがある。
畔ノ内、筑畔、芦畔、中畔、立オサ、白米田、三反田、鍋田、小島田。今回調査したところは、立オサと白米田である。
滋賀里遺跡の現在地は、大津市見世1丁目と2丁目にまたがっている。
- 14) 晩期にはイヌの埋葬が多く認められているが、滋賀里遺跡ではこの26号・27号にその可能性があるだけである。
- 15) 人骨の鑑定は、大阪市立大学助教授寺門之隆氏と京都大学教授池田次郎氏におねがいした。
- 16) 遺構保存のためにたち割りをおこなっていないので、更に下から墓壇が発見される可能性もある。
- 17) 滋賀里Ⅲ～Vの臺の体部片は調整手法が同じであり区別がつかない。また口縁部に突帯のある滋賀里IV・Vの土器を含まない土壇にしても口縁部の破片の量が問題であり、この点をもって滋賀里Ⅲに属するとは決められない。
- 18) この他に、217号土塚墓の人骨の腰付近から獸骨製品らしいものが出土しているが、詳細はわからない。
- 19) 81号魚骨墓の顎蓋骨下の集骨中にこの土製品が入り込んでおり、現在のところこの土製品を取り出していない。
- 20) 肖灰色微砂層から灰褐色砂層までの堆積は、古墳時代の遺物を含んでいる。
- 21) 以下の本文の記載でⅢD区貝塚のピート層と略称するものはこの第1ピート層のことである。
- 22) この木器原料の放射性炭素による年代測定を京都産業大学教授山田治氏におねがいした。
- 23) 斜面堆積の複雑な土層であるため、便宜的に10cmを単位として掘り下げていった。
- 24) ブロック内の貝の種類別算定は、今回の整理ではその一部しか実施できなかった。

	セタシジミ	ナガタニシ	イケチョウガイ	イボカワニナ
個体数	4,660	46	28	11
比率	98.2%	1.0%	0.6%	0.2%

セタシジミが圧倒的に多い事は他のブロックでも同じであり、今後シジミの種類が増える可能性はあるが、全体として淡水性の貝に限定されている。

- この様な貝ブロックは一度に消費された単位と考えられるが、静岡県西貝塚の検討と同じように、食料資源の中で貝殻のしめる役割りは副次的なものといえる。
- 麻生優・市原寺文雄『西貝塚』磐田市教育委員会 1961年
- 25) 魚骨の鑑定は、早稲田大学講師金子浩昌氏におねがいした。
- 26) 文化財保護委員会編『吉胡貝塚』(『埋蔵文化財発掘調査報告』1) 1952年
- 27) 小島俊次「各地域の縄文土器一叢」(『日本考古学講座』3) 河出書房 1956年
岡田茂弘「近畿」(『日本の考古学 縄文時代』) 河出書房 1965年
末永雅雄・藤井祐介「近畿」(『新版考古学講座』3. 先史文化) 堀山閣 1969年
- 28) 滋賀里Ⅰ・Ⅱは従来の滋賀里式、滋賀里Ⅱは丹治式の一部と細原式の一部、滋賀里Ⅳは穴帯土器(細原式の一部)、滋賀里Ⅴは船橋式とそれぞれ対応する。
- 29) III C 区墓石と III C 区開拓谷出土の土器量は III D 区貝塚出土のもの占以下であり、小破片が多い、接合作業をおこなっていないので貝塚地点の上器と同列には扱えなかった。
- 30) 山内消男「縄文土器の技法」(『世界陶磁全集』1) 1958年
- 31) 註30に同じ。
- 32) 外反する口縁部と体部との区別が、単に形態上ののみならず製作手法上からも明確に意識されている土器を、深鉢と区別して表とした。
- 33) これとは逆に、多くの砂粒を含む深鉢・笠類には意識的に砂粒が混ざられたことも考えられ、その場合同じ現象が描かされている弥生前期の土器との関連が注目される。
- 34) 滋賀里Ⅰ～Ⅲの浅鉢・模類は、黒く化上げることに意味があったことが考えられる。
- 35) 猿程湖の河口付近に現在でも採集できるイボカワニナが、その原体と考えられる。
- 36) 東海地方や瀬戸内地方でハイガイを使用した貝殻条旗と呼ぶものに似るが、A85のように形の深いそれらしきものは少なく、その影響を受けてイボカワニナのイボの欠損したものを使ったのではないかと思われる例があり、この調整の原体に関しては検討の余地が多い。
- 37) 縄文式土器の検討で、削りの方向まで觀察したものは少なく、静岡県天王山遺跡の報告例はその数少ない一つである。天王山遺跡出土土器の削り調整は滋賀里遺跡のものと全く逆方向で、口縁から底部の方向に削ると報告されており、同じ調整手法にみられる地域差であろうか。
和島誠一・市原寺文雄『清水市天王山遺跡』清水市郷土研究会 1960年
- 38) この滋賀里Vの縦縫束状の原体による条痕は、削り調整の一種と理解したが、具体的には削り調整ともナデ調整ともつかぬものである。
- 39) 潤見浩『山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究』(『広島大学文学部紀要』18号) 1960年
- 40) 岛井清足『岡山県笠岡市高島遺跡剖面報告』笠岡市教育委員会 1956年
- 41) 註36に同じ。
- 42) 口縁部の突起・突帯や口縁上端面の刻み目は、土器の觀察表では文様欄に扱ったが、この数量操作では文様とはみなしていない。

- 43) 東北・北陸系土器は除外している。東北系土器には搬入品と模倣品とがあり、後者の比率が時期の推移とともに低くなっているようであり、土着土器の無文化と併せて一にする。搬入品か模倣品かについて検討するために、東北大大学院清水芳裕氏に胎土分析をおねがいした。
- 44) 錐木義昌・江坂進「岡山県御津町原遺跡」(『瀬戸内考古学』2) 1958年
- 45) 南方前池遺跡調査団「岡山県山陽町南方前池遺跡」(『私たちの考古学』7) 1956年
- 46) 横桿の施文具を使用する例は、吉胡貝塚をはじめ尾張地方の後期の古いところにある。
- 47) 变形山形沈線文は A126, A127を典型とし、A373, A384, A387をさす。山形沈線文から山形反転沈線文への移行は、前者の数条からなる沈線が山形沈線と口縁あるいは肩縁部に平行な直線に分解反転したものか、あるいは上下2段に施した山形沈線の下段の単位をずらした結果によるものか断定できないが、明らかな点はその推移における構図の変化である。山形沈線文は、口縁部をめぐる沈線の集合にすぎないが、山形反転沈線文は上下2段の文様構成をとり、文様帯の出現ともいえる。
- 48) 山形反転沈線文と樋原式文様との関係について検察されたことは以下の5項目である。
- ① 山形反転沈線文も樋原式文様もすでに完成された様相で滋賀里IIに出現する。
 - ② 滋賀里IIIで山形反転沈線文は姿を消すが、樋原式文様や变形山形沈線文は継続している。
 - ③ 文様の構成要素を比較すると次のようになる。
 - 山形反転沈線文：沈線、棒状刺突文
 - 樋原式文様：沈線、刻み目、三角形くり込み
 - 变形山形沈線文：沈線、棒状刺突文 - ④ 表現方法を比較すると次のようになる。
 - 山形反転沈線文：陰刻文様帶
 - 樋原式文様：陽刻文様帶
 - 变形山形沈線文：陰刻文様帶 - ⑤ 施文される器形を比較すると次のようになる。
 - 山形反転沈線文：浅鉢A₁, C₂, F₁
 - 樋原式文様：浅鉢A₂, E₂, 楕A₂
 - 变形山形沈線文：浅鉢E₂, H₁, I, 楕A₁

山形反転沈線文と樋原式文様の類似点を挙げると、出現時期、文様の要素である沈線、文様帶の3点となる。差異点は、消滅時期、沈線を除く文様要素、陰刻と陽刻による表現の違い、施文される器形である。

山形反転沈線文に、三角形のくり込み、刻み目、さらに文様帶の発展を加えることによって樋原式文様の出現をみたと仮定することもできるが、完成された文様として両者が滋賀里IIに出現した事実はむしろその仮定を否定するものであろう。このことは器形との関係からもいえる。山形反転沈線文は、浅鉢C₂のように滋賀里Iの伝統をもつ形態にも施文されるが、樋原

式文様はその主体が楕であり、浅鉢に施文される場合も、滋賀里Ⅱ以降の新しい要素である浅鉢Eに多い。また楕A₄のA124, A375のように、本来浅鉢に施文される山形沈線文や山形反転沈線文が、変形されて楕に施文されていることなど、山形反転沈線文から生じた楕原式文様が出現したとは考えられないほど、器形と文様とに流動性が認められる。

- 49) 滋賀里IVの突部上にみられる刻み目の各タイプの比率は以下のとおりである。

刻み目のないもの	9%
刻み目Bタイプ	76%
刻み目B'タイプ	13%
刻み目Cタイプ	2%

また、滋賀里VではBタイプが主体をしめるが、Aタイプも認められる。(図版45-11)

- 50) 滋賀里Ⅳ以降は計測しなかったが、確実に減少している。愛知県馬見塚F地点からは、滋賀里の浅鉢G₁, G₂, G₃と手法・形態とも全く同じ土器が出土しているが、馬見塚の例は火にかけて使用された痕跡が明瞭であると報告され、一方滋賀里ではススの付着があるものの火との関係は稀薄であり、大きな差異が存在する。泣田正一他『新編一宮市史 資料編1』1940年
- 51) 手法の観察が可能な凹底の総数569のうち、凹面が未調整のものはわずかに2%にすぎない。
- 52) 木枕AW14にも補修孔がある。

- 53) 個体数は次測可能な破片までに限って算定しているが、その欠をおぎなう意味で、深鉢・甕類と浅鉢・鉢・楕類との総重量を出し、深鉢・甕類と浅鉢・鉢・楕類との平均的な重量比を4:1と仮定して個体数の比率算定を試みた。

滋賀里Iは79%:21%, 滋賀里IIは78%:22%, 滋賀里IIIは81%:19%,

滋賀里IV・Vは79%:21%となった。

- 54) 浅鉢のうち、滋賀里IV・Vの特徴的器形である浅鉢Gのみを計算している。

- 55) 坪井清足氏が滋賀里遺跡出土の土器で検討した数値71%:24%と、各時期ともほぼ同じ結果が得られた。

坪井清足「縄文文化論」(『日本歴史』1)岩波書店 1962年

- 56) 高畠勝喜「金沢市近郊八日市新保並びに御経塚遺跡の調査」(『石川県押野村史』)1964年

- 57) 註56に同じ。

- 58) 小島俊彰他『富山県高岡市勝木原遺跡』1 県立高岡工芸高校地歴クラブ 1967年

- 59) 滋賀里III～Vの東北・北陸系土器に関しては、同一層から出土したものであり、厳密には分類できないが、-30cmを境とした出土深度によって一応分類したものである。

- 60) 東北系土器の取り扱いに関して、その一端を知る資料として、土器の体部上半部あるいは下半部を打ち欠いた形跡が認められる。A333は後者に属する。

- 61) 小島俊彰「吉野川流域の古文化について」(『奈良県総合文化調査報告書 古野川流域』)1954年

- 62) 末永雅雄他『櫛原』(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』17) 1961年
- 63) 山口県岩田遺跡の土器の様相は、滋賀里IIに最も近い。註39と同じ。
- 64) 愛知県馬見塚遺跡の突苔文のつく壺はほとんど平底であり、滋賀里遺跡の丸底と様相が異っている。註50と同じ。
- 65) 土器の検討にあたり静岡大学教授市原寿文氏と港北ニュータウン調査団の小宮恒雄氏から多くの教示を受けた。特に小宮氏との討議によって、本遺跡における晩期の土器の動向をつかむことができた。また、土器の觀察表中に引用した遺跡の内、他で述べていない報告書を列記しておく。
- 河野通哉・喜谷実宣『日笠山貝塚』(『高砂市文化財調査報告書』3) 1968年
- 田辺昭三編『船橋II』平安学園考古学クラブ 1961年
- 杉原莊介・外山和夫「豊川下流域における縄文時代晩期の遺跡」(『考古学集刊』2巻3号) 1964年。
- 『鳴神貝塚発掘調査報告』(『和歌山県文化財学術調査報告書』第三回) 1968年。
- 66) 晩期以前の土器に関して、港北ニュータウン調査団の小宮恒雄氏から多大の教示を受けた。
- 67) 体部にアバタ状の打痕を残しているものと称している。
- 68) 註50と同じ。滋賀里遺跡のものは、図版56—5に示した。
- 69) A S 218が最大と考えられる。現存長7.8cm、幅8.9cm、厚さ3.0cmで、重量220g。刃部付近が全体の1/3程度残っている。
- 70) エス・アー・セミヨーノフ『先史時代の技術』1964年。論文の一部は山中承氏が『考古学研究』56、1968年に訳文を発表。M・W・トムソン訳の英語版からは小山修二氏が『国学院大学考古学会先土研研究会・資料1』1969年などに邦訳、紹介されている。この文では使用痕、柄の着装法に関する記述は全て、この論文を前提としている。
- 71) 小林行雄・佐原真『紫雲出』北關町文化財保護委員会 1964年。
- 石器に関する用語はこの『紫雲出』で佐原真氏が使った用語を用いています。
- 72) 各種計測は完形品、形態分類には形の識別し得るもの全てを使用している。計測には黒色砂混泥土層(表面～-30)166個、同(-40～-50)79個、灰褐色泥土層59個を使用した。他の層は計測可能なものが30個に満たない。
- 73) 『櫛原』の図版80の3、4、5に似ている。
- 74) 竪田直『岸和田市春木八幡遺跡の研究』(『帝塚山大学考古学研究報告』第1輯) 帝塚山大学考古学研究室 1965年。石器の片りについて、幅との関係による分類をしているが、ここでは単純に平面形で分類した。
- 75) 長さと幅の比は、IV・V類の場合茎を含めた長さである。数値の上で細長く感ずるのは、このことも一つの理由と考えられる。茎の部分の長さを含めない場合、IV類はII類と大差ないが、V類はII類よりやや細長く、先端の角度はII類より鋭い傾向を示す。

76) 佐原貞氏は『弥生』で、弥生時代の石器に残る階段状の剥離痕を階段状剥離と命名し、*Stepflaking* という英語の単語で表現している。*Stepflaking*について、M・バーキットが『old stone age』の中で定義しているが、それによれば剥片が階段状に剥離する原因に対する定義は佐原氏と同じであるが、バーキットは刃部を薄くするための二次加工をしている点が異なる。このような剥離痕の定義に対しK・P・オーフリー（『先史時代の技術』国文直訳 1971年）のように単に打撃を加える位置・角度によるとする見解もある。佐原氏は石器の調整を表現するのに「階段状の剥離を用いて」としているからこれを石器製作の技法と考えていい事は疑いない。

しかし、石器の剥離痕が全て階段状になっている石器の例は今のところ発見されていないし、特定の場所にだけ残っているわけではなく、不規則に残るなどの点から、フリントの握斧の刃部を薄くするというような特殊な技法と同じであるとは考えられない。また佐原氏の定義によると階段状の剥離痕が生ずるのは打撃の方向が一方向に限られるが、サスカイトはこの一方に向く限らず、打撃の角度が垂直（内側、外側という語で表現すると内と外との間）に近い場合でも生ずる。このような点から剥片を剥離した痕跡が階段状になるように意識して打撃を加える技法の存在は極めて疑わしい。従ってここでは石器などで剥離、調整する際の打撃方向の不正確さによって偶然階段状の痕が石器に残るもので、これを特殊な技法とは考えていない。文中の階段状の剥離痕という語はこのような意味で用いている。

77) 木村貞朗「実験よりみた敲石とその用途」（『考古学ジャーナル』No. 74・75）1972年。石が磨滅するような作業を実験的に復元している。この実験の結論に賛同できる。

78) 註74に同じ。

79) 註62に同じ。図版48参照。

80) 註26に同じ。

81) 最も自然な姿勢で作業すると右上りの痕が生じる確率が高い。実験の条件により結果が多少異なると思われるが、左手では右上りの痕はつくりにくい。

82) 註77の木村氏のような見解もある。

83) 内反りの石刀が出土している。小林行雄・中村春寿・藤岡謙二郎「近江坂田郡春照村杉沢遺跡」（『考古学』第9巻5号）1938年。

84) 石材の鑑定は、京都大学理学部助教授石田忠朗氏におねがいした。

85) 骨角器の材質鑑定は京都大学理学部教授龜井節夫氏におねがいした。また早稲田大学会了寺昌氏からは有益な教示を受けた。

86) 第17表中に引用した遺跡の報告書を記しておく。『馬場川遺跡調査概報』東大阪市教育委員会 1969年。

87) I区内の近接地点からは弥生第1様式(中)の土器も発見されており、この滋賀里Vの生活址の存在は注目する必要がある。第2章参照。

第13表 III C 区墓址主要な遺構

十 九 番	種 類	土塗の規模(半径m)	人 骨	事 法	特 記
1	土塗墓	1.3×0.6×0.15	頭蓋骨、骨片 骨に朱がついている。	N-20°-W	・現代の大によって一部削られていた。 ・上部削平されている。
26	土塗墓?	1.2×0.8×0.3			・土塗の覆土上面に腰骨片が 散在するが、土塗にともな うものかどうか、不明である。 ・上部削平されている。
30	土塗墓	1.4×0.8×0.2	?	仰臥屈葬 N 下肢右	・32を切る ・上部削平されている。
36	土塗墓	2.2×1.5×0.1	A 幼? 若年~壯年 B 頭蓋骨、上腕骨 C 成人	A 横臥屈葬(左下) N-40°-W B N-40°-W? C 頭骨か、骨が散在 していない。	・B→C→Aの順に切り合っ ている。各々の土塗のブリ ンは正確につまめなかった。 ・上部削平され、南部は現代 の溝で切られている。
41	土塗墓	0.5×0.4×0.15	骨片		・上部削平されている。
47	土塗墓	1.1×0.9×0.07	骨片		・上部削平され、土塗のブリ ンは明確でない。肅半部を現 代の溝によって切られている。
48	土塗墓	0.7×0.5×0.04	頭蓋骨片		・上部削平されている。
50	土塗墓	0.9×0.5×0.3	指骨片		・上部削平されている。
51	土塗墓	0.7×0.6×0.4	骨片		・上部削平されている。
52	土塗墓	1.2×0.4×0.1	頭蓋骨、骨片		・上部はほとんど削平され、 肅半部は現代の溝で切られ ている。
59	土塗墓	1.2×0.9×0.4	骨片		・60、61を切っている。 ・上部削平されている。
60		0.5×0.5×0.2	骨片		・61を切り、59に切られてい る。 ・現代の溝によって肅部は切 られている。
64	土塗墓	1.3×0.7×0.1	?	成年	・上部削平されており、頭蓋 骨の上半部はとばされている。
69	土塗墓	1.2×0.9×0.3	骨片		・上部削平されている。
81	土塗墓	0.6×0.4×0.15	頭蓋骨、骨	屈葬葬 頭蓋骨を上に置き、 下に一休分の他の 骨をあつめている ようである。完全 に1休分の骨が集 骨されているかは 目下のところ明ら かでない。	・79、80、82によって切られ ている。 ・骨中に、表面に朱を塗り、 一孔をうがつた製品がある。 ・腰椎かとも思われるが、骨 を分解していない。詳細 は不明。施成品ではなくて 粘土を塗て練り固めた可能 性がある。
83	土塗墓	1.2×0.7×0.1	老老年	仰臥屈葬 N-35°-W 右手前、左手伸、 下肢右	・84を切っている。 ・黒色泥砂層を切り込んだ土 塗か。
84	土塗墓	1.3×0.6×0.06	骨片		・83に切られている。

土壟 No.	種類	土壙の巻模(単位m)	人骨	葬法	特記
91	土塙墓?	1.4×0.9×0.2			<ul style="list-style-type: none"> • 88、90を切っている。 • 土塙の覆土上面に10cm大の角礫9個が土器片やイノシシの骨とともに発見されたが、土塙に伴うものかどうか明らかでない。
99	土塙墓?	1.1×0.6×0.1			<ul style="list-style-type: none"> • 6世紀代の流路によってはとんど削られている。
101	土塙墓?	1.0×0.7×0.25			
102	土塙墓?	0.9×0.6×0.25			
104	土塙墓?	1.9×1.2×0.04			<ul style="list-style-type: none"> • 103、105を切っている。
105	土塙墓	1.2×0.9×0.35	♂? 成人	横臥屈葬(左下) N 左右手伸、下肢左	<ul style="list-style-type: none"> • 103(盜賊盗掘の櫛孔)・104によって切られ。更に6世紀代の流路と現代建築物の破壊を受けている。
106	土塙墓	1.8×0.85×0.15	♀ 壮年 右 Femur 373	横臥屈葬(右下) N-88°E	<ul style="list-style-type: none"> • 運搬形態が他と異なり、下肢の組み方が特異である。あぐらをかくような組み方と思われるが、正確な組み方はわからない。 • 頭部と足部とに、0.5×0.25の掘り込みがある。人骨の形態と考え合わせて、腰板または棺を使用した可能性もある。
112	土塙墓?	1.0×0.6×0.2			<ul style="list-style-type: none"> • 土塙の覆土上面に25cm大の花崗岩が3個発見されたが立場的に置かれたものか不明。
114	土塙墓?	0.9×0.5×0.4			
122	土塙墓	1.2×0.6×0.2	♂ 右胫骨 327 (156.4cm)	仰臥屈葬 N-20°-E 右手肩、下肢後方	<ul style="list-style-type: none"> • 頭部付近は現代の溝で切られ、土塙上部を現代建築物によって破壊されている。
123	土塙墓	1.0×0.6×0.1	頸蓋骨片、骨片	屈葬 N-25°-W	<ul style="list-style-type: none"> • 現代の溝によって切られ、6世紀代の流路によって削られている。
124	土塙墓	1.0×0.8×?	下顎骨片		<ul style="list-style-type: none"> • 6世紀代の流路によってはとんど削られている。
129	土塙墓	1.1×0.8×0.1	♀	仰臥屈葬 N-45°-E	<ul style="list-style-type: none"> • 128を切り。127によって切られている。 • 上部削平されている。
138	土塙墓?	1.5×0.7×0.2			<ul style="list-style-type: none"> • 185・139によって切られている。 • 上部の削平を激しく受けている。

十五 No.	種類	土壇の規模(単位m)	人骨	葬法	特記
141	土壇墓	1.3×0.8×0.4	♂ 成人 左 Femur 407	横臥屈葬(右下) N-55°-E 腰椎前面にUking 下肢右	
142	土壇墓	1.3×0.9×0.2			• 6世紀代の流跡によって上部を削割られている。
145	土壇墓	1.0×0.7×?	頭蓋骨片、骨片、 子供		• 黒色泥砂層を切り込んだ土壇で、ベースの砂層に土壇底が達しておらず、土壇のプランははっきりとつかめていない。
146	土壇墓?	1.6×0.8×0.1			• 145・159によって切られ、一部現代の穴によって破壊されている。
147	土壇墓	0.3×0.3×0.02	長骨片		• 確認できたのは円形のピットであるが、黒色泥砂層を掘り込んでつくられた土壇と思われる。プランはつかめなかった。 • 149によって切られている。
148	土壇墓		長骨片、成年		• 黒色泥砂層に掘り込まれたらしく、土壇のプランははっきりとつかめなかった。 • 147を切っている。
153	土壇墓	0.6×0.8×0.2	頭蓋骨片、骨片	N-35°-W?	• 152、154によって切られており、155を切っている。土壇の大半は切り合いによって破壊されている。
154	土壇墓?	1.1×0.8×0.3			• 153を切り、現代建築物の基礎を受けている。 • 角礫が土壇覆土中に入っている。
163	土壇墓	1.0×0.6×0.2	♀ 壮年 左 Humerus 263 (143.9cm) 歯の残りはよくな いが、抜歯がある ようだ。	仰臥屈葬 N-30°-W 右手肩、左手腕、 下肢右	• 黒色泥砂層を切り込んだ土壇と思われるが、はっきりとつかめなかった。 • 人々の残りがよい例で、樹脂で固めて取り上げた。 • 164に切られている。
164	土壇墓?	1.0×0.5×0.25			• 現代の穴によって切られ、163を切っている。
165	土壇墓	1.0×0.4×0.5	骨片		• 164、166によって切られ、現代の穴によって一部破壊されている。
166	少土壇墓?	0.8×0.5×0.45			• 165を切る。
167	土壇墓?	1.5×0.7×0.1			• 168によって切られている。
173	土壇墓	1.0×0.6×0.2	♀ 壮年	横臥屈葬(右下) N-45°-E	• 黒色泥砂層を切り込んだ土壇か。 • 土壇の中央を横切って現代の溝が走り、その付近の骨
177	土壇墓	1.3×0.8×0.2	♀ 成人	仰臥屈葬 N-35°-W 右手曲腕、左手腕	

土坑 No.	種類	土坑の規模(単位m)	人骨	葬法	特記
184	土塙墓	1.3×0.8×0.2	♀ 壮年 歯の残りはよくないが、抜歯があるようだ。	下肢右 横臥屈葬(左下) N=20°-W 右手腹、左手伸、下肢左	は動いている。 + 186を切っている。
188	土塙墓?	1.2×0.5×0.1			• 191によって切られている。
191	土塙墓	1.0×0.7×0.2	骨片		• 190を切る。
194	土塙墓	1.2×0.8×0.15	♀? 成人	仰臥屈葬 N=60°-W 右手肘、左手腹、右下肢後方	• 191、196によって切られ。195を切っている。
195	土塙墓	1.0×0.5×0.1	♀ 小兒 右 Femur 297 2大臼歯ははえかわっている。	仰臥屈葬 S=45°-W 左手腹、右手腕、下肢左	• 184によって切られ。南半部を現代の穴によって破壊されている。
206	土塙墓?	1.0×0.8×0.2			• 踵との切り合い関係はつかめなかった。
207	土塙墓	1.5×0.9×0.25	♂? 成人 抜歯はない。	仰臥屈葬 N=45°-W 右手腕、左手腹 右足趾と跗近く、左足立	• 208によって切られており、 踵との切り合い関係は不明 • 頭のあたりに、薄い小片であるが、朱墨の土製品片がある。81の墓骨室にあつたものと同じ施成品ではなく、粘土を漆で練り固めたものようである。
214	土塙墓	1.0×0.6×0.35	♀ 壮年-老年	横臥屈葬(右下) N=40°-E	• 213(滋賀里Yの腰椎)によつて切られている。 • 滅盡骨から5cmほど離れ、土坑の壁に接して、19cm×7cm大の角礫が、あたかも石枕のように入っていた。 • 人骨の残りのよい例で、樹脂で留めてとり上げた。
25	土塙墓	1.0×0.7×?	頭蓋骨一層の骨、足の骨なし	仰臥屈葬? N=40°-W? 骨は移動している	• 黒色泥沙層を切り込んだ土塙らしく、はつきりとプランはつかめなかった。 • 6世紀代の流路によって削られており、人骨は原位置にない。
216	土塙墓	1.1×0.6×0.3	♀ 壮年 右 Humerus 315 (161.6cm)	仰臥屈葬 N=30°-E 両手掌上、頭面を斜め下に、下肢右	• 6世紀代の流路によって上部は削られている。 • 土塙の主軸と位置関係からみて、217と時間的に接近した埋葬か。
217	土塙墓	1.1×0.7×0.2	♀ 35才-45才 左 Humerus 290 (152.5cm)	横臥屈葬(左下)、仰臥屈葬に近い N=30°-E 左手掌上、右手伸、下肢左	• 6世紀代の流路によって南半部は削られている。 • 土塙の主軸からみて、216と接近した時刻の埋葬か。 • 頭付近に歯骨片があり、装飾品の可能性もあるが明らか

上塙 No	種類	土塙の規模(単位m)	人骨	埋法	特記
					かでない。
288	土塙墓		?	仰臥(?)屈葬 N?	・黒色泥砂層を切り込んだ土地らしく、プランはつかめなかった。 ・6世紀代の流跡によって削られている。
289	土塙墓	1.0×0.6×0.15	頭蓋骨片、骨片	N-15°-E?	・28(滋賀里田の腰棺)によって切られている。 ・6世紀代の流跡によって削られ、大半の骨は擾乱されている。
290	土塙墓	0.9×0.6×0.05	?	仰臥屈葬 E 右手曲、左手伸、下肢右	・28(滋賀里田の腰棺)を切っている。 ・東部は現代の穴の破壊を受けて頭蓋骨はない。
291	土塙墓	1.3×0.9×0.03	骨片	集骨葬 骸骨体の人骨が、3ブロックに集骨されている。	・黒色泥砂層を切り込んだ土地らしく、プランははっきりとつかめていない。 ・28、29によって切られている。
292	土塙墓?	1.0×0.6×0.07			・現代の溝によって切られている。
293	土塙墓?	1.0×0.7×0.1			・現代の溝によって切られている。
294	土塙墓?	0.7×0.6×0.3			・28(滋賀里田一Nの腰棺)によつて切られている。 ・調査区域外におよんでいる。
295	土塙墓	1.1×0.7×0.04	?	仰臥屈葬 N-50°-E 右手曲、下肢左	・3Hによって切られている。
296	土塙墓	1.1×0.8×0.25	老年? 右 Femur 412 (153.0cm)	横臥屈葬(左下) N-60°-E 両手胸	・28(滋賀里田の腰棺)によつて切られている。
297	土塙墓	0.8×0.6×0.1		横臥屈葬(左下)、N 右手體、下肢右?	・深を切っている。
298	土塙墓	0.7×0.6×0.1	頭蓋骨と付近の骨 幼児骨 Femur 110		・南半を現代の穴で破壊され西部は調査地域外におよんでいる。
299	土塙墓?	1.3×0.7×0.2			・現代の穴によつて一部切られている。
300	土塙墓?	0.7×0.7×0.1			
301	土塙墓?	0.7×0.4×0.3			
302	土塙墓?	0.7×0.5×0.15			
303	土塙墓?	1.1×1.0×0.4			・28(滋賀里田の腰棺)を切っている。
304	土塙墓?	1.3×0.6×0.5			・28を切っている。
305	土塙墓?	1.0×0.6×0.4			・28(滋賀里田の腰棺)を切っている。
306	土塙墓		骨片、移動している。		6世紀代の流跡によつて移動

土塁 No.	種類	土塁の規模(単位:m)	人骨	葬法	特記
281	土塁墓	1.0×0.7×0.3		仰臥屈葬 N-80°-W	した土塁の一部と考えられる。 ・280(滋賀里Ⅲの腰格)の下にあり、282によって切られている。
270	土塁	0.6×0.55×0.6			・長さ35cm、幅15cmの細長い花崗岩の大石が、土塁中に垂直に立った状態で発見された。土塁の底面より約10cm浮いている。
271	石組造構	0.7×0.7×0.1			・南半部を現代の溝で破壊されているが、わずかに掘り凹めた掘り方の周囲に約10cm大の石を組み、底面にはやや小さい石を敷いている。 ・底面に接して滋賀里Ⅲの腰が2個体分破片で出土した。(A189) ・火を使用した痕跡は全くない。
71	腰格墓	0.6×0.5×0.3	骨片		・掘り方底面は腰格の長軸にそって傾斜しており、滋賀里Ⅲの腰(A170)を斜方向に置いている。N-10°-E開口。 ・腰と掘り方底面との間に1cmほどのすき間がある。
93	腰格墓	0.9×0.6×0.2	骨片		・掘り方底面は腰格の長軸にそって傾斜しており、滋賀里Ⅲの腰(A202)を斜方向に置いている。 N-15°-W開口。
98	腰格墓	0.9×0.8×0.35	骨片		・掘り方底面は腰格の長軸にそって傾斜している。滋賀里Ⅲの腰(A203)を斜方向に置いている。N開口。 ・腰と掘り方底面との間に4cmほどのすき間がある。
					・現代の穴の破壊を受けている。

十进 No.	種類	十进の规格(単位m)	人骨	審法	特記
109	腰椎基	1.0×0.7×0.25	頭蓋骨、上腕骨 乳児 洗骨しているか	・滋賀里田の腰(A 191)の体部下半を 打ち欠いて、掘り方 内に垂直にすえてい る。	・6世紀代の流路によつて上 部は削られている。 ・筋を切り、IRによって切ら れている。
110	腰椎基	0.5×0.5×0.1	骨片	・滋賀里田の腰を使 用しているが、上 部破壊され、底部 のみ残っている。	・6世紀代の流路によつて削 られている。
111	腰椎基	0.9×0.5×0.25	頭蓋骨、太腿骨 幼児? 白痴成長してい ない 洗骨しているか	・掘り方の底面は櫛状 の長軸にそつて凹 凸をもちながらも 傾斜している。滋 賀里田の腰(A194) を斜方向にすえて いる。N-65°-W開 口。	・南半部を現代の穴によつ て破壊されている。
112	腰椎基	0.6×0.6×0.25	頭蓋骨	・滋賀里田の腰(A 174)を斜方向にす えている。 N-40°-E開口	・骨の残りが悪いが、洗骨の 可能性がある。
113	腰椎基			・滋賀里田の腰(A 218)を使用してい るが、大半は攢乱 されている。	・6世紀代の流路によつて削 られており、掘り方の規模 など不明の点が多い。
115	腰椎基		頭蓋骨片?	・滋賀里田の腰(A 197)を斜方向にす えている。 N-40°-E開口	・6世紀代の流路に削られ て、掘り方の規模不明。 ・頭蓋骨片は腰からずれてお り、他に土塁基があったの かもしれない。
116	腰椎基	0.7×0.7×0.3	上腕骨、骨片	・掘り方の底面は、腰 椎の長軸方向にそ つて傾斜している。 滋賀里田の腰(A 193)を水平に近い 斜方向にすえてい る。S-20°-E開口 ・腰椎は掘り方底面よ り16cmも浮いてい る。	・一部現代の穴によつて破壊 されている。
117	腰椎基	0.3×0.3×0.1		・腰は大半が破壊さ れ。体部の破片の み残っていた。体 部には削り調整が みられる。	・現代の溝によつて破壊され 更に溝外におよんで いるので、掘り方は判は じか確認できなかつた。
118	腰椎基	0.4×0.4×0.2		・腰の体部下半を打 ち欠いて、垂直に すえている。口様 部は破壊されてい る。	・上半部は削平されてい る。

土塊 No	種類	土塊の大きさ(単位m)	人骨	葬法	特記
				る。体部には削り 調整がみられる。	
213	表棺墓	1.1×0.8×0.1	頭蓋骨片、骨片	・滋賀県Vの腰(A 281)を斜方向にす えたものと思われ るが、上半部の職 場が激しく正確に わからぬ。	・掘り方は不明確であるが、 黒色泥砂層を切り込んでい ると思われる。 ・IIを切っている。
225	表棺墓	0.5×0.3×0.15		・垂直に腰(A178) をすえていたらし いが、腰の上半部 は破壊されている。 (滋賀県II~III)	・224によって切られ、6世紀 代の流路によって削られて いる。
227	表棺墓	0.9×0.7×0.03	頭蓋骨片	・滋賀県Vの腰(A 279)を斜方向にす えているが、上半 部は破壊されてい る。 N-45°-E開口	・226を切っている。 ・6世紀代の流路によって削 られており、掘り方をはっ きりとつかめなかつた。 ・掘り方は黒色泥砂層を切り 込んだものか。 ・IIによって切られている。
239	表棺墓	0.8×0.6×0.2	頭蓋骨片	・滋賀県IIIの腰(A 205)を斜方向にす え、同じく滋賀県 IIIの流路IIの腰 (A171)を割って 大きな破片を利用 して、口をおおっ ていている。 N-40°-E開口	
238	表棺墓	1.0×0.5×0.05		・滋賀県IVの腰(A 291)を斜方向にす えたものと思われ るが、上半部はか なり破壊されてい る。底部は打ち欠 いているものか。 N-50°-E開口	・掘り方は不明確であるが、 黒色泥砂層を切り込んでい ると思われる。 ・IIによって切られている。
255	表棺墓	0.6×0.6×0.35	骨片	・滋賀県III-Nの腰 の底部のみ残存し 上部は破壊されて いる。	・掘り方は不明確であるが、 黒色泥砂層を切り込んでい ると思われる。 ・IIを切っている。
260	表棺墓	0.6×0.4×0.25		・滋賀県IIIの腰を垂 直にすえていたも のか。上半部は破 壊されている。	
254	表棺墓	0.8×0.6×0.2		・滋賀県IIIの腰(A 177)の底部のみ残 り、上半部は破壊 されている。	・253を切っている。
255	表棺墓	0.8×0.5×0.15	新生児	・大瀬系の腰(A153)	・256を切っている。

土壇 No.	種類	上塙の規模(単位m)	人骨	葬法	特記
				を斜方向にすえて いる。 S-10°-E開口 滋賀県IIIの浅鉢 (A233)を蓋としていたようである が、調査では正確な状況をつかめて いない。	
28	腰棺墓	0.7×0.6×0.2	骨片	・突起のある滋賀県 の腰(A274)を 斜方向にすえている。 S開口。穴蓋のない腰(A292) を背で、大きな 破片を利用して、 口をおおっている。	・黒色泥砂層を切り込む掘り方 と思われるが、下層の青灰色 泥砂層でしか確認できなかつた。 一部現代の火によって擾乱 されている。
29	腰棺墓	0.6×0.4×0.2		・滋賀県IIIの腰を斜 方向にすえたもの と思われるが、腰 の内腔容し、上 部は破壊されてい る。S-30°-E開口	・28と現代の溝とによって切 られている。
30	腰棺墓	0.8×0.6×0.3	骨片	・滋賀県IIIの深鉢 (A144)を斜方向 にすえている。 N-30°-W開口	・28, 29, 30によって切られ ている。
29	腰棺墓	0.7×0.6×0.1	頭蓋骨片	・滋賀県IVの腰(A 267)を斜方向にす えている。S開口。 深鉢(A300)を割 った大きな破片で 蓋をし、更に腰鉢 の底面上面を、滋 賀県Vの腰(A31) を割った大きな破 片でおおっている。	・頭の上につくられている。 一部現代の溝によって切ら れている。 ・黒色泥砂層を切り込む掘り 方か。

*人骨の葬られる方向については、葬法の欄に、頭がおかれる方位を示した。
 *この表に掲げなかった番号の土壇は縄文時代に属するものであるが、性格が不明のもの
である。

第14表 滋賀里遺跡出土の縄文晚期土器觀察

滋賀里

器形	側体 数	上器 No.	形 态 の 特 徴	手 法 の 特 徴	文 標	備 考
深 鉢	18	A 1 A 2 A 11 A 13	・体部に2つの段をもうけ。口縁は上段部よりいったん内傾し、縁部は直立ぎみにつくる。 ・上段部には、腹をつくらず丸味を帯びるものと、屈曲が強くて棱をなすものがある。 ・口縁端部は、丸味をおびつつ重厚なつくりである。 ・口径は32cm~38cmが主体で、24cm前後のやや小型のものもある。 ・凹底。	・基本的な調整は巻貝でおこなわれ、ナデ調整がからみ合っている。 ・口縁から体部の下段部までの外面は、水平方向の巻貝調整がおこなわれ。下段部以下は、漸移的に斜方向から垂直方向の調整となる。この巻貝調整のあと、口縁と上段部との間をナデ調整したものや、全面を丁寧にナデ調整して、巻貝柔軟をほどんど消しているものなどもある。 ・内面は、ほぼ全面に水平方向の巻貝調整をおこなった後に、水平方向のナデ調整を局部的におこなっている。		・褐色~黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・A1, A2の外間に吹きこぼれが付着し、体部下半部の内面に、帶状の有機物の付着が認められる。
深 鉢	19	A 3 A 7 A 12	・形態は深鉢A1と全く同じだが、文様がある。 ・口径は31cm~36cmのものと、22cm~25cmのものとがある。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢A1と同じである。外面の巻貝調整の方向に關して、完形品がないので小明点が多いが、体部のかなり下段部まで水平方向の調整となっている。 ・深鉢A1にくらべて、巻貝調整後のナデ調整が、より広く施されている。	・ヘラ状のものまたは巻貝で沈粧文をつけている。 ・沈粧文の口縁と上段部の間と、上段部と下段部の間とにつけられる。その種類は、A 3のような2本・2本の組み合せが3例、A 4のような3本・2本が2例、A 4の逆で2本・3本が2例、A 5のような2本・2本・2本のものや、A 7のような1本・3本の特殊例もある。基本的には2本単位と3本単位との構成があり、2本単位の構成がやや優越している。	・褐色~黒褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒・莢母片を含む。 ・A 6, A 7, A 12の外間に吹きこぼれかスカが付着している。
深 鉢	2	A 8	・体部には、調整によつて丸味を帯びる2つの段があり、口縁部は内側をさせておさめている。 ・口縁端部は丸味をおびつつ重厚なつくりである。器壁は厚い。 ・口径は37cm。 ・凹底。	・外面は、口縁から下段部の間を水平方向の巻貝調整をほどこし。下段部以下は、漸移的に斜方向から垂直方向に巻貝調整をおこなう。下段部以下は更に水平方向のナデ調整をおこなっている。		・白褐色~灰褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・小破片ではこの器類を区別
B ₁						

器形	個体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				・内面は丁寧な水平方向のナナ調整。		するのがむずかしく、個体数は多くなるかもしない。 ・口縁から全体部の外表面に吹きこぼれかスカが付着している。
深 鉢	7	A 9	・基本的形態は深鉢B ₁ と同じであるが、沈線文様で飾られている。 ・口径の計れる個体は少なく、19cmの小さい例しかわからないが、30cmを超える例もあると思われる。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢B ₁ と同じであるが、卷貝調整後のナナ調整がより広範囲におよんでいる。	・ヘラ状のものと巻貝頭部とによって沈線をひいている。巻貝利用のものは、7例中2例である。 ・基本的には深鉢A ₂ の文様と同じ傾向をしめす。A 9は全体のわかる唯一の例で、2本単位の沈線が4組ひかれている。口縁部の破片では、2本単位のものが3例、3本単位のものが3例ある。	・褐色～茶褐色。 ・砂粒を含む。 ・A 9の外表面全面にわたり吹きこぼれかスカが付着し、内面にも所々有機物が付着している。
深 鉢	4	A 10 A 408 A 553 A 55 A 209	・波状口縁となる深鉢をCタイプとし、深鉢C ₁ は、その形態が深鉢Aと同じものである。波頂部を中心として、多種の文様で飾られている。 ・口径は18cm。 ・凹底。	・基本的な調整は深鉢A ₁ と同じであるが、文様で飾るため、ナナ調整がより広範囲におよんでいる。	・施文には、ヘラ状のものか巻貝による沈線文と、巻貝による刺突文の2種がある。 ・深鉢A ₂ や深鉢B ₂ の沈線文の最も上部の単位が、波頂部にそって走る結果生じた空隙を埋めるため、A 408のように巻貝を刺突したり、波頂部から直ちに沈線を下したりする。 ・沈線文には3本単位と2本単位とがある。	・灰褐色～黒褐色。 ・焼成良好。 ・砂粒を含む。 ・A 10、A 408はともに宮瀬式の特徴をもっているが、滋賀県Iにおける古い要素と考えている。 ・A 10の外面上半部に吹きこぼれかスカが付着し、内

器形	側体数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深 鉢 <i>C₂</i>	2	A410	・破片のみで、全体の器形は明らかでないが、深鉢C ₂ の上部と下段部との間のくびれの強い器形と考えられる。	・基本的に深鉢C ₂ と同じ調整であるが、A410は平滑なナヂ調整の波に、巻貝調整がおこなわれたかどうかわからぬ。	・ヘラ状のものによる3本単位の沈線が口縁にそってめぐり、波頂部には、A418では太く短かく垂直の棒状斜突突如、A410では半円弧文が斜めにつけられている。	面の上部にもびっしりと有機物が付着している。
		A418				・黒褐色。 ・砂粒を含む。
深 鉢 <i>D</i>	15	A14 1 A16	・深鉢Aが体部に2つの段をもっていたのに對して、この瓶は1つの段しかないもので、口縁部の特徴は同様に、一たん内傾して端部は直立気味におさめている。 ・器壁は厚く、口縁端部は丸味をもった重厚なつくりで、この点も深鉢Aと共通の特徴をしめしている。 ・人小の2種類があり、口径27cm~31cmの大形品は口径よりも器高が大きいが、口径21cm前後の小型品は器高の方が小さいようである。 ・底面。	・口縁部外縁はナヂ調整。 ・体部外面は巻貝によって隔壁しておらず、頸部付近は水平方向におこない、以下漸移的に斜方向から垂直方向に調整している。 ・底部付近は、巻貝調整の後にあらいい面取り風の仕上げをおこなっている。底部の凹部外面は粗面となっている。 ・内面は全面水平方向のナヂ調整をおこなっている。ナヂ調整の前に巻貝調整をおこなったかどうかわからぬほど、丁寧なナヂ調整である。	・褐色~黒褐色。 ・焼成良好で堅硬。 ・砂粒を含む。 ・A16の体部上半の外面に吹きこぼれが付着し、内面の底部よりやや上ったところに、帯状の有機物が付着している。	
		A17				
深 鉢 <i>E</i>	4	A17	・口縁部と体部との接合部に段をもち、口縁部は深鉢Dにくらべて長く、直立している。 ・口縁端部は丸味をおびつつ重厚なつくりである。 ・口径22cm。	・口縁部外縁は水平方向のナヂ調整。 ・体部外面は巻貝調整をおこなう。頸部付近は水平方向に、以下漸移的に斜方向から垂直方向に調整している。A17では、斜行部が左下から右上に走り、巻貝調整の通例と異っている。 ・内面は水平方向のナヂ調整。	・褐色~黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A17の外縁全面に吹きこぼれか、ススかが付着している。	
		A18				
深 鉢 <i>F</i>	1		・浅形に近い体部に、長く大きく外反する口縁部をもつ。 ・口縁端部は丸味をおび	・外縁は巻貝調整されており、口縁部とその直下は水平方向に調整し、以下漸移的に斜方向か		・黒褐色。 ・焼成良好で堅硬。 ・砂粒含む。

器形	個体 数	上器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			重厚なつくりである。 ・口径は、20cmで、この類には大型品はない。	ら垂直方向におこなっている。 ・内面は、頸部付近に巻貝調整の痕跡が認められるが、全面にわたって水平方向のナデ調整をおこなっている。		・口縁部外面に吹きこぼれ付着し、内面には全面に有機物が付着する。
深 鉢	57	A19 1 A22	・体部と口縁部との区別の全くない器形で、口唇部はやや内脣気味におさめている。 ・口縁端部は、丸味をねじつて重厚なつくりである。 ・口径は22cm~24cmの小型のものと、30cmを越える大型のものとがある。	・外側の調整には2種類がある。1つは器具によって口縁付近を水平方向に調整し、以下漸移的に斜方向から垂直方向におこなうもので、そのあと軽い水平方向のナデ調整をおこなうものもある。他の1種は、巻貝調整をせず、ナデまたは磨研によつて平滑に仕上げるもので、A21のように粘土壁の継目が残るものもある。 ・内面はいづれも水平方向のナデ痕跡。 ・A21の粘土壁の幅は1cm強である。		・褐色~黒褐色。 ・一般的に施成良好で堅緻。 ・砂粒・漆母片を含む。 ・A19、A20、A22の外側には吹きこぼれかススかが全面に付着している。
G						
深 鉢	2	A435 A436	・波状口縁をなし、波頭部はやや内傾する。 ・底部不明。	・内外面磨き。体部外側はやや荒くなる。 ・A435は頑めて丹念な磨きである。	・A435は口縁波頭部に、三叉文と沈線文との組み合せによる七宝文に類する文様が施されている。口縁部には平行沈線文がめぐると推定される。 ・A436は口縁波頭部に横、横の三叉文を施し、口縁部には、端部に平行する沈線によって囲まれた三叉連続文を施す。	・北陸系。 ・内外面にススが付着する。 ・石川県八日市新保遺跡に類似あり。
Z ₁						
深 鉢	1	A430	・波状口縁をなし、波頭部も口縁部と同じく直立に近い。 ・底部不明。	・内外面磨き。特に体部の磨きは丹念である。	・口縁底部に横位三叉連続文を施し、その間に列点文を入れる。三叉文は2条の沈線によって囲まれる。	・北陸系。
Z ₁						
浅 鉢	8	A23	・口縁部は外反し、平縁である。 ・明確につくり出された肩部は棱をなし、その径は口径より小さい。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨土器。		
A ₁						

器形	個体数	土器名	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅 鉢 A ₂	3	A29 A31	・口縁部は短く外反し、半円である。 ・肩部のはり出しに強器があり、特にA31は口縁部と体部との区分が明確でない。 ・丸底か。	・内外面磨き ・黒色磨研土器。	・口縁部外間に3本・5本単位の平行沈線文を施す。 ・A29、A30は内面に2本の平行沈線文を施す。	・A29は内面に朱を塗っている。 ・A30は内外面に朱を塗っている。
		A25	・口縁部は短く外反し、口縁の四分点に突出部をつくる。端部は断面三角形を呈し、内面に削り出しの段を1段つくる。 ・体部には弱い肩部をつくる。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁の突出部とその直下の肩部に、各々神狀刺突文を施す。	・A25にはスヌが付着する。
	B ₁	A24 A26	・浅鉢B ₁ と形態は似るが、口縁に突出部をもたない。 ・丸底か。 ・A26は肩部の棱をつくすことなく体部に移行している。	・A24は内外面丹念な磨きであるが、口縁部と体部との接合部の内面に削り底を残す。黒色磨研土器。 ・A26は外面丹念な磨きであるが、内面は同様に磨くも、削り底を残す。黒色磨研土器。		・スヌの付着するものがある。 ・A26は内外面にスヌが付着する。
浅 鉢 B ₂	8	A27 A28 A58	・口縁部は外びらきに内脣し、流状口縁をなししている。 ・口縁部と体部とは、一周めぐる幅広いえぐりによつて区別されている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・液状口縁にそって、3本・5本単位の山形沈線文を施す。 ・A28の体部上半には1本の沈線がめぐる。 ・A58は無文であり、数量的(1例のみ)にも特異である。	・内外面にスヌの付着するものが多い。 ・山口県岩田道跡に類例あり。
		A33	・口縁部は内傾する。 ・口縁部と体部とは棱をなして接合されている。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に横位三叉連結文を施し、その上半部に3本の平行沈線文を、下半部に連続平行沈線文を入れる。また三叉文間にねじ位沈線を入れる。	・外面上に朱を塗る。 ・スヌが付着している。 ・北陸系。
	Z ₁	A32	・口縁は直立気味におさめている。また口縁の内面に2つの段を削り出している。 ・底部不明。 ・輪広い口唇部をつくっている。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁外間に2本の平行沈線文を施す。	・外面上に朱を塗る。 ・圓形に近い形態である。 ・北陸系。
鉢 A	1	Z ₁		・内外面やや荒い磨き。	・口唇部に擬位軸隆線を貼りつけ、その間に繩	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
楕	8	A34	・底部不明。		文を施す。	
		A35	・口縁は内側しておさめられている。 ・体部中央はやや張り出し、急な角度で底部に移行する。 ・丸底。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・スヌ付 青するものが多い。
楕	9		・楕A ₁ と特徴は同じであるが、支脚をもつている。	・楕A ₁ と同じ。	・口縁部に数本の平行沈線文を施す。	・朱を塗っているもののが1例ある。
Z ₁	1	A40	・口縁は内側さみにおさめる。 ・平縁か。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・体部上半に、平行沈線文と離位の2列点文を施す。	・内外面にスヌが付着する。 ・北陸系。

潜質Ⅱ

潜勢	個体数	上部 kin	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深 体 A ₁	91	A36 A48	<ul style="list-style-type: none"> ・体部に2つの段をもうけているが、潜質Ⅰの深跡A₁にくらべて、段部の縁を明確につくるものが多くなっている。 ・口縁部はより長くなる傾向をしめし、一たん内傾する度合いが減る。端部は直立気味におさめているが、A46のように外反するものもある。 ・口徑は18cm~39cmまでの各種のものがある。 ・凹底。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巻貝による調整とナデ調整の組み合わせがみられる。 ・体部外周は巻貝によって口縁部付近は水平方向に調整し、以下漸移的に斜方向から垂直方向におこなっている。口縁部は水平方向のナデ調整をおこない、段部と段部の間をナデ調整するもののや(A36, A44)、下段部まで全面ナデ調整するものの(A45, A47)があり、ナデ調整によって巻貝糸痕を消している範囲が潜質Ⅰより広くなる傾向が認められる。 ・内面は巻貝調整を水平方向におこなつた後、水平方向のナデ調整をおこなっている。 ・A₁の殻部後合部外側をへラ状のもので強く一周ナデしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・灰褐色~黒褐色。 ・一般的に焼成は良好だが、悪いものも混じる。 ・砂粒、雲母片含む。 ・A36の体部下半の外周、A44, A46の口縁部外周に吹きこぼれかスカカ付着し、A44, A46の体部内面に有機物が付着する。 ・A42は潜質Ⅰの特徴をもっている。 	
深 体 A ₂	26	A49 A52 A46 A49 A50 A56 A58	<ul style="list-style-type: none"> ・深跡A₁と同じ形態であるが、文様で飾られている。 ・深跡A₁と同様に、口縁部はより長くなり、一たん内傾する度合いが減り、端部は直立かやや外反気味におさめている。 ・口徑は17cmを最小とし、26cm~28cmのものと、38cmの大型品とがある。 ・凹底。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巻貝調整とナデ調整の組み合せがみられ、深跡A₁と同じ特徴をしめしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・巻貝かへラ状のものによる沈継文と巻貝頂部斜文とが組み合わせられている。 ・沈継文は、2本単位の構成が3本単位のものより圧倒的に優勢であり、26例中、3本単位が確認されたのは8例であり、口縁部6例と、口縁部2本単位、くびれ部3本単位の1例と、その他の組み合わせ1例のみである。 ・A50, A52では、沈継間に巻貝頂部による斜文が配され、特にA50では、文様帯としての意識が強くなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・褐色~黒褐色。 ・焼成良好で堅緻である。 ・砂粒、雲母片を含む。

器別	細体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深 鉢 B_1	6	A57	・体部に不明瞭ながらも2つの段をもち、口縁部は内側している。 ・温質Ⅰ深鉢 B_1 との差異はない。 ・口径は22cm。 ・凹底。	・調整手法の上からも温質Ⅰの深鉢 B_1 と全く同じであるが、A57のように全面をナナ調整したものもある。		・褐色～黒褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
深 鉢 B_2	3	A56 A61	・形態は深鉢 B_1 に同じであるが、文様で飾られている。 ・口径は25cm。 ・A61は厳密には口縁の特徴を異にしているが、この類に入れなおした。	・調整手法も深鉢 B_1 と同じである。 ・A61は、内外とも平行なナナ調整をおこなっている。	・ヘラ状のものによる平行沈線文で飾り、A56では恐らく4ヶ所に直直の型模を入れて平行沈線文を切っている。 ・2本単位と3本単位の構成がある。	・黒褐色～灰褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
深 鉢 C_1	7	A40 A42 A43 A47 A56 A59 A60 A70	・形態は深鉢Aと同じであるが、波状口縁をなし、各種の文様で飾られている。 ・凹底。	・調整手法も深鉢Aと同じである。	・ヘラ状のもののか半截竹番で2本単位の沈線文をめぐらし、最上段の単位は波状部にそって走るため、結果として生じる空間をA412では、山形文で、A409では意図的沈線文で埋めている。A409のように長い垂下文ではなく、太く短い例もある。これらヘラ状のものによる沈線文だけで文様を構成するものは温質Ⅰに含めるべきかもしれない。 ・これに対して、A413やA568のように、巻貝の底部刺突文や巻貝頂部刺突文の組み合わざるものや、半截竹番による沈線文などは、温質Ⅱの特徴と考えられる。A567では突起がついている。	・黒褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
深 鉢 C_2	4	A53 1 A55	・形態は深鉢Aと同じであるが、波状口縁となっている。しかし文様のない点で、深鉢 C_1 と区別される。 ・口径は20cm前後のものと、29cmの大型品と	・調整手法は、毛貝削を半とし、その手法は深鉢Aと全く同じである。 ・粘土紐の幅は1cm～1.5cmである。		・褐色～灰褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。 ・A54の内面には有機物が付着している。

器形	個体数	土器No	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			がある。 ・凹底。			
深 体	4	A58 A60 A62 A61	・形態は、深鉢Bと同じであるが、底部は縁をなし、文様で飾られている。 ・口径は16cmと27cm。 ・A62はやや特異なくせのある土器であるが、この類に入れておく。小片で全体の形態はわからない。 ・A58は波状口縁を見るか、平滑に突起のついたものと見るか微妙なところである。このような波状口縁の退化現象は、滋賀尾IIの特徴の1つであろう。	・調整手法は、深鉢Bと全く同じである。	・字載竹管やヘラ状のものによる沈線文上、卷貝頂部や体状のものによる刺突文がある。 ・A60は下載竹管による2本単位の沈線文に、卷貝頂部刺突文を組み合わせている。 ・A58は円柱状のものによる刺突文で飾っている。 ・A61は、卷貝頂部刺突文を底頭部に配し、波頭部闊を2本単位の半載竹管による沈線の連続山形文で飾っている。	・黒褐色一褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。 ・A60は焼成良好。 ・A62の外間に吹きこぼれかススかが付着している。 ・奈良県井治遺跡に類例あり。
深 体	3	A59	・形態は深鉢Cと全く同じであるが、文様をもたない。 ・口径は32cm。 ・波状口縁としては、かなり退化している。	・調整手法は深鉢Cと全く同じである。 ・A59は外表面を全面にわたって平滑にナデ調整をおこなっている。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
深 体	39	A64 A65 A66	・口縁部と体部との接合部に段をつくるもので、滋賀尾Iの深鉢Dにくらべて、口縁部の一部内傾する度合いが減り、直立しないしは外反するものもある。 ・口径が29cm~32cmの大型品と、22cm~24cmの小型品とがあり、小型品は滋賀尾Iの深鉢Dと同様に、口径に対して器高が小さく、浅い形態となっている。 ・凹底。	・調整手法は滋賀尾Iの深鉢Dと全く同じである。 ・小型品の中で、全面を平滑にナデ調整しているものがある。		・褐色~黒褐色。 ・一般的に焼成良好で堅硬。 ・砂粒を含む。 ・A66の外面上には吹きこぼれかススかが付着している。 ・A65は、単に形態上からいえば蝶形の移行過程にあるものともいえる。
深 体	7	A63 A72 A73	・深鉢Dと基本的な形態は同じであるが、口縁部が長く、直立からやや外反気味におさまる。滋賀尾Iの深鉢Eと差異はない。	・調整手法は滋賀尾Iの深鉢Eと同じである。 ・A63は内外とも卷貝調整の後、軽いナデ調整を全面におこな	・A63は波状口縫ではないが、4ヶ所に卷貝頂部刺突文を配し、その間を卷貝頂部を利用して2本単位の沈線文で対称形に結ぶ。	・黒褐色。 ・焼成良好。 ・砂粒を含む。 ・A63の外面上には吹きこぼれかススかが付着して

器形	體數	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			<ul style="list-style-type: none"> A63とA416とは、口縁部に文様をもつてている。 A72は形態においてやや異なるところがある。この類に入れておく。 	<p>ついている。</p> <ul style="list-style-type: none"> A72は内外面とも全面平滑なナデ調整がおこなわれ、口縁部内面にヘラ状のものによる沈縫が1本めぐっている。 A72の外面は、ヘラ状のものによる1本単位と2本単位の沈縫文で飾られている。 	んでいる。浪状口縁と有機的に結びついでいたこの文様構成が、器形から遊離して純粋な文様としてとり入れられている。	いる。
深 体 F	5	A67 A68	<ul style="list-style-type: none"> 形態は滋賀県Iの深体Fと同じで、浅い体部に大きく外反する口縁部がつく。 A67のように退化した波状口縁となるものもある。 口径は15cm~18cmのものに限られるようだ。 	<p>調整手法は滋賀県Iの深体Fと同じである。</p> <ul style="list-style-type: none"> A68の口縁部外面は垂直方向にナデ調整している。 		<ul style="list-style-type: none"> 茶褐色~灰褐色。 砂粒を含む。
深 体 G	58	A73 A79	<ul style="list-style-type: none"> 体部と口縁部との区別のない深体で、滋賀県Iの深体Gと形態は全く同じである。 口径は21cm~35cmの各種のものがある。 円底。 A79は肩部に棱をもつ特殊例であるが、この類に含めておく。 	<p>巻貝を使う調整が主体であるが、わずか1例であるが削り調整が出現していることは見逃せない。</p> <ul style="list-style-type: none"> 番貝調整は滋賀県Iの深体Gと全く同じであるが、斜方向に調整する部分が左下→右上方向で、逆側と逆のものがかなり見受けられる。番貝調整の後、軽くナデ調整するものもあり、また全面を平滑にナデ調整する例も相当な量がある。 削り調整は、基本的には巻貝調整と同じルールでおこなわれており、底部から口縁の方に向けて垂直方向に削りあげ、口縁部付近は時計通りの水平方向に削っていっている。 A78は削り調整のあと、軽いナデ調整をおこなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰褐色~黒褐色。 砂粒、雲母片を含む。 A74、A75、A77の内面には有機物が付着し、A79の口縁部外面に焼きこぼれかスカカ付着している。 	

器形 類別	個体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深 鉢 H	2	A95	・深鉢Gの形態に、直立する短かい口縁部をついたもの。	・内外面とも丁寧にナデ調整をおこなっている。ナデ調整の前に、体部外面を卷貝調整しているかどうか不明である。	・恐らく4ヶ所と思われるが、卷貝底部剥突文を配している。	・褐色。
		A96	・A95のように、4ヶ所に半円形の突起をもつものもある。 ・口径は30cm前後。	・口縁部内面にへラ状のものを斜にあてて一周させ、段をつくっている。	・A95の上段の剥突文は、卷貝によるものかどうかわからぬ。	・砂粒、雲母片含む ・A96の外縁には吹きこぼれかスカカ付着している。
深 鉢 Y ₁	1	A59	・やや外反する波状口縁。 ・体部、底部不明。	・口縁の内外面とも磨き。	・口縁に數条の平行沈線文を施し、波頂部には數条の輕位沈線文を配する。	・内外面にスカ付着する。 ・北陸系。
深 鉢 X ₁	1	A46	・波状口縁の波頂部にやや内反する突出部をつくる。 ・体部、底部不明。	・口縁の内外面とも磨き。	・波頂部底下に、三叉連結文と門点からなる魚鱗文を施す。	・北陸系。
甕 A ₁	3	A86	・外反する口縁部と体部とはなめらかに移行する。 ・口縁端部は、折り曲げるよう直立させている。 ・口縁端部内面に、へラ状のものを斜めにあてて一周させ、段をつくっている。 ・口径は39cm。 ・口縁端部は重厚なつくりである。	・口縁部から体部にかけての外面を、卷貝によって削りに近い痕跡を残して、時計回りの水平方向に調整している。 ・卷貝調整のあと、ナデ調整しているものもある。 ・内面は水平方向のナデ調整。		・灰褐色。 ・焼成良好で堅緻。 ・砂粒を含む。 ・甕に分類したが、甕Aと甕Bとは深鉢との区別が明確でない。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
		A84	・外反する口縁部はなめらかに体部に移行している。	・内外面とも平滑なナデ調整がおこなわれているが、口縁端部の肥厚部の外面を、卷貝によって水平方向に削り風に調整している。		・褐色～黒褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕 A ₂	8	A31	・口縁端部が肥厚している。	・A84は退化した波状口縁である。明確に波状口縁となるものは5例ある。 ・口径は22cm。		
		A87	・器高の大きい深い体部から、折れ曲るよう外反する口縁をもつ形態を瓶類として分類したが、この甕Bは波状口縁となる甕である。	・口縁部外縁は水平方向のナデ調整。 ・体部外縁は、削り調整のあと、ナデ調整をおこなっている。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこない、口縁部は特に丁寧に	・波頂部の両側の口縁上端間に規み目を入れるものある。 ・波頂部外縁に丸棒状の剥突文を配するものもある。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
甕 B	3					

器形	倒体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
			<ul style="list-style-type: none"> A87は定型化した袋になり切っていない形態をしめし、波浪部は直させている。 口径は20cm。 凹底。 	<ul style="list-style-type: none"> おこなっている。 底部凹面はナゲ調整。 		
甕	3	A89	<ul style="list-style-type: none"> 外反する口縁部には、ほとんど胴の張らない体部がつくもの。 体部の最大幅は、口縁部との接合部にあるといつてよい。 口径は25cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部、体部外側は巻貝で水平方向に調整している。 体部外側を削っているものもある。 内面も巻貝調整のあと、ナゲ調整。 		<ul style="list-style-type: none"> 黒褐色。 内面に有機物付着する。
甕	2	A88	<ul style="list-style-type: none"> 形態は甕C₁に全く同じだが、調整手法が異っている。 A88はこの類でもやや特異のもので、口縁部と体部との区別が明確ではないが、一定この類に入れておく。 口径26cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外側は水平方向のナゲ調整。 体部外側は削り調整をおこなう。A88は下→上に垂直方向に削っているが、時計回りの水平方向に削るものもある。 内面は水平方向のナゲ調整。 		<ul style="list-style-type: none"> 褐色。 砂粒、雲母片含む。
甕	8	A85 A91 A93 A94	<ul style="list-style-type: none"> 外反する口縁部には、肩部がやや盛る長脚形の体部がつく。 口径は肩部最大幅よりも大きいが、ほぼ等しい。 口径は24cm~41cmである。 A85は重厚なつくりで、口縁内面に沈線をめぐらし特異であるが、この類に入れておく。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外側をA91のように巻貝調整するものもあるが、多くの場合は一枚貝調整をおこなう。A94はその後に軽くナゲ調整し、A85では平滑にナゲ調整している。 体部外側には、A93のように巻貝調整やA85のように一枚貝調整も見られるが、A91、A94にみられる削り調整が量的に多い。削りの方向は、体部上半では時計回りの水平方向で、下半では下→上の垂直方向である。 内面は外側の調整に対応して、A93では巻貝調整、A85では一枚貝調整の後にナゲ調整する。これに対してA93、A94ではナゲ調整だけおこなう。 		<ul style="list-style-type: none"> 褐色~灰褐色。 砂粒、雲母片を含む。 A85は焼成良好で堅緻である。 A93には補修孔らしき孔が2孔ある。
D ₁						

器形	側体數	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
				なっている。 ・A93、A94の腹部接合部外面をヘラ状のもので一周強くナデている。		
裏 E ₁	3	A92	・外反する口縁部に刷の張った体部がつく。 ・胸部の枚大幅は口径よりも大きい。 ・口径は28cm。	・口縁部外面は二枚貝調整をおこない、後にナデ調整をして、貝殻条痕を消していくものもある。 ・体部外表面は削り調整しているが、A92では、更にナデ調整をおこなっている。	・A92の口縁には、リボン形の突起が3個一組となってついている。これが何ヶ所につくものか不明であるが、4単位として復元しておいた。	・淡褐色。 ・砂粒を含む。
裏 E ₂	2	A90 A93	・形態は裏E ₁ と全く同じである。 ・口径は21cm。	・内外面ともに磨研風のナデ調整をおこない、口縁部外面と内面は水平方向に、体部外面は垂直方向におこなっている。	・A572の口縁上端面には細かい削み目がつけられている。	・淡褐色。 ・砂粒、器母片を含む。 ・口縁部外面に吹きこぼれが付着している。
裏 J	3	A80 A82	・口径が12cm~13cmの小型の鏡である。 ・口縁部のつくりは変化があり、A80は内脣気味に外にひらき、A81は外反し、A82は直立気味にひじりしている。	・内外面ともナデ調整によるものが多いく、A82は体部外面を下→上の垂直方向に削っている。 ・A81は手づくね的なあらいつくりである。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
裏 Z ₁	1	A130	・外反する口縁部はなめらかに体部に移行する。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。	・口縁にB突起を多数もつ。 ・体部上半の各々2本の沈線で両側された文様帯に半角状文を施している。	・外側は黒色を呈する。 ・内外面にススが付着する。 ・焼成良好。 ・大溝BC併行。
裏 Z ₂	1	A83	・やや内脣しつつ外に聞く口縁部に、刷の張らない体部がつく。 ・口縁部と体部の接合部外面をヘラ状のもので強く一周ナデしている。	・内面は平滑なナデ調整。 ・口縁部外面は水平方向のナデ調整をおこない、体部外面は結節繩文(LR)を施している。繩文を施した後に、部分的に強くナデ調整している。	・口縁に山形突起(Dタイプ)が4ヶ所つく。	・外側にススが付着する。
浅 外 A ₁	9		・形態は湯賀里Ⅰ浅体Adと同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黑色磨研土器。		

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅鉢	35	A97 ↓ A100 A53	・口縁部は大きく外反し、口縁端部は立ち上がりておさめられている。この立ち上がりには、垂直に近いものや、水平に近いものや、外側に沈線を入れるものなど、変化が認められる。 ・肩部は後をなし、その様は口径よりも小さく、浅鉢A ₁ と比較してその比率は大きい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・口縁端部の立ち上がりの変化の量的関係は、水平に近いものの沈線をもつもの>垂直に近いものの順になる。 ・A97は端部の立ち上がりが強く、むしろ浅鉢A ₁ に近い。内面に1本の沈線をもち、外面にススの付着を見る。 ・山口県岩田道路、広島県中山貝塚に類例あり。
浅鉢	9	A101 A365 ↓ A367 A577	・口縁部は大きく外反し、口縁の四分点に突出部をもつ。 ・口縁部内面には1-2段の段を割り出している。 ・強弱の差はあるが、肩部は棱をなしていない。 ・丸底。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部の4つの突出部とその直下の肩棱部とに頂をもつ山形反転沈線文を施す。頂部には神状刺突文を施している。	・ススの付着するものや、外側面に朱を施す例が多い。
浅鉢	1	A102	・口縁部不明。 ・肩部はあまり明瞭ではない。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・体部上半に2条の網目を施し、その間に三角形のくり込み文や山形沈線文を入れる。	
浅鉢	17	A103 ↓ A105 A574 A627	・形態は滋賀県Iの浅鉢B ₂ に似るが、肩棱部が確実になり、ふくらみをもたずして底部に移行する。 ・丸底か。 ・A105は断面方形状を呈する口縁端部をもち、明確な肩棱部から直線的に底部に移行している。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・A103の内面に朱が塗られている。 ・ススが付着する例が多い。 ・A105は奈良県橿原道路に類例がある。
浅鉢	2	A368	・形態は滋賀県Iの浅鉢C ₁ と同じだが、体部に肩部をつくり出していない。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・底状口縁にそう山形反転沈線文を施す。頂部には神状刺突文を施す。	

西野 類体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅 鉢 C ₁	A88	・形態は滋賀県の浅鉢C ₁ と同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・肩縁部に胡み目を施し、それと平行の割み目帯を口縁部にめぐらしている。	・奈良熱原遺跡に類例あり。 ・A42(滋賀県)もこの類に入る。
浅 鉢 C ₂	A34 A38	・形態は浅鉢C ₁ と似るが、平縁である。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に平行沈線文を施し、その間に山形沈線文を配す。腹部には棒状剥突文か縦位の沈線文を施す。	
浅 鉢 D ₁	A106 A107 A555	・口縁部は短く、やや外に開く。 ・口縁部内面に段を削り出している。 ・肩部径は口径と等しいかやや大きい。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。 A575の外面は誰な仕上げである。 ・黒色磨研土器。		・A107は内外面とも朱を塗り、外面にはスヌが付着している。
浅 鉢 E ₁	A108	・口縁部は外に開き、端部は内輪気味におさめ。その結果内面に段が生じている。 ・肩部は大きく張り出し、その径は口径をはるかに上まわっている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。	・肩上半部の上縁を1本の太い沈線で、下縁を肩縁部の割み目帯で圍した空間に、3本と4本の沈線による2単位の条線文を施し、条線の結束部に棒状剥突文を配する。	
浅 鉢 E ₂	A110	・口縁部不明。 ・肩部の張り出しは浅鉢E ₁ より弱いが、基本的な差異はない。 ・丸底。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・颈部接合部と肩縁部とに割み目帯を施し、その間に三角形のくり込み文を配している。	・奈良熱原遺跡に類例がある。
浅 鉢 E ₃	A373	・口縁部不明。 ・肩部は張り出しが弱く、深い器形になるかもしれない。	・内外面やや荒い磨き。	・肩部に5本の平行沈線による直線の山形沈線文を施す。平行沈線は歯齒状の原体による可能性がある。	・外面にスヌが付着している。
浅 鉢 F ₁	A311 A388 A370 A371 A376	・口縁部はわずかに外反するも直立に近い。 ・口縁内面に1~2の段を削り出している。 ・肩部径は口径とほぼ等しい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に山形反転沈線文、山形沈線文を施す。沈線頂部に棒状剥突文をもつものもある。	・A370は深い鉢形になるかもしれない。
浅 鉢 F ₂	A112 A389	・基本的な形態は浅鉢F ₁ と同じだが、口縁部のカーブに差異がある。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁部に数条の平行沈線文を施す。A112では5本の平行沈線文となっている。	・A112の外面にスヌが付着する。
浅 鉢 G ₁	A465	・口縁部は直立し、平縁である。口縁部内面を斜めに削って	・内外面丹念な磨き。	・口縁部に2条の割み目を施し、その間に山形沈線文を配する。	

器形	個体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・いる。 ・体部には肩部をつくり出していない。 ・底部不明。		・沈線のはりが浅く、文様は不明瞭である。	
浅 鉢 Bb	1	A188	・口縁部は長く、外反するか? ・明瞭な肩部をつくり出している。 ・丸底。	・外面はやや荒い磨き。 ・内面はナデ調整。	・口縁から肩部上半に文様があるらしく、肩後部付近の2本の平行沈線を下限として、直線的山形沈線文を施している。	
浅 鉢 Bb	3	A69 A71	・口縁部は長く外反し、体部はごく浅い錐形である。 ・肩部は棱をなしてい。	・外面は平滑な水平方向のナデ調整。 ・内面もナデ調整が一般的であるが、A71では巻貝調整がおこなわれている。		・褐色～淡褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
浅 鉢 I	4	A35 A36 A38 A39	・口縁部、底部不明。 ・体部には肩部をつくり出すものと推定される。	・内外面磨き。しかし手法に一定性を欠く。	・文様の全体の構成は不明であるが、直線的連續山形沈線文、格子文を施す。統じて沈線は直線的である。	・奈良県橿原遺跡に類例あり。
浅 鉢 Za	2	A133 A40	・形態は滋賀県Iの浅鉢Zaと同じ。	・内外面磨き。	・A443は滋賀県Iの浅鉢Zaと同じ。 ・A133は滋賀県Iの浅鉢Zaと基本的に同じであるが、横位三叉連結文の下半部も、上半部と同様に平行沈線を入れる。	・北陸系。 A133の外面に若干のスス付着がみられる。 ・A133は黄土色に近く、A443は茶色味を帯びた黒色。
浅 鉢 Za	1	A40	・口縁端部が内反する。 ・底部不明。	・内外面ともナデ調整。 ・内面に粘土絆の離ぎ片が残る。粘土絆の幅は約2cm。	・口縁端部の大いに位した沈線を上限として横位三叉連結文を施す。三叉文の上下部分に斜沈線を入れ、三叉間には三角形くり込みと竹管文1脚を施す。	・北陸系。
鉢 Bb	6	A113 A118	・口縁端部のおさめ方に変化がみられる。 ・丸底、平底。 ・A114は錐形に近い浅い器形であるが、ここに括する。	・内外面とも極めて荒い磨き。		・褐色～淡褐色。 ・砂粒を含む。
鉢 C	1	A325	・口縁端部がやや外反する。 ・底部不明。	・内外面丹念な磨き。	・5本からなる平行沈線文2単位が、口縁付近に施されている。 ・平行沈線文は描画状の原体による可能性も	

器形	編 目 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
鉢 Za	1	A48	・形態は滋賀型Ⅰの鉢 Zaと同じであるが、 口唇部の文様構成が 異っている。 ・底部不明。	・内外面ともやや荒い 磨き。	・幅広い口唇部に縱位 の細隣線を貼りつけ、 これを起点として1 本の太い沈縫がめぐ る。またこの間に纏 文を施している。な お、滋賀型Ⅰの鉢Za は小片の文様全体 は不明であるが、こ の類に入るかもしれ ない。	・右川原八日市新 保遺跡、同・御 経塚遺跡に類例 を見るが、三叉 文の欠落に注意 がある。 ・北陸系。
鉢 Za	1	A49	・形態は鉢Zaと同じ であるが、口唇部の文 様構成が異なる。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・口唇部に横位の三叉 造筋文を刻み、三叉 間に縱位の沈縫を入 れる。	・右川原八日市新 保遺跡に類例を 見る。 ・北陸系。
椀 Aa	22	A113 A56 A58	・滋賀型Ⅰの椀Aaと形 態は似るが、やや深 身となっている。 ・A576は口縁端部の 内傾度が強く深身で ある。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。 ・A576は窯で得手 の土器である。		
椀 Aa	10	A120	・形態は滋賀型Ⅰの椀 Aaと同じである。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。 ・A120の内面はナチ 調整している。	・口縁付近に平行沈縫 文をめぐらしている。 A120は3本である。	・奈良県橿原遺跡 に類例を見る。
椀 Aa	15	A121 A123 A125 A126 A127 A129 A400 A402 A407	・形態は滋賀型Ⅰの椀 Aaと同じだが、文様 をもっている。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・体部上半に、三角形 くり込み、平行沈縫、 割み目からなる七宝 文を施す。いわゆる 橿原式文様である。 ・A125は、三角形くり 込みによる浮彫部分 に纏文（L.R）を施 している。	・奈良県橿原遺跡 に多くの類例を みるが、滋賀型 IIかIIIかは決定 できない。
椀 Aa	11	A124 A126 A127 A129 A366 A381 A383 A384 A387 A388 A389	・形態は滋賀型Ⅱの椀 Aaと同じである。	・内外面磨き。磨きは やや荒いものが多い。 ・黒色磨研土器。	・体部上半の平行沈縫 で両された文様帶に、 沈縫線上に頂点をもつ 山形沈縫文を配して いる。この場合、頂 点に棒状刺突文ある いは縱位の沈縫を施 するものがある。 ・文様帶中に、直線的 連続山形沈縫を配す るものもあり、この場 合にも頂点に棒状刺 突文を施している。 ・A387は巻貝を刺突	・奈良県橿原遺跡 に類例あるが、 滋賀型Ⅱか滋賀 型Ⅲかは決定で きない。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					している。 ・A390格子目文である。	
桶B	1	A43	・小型の桶であるが、底部が平底になるかあるいは側付となる。	・内外面荒い磨き。		
桶Za	2	A44 A45	・体部がやや張る器形。他は不明。	・内外面とも研めて良好な磨き。	・A441の体部には、縦位三叉文による磨消文を施す。 ・A445の体部には、横位三叉文による磨消文が施されると推定される。	・器形が不明であり、文様も異なるが、A442もこの類であろうか。 ・北陸系。
瓶Y	1	A47	・口縁端部は直立気味におさめられている。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・磨消籠文（LR）。 ・三叉文の組み合せが、魚鱗状の文様を構成する。	・内外面にススが付着する。 ・大羽B併行。
碗X	1	A12	・口縁部欠損のため桶形となる判断できない。 ・平底。	・内外面とも磨き。	・体部上半の平行沈線文で両された文様帯に、横位三叉連結文を施す。三叉連結文で区分された空間には平行沈線を入れ、三叉間には縦位の平行沈線を入れる。	・深杯になるかもしない。 ・北陸系。
注口十器A	4	A129 A469 A421	・全体のわかる例はないが、A129では肩の張らない体部に注口部をついている。	・A129の外面は巻貝調整のあと荒くナデ調整され、内面はナデ調整されている。	・A129の頭部に2本の沈線がめぐる。	・褐色一灰褐色。 ・砂粒を含む。
注口上器Z	1	A131	・口縁端部は欠損しているが、口縁部下半は内傾している。 ・体部はなで肩状に張り出している。 ・底部不明。	・外面は丹念な磨き。 ・内面はナデ調整をおこない、粗粒度が残る。	・口縁部下半から体部上半にかけて、楕円弧沈線文を組み合わせて施し、その交点にコブを貼り付ける。	・福島県新地村小川貝塚に類似あり。 ・黒色。
壺Z	1	A47	・口縁部不明であるが肩部の張る壺形と思われる。 ・底部不明。	・内外面ともに磨き。	・肩部上半に三叉連結文、凹窓によって魚鱗文を施す。	・外面赤褐色。内面黒色。 ・北陸系。

滋賀県III

器形 個体 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
深 鉢 A ₁	A134	・滋賀県I以来の深鉢 A ₁ の特徴である体部に2つの段をもつける形態で、形態的には滋賀県IIの深鉢 A ₁ と同じである。 ・口径は18cm~23cm。 ・凹底。	・外面はナデ調整が主体をなすようであるが、A134では、体部の下段以下を左下→右上の斜方向に削っている。 ・内面もナデ調整が主体であるが、A134では卷貝調整を水平方向におこなっている。	・A137には半円形とも山形ともつかぬ突起が4ヶ所についている。波状口縁の退化したものとも考えられる。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A134の外面には吹きこぼれかスカが付着している。
	A137				
深 鉢 A ₁	A138	・深鉢A ₁ と形態は全く同じであるが、文様をもっている。 ・口径は36cm。 ・凹底。	・A138の外面は卷貝調整をおこない、更にナデ調整している。下段部以下は特に強くナデ調整している。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこなっているが、口縁部には卷貝調整の痕跡が残っている。	・A138では口縁部と下段部の上部とに、半截竹管による2本単位の波線文を2組ずつめぐらしている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
	A139				
深 鉢 B ₁	A135	・体部に2つの段をもち、口縁が内唇気味におさめられている。体部の2つの段は退化してほとんどなくなってしまっているものもある。 ・A135は口縁が直立気味でやや異っているが、変種としてこの類に含めた。 ・口径は18cm~25cm。	・外面は全面をナデ調整したものか土全体。 ・A136は体部外周を水平方向に巻貝調整し、その後で全面縦いナデ調整をおこない、上段部と下段部の間を更に二枚貝溝調整している。体部下半はへラ状ないしは巻貝頂部などによって、垂直方向にあらくナデされている。 ・A135は体部外面の下段部以下を時計廻りの水平方向に削っており、それより上部は水平方向のナデ調整がおこなわれている。 ・内面はいづれも水平方向のナデ調整である。		・褐色~灰褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
	A136				
深 鉢 C ₁	A45	・滋賀県IIの深鉢C ₁ と特徴は同じ。 ・口縁部のみの破片である。	・口縁の内外面ともナデ調整。	・2つの段部には筋目をつけ、上段部と口縁との間に2本単位の山形反転沈線文を施し、その頂部には丸棒状の刺突文を配し	・滋賀県IIになる可能性がある。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					ている。上枝部と下段部の間は平行沈縁文を施している。	
深 鉢	1	A141	・口縁部と体部の接合部に段をもつ形態で、段部はかなり退化している。溢貯量Ⅰ～Ⅱの深鉢Dの系譜上にあるものと思われる。 ・口縁部はより長くなり外反し、端部のつくりは薄くなっている。 ・丸底。 ・口径は30cm。	・口縁部外側は、二枚貝調整をおこなった後にナデ調整をおこなっている。 ・体部外側は、下→上の垂直方向から斜方向に4段にわけて削り上げ、頸部付近は時計回りの水平方向に削っている。 ・内面は一枚貝調整を水平方向におこなつた後に、水平方向のナデ調整をおこなっている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A141は280号窯棺として使用されたいた。 ・岡山県原遺跡に類例あり。	
深 鉢	8	A141 A142	・長い口縁部はわずかに外反している。 ・口径は30cm前後。	・基本的に巻貝調整とナデ調整との組み合わせで、A141の口縁部外側は意識したように整然と二枚貝調整している。A142は口縁部の内外面とも、ナデ調整の後に部分的に巻貝でナデしている。 ・体部外側は、巻貝で水平方向に調整するものと、水平方向から斜方向に調整するものとがあり、全面をナデ調整するものもある。 ・内面は水平方向のナデ調整をおこなう。	・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A141の体部内面に有機物が付着し、口縁部外側に吹きこぼれかスカが付着している。 ・A142は焼成良好で堅硬である。	
深 鉢	4	A139 A140	・基本的な形態は深鉢E ₁ と同じであるが、小型品である。 ・口縁部のつくりは深鉢E ₁ とやや異なり、A139のようにわずかに外反するものや、A140のように口縁端部を外反させるものなど一定していない。 ・口径は19cm～22cm。	・巻貝調整とナデ調整との組み合わせである。 ・A140の外側は細かい条痕が走っているが、一応巻貝調整と考えておく。 ・A139では、口縁部の内外面とも水平方向にナデ調整し、体部は巻貝調整している。	・灰褐色～黒褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。 ・A139の外側に吹きこぼれかスカが付着し、体部内面には有機物が付着する。	

器種 名	個体 数	上器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
深 鉢	1	A145	<ul style="list-style-type: none"> ・口径14cmの小型品で、口縁部は外反する。 ・わずかに波状口縁の名残りをとどめるよう突起状の波頂がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部外面は平滑なナデ調整をおこない、体部外表面は削り調整で、下→上の垂直方向から斜方向に削り、縁部付近は時計通りの水平方向に削っている。 ・内面は本平方向のナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ・波頂部直下に半截竹管による爪形文をついた後に、鋏部接合部を同様の爪形文で飾っている。 ・口縁上端面に細かい刻み目をついている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・褐色～黒褐色。 ・焼成良好。 ・砂粒を含む。 ・岡山県原遺跡に類例あり。
深 鉢	12	A146 A152	<ul style="list-style-type: none"> ・体部と口縁部との区別のない深鉢で、口縁は内寄しているのが一般的である。 ・口径は15cm~35cm。 ・底部は丸底、凹底のものが全くないとはいはずれず、卷貝調整のものは凹底となる可能性がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・外周調整に関して、10例中67例は精粗の差はあるがナデ調整で、あるいは仕上げのものは粘土紐の断ぎ目を残している。また、この内には削り調整の後に、ナデ調整している例も含まれている。 ・削り調整は23例あり、一般的には下→上の垂直方向に削り上げて、口縁付近は時計通りの水平方向に削っている。全て垂直方向に削る例もある。 ・卷貝調整は12例あるが、この時期にまで併存するものかどうか不明で、滋賀里IIに属する可能性がある。 ・粘土紐の幅は1cm~1.5cm。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁上端面に、細かい刻み目またはA152のような押し引きによる変形の刻み目あるいは長横円形の刻み目がほどこされる例は、わずか8例しかない。 ・A151は口縁直下に、発達してはいないが突帯をもつ特殊例である。あるいは滋賀里IV~Vに属するのかも知れないが、突帯の形状からみて、ここに分類した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・褐色～灰褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。
深 鉢	2	A145	<ul style="list-style-type: none"> ・長い口縁部は、大きくゆるやかに内寄し、端部は直立している。 ・口径は26cm。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A145の口縁部外面は、水平方向の卷貝調整のあとナデ調整をおこない、体部外面は二枚貝調整をおこなっている。 ・内面は本平方向のナデ調整。 ・他の1例は、口縁部の内外面とも平滑なナデ調整である。 		<ul style="list-style-type: none"> ・黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・この深鉢は、滋賀里IIでは分類されていないが、それらしき破片はあるので収録しているとも考えられるし、これ自体が滋賀里IIに属するとも考えられる。 ・岡山県原遺跡に類例がある。

器形	個体数	土器No	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深鉢 Y ₂	1	A153	・やや外反する波状口縁である。 ・体部以下は不明。	内外面やや荒い磨き。	・波頭部に三叉文を施し、口縁部に1本の、頸部に2本の沈線をめぐらす。	・外面にススが付着する。 ・北陸系。
深鉢 X ₂	1	A169	・二又状につくられた波状口縁の突出部である。 ・体部以下は不明。	内外面磨き。	・波頭部外面には、瓶位の三叉文によって2分される山形沈線文を施す。 ・波頭部内面には二又部を中心として、3ヶ所に各々2本の沈線による円弧文が施される。この内、波頭部のものは内側の沈線が波頭部上端面に施されている。	・外面にススが付着する。 ・北陸系。
深鉢 W	1	A165	・波頭部が凸形状の波状口縁である。		・波頭部外面に2条の割み目帯で区画された文様帯があり、瓶位の沈線で区画された長方形空間に被杉状文を施し、波頭部下部を三叉文でうめている。	・A438もこの類に入るか。 ・北陸系。
甕 A ₁	2	A158	・外反する口縁の端部を直角気味におさめており、滋賀里Ⅱの甕A ₁ と同じである。 ・口縁端部内面にへラ状のものをめぐらして段をついている。 ・口径27cm。	・外面は巻貝調整から一枚貝調整のあと、ナデ調整している。 ・内面は平滑なナデ調整。		・黒灰色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里Ⅱに属するのかもしれない。
甕 A ₂	3	A156 A157	・反くて外反する口縁の端部が肥厚している。 ・滋賀里Ⅱの甕A ₂ と同じである。 ・口径は27cm~35cm。	・外面は水平方向に色々調整をおこない、A157ではその上をナデ調整している。また口縁の肥厚部だけを丁寧にナデ調整している例もある。 ・内面は水平方向のナデ調整が基本で、A157のように口縁の肥厚部に巻貝調整をおこなった後に、ナデ調整している例もある。		・茶褐色~黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里Ⅱに属するのかもしれない。 ・山口県岩川遺跡に類似あり。
甕 B ₁	7	A167 1 A168	・波状口縁をもつ甕をBタイプとし、甕B ₁ は調整手法上、二枚	・口縁部外面は二枚貝調整か巻貝調整をおこない、その上をナ	・波頭部をA169のように半截竹管による爪形文によって飾る	・褐色~黒褐色。 ・砂粒を含む。

器種	個体数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			貝調整や巻貝調整のみられるものである。 ・A167は口縁部と体部との境界が明確ではない。 ・口径は31cm~36cm。	手調整する例もある。 ・体部外画は削り調整する例と、削ったのちナデ調整する例とがある。 ・内面は水平方向にナデ調整している。	例がある。A169はまた口縁上端間に細かい刻み目を入れているが、他の瓦形文をもつ例では、波頂部中央を削突して凹ませているだけである。 ・口縁部上端間に刻み目のある例は1例のみである。	・岡山県原遺跡に類似例あり。
甕	40	A170	・形態は甕B ₁ と全く同じであるが、調整手法において、巻貝調整や二枚貝調整のないもの。 ・口径は22cm~38cmまで各種ある。 ・凹底。 ・波頂部の頂中央を軽くおして少し凹ませた例が1例ある。	・口縁部外画は水平にナデ調整し、体部外画は下→上の並直方向から斜方向に削り上げ、頸部付近は時計回りの水平方向に削る。これが削り調整の一般的な方式である。削り痕の立ち幅は1cm前後である。 ・A172やA175のように削り調整の後にナデ調整を加える例もある。 ・内面は全て水平のナデ調整をおこなう。 ・底部四面は、A170、A174ではあらいため調整のみである。 ・A170、A174、A175の頸部結合部外画を、ヘラ状のもので一回強くナデしている。 ・粘土紐の幅は1cm~1.5cm。	・A175のように波頂部に棒状の原体で削突文を配する例が2例あり、他の1例は規則に4個配している。 口縁上端間に細かい刻み目のある例は14例あり、A171のような刻み目は9例をしめ、A172のように断続的に刻む例もある。A170のような押し引きによる變形の刻み目は3例、半円形の刻み目は2例ある。	・褐色~灰褐色。 ・砂粒。富母片を含む。 ・内面に有機物が付着し、外面に吹きこぼれかスカが付着するものも多い。 ・A170は71号甕棺に、A171は、230号甕棺に、A174は172号甕棺に、A177は254号甕棺に、A178は225号甕棺に使用されていた。
		B ₂	B ₃	A176		
甕	8	A179	・半球の底で、外反する口縁部に、その最大幅が頸部結合部にあるような体部がつく。 ・調整手法に巻貝や二枚貝調整のあるもの。 ・口径は30cm~40cm。	・この類の一般的な手法は、口縁部外画を二枚貝調整し、体部外画は下→上の並直→斜方向に削り上げ、頸部付近は時計回りの水平方向に削っている。口縁部は二枚貝調整の後にナデ調整を加えるものもある。 ・A179は口縁部外画を水平にナデ調整し、体部外画を水平方向	・A182は口縁上端間に幅広い刻み目があり、3つの連続した半円形突起がつく。突起が何ヶ所につくものか不明。	・灰褐色~褐色。 ・砂粒。富母片を含む。 ・A180の外には吹きこぼれかスカが付着し、内面には有機物が付着する。
		C ₁		A182		

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				に巻貝調整した後にナデ調整を加えている。 ・内面は全て水平のナデ調整。		
甕	5	A183 A185 Ca	・形態は甕C ₁ と全く同じである。 ・調整手法上、巻貝や二枚貝調整がなく、削りとナデで調整をおこなっている。 ・口径は28cm~32cm。 ・A184は口縁部の意識が弱く例外的であるが、この類に入れてくれる。	・口縁部外面は水平ナデ調整し、体部外面は下→上の垂直→斜方向に削り上げ。頸部近は時計回りの水平方向に削る。A183のように水平方向の削りがない例もある。 ・A184は特殊例で、体部・口縁部の区別なしに削り上げている。 ・内面は精・粗の差はあるが全て水平ナデ調整。 ・粘土紐の幅は1cm~1.5cm。		・褐色~黒褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。 ・山口県岩田遺跡に類例あり。
甕	8	A186 A191 D ₁	・外反する口縁部に、やや肩部の強る長胴形の体部がつく。 ・口径は肩部の絞大幅よりも大きいのが一般的である。 ・調整手法上、巻貝や二枚貝調整のあるもの。 ・口径は34cm~39cm。	・口縁部外面は巻貝調整か二枚貝調整をおこない、その後に水平ナデ調整をしている例もある。 ・体部外面は削り調整がおこなわれ、一般に下→上に削り上げているが、A191は時計回りの水平方向に削っている。A191では更に、二枚貝調整を体部下半部におこなっている。 ・内面は平滑な水平ナデ調整。 ・A186の体部の削り調整には巻貝が使われた可能性がある。 ・頸部接合部外面をへう状のもので一回強くナデた例もある。	・台形の突起がつくと思われる破片が2例ある。	・褐色~黒褐色。 ・砂粒を含む。 ・A191は103号焼粧として使用された。 ・A191は限界に近いほど薄手のつくりで、鐵文式土器の中でも最高の調整技術を発揮した優品である。 ・兵庫県日笠山貝塚に類例あり。
甕	50	A187 A188 A189 A192	・形態は甕D ₁ と全く同じであり、調整手法上、巻貝調整や二枚貝調整のないものであ	・口縁部外面は水平方向のナデ調整。 ・体部の調整には、33例削り調整によるもの	・口縁上端間に割み目をもつものは23例あり。10例は細かい割み目で、7例はA182	・褐色~灰褐色。 ・砂粒、雲母片を含む。

器形	個体数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕	50	A187	る。	と17例のナデ調整によるものとがある。削りは一般的には下→上に削り上部、頸部付近は時計回りの水平方向に削る。A187はこれと全く逆の特殊例で、上→下に削り、頸部付近は逆時計方向に削っている。削り調整のあと、ナデ調整を加えているものもある。	のような押し引きによる菱形の刻み目、6例はA190のよる長楕円形の刻み目である。	・A189はⅢ-C墓址の石組遺構内(273号)出土の土器である。
		A190	・口径は27cm~34cm。	・削起のつく例は2例あり、半円形突起の中央を囲ませたものと台形突起とであり、それぞれ何ヵ所につくものかわからない。		・A188の外面には吹きこぼれかスカが付着している。
		A192				
	D ₂			・体部外面をナデ調整するものは、多くは粘土紐の離ぎ目を残す程度の軽いもので、A192は板状のものでナデ調整したものではないかと思われる特殊例である。		
甕	42	A189	・「く」字形に外反する口縁部に弱い強る体部がつく。	・内面は全て水平ナデ調整である。	・褐色。	
		A202	・調整手法の上で、也貝調整や二枚貝調整のあるもの。	・粘土紐の幅は1cm~1.5cm。	・砂粒、蜜母片を含む。	
甕	E ₁	A191	・口径は31cm~35cm。	・体部接合部をへら状のもので強くナデしている例が3例ある。	・A202の体部内面に帯状に有機物が付着している。	
		A203	・凹底。	・口縁部外面に巻貝調整か二枚貝調整をおこない、多くの場合その上をナデ調整するので条幅はほとんど消えてしまう。	・A202は93号甕棺として使用されていた。	

器形	個体数	上器No.	形態の特徴	手法の特徴	文 様	備 考
				<p>ものもある。</p> <ul style="list-style-type: none"> 内面は水平ナデ調整が基本であり、A202の口縁部から肩部にかけて巻貝調整がみられる。 A202の底部凹面はナデ調整されている。 		
		A193	・形態は變Eと全く同じで、調整手法の上で巻貝調整や二枚貝調整のないもの。	・口縁部外面は全て水平ナデ調整がおこなわれるが、体部外面の調整には、削りによるものが187例と、ナデによるものが69例とがある。削り引きによる要形の割み目は36例、A204のようと同じく押し引きによる長楕円形の割み目は25例である。A201は小突起の連続したようなもので特殊である。	・褐色～灰褐色。	
		A201	・口径は17cm～35cm。 ・A194、A199、A203	・口縁上端面に削み目を入れる例は全部で84例あり、A203のような僅かい削み目は23例。	・砂粒、雲母片を含む。	
		A203	では円底で、A193は平底である。	・A197の口縁部は他とくらべて薄いつくりで、端部などのつくりも他と異っており、強質里V-Vに下がる可能性もある。	・A194、A198、A203の体部内面には有機物が帯状に付着している。	
		A205	29	<ul style="list-style-type: none"> 正面をナデ調整で仕上げるものは、多くの場合粘土模の織目を残している。 A205の頸部接合部をヘラ状のもので一回強くナデしている。 A199、A203の底部凹面はナデ調整しているだけだが、A194では、磨研した跡が周囲に残り、中央は使用感なのかアバタ状となっている。 底部のつくりがよくわかるのはA194で、円盤状の底に粘土模を積み上げている。 粘土模の幅は1cm～1.5cm。 	・A193は180号磨粒、A194は171号磨粒、A197は175号磨粒、A203は99号磨粒、A205は230号磨粒として使用されていた。	
Eg					・A196は専手の作りで施成も良く、優品である。	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕	F ₁	A26	・口縁部は外反し、胴の張った体部とはなめらかな曲線を描いて接続する。	・口縁部外面は巻貝か二枚貝調整をおこない、A207, A209のように更にその上からナデ調整を加えているものもある。	・口縁部上端面に割み目をもつ例は7例あり、A210のような細かい割み目は1例。他は全て押し引きによる変形の割み目である。	・褐色一灰褐色。
		A210	・調整手法の上で、巻貝調整や二枚貝調整のみられるもの。	・体部外面は7例が削り調整、7例がナデ調整によって仕上げられている。削りは下→上に削り上げられていた。A207は体部下半分のみ削り調整を加えているが、長い削りであってナデ調整とあまりかわりがないくらいである。	・突起、文様をもつものはA208 1例である。古形突起に2つの凹みをもつた3重突起で、突起下に丸棒状のもので刺突した円文が垂直にならんでいる。恐らく4単位の文様、突起の構成であろう。	・砂粒、雲母片を含む。
		A58	・A206は、焼き方や口縁部内面に沈線のあることなど他と異った特徴をしめているが、ここに分類しておく。	・ナデ調整のものはA209, A210のように平滑な仕上げもあるが、多くは粘土緑の難ぎ日を残す程度の仕上げである。		・A206, A209の外面にはスッカラク物かの付着がある。
		14	・口径は20cm~39cm。	・内面は全て水平ナデ調整。		・岡山県黒土塗跡に類似。
				・粘土緑の幅は1cm~1.5cm。		
	F ₂	A211	・形態は甕F ₁ と全く同じであるが、調整手法の上で巻貝や二枚貝調整のないもの。	・口縁部外面は水平ナデ調整をおこない、体部外面には甕F ₁ と同様に削りとナデとの調整がある。削り例は95例、ナデ例は55例あり、甕F ₁ は他の謙にくらべてナデ調整のものが多い。	・A213は半截竹管の押し引きによる連續した爪形文で口縁部を飾っている。垂直に施文しているところは本来波頂部となるのだが、本例は心もちわざかに盛りあがるかという程度で、波頂部は退化してしまっている。A578には波頂部が認められる。	・褐色一灰褐色。
		A212	・口径は20cm~37cm。	・体部外面の削りは、一戦には下→上に削り上げ頸部付近を時計廻りの水平方向に削るが、A212のように水平方向だけに削るものもあり、しかもこの場合逆時計廻りに削っている。	・口縁上面面を削むものは45例あり、A213のような細かい割み目は6例。押し引きによる変形の割み目は28例。長筋円形の割み目は11例である。	・砂粒、雲母片を含む。
		A58				
		50				

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
					・口縁に突起のつく例が4例あり、半円形山形突起の中央を凹ませた突起が3例、凸状突起が1例である。	
甕	2	A25 A26	・甕Gは、甕Fと同じように口縁部と休部とはなめらかに接続するが、口縁部は直立気味にわずかに外に向く。休部はやや肩の張るものもあるが、多くはなで肩である。 ・甕Gは、調整手法上巻貝や二枚貝調整のみられるもの。 ・口径は19cmと29cm。	・口縁部外側は巻貝調整か一枚貝調整をおこない、A216のようにはその上をナデ調整するものもある。 ・休部外側は、A215では下→上へ削り上げておき、A216では軽い粘土棒の遊び目を残している。 ・内面はいずれも水平ナデ調整をおこなう。	・口縁上端面には、A215では菱形の、A216では長楕円形の、それぞれ押し引きによる割み目が加えられている。 ・A216には台形突起の上面に2つの凹みをつけた3頭突起がついているが、何ヶ所につくものか不明。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A215の休部内面に有機物が付着している。
甕	14	A27 A28 A29 A30	・形態は甕Gと全く同じだが、調整手法上、巻貝や一枚貝調整のないもの。 ・口径は22cm～35cm。	・口縁部外側は水平方向のナデ調整。 ・休部外側は削り調整によるものとナデ調整によるものとがあり、どちらも7例ある。 ・削りは下→上へ削り上げ、頸部付近は時計回りの水平方向に削るものが一般的であるが、A219のように逆時計回りの水平方向に削る特殊なものもある。削り調整の後にナデ調整を加える例もある。 ・内面は全て水平ナデ調整。 ・粘土棒の幅は1cm～2cm。	・口縁上端面に割み目を入れるものはA222の1例で、押し引きによる菱形の割み目である。 ・口縁に突起をつける例は5例あり、A218のような台形の突起が2例、A219、A221、A223のように台形突起の中央を凹ませたものが3例ある。 ・A280の頸部に、コブ状の貼りつけがある。	・褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A218は174号標柵として使用されていた。 ・A219の頸部に、外面と内面の間隔より穿孔しているが、位置がずれて貫通していない。補修孔の失敗か。
甕	2	A159 A160	・形態からは甕Eに近く、外反する口縁部に弱い張る休部が屈折するようにつく。しかしながら口縁部は丸く、休部も幅広く丸の短かい器形となっている。	・A159の外側は丁寧な滑研磨のナデ調整。 ・内面は、休部に巻貝又は一枚貝調整をおこなった後に丁寧にナデ調整している。 ・A160は、休部外側を時計回りの水平方		・白褐色～灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A159、A160ともに外面に吹きこぼれかススかが付着している。

器形	個体数	土器No	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			・口径は24cmと27cm。	向に削り調整し、口縁部外面と内面の全てはナデ調整している。		
甕	1	A23	・小破片であるが短かく外反する口縁をもち、口縁の内面に沈線をめぐらしている。 ・口径は20cm。	・内外面ともに水平ナデ調整。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
甕	4	A161 A164	・各形態の小甕の観。 ・口径は21cm~18cm。 ・A161は丸底となるようであり、A162、A163はわずかに凹んだ凹底であろう。	・口縁部外面はナデ調整。 ・体部外面は、A161、A162では下へ上に割り上げており、A163、A164は全面を平滑にナデ調整している。 ・内面は全て水平ナデ調整。	・A164は口縁上端面に細かい刻み目を入れている。 ・A162はリボン形の突起を1ヶ所だけにつけている。	・褐色~黒褐色。 ・砂粒、茶母片を含む。
甕	1	Z ₄	・口縁部は規則なく外に開き、最大幅が口縁部との接合部にある体部がいく。 ・底部は平底に近いが中央部がわずかに凹んでいる。	・口縁部外面と全ての内面は磨き。 ・体部外圍は筋節織文(L R)を施した後に、筋節部を中心にナデ調整を加えている。 ・底部付近は、織文を施した後に、へラ状のもので水平方向と垂直方向とに磨いている。	・口縁部外面に文様帯がある。織割による半圓状文を端部に施し、その下に簡略化された半圓状文と平行線文を織割であらわす。	・この土器はIII C墓地の255号墓標として使用されていた。 ・大柄B C併行。
甕	2	Z ₄	・口縁部は欠損しているが、外開きのものであろう。肩部にも文様帯をもつ要である。 ・大型である。	・内面は磨き。 ・体部外面は織文(L R)を施し、文様帯は磨いている。	・口縁部不明。 ・体部上半の文様帯には、大きな半圓状文を配する。	・灰褐色、黄白色など黒色を呈さない。 ・大柄B C併行。
甕	1	Z ₄	・外反する口縁部になじ崩の体感がいく。 ・特徴は甕Z一般と同じであるが文様帯の内に文様が施されていない。 ・底部不明。	・外側は無筋の織文を施し、部分的にナデ調整を加えている。 ・文様帯は磨き仕上げ。 ・内面はナデ調整。	・口縁端部に刻み目をつけB突起をもつ。突起の個数は不明。 ・体部上半に沈線で調された文様帯があるが内には何も施されていない。	・茶褐色。
甕	8	Y ₁	・形態の特徴は甕Z一般と同じであるが、小型の甕である。 ・平底か。	・文様のある部分は丹念に磨き。 ・体部の文様帯以外の部分には織文が施されている。	・A463のようにB突起のつくものがある。 ・口縁部外面には、A463では簡略化した半圓状文と、織割によ	・黒色。 ・スヌが付着する例が多い。 ・大柄B C併行。

器形	個体数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅 鉢	49	A25 1 A29 A32 A33	・形態は滋賀県IIの浅 鉢A ₀ と同じであるが、 体部の深いものや深い ものなど変化が認め られる。 ・丸底か。 ・A229は口径51cmの 大型品である。	・内面はナテ調整が荒 い磨き。 ・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	平行沈線文間に刮み を加えたものとを施 している。 ・体部上半の文様帶に は、A465では半円 状文が施されている。 ・文様は縦Z字に比べて 精緻である。	
浅 鉢	64	A29 , A23 A56 A37	・形態は滋賀県IIの浅 鉢A ₀ と同じ。口縁部 の立ちあがりの細分 も同様であり。その 量的な関係は、外面 に沈線をもつもの> 水平に近いもの>垂 直に近いものの順と なる。 ・A230は、口縁端部 外面に細い突帯を貼 りつけている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起をもつものがあ る。A228はHタイプ の突起、A582はC タイプの突起を各々 もつ。	・A226は滋賀県 II・IIIにおける 形態変化のない ものの例である。
浅 鉢	1	A28	・外反する口縁部の端 部は肥厚している。 ・肩部は棱をなして張 り出ますが、その様は 口径より小さい。 ・丸底か。	・内外面極めて良好な 磨き。 ・黒色磨研土器。		・A233は255号鏡 の蓋として、 A153とともに 使用されていた。 ・同じ原船津貝塚、 香川県伊喜木道 跡、宮崎県松添 貝塚、鹿児島県 黒川洞穴遺跡に 類例がある。
浅 鉢	1	A25	・形態は滋賀県Iの浅 鉢B ₀ と同じだが、体 部が浅くなっている。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・口縁の突出部とその 直下の肩後部とに、 各々棒状刺突文を施 す。	・外面に朱を塗り、 またスヌが付着 している。 ・長崎県深場遺跡 に類例をみる。
浅 鉢	7	A26	・形態は滋賀県IIの浅 鉢B ₀ と同じ。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。		・A236の外面に は朱が塗られ、 またスヌが付着 している。 ・A236は補修孔 をもつ。
浅 鉢	5	A30 A42 A90	・口縁部は不明である が、体部は大きく張 り出している。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・肩部上半に、三角形 くり込み。平行沈線。 胡み口唇からなるい	

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
		A601 A602	・丸底か。		わゆる櫛原式文様を施す。 ・A422は平行沈線文とみうけられるが、組み合わせの単位と破片の関係からこの類に入れた。	
浅鉢	7	A237 A238 A239 A591 A592 E4	・口縁部は細かく外反し、その端部は丸味をおび、内面が肥厚して段をなしている。 ・体部は浅く、大きく張り出している。 ・丸底か。 ・A237, A238, A591, A592は、口縁端部外面に1本の沈線を施すことによって、端部断面は卵形を呈す。	・内外面丹金な磨き。 ・黒色磨研十器。 ・口縁端部外面に沈線をもつものは、極めて良好な磨きが施されている。	・A237はAタイプの突起をもつ。 ・口縁端部外面に沈線をもつものは、Bタ イプの突起をもつ。	・A591は赤褐色を呈し、焼成良好。 ・A237はⅢ C 基址黒色泥沙層出土。 ・奈良県櫛原遺跡、宮崎県松添貝塚、鹿児島県墨川洞穴遺跡に類例がある。
浅鉢	1	G1	・やや内傾する口縁部の端部は角ばっている。 ・肩部をつくらずに口縁部と体部とが接合している。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・口縁部に山形反転沈線文を施し、沈線間に棒状突起をうつ。山形部と体部との接合部に剥み目を施している。	・滋賀県に満すかもしれない。
浅鉢	1	H2	・形態は滋賀県IIの浅鉢H2と同じ。 ・丸底。	・外面は逆時計回りの水平方向にあらい削り調整をおこなう。 ・内面はナデ調整。粘土縁の巻き口が残る。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。
鉢	12	B2	・口縁と体部との区別のない鉢形で、滋賀県IIの鉢B2と比較して大型、深身となっている。 ・底部不明。	・外面は水平ナデ調整し、内面に比べてあらい。 ・内面は磨き。	・突起をもつものがある。	・外面にススの付着する例が多い。
鉢	19	B2	・形態は鉢B2と同じ。 ・A597は波状口縁をなし、特殊例である。 ・底部不明。	・内外面磨き。	・口縁部内面に沈線をめぐらす例があり、A247は3本、A597は2本ある。 ・A247にはEタイプの、A597にはBタ イプの突起が各々ついている。	・焼成は悪い。
鉢	1	Z2	・形態の特徴は滋賀県IIの鉢Z2と同じ。	・内外面とも荒い磨き。	・文様も滋賀県IIの鉢Z2と同じ。	・北陸系。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
鉢	2	A29	・形態は鉢Z ₂ と同じく幅広い口部をもつている。 ・底部不明。	・内外面荒い磨き。	・粗広い口部に、部位の細陰線と円形もしくは方形状の粘土縫を貼りつけている。 A251では更に繩文(L R)を施している。	・A250はIII C開析谷黄褐色砂層出土で、補修孔に樹皮縫が残っていた。 ・石川県八日市新保遺跡、同・御経塚遺跡に類例がある。 ・暗褐色。 ・北陸系。
		A51				
碗	16	A22	・形態は滋賀里IIの柄A ₁ と同じ。	・内外面丹念な磨きであるが、A242の口縁付近には粘土縫の難きが残る。 ・黒色磨研±20°。		
		A42	・形態は滋賀里IIの柄A ₂ と同じ。	・内外面月全な磨き。 ・黒色磨研。	・文様も基本的に滋賀里IIの柄A ₂ と同じである。 ・A42は平行沈線文七に棒状刺突文を配し、A430では、口縁端部に刻み目を入れ、平行沈線上に棒状刺突文を配している。(碗A ₄ の支撑に近い)。	・A421は奈良県橿原遺跡に類例を見る。
碗	5	A43				
		A49				
碗	10	A30	・形態は滋賀里IIの柄A ₃ と同じ。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研研土器。	・文様も滋賀里IIの柄A ₃ と変化はない。 ・A434は三角形のくり込みによる浮彫部に繩文(L R)を施している。	
		A47				
碗	5	A48				
		A42				
碗	A ₄	A49				
		A50				
注口土器A	2	A24	・形態は滋賀里IIの柄A ₄ と同じ。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。	・文様も滋賀里IIの柄A ₄ と変化はない。 ・A52は、口縁端部に刻み目を施し、その旗下の沈線を上縁として斜行沈線文を施している。	
		A55	・A244は体部の張り出しが極めて、注口部は欠損する。 ・底部は丸底。	・A244は内外面とともに磨き。		・灰褐色。 --
注口土器B	1	A36	・口縁部と体部が明確に分かれる壺形の注口土器と推定される。	・内外面ともに磨いているが、口縁部外面には目の細かい繩文	・頸部の突起の上方と肩部の交差線上に、各々丸玉状の刺突文が	・淡褐色。 ・厚手のつくり。

器形	側面 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			<ul style="list-style-type: none"> 底部不明。 頸部と肩部上半とに突唇状の貼りつけがある。 	が施されている。	施されている。	
壺	A 1	A26	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は短かく直立する。 体部以下は不明。 	<ul style="list-style-type: none"> 磨減が激しく、調整手法は不明。 		<ul style="list-style-type: none"> 淡褐色。 厚手のつくり。
蓋	1	A59	<ul style="list-style-type: none"> 一部欠損しているが、製造径6.2cmあり、対称的な位置に計4個の孔をあけている。 	<ul style="list-style-type: none"> 成形は難で、器表の凹凸は激しい。 内外面ともナナ調整。 		<ul style="list-style-type: none"> 黒灰色。 砂粒、雲母片を含む。 奈良県橿原遺跡、同・丹治遺跡、大阪府船橋遺跡に類例あり。

滋賀型

器形	側面 部	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕	1	A252	<ul style="list-style-type: none"> 刻みのない一条の突唇が、口縁端部から少し離れた位置についている。 A252は甕Kの典型的な形態ではなく、滋賀県出の甕Eに突唇のついたもので突唇、文の要が定形化する以前のものであろう。 口径は28cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外側は二枚貝調整の後にナデ調整を加え、体部は二枚貝調整で全面をおおっている。恐らく削り調整と同じく下→上に調整し、頸部附近は水平方向に調整していると考えられる。 内面は水平ナデ調整。 突唇は口縁部の調整が終わってから貼りつけられている。 		<ul style="list-style-type: none"> 灰褐色～褐色。 砂粒・雲母片を含む。 A252の体部内面に有機物が付着している。 A252は290号標の底部のおおいとして、A267、A300とともに使用されていた。
		K1				
甕	27	A251	<ul style="list-style-type: none"> 刻みのない一条の突唇が口縁端部から少し離れてつくのは甕K1と同じだが、調整手法上、巻貝と二枚貝調整のないもの。 A254が典型的な形態で、長い口縁部は一たん直立気味にのび、そして外反して端部にいたる。体部はその最大幅が口縁部との接合部にあるような腰高な形態で、口縁部との接合部には明確な境ができる場合が多い。この形態が突唇文の要の定形化したものである。 A255は滋賀県出の甕Gに突唇のついたものである。 口径は22cm～34cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外面は水平ナデ調整。 体部外面は、削り調整と平滑なナデ調整によるものがあり、多くは削り調整である。削りは頭部付近では時計回りの水平方向におこなっていいる。 内面は全て、水平ナデ調整。 突唇は口縁部の調整が終った後に貼りつけられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 褐色～灰褐色。 砂粒・雲母片を含む 突唇のつく甕は、奈良県橿原遺跡、愛知県馬具塚遺跡、同・五ヶ森遺跡、岡山県前池遺跡など、西日本全般に広く類例がある。 	
		A256				
甕	6	A256	<ul style="list-style-type: none"> 甕の形態は甕Kの定型例と同じと思われるが、一条の突唇が口縁端部につけられている。 口径は14～16cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部片ばかりであるが、内外面ともに水平ナデ調整。 A256の調節に削りとられてできた段状のものがあるようで、滋賀型Vに近い特徴といえる。 		<ul style="list-style-type: none"> 褐色～灰褐色。 砂粒・雲母片を含む。
L						
甕	4	A257	<ul style="list-style-type: none"> 形態は甕Kと同じであるが、口縁端部から少し離れてつけられている一条の突唇 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外側は二枚貝調整され、多くはその上にナデ調整を加えている。突唇は最 	<ul style="list-style-type: none"> 突唇上の刻み目は、時計回りの押し引きによる要形刻み目が3例、A258のような 	<ul style="list-style-type: none"> 褐色～灰褐色。 砂粒・雲母片を含む。 A257の外面、A
		A258				
		A259				
甕	M1	A260				
		A261				

器形	個体数	土器No	形態の特徴	手法の特徴	分類	備考
			<p>上には刺み目がつけられている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・調整手法上、巻貝や一枚貝調整のみられるもの。 ・口径は28~32cm。 ・A267はとがり気味の丸底である。 	<p>後につけられる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・体部外画は、削りによるものとナデによるものがある。削りはドー上に削り上げ頭部附近は時計回りの水平方向に調整される。A267はごく軽い削りで、粘土紐の難び目が残っている。 ・内面は水平ナデ調整。 	同じく二枚貝による 変形刺み目が1例である。	<p>258の内外面に有機物かススかが付着している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A267は290号調査にA252, A300とともに使用されていた。 ・和歌山県鶴神貝塚に変形の類例あり。
腹	102	A259 1 A265 A266 A271 A615 A634	<p>形態は腹Mに同じで、開口手法上、巻貝や一枚貝調整のないもの。</p> <p>突審文の裏で最も主体をなす顔である。定型化した形態のものが圧倒的に多いが、A266は滋賀里田の腹F、A271は同じく腹Gに突審のついたものである。</p> <p>A260, A261, A269のように口縁部が異状にひびて体部が浅くなる形態は、滋賀里田の内でも新しい傾向と考えている。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A259は丸底である。 ・口径は18cm~35cmで、12cm~14cmの小型品もある。 	<p>・口縁部外画は水平ナデ調整。突審は最後につけられる。</p> <p>・体部外画は削り調整によるものと、ナデ調整によるものがある。軽いには削りによるものと正側的が多いが、滋賀里田にくらべて削りが一般的に軽くなっている。削った後をナデ調整する例もある。</p> <p>・内面は全て水平ナデ調整である。</p> <p>・A261, A262の頸部接合部外画をへら状のものではない何かで、縫に一層強くナデしている。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・突審上の刺み目には、押しひきによる変形刺み目が75例と多く、同じく二枚貝による変形刺み目は17例である。多くは時計回りの方向に押し引いているが、少数ながらも逆時計方向のものもある。 ・口縁上端間に刺み目を入れるものは55例あり、細かい刺み目は3例、押し引きによる変形刺み目は42例。同じく二枚貝による変形刺み目は17例。同じく長椭円形の刺み目は3例である。口縁上端面の刺み目についても、押ししひきは時計回りが圧倒的に多く、突審上の刺み目と軌を一にしている。 ・A264は、突審上に刺み目を入れる際に、その原体が同時に口縁部をきずつけている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・褐色一灰褐色。 ・砂紋・苔跡片を含む。 ・A260の内外面、A265の内面、A261, A271の外面に、有機物かススかが付着している。
M ₆		A273	<ul style="list-style-type: none"> ・刺み目をもつ一條の突審は、口縁端部につけられている。 ・形態は定型化した腹形であろう。 	<p>・口縁部外画を一枚貝調整しているものが1例あるが、他の全ては縫部外画をナデ調整している。突審は最後にはりつけている。</p> <p>・体部調整は、はっき</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・突審上の刺み目は、押し引きによる変形刺み目が35例。同じく二枚貝による変形の刺み目が5例ある。 ・口縁上端間に刺み目のあるものは6例で、5例が押し引きによ 	<ul style="list-style-type: none"> ・褐色。 ・砂紋・苔跡片を含む。
N	40					

器形	側体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
				<ul style="list-style-type: none"> りわかるものがないが、削りとナヂの両調整があろう。 内面は水平ナヂ調整。 	る變形の刻み目で、1例が同じく二枚貝による變形の刻み目である。	
裏 O	1	A272	<ul style="list-style-type: none"> ・形態は他の突帯のつく器と同じであるが、口縁部に刻み日のある突帯を2条接着してはりつけている。 ・口径は30cm。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部外面は二枚貝調整の後に、ナヂ隔壁を加えている。突帯は殷後にはりつけられている。 ・体部外面は時計通りの水平方向に軽く削り調整。 ・内面は水平ナヂ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ・突帯上には、逆時計通りの方向に押し引いた二枚貝による長楕円形の刻み目がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・灰褐色。 ・砂粒を含む。
裏 P	1	A274	<ul style="list-style-type: none"> ・定型化した器の形態で、口縁部に刻み日のある突帯をつけ、更に肩部に刻み日のない頸の先端的なものと見ることもできるが、器形や手法などからは滋賀里Nの特徴をしめしている。 ・口径30cm。 ・とがり気味の丸底。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部外面は水平ナヂ調整。 ・体部外面は削り調整し、下→上に削り上げて頸部付近は時計通りの水平方向に削っている。 ・内面は全て水平ナヂ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> ・上段の突帯上には、時計通り方向の押しきによる刻み目がつけられている。 ・口縁上端面には押し引きによる變形の刻み目がつけられていて、大体均勻したところで、施文方向が逆になっている。これは、土器を適さずに施文した結果であろう。 	<ul style="list-style-type: none"> ・灰褐色→褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A274は259号標帽として、A292とともに使用されていた。

器質Ⅴ

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
M	1	A275	<ul style="list-style-type: none"> 形態上は器質Ⅳの 継ぎと同じで、口縁 端部に刺み目のある 突帯がつく。 頸部後合部にあらい 沈窓がめぐっている。 口径は42cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部外側は従来の 水平ナナメ調整ではなく、 垂直方向の削り 調整である。この削 り調整はナナメ調整と 紙一重というほど特 いものであり、器 質Ⅳの削り調整の 特徴である。 内面は水平ナナメ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 突帯上には、時計回 り方向の押し引きによ る變形の刺み目がつ けられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰褐色。 砂粒を含む。 大阪府船橋遺跡 に類似あり。
M	5	A276 A277 A279 A281	<ul style="list-style-type: none"> 器質Ⅳの続Pから 單純に変化したもの かは別として、口縁 部と肩部とに2条の 突帯がつく。 形態上、口縁部と体 部との区別がなくなり、 体部の最も張り出す ところから餘々に内 傾させて口縁にいた っている。名称とし ては深体の方が適切 であろうが、晚期の 器形の変遷をふまえ て要とした。 口径は33cm~39cm。 A276は15cmの小型品 であり、果して2条の 突帯がつくか疑問 でもあるが、一応こ の類に入れておく。 A279、A281は平底 である。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は全面にわたり 垂直方向の軽い削り 調整をおこなってい る。多くは下→上に 階層しているが、A279 は上→下に削っている。 またA279は、突 帶と突帯の間を、垂 直方向の削りのあと で水平方向に削り調 整している。これは 垂直の削りの後に突 帯をはりつけ、更に 突帯間を口縁部とみ る意識があつて水平 の調整がおこなわれ たものであろう。 A277の外面は水平 ナナメ調整。 内面は全て水平ナナ メ調整。 円盤状の底部に、幅 1.5cmの粘土紐を積 み上げて形成してい る。 	<ul style="list-style-type: none"> 突帯上には、押し引 きによる變形の刺み 目がつけられている。 多くは時計回りに施 されているが、A279 では逆時計回り である。 A276の口縁上端間 には、押し引きによ る變形の刺み目がつ けられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 灰褐色~黒褐色。 砂粒を含む。 A279、A281の 内面には、帶状 に有機物が付着 している。 A279は227号甕 格、A281は213 号甕格として使 用されていた。 大阪府船橋遺跡 に類似あり。
M	1	A278	<ul style="list-style-type: none"> 大きく外反する口縁 部からなめらかに体 部に移行し、体部は 肩部が大きく張り出 している。 器壁はうすく、特に 口唇部はうすくおさ めている。 口縁部と体部に、う すい突帯を2条はり つけている。 口径は28cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 外面は垂直方向の軽 い削り調整。調整後 に突帯をはりつけて いる。 削りの原体は纖維束 状のもの。 内面は水平方向のナ ナメ調整。 粘土紐の幅は1cm ~1.5cm。 	<ul style="list-style-type: none"> 突帯上に細かい刺 み目をついている。 	<ul style="list-style-type: none"> 褐色。 砂粒を含む。 III C 墓以黑色泥 砂層出土。 器質Ⅳの中でも 一番新しい特 徴をもつている。

滋賀型N~Y

器形	個体数	土器No	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
甕	1	A24	・外反する口縁部はなだらかに体部に移行する。 ・形態上滋賀田の甕Fと全く同じであるが、両手のつくりなのが異っている。 ・口径は30cm。	・口縁部外面は水平ナナゲ調整。 ・体部外面は時計通りの水平削り調整。 ・内面は水平ナナゲ調整。		・褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・滋賀県田のこの類との区別は困難であり、滋賀里田となる可能性がある。
甕	7	A22 A24 A25 A26 A27 A28	・形態上からは滋賀丸IIIの甕Gと同じであり、直立気味の口縁部はなだらかに体部に移行している。 ・口径が体部最大幅より小さいA22~A24のタイプと、ほぼ同じA29~A293と2つのタイプがある。前者の口径は19cm~28cm、後者の口径は29cm~30cm。	・口縁部外面は水平ナナゲ調整。 ・体部外側は削り調整とナナゲ調整によって調整される。削りは、滋賀里田の削りにくらべて一般に軽く、A282のように下→上に削り上げるもののやA284のように時計通りの水平方向に削るものがある。削った後をナナゲ調整する例もA293に見られる。 ・A283、A291、A293はナナゲ調整がおこなわれ、粘土紐の継ぎ目を残している。 ・内側は全て水平ナナゲ調整。 ・粘土紐の幅は1cm~2cm。	A 282, A 284, A 292 の口縁上端面に崩み目がつけられている。 A 282, A 292は押しびきによる變形の削み目で、A 284は細かい削み目である。	・褐色~灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・A 291と232号甕棺として使用されていた。 A 292と259号甕棺の蓋として、A 274と組み合わせて使用された。 ・A 288の外側にススが付着している。 ・A 282, A 284は、滋賀里田の甕Gと差異なく、滋賀里田となる可能性がある。
甕	1	A28	・短かい口縁部は胴の張った体部にゆるやかに移行し、滋賀里田の甕Hと全く同じ形態である。 ・口径は24cm。	・内外面ともにナナゲ調整され、口縁部外面と内面の全ては水平方向に、体部外面は垂直方向に調整し、粘土紐の継ぎ目を残している。 ・調整上からも滋賀里田と差異はない。		・褐色。 ・砂粒を含む。 ・外側にススが付着している。 ・滋賀里田となる可能性がある。
甕	3	A28 A29	・口径が14cm~17cmの小型の甕。 ・口縁部はA 286, A 288のように直立気味のものと、A 287のような外反するものがある。	・内外面をナナゲ調整しているが、A 288の体部は、下→上方側の軽い削り調整の上をナナゲ調整している。		・褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・滋賀里田のものと差異なく、滋賀里田となる可能性がある。
甕	2	A295 A296	・A 295は外反し、A 296は直立気味という差	・A 296は内外面とも平滑な水平ナナゲ調整。		・褐色~灰褐色。 ・砂粒を含む。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			<p>質はあるが、いずれも口縁部はやや肥厚し、なめらかに体部に移行している。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・A 296の体部は接をもち、A 295の肩部は長いなで肩という特異な形態をとっている。 ・口径は16cm~25cm。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A 295の体部外周は下→上に削り上げており、他の全ての面はナデ調整されている。 		<ul style="list-style-type: none"> ・A 296は出質黒田にさかのはる可能性がある。
甕	8	A33 A46 A61 A86 A87	<p>・形態は滋賀県の甕Y₁と同じく小型の甕である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平底。 ・A 333は口縁部が内側しつつ外に開いており、他のものと若干異なっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体部外周は、文様帯を除いて繩文(L R)を施す。 ・口縁部外周と内面の全ては磨き。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A 333, A 606, A 607の口縁端部には刻み目とB突起がつき。口縁部には半齒状文、陽刻された刻み目、刻み目と半齒状文の組み合わせ文が施される。体部の文様帯には半齒状文が施される。 ・A 462の体部文様帯には、平行沈線文と半齒状文と陽刻による刻み目が施されている。 ・A 464の口縁部には、平行沈線文と半齒状文と陽刻による刻み目が施されている。革状文では半齒の墨が欠落している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒色。 ・大甕BC併行。
甕	2	A334 A608	<ul style="list-style-type: none"> ・基本的には甕Y₁と同じく小型の甕である。 ・平底か。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも磨きをおこなっているが、A 334の体部外周は繩文(L R)を施している。A 608の体部外周には削り紙が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁端部に刻み目を施し、陽刻によるB突起形の文様と平行沈線文とを口縁部に施す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・A 334は黒色。 ・A 608は白色。 ・大甕BC併行。
甕	1	A335	<ul style="list-style-type: none"> ・特徴は甕Y₁と同じであるが、厚手である。 ・底部不明。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも磨きをおこなうが、口縁部外周には繩文(L R)を施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁上端面に列点文を施し、B突起がつく。 ・体部上半の文様帯には、逆S字形に変化した半齒状文を施している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黄褐色。 ・大甕BC併行。 ・つくりは滋賀県甕Y₂に近い。
甕	1	A337	<ul style="list-style-type: none"> ・長く外反する口縁部に肩部の張り出さない体部がつく。 ・口縁部と体部との接合部から肩部上半にかけて削り、肩部は後 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面とも磨き。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部に突起をもつ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒色。 ・当地域製作の上器から知れない。

器形	側体部	土器 %	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			をなす。小型である。 ・底部不明。			
甕	1	A45	・強く外に開く波状口縁で、波頂部中央は弧状に凹む。 ・体部以下不明。	・内外面ともに磨き。	・波頂部内面に三叉文を除刻し、口縁をめぐって太い沈線が施され、この間に纏文が施されている。 ・外面には、口縁にそって太い沈線がめぐらされ、その間に纏文が施されている。	・黒褐色。 ・右川岸御経塚遺跡に類似例あり。 ・北陸系
X ₁						
甕	1	A45	・口縁部は強く外に開く。 ・体部以下不明。	・外面には細かい纏文がこころがされている。 ・内面は糞念な磨き。	・口縁端部にB突起がつく。 ・口縁部内面には、削り出しによる浮彫文が施されている。 ・孔があいているのが特徴か。	・灰褐色。 ・富山県勝木原遺跡に類似例がある。 ・北陸系。
X ₂						
深	60	A29 A35	・口縁部と体部との境のない滑形で、底質里Ⅲの深鉢Gと形態的には同じである。 ・A298の如きは口部が小さくて細長いタイプや、A299、A301、A304、A305のように、口縁端部があまり内燃せず薄手につくられているものなどは、底質里Ⅲには見られないかった傾向である。 ・A305は口縁端部近くに、突審が1条つけられていた。 ・口径は15~42cm。	・外面を削り調整するものとナデ調整するものとがある。削りは一般に軽くおこなわれ。ナデと区別のつきにくいものもある。下→上に削り上げて、口縁付近では時計廻りの水平方向に削る。A298では下→上に削り上げているだけである。 ・粘土縁の継ぎ目の残るものが多く、粘土縁の幅は1cm~1.5cm。 ・内面は水平ナデ調整。	・口縁上端面に割み目のあるものは3例で、A301、A304は細かい割み目、A305は押しげきによる菱形の割み目である。	・褐色~黒褐色。 ・砂粒・雲母片を含む。 ・A300は290号甕塚の壺として、突審が1条めぐるA267、A252と組み合わせて使用されていた。 ・この類の内には底質里Ⅲに属するものもあると思われるが、分離はできなかつた。
鉢	G					
深	1	A45	・縁部がうすくおさめられた波状口縁である。	・内外面とも磨き。	・波頂部外面に、両端に凹点をもつ2本の細い縦位沈線文を施し、その下端を起点として1本の太い沈線を口縁にそってめぐらしている。	・北陸系。
鉢	Z ₂					
深	1	A45	・波状口縁。波頂部下がややくびれて肩部に移行する。外面のくびれに対応する内面を削ることによって、口縁端部を肥大させている。	・外面はナデ調整。 ・内面は磨き。	・波頂部は不明であるが、波頂部下に三叉文を施し、波頂部と平縁部とを縦位沈線文によって区する。この縦位沈線文を起点として、3本の沈線	・北陸系。
鉢	Z ₄					

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
深 鉢	1	A459	・肩部をつくり出すも張り出すことなく底部に移行する。	・内外面とも磨き。	が口縁部をめぐる。 ・波頂部直下の肩部に葉状文を施している。	
			・波頂部に内凹する突出部をつくり出した波状口縁である。 ・体部は若干張り出さず。		・突出部に5本の横位平行沈線文を施し、波頂部中央に「角形」のくり込み文を配し、それによって圍まれた左右の空間に4~5本の沈線文を施し、またくり込み文の底辺に隣接して横位三叉文を施している。この三叉文に連続して、4本の横位沈線文を波頂部に施している。 ・口縁にそって5~6本の平行沈線文をめぐらしている。	・北陸系。
	X ₄					
浅 鉢	59	A314 A315 A316	・形態は滋賀里田の浅鉢A ₁ と同じ。 ・A593は口縁端部に削り出しの突唇をもつ。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き ・黒色磨研土器。		・滋賀里田に属す可能性がある。 ・A315は広島県中山貝塚に類例がある。
		A320 A328	・形態は滋賀里田の浅鉢A ₄ と同じ。口縁端部の立ちあがりによる細分の量的関係は、外側に沈線をもつもの>半底に近いもの>水平に近いものの順である。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・突起のつくものがあるが、何ヶ所につくか不明。	・滋賀里田に属す可能性がある。
		A318				
深 鉢	A ₄	A312	・形態は滋賀里田の浅鉢A ₄ と同じであるが、肩部から底部への移行が急角度である。 ・丸底か。	・内外面極めて良好な磨き。 ・黒色磨研土器。		・滋賀里田に属す可能性がある。
		A317 A319	・大きく外反する口縁部の端部内面に肥厚による段がある。 ・肩部は明確な棱をなし、その僅は口径とほぼ等しい。 ・丸底か。	・内外面丹念な磨き。 ・黒色磨研土器。	・A589のように突起(Aタイプ)をもつものがあるが、何ヶ所にあるか不明。 ・なお耳タイプの突起もある。	・滋賀里田に属す可能性がある。
		A313	・長く外に開く口縁部は波状口縁をなす。 ・肩部は後をなすも、その張り出しが小さ	・内外面磨き。	・波頂部の片側に突起(Cタイプ)がつくが、何ヶ所につくものか不明。	・口縁部外側にスカット痕。 ・滋賀里田に属す可能性がある。

體形	體休 數	上唇 %	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			い。			
浅 体 E ₁	36	A32 A30	・丸底か。 ・形態は各々道賀里田の浅鉢E ₁ と同じ。 ・A322は口縁部外側に沈線をもたないが、A590は沈線を持つ。	・内外面円全な磨き。 ・黒色磨研七輪。	・A590には突起(Aタイプ)がついているが、何ヶ所につくかは不明。	・A590は白褐色を呈し地成良好。 ・道賀里田に属する可能性がある。
浅 体 E ₂	5	A33 A24	・口縁部は瓶頸に短かく、やや外に開いている。 ・体部は大きく張り出でる。 ・底部不明。	・内外面円全な磨き。 ・黒色磨研上器。		・道賀里田に属する可能性がある。
浅 体 E ₃	1	A31	・他の浅鉢E類にくらべて口縁部が長く、体部は丸底をおびて外に張り出している。 ・丸底か。	・内外面円全な磨き。 ・黒色磨研上器。	・2箇で一単位の突起(Cタイプ)かつくが何ヶ所につくものか不明。	・道賀里田に属する可能性がある。
浅 体 G ₁	48	A325 A327 A328 A330	・内側の口縁部の端部はわずかに外反気味におさめられ。また端部外側を削り出して、端部断面は半円形となる。 ・口縁部の長さには长短のバラエティがある。(A329とA331) ・A327は、口縁部の上、下に沈線を施している。 ・平底、凹底。	・口縁部外側はやや舟型に磨いているが、体部外面はナゲ調整がおこなわれ、砂粒痕を残す例が多い。 ・内面は外側よりも丁寧に、磨き調整されている。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。 ・奈良県櫛原遺跡、愛知県馬見塚遺跡、同・五貫森遺跡に類例がある。 ・長崎県原山遺跡、福岡県板付・夜日各遺跡の類例は、口縁端部の特徴がやや異なる。
浅 体 G ₂	1	A329	・形態は浅鉢G ₁ と同じであるが、口縁部に突起をもっている。 ・平底。	・内外面円全な磨き。 ・黒色磨研上器。		・愛知県馬見塚遺跡に類例がある。
浅 体 G ₃	4	A328	・基本的な形態は浅鉢G ₁ と同じであるが、波状口縁である。 ・平底が凹底。	・浅鉢G ₁ と同じ。		・淡褐色。 ・砂粒を含む。 ・愛知県馬見塚遺跡、岡山県黒土遺跡に類例がある。
浅 体 G ₄	1	A306	・長い口縁部はほぼ直立し、端部に突帯をもつ。 ・肩部はわずかにつくられている。 ・底部不明。 ・口径29cm。	・口縁部外側は水平方向の磨き。 ・体部外側は時計通りの水平方向に削り調整している。 ・口縁部と体部との接合部外面を、ヘラ状のもので一周削くナ		・褐色。 ・砂粒を含む。 ・口縁部外面に朱を塗っている。

器形	側体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
浅 鉢 H ₂	2	A338	・長く外反する口縁部以外は不明であるが、滋賀里田の浅鉢B ₂ と同じ体部がつくものか。 ・丸底か。	・内外面磨めて良好な磨き。 ・内面は水平方向の磨き。	・突起(日タイプ)をもつものあり。	・滋賀里田に属する可能性がある。
浅 鉢 Y	1	A339	・大きく外反する口縁部の端部はわずかに立ち上がりっている。 ・体部は不明であるが、明確な肩部をつくるない器形か。	・外面には繩文(L R)が施されている。 ・内面は磨めて良好な磨き。	・口縁端部の立ち上がり部に、削み目が施されている。	・浅鉢A ₆ と似ているが、繩文手法、胎土、焼成に北陸系の色彩が強い。
鉢 B ₂	14	A307 A339	・形態は滋賀里田の鉢B ₂ と同じ。 ・A307は小型品であるが一括した。 ・底部不明。	・外面は水平ナデ調整され砂粒痕が残る。 ・内面は磨き。	・A339の内面に沈線が2本めぐる。	・浅褐色。 ・砂粒を含む。
鉢 B ₃	8	A340 A341	・形態は滋賀里田の鉢B ₃ と同じ。 ・A340の口縁端部に、無い突帯がある。 ・底部不明。	・内外面ともに磨き。	・突起をもつものがある。	・焼成は不良。 ・A340は愛知県馬見原遺跡に類似がある。
鉢 B ₄	5	A308 A311	・形態は鉢B ₂ と同じであるが、調査手法に差異がある。 ・A308、A309のように、口径27cm~29cmのやや深い器形のものと、A310、A311のように口径31cm~54cmの浅い器形のものとがある。	・外面は削り調整をおこない、その上をA308のようにナデ調整するものもある。削りは、下→上の方向に削り上げ口縁端部付近は時引廻りの水平方向に削るのが一般的である。 ・内面は平滑な磨研風のナデ調整をおこない、外面の仕上げに対する内面の仕上げを重視している。	・A310の口縁上端部には、押し引きによる変形の削み目がつけられている。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。 ・滋賀里田に属するものもあると思われるが、分離できない。
鉢 Y ₁	1	A357	・口縁上端面に幅広い文様帶のない鉢である。 ・底部不明。	・内外面ともにやや荒い磨き。	・1条の半齒状文と刻み目等とで構成された文様帶の内には、磨消繩文(L R)によるいわゆる人頭骨文に似た文様を配している。	・黒色。 ・黒雲母を含む。 ・大割BC-C ₂ か。 ・形態不明であるがA610もこの類に入るかもしれない。
鉢 Y ₂	1	A362	・厚手のつくりの鉢。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。	・口縁付近に文様帶があり、平行沈線文の間に、半齒状文と2	・大割BC併行。

器形	標本 数	土器 No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
鉢	1	A46	・口縁端部を肥厚させている。 ・厚手のつくり。	・内外面とも磨き。	糸の刺み目帯を施す。	
Y ₃						
鉢	1	A56	・口縁端部を薄くおさめている。	・内外面とも磨き。	・口縁外面に数本の平行線文を施し、3本毎にS字を強調する。	・大洞BC併行。
Y ₄						
桶	17	A33	・形態は滋賀県II～IIIの桶A ₁ と同じである。	・内外面磨き。 ・黒色磨研土器。		・滋賀県田に属す可能性がある。
A ₁						
桶	1	A37	・体部に2つの段をもつ深鉢を小型化した器形で、口縁端部を外開きにおさめている。 ・底部不明。	・内外面粗急な磨き。		・淡灰褐色。 ・奈良系櫻原遺跡に類似がある。
C						
桶	1	A25	・口縁端部はやや内凹する。	・外面には幾文(LR)を施す。 ・内面やや豊い磨き。	・列立文を施し、その下限に沈縫が1本めぐる。	・北陸系。
Z ₄						
洗 口 匙 鉢 A	4	A69 A62 A61	・いずれも注口部のみの断片である。	・外面はナデ調整。	・注口部下面に、A623では沈縫文、A624では胡み目帯がある。	・灰褐色。 ・砂粒を含む。
匙	1	A54	・口縁部はやや外反する。端部外沿に1本の細い沈縫がめぐる。 ・口縁部と体部との接合部外沿が削り出され、体部はやや張り出す。 ・底部不明。	・内外面とも磨き。		・蓋としたが器形に接続の余地がある。
B						
壺	1	A28	・口径12cmの口縁部の破片で、形態からみて壺になると思われる。 ・口縁端部から少し離れて糸みのある穴帯をはりつけている。	・内外面とも平滑なナデ調整。内面には指ナデの痕跡が認められる。	・突带上には、逆時計回り方向の押し引きによる菱形の糸み目がつけられている。	・黒灰色。 ・砂粒を含む。 ・大阪府船橋遺跡に類似あり。
C						
壺	1	A53	・体部の小片。	・外面は極めて良好な磨き。 ・内面はナデ調整。	・肩部上半に文様帯があるようだが、隣肩手法がわかる他は不明。	・小片につき器形も接続の余地がある。 ・大洞C ₁ 併行。
Y						
壺	1	A56	・口縁部はやや外反しつつ外に開く。 ・体部はやや張り出す。	・内外面極めて良好な磨き。	・頸部に糸み目隆帯をめぐらしている。	・大洞C ₁ 併行。
X						
壺W	1	A89	・口縁部は外に大きく	・内外面とも磨き。	・口縁端部の突出部間	・大洞C ₁ 併行。

器形	個体数	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	文様	備考
			開き、腹部は細い。 ・口縁端部に山形の突出部(2ヶ所か)をもち、その中央に1本の沈線を施している。 ・体部以下不明。		に、2側の連続する山形突起をつける。	・朱塗りである。
高杯	1	A230	・脚柱部だけの破片であるが、脚柱の中央で直径4cmあり、中実の脚部である。	・脚部外面は下→上の方向にナデ調整している。 ・器底内面はナデ調整している。		・灰褐色。 ・砂粒を含む。
底盤	1	A335	・わずかに凹底となる平底。	・内外面とも極めて良好な焼き。	・底部をめぐる陽刻された同心円文を下限として、雲形文に類する文様を春秋繩文(L R)手法で施す。	・大河C1併行。 ・白褐色を呈し、黑斑を残す。
手づくね上器	2	A557 A558	・いわゆる小型の手づくね土器で、口径はA557が4.2cm、A558は4.8cmである。	・つくりは粗雑であるが、内外面ともにナデ調整をおこなっている。 ・A557の内面は、垂直方向に指または太いヘラ状のものでナデ調整している。		・3~5mmの大砂粒と露母片を含む。 ・褐色。 ・A557はIII C区谷黄褐色砂層から出土。 ・奈良県橿原跡大坂府船橋遺跡に類例あり。

東分類の標示は、同一器形の同じ特徴をもつものは同一の標示をとり、2型式以上に及ぶ時には、型式によって特徴の変化がつかめるものは記入した。特徴の変化のない場合は、変化せずに継続するのか、あるいはより古い型式に全て属するのか決しがたい。

東北・北陸系の土器はZから始めて逆にさかのぼって標示した。

東北・北陸系の土器はZから始めて逆にさかのぼって標示した。

第15表 滋賀里遺跡出土の骨角器の観察

種類	例数	遺物No.	材質	特徴	備考(層位)
根ばさみ A	11	AB1	鹿角	・短かい、茎部に対して受け部が頗る長い。 ・完形品がないので全長はわからぬが、 Bタイプのものよりやや長い。	・III D区貝塚黒色砂泥 土上から9例出土。 (AB1~AB6)
		↓		・受け部端にある切り込みの幅は、Bタイプと同様に3~4mmである。	・III D区貝塚褐色砂 土から2例出土。
		AB6		・鹿角の前性状部の縦半割り材からつくりられており、小乳頭を除けば、受け部の一長側面は堅密質があらわれ、しばしば鹿角の原画も残っている。反対の長側面には海綿質があらわれる。	
		AB49		・長軸方向に磨いて仕上げている。	
		↓			
根ばさみ B	12	AB7	鹿角	・受け部は茎部よりやや長く、受け部の最大幅はAタイプにくらべて大きい。	・全てIII D区貝塚黒色 砂泥混土出土。
		↓		・全長は3.4cm~4.9cmのものがあり、受け部端の切り込み幅は3~4mmである。	
		AB11		・鹿角からのとり方や仕上げ方はAタイプに同じ。	
		AB43		・完形品の重量は最小で0.8g、最大で3.4g。	
		↓			
馬箸	1	AB12	鹿角	・2つの紋をつくり出し、それぞれの波部に沈線を刻み、更に先端近くにやや太い沈線を刻んでいる。先端部は欠損しているが、根ばさみのように切り込みを入れていると思われる。 ・荒削き痕は長軸に対して直角方向に走り更に全面を磨いて仕上げている。内面の荒削きも長軸に対して直角方向におこなわれている。	・III D区貝塚黒色砂泥 土上出土。
牙鑓	1	AB13	イノシシの 犬歯	・片面にエナメル層が残るように削って成形し、右端のように茎部をえぐっている。 ・3辺とも向面より刃付けをおこなっている。 ・エナメル層の側へ、片側空孔をしている。	・III D区貝塚黒色砂泥 土上出土。
釣針	2	AB14	イノシシの 犬歯	・AB15は頭部にひもかけをつくり出しているが、鉤先を欠き、AB14は頭部、鉤先ともに欠損している。	・ともにIII D区貝塚黒 色砂泥混土出土。
		AB15		・AB14は片面にエナメル質をそっくり残しているが、AB15はよく磨いていて、エナメル質をほとんど残していない。	
モリ・ヤス A	7	AB17	シカの中手骨 ・中足骨	・原材を縦に半割りしたものから、両端をとがるようにつくり出している。断面はほぼ三角形に近く、原材の骨の内面にある面は凹んでいる。	・III D区貝塚黒色砂泥 土から6例出土。(A B17~AB21, AB 23)
		↓		・両端部は長軸に対して直角からやや斜方向に激しく荒削きしている。最後は長軸方向に仕上げの磨きをかけている。	・III D区貝塚黒色砂泥 土上から1例出土。 (AB22)
モリ・ヤス B	1	AB31	シカの中手骨 ・中足骨	・全長4.3cmの小型のヤスである。一方の端部を長軸に対して直角方向に驚く磨いている。他の部分は長軸と平行に磨いて	・III D区貝塚黒色砂 泥土上出土。

種類	個数	遺物No.	材質	特徴	備考(層位)
				いる。 ・ヤスの使用上の欠損によって何度も修理したことによって、かくも短かくなつた可能性もある。	
針	11	A B24 A B28 A B53 A B54	鹿角 3 シカの中手骨 ・中足骨 7 (AB24～AB28) 魚の骨ヒレ 1	・シカの中手骨・中足骨を材としたものが主体をしめているが特殊なものに、魚のヒレ骨をみがいているものがある。中手骨・中足骨を概に割り、一方の先端をとがらすように削り、長軸方向に磨き仕上げをおこなっている。 ・完形品の全長は7.8cm～10.9cmで、断面は円形となるが、1例やや扁平につくつてヤスとの中间形態のものがある。 ・A B24は、針先と反対側の端部をヘラ状に削っている。	・III D区貝塚灰褐色泥土から4例出土。 (AB24～26, AB28) 魚のヒレ骨製もこの層から出土している。 ・III D区貝塚黑色砂混泥土から2例出土。 (AB27)
ヘラ状 骨島	2	A B34 A B37	シカの肋骨 (AB34) イノシシの 大歯 (AB37)	・A B34は、肋骨を概に半削りした扁平な材を長軸に対して直角方向に荒磨きし、更に長軸方向に仕上げの磨きをかけている。 ・A B37は一面にうまく大歯のエナメル質を取り入れるように反対の面を長軸に対して直角からやや斜方向に荒磨きしてつくり出している。粗粒の幅広い方の端面を磨いて刃先をおこなっている。	・A B34はIII D区貝塚灰褐色泥土上出土。 ・A B37はIII D区貝塚黑色砂混泥土出土。
角棒	1	A B43	鹿角	・骨柱は破損しており、破損部に火を受けた痕跡がある。 ・第1枝の先端部上面を荒磨きして刃付けをおこなっており、また第1枝の下側面に手づけ状の消滅した痕跡が認められる。この角棒を使用した時に生じたものかどうか問題となる。	・III D区貝塚黑色砂混泥土出土。
牙玉	2	A B41 A B42	ツキノワグマ の上顎大歯 (A B42) クマキの上顎 大歯(A B41)	・歯根部端の形をととのえて、歯根部全面にわたって磨き仕上げをおこなっている。 特にA B41は、歯根部を肩方に近く磨きあげている。 ・AB42は全長5.9cmで両面穿孔。AB41は全長2.9cmで片面穿孔。	・いずれもIII D区貝塚黑色砂混泥土上出土。
舟形袋 飾品	1	A B40	鹿角	・鹿角の堅枝の堅硬質を利用してつくられ全面に細かい磨き仕上げがおこなわれている。 ・鷹爪部は一部欠損しているが、切り落みが3つある4本歯と推定される。 ・長い刃で沈縫が3本組まれているが、3条とも両翼面で切れており、一箇つながっていない。	・III D区貝塚黑色砂混泥土上出土。
小形袋 飾品	1	A B38	イノシシの 椎骨	・椎骨の末端部を利用して形制をほどこしている。一方の端部は欠損している。	・III D区貝塚黑色砂混泥土上出土。
管釣	1	A B39	イノシシの 椎骨	・椎骨のグロテスクな形状をうまくとり入れて加工している。	・III D区貝塚黑色砂混泥土出土。

種類	番号	遺物No.	材質	特徴	参考(層位)
				・一端は欠損しているが、一方の端部に両面穿孔による孔をあけている。他方の端部は環状にはっていない。 ・全面に朱を塗っている。	
黒漆塗り 柄頭骨	1	A B36	材質不明	・断面が長楕円形の柄頭状製品で、中央部に日射孔のように貫通する小孔がある。 全長は4.7cm。 ・中央の孔を中心として彫刻がほどこされ全面に黒漆を一層塗って仕上げている。	・Ⅲ D区貝塚灰褐色泥土出土。 ・実物は取りあげて間もなくバラバラになってしまった。実物は現場での実測図をもとにしておこなった。
有孔骨 製品	1	A B16	材質不明	・現長1.4cmの扁平な破片で、端部は丸くおさめて、穿孔している。	・Ⅲ D区貝塚黑色砂混泥土出土。
鑿状装飾品	1	A B35	鹿角	・鹿角幹の堅緻質を利用してつくられており、A B40と似ている。 ・両端部には大小の差こそあれ同じような形のつくり出しがあるが、主体部との接合の仕方において、90°のずれがある。 全長5.2cm。	・Ⅲ D区貝塚黑色砂混泥土出土。
管状装飾品	1	A B32	鳥上腕骨	・半折した破損端で、もとは管状品であろう。 ・長さ4cmほどに材を切断したもので、両端部の近くにそれぞれ鋭い刃で鉛文している。刻文は単純な平行流線ではないが、破損のためよくわからない。	・Ⅲ D区貝塚灰褐色泥土出土。
有孔 未製品	1	A B29	イノシシの大歯	・片側は荒削りが認められるが、反対の面は全く未調整である。この未調整の面はもともと犬歯のエナメル層がある面にある。從ってエナメル層を利用した際の不要品と考えられるが、中央に片面穿孔の孔があいている。製作中にエナメル層がはがれてしまった尖歯品であろうか。	・Ⅲ D区貝塚灰褐色泥土出土。
未製品	10	A B30 A B55 A B57	シカの中手骨 ・中足骨	・原材を縦に割ったものから、端部を削ってとがらす過程にある未製品または失敗品で、多くはヤスの形態に近いようである。 ・未製品の観察によると、端部をとがらす技術としては、先ず輻方向の荒い削りを2側面に入れておおよその形をつくる。次に長軸に対して底角からやや斜方向に荒削りして形を整え、最後に長軸方向にそって細かい磨き仕上げをおこなって、丸味を出している。 最後の仕上げの磨きはなかなか徹底しないのが、最初の荒削りは極度を深く残している。	・Ⅲ D区貝塚灰褐色泥土から6例。 ・Ⅲ D区貝塚黑色砂混泥土から4例。 (A B30)
原材料	4	A B35 A B44	鹿角	・鹿角に割み目を入れて切断したものや、更にそれを縦に半割りしたものなどが発見されている。	・Ⅲ D区貝塚黑色砂混泥土出土。

第16表 滋賀里遺跡出土の木器の観察

種類	個数	遺物名	特徴	備考(層位)
石斧柄	2	AW2 AW3	・いずれも柄部が欠損して全長は不明。AW3は柄部つけ根から焼損している。 ・X円周の原材料から削ってくり出している。仕上げが丁寧で削り痕はわからない。 ・着刃孔は一方に末広がりの断面となっている。	・AW2はIII C区谷黄褐色砂出土。 ・AW3はIII D区貝塚ビート出土。
石斧柄半製品	1	AW4	・全長59cmの完成品で荒削りをおこなって大体の形をつくり出している。これから磨装孔をあけて仕上げをまつ段階のものである。 ・X円周の原材料からつくり出している。	・III D区貝塚ビート出土。 ・コナラかクヌギ。
櫛状木器	2	AW5 AW6	・いずれも柄部を欠損しており完成品ではないが櫛では小さすぎる。 ・櫛部には2つの形態がある。AW6は先端を欠いているが、腹半に削り出している。AW5の方は、先端部を厚く残しており、半製品の可能性もある。 ・どちらもX円周の原材料からつくり出している。 ・AW5は完成品か半製品かで用途の推定に影響があるが、必AW6をもって、この木器の完成品と考えたいが、その用途については今後の課題となり。	・III D区貝塚ビート出土。 ・コナラかクヌギ。
櫛状木器半製品	1	AW7	・全長110cmの完成品で、X円周の原材料から荒削りして形をつくり出したもので、特に櫛部は原木の面がそのまま残っている。	・III C区谷第2ビート出土。 ・コナラかクヌギ。
丸木杓	7	AW18 AW21 AW22	・端部の欠損するものが多いため、全長145cm~90cmの丸木杓で、木の筋をうまく取り入れている。AW21、AW22などは円以外の綱作などとも考えられないことはないが、一定円としておく。 ・端部に縄をつくり出しているのはAW18、AW19の2例で、AW18では両端部に、AW19では片方につくり出している。縄を切っているのは片面だけなので、弦が張られたのは、現在弓が曲っている頃であろう。 ・AW18は、弓の外側面に縄を刻んでいるが、縄の走っている範囲は、中央部附近で端部には及んでいない。また、もと全面に縄で巻いていたらしく、現在部分的に残っている。一方の端部には所々縄の擦痕が明顯に認められる。	・III C区谷黄褐色砂出土のものはAW18、AW20 AW22の他2例。 ・III D区貝塚ビート出土はAW19、AW21。
漆後り勺	3	AW15 AW16	・基本的な形態は丸木杓と同じであるが、いずれも外側面に縄が刻まれており、墨漆が塗られている。 ・AW15には、纏縄を6~10条巻きつけたものを一単位として、3単位が組みとなったものが3ヶ所認められ、この巻き部には朱漆を塗っている。 ・AW16では、纏縄にかわって、樹皮を3条巻いたものを組みとしている。	・いずれもIII C区谷黄褐色砂出土。
木杓	1	AW17	・塊長126cmの丸木杓で、先端を扁平にとがらしている。	・III D区貝塚ビート出土。 ・木杓と考えたが、用途は検討の要がある。

種類	個数	遺物No.	特徴	備考(層位)
有孔板	1	AW1	<ul style="list-style-type: none"> 両端を欠損しているが、両形断面の細長い板材で、両反側に段をつくり出している。孔が一つ 両側よりあくらくあけられている。 平面が極形の高さの低い突出部を4ヶ所彫り出している。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷第2ピート層出土。
小形薄板状木器	1	AW11	<ul style="list-style-type: none"> 四角を小判形に削った薄板状のもので、片面はやや内凹み気味であり、この面の3ヶ所に短かい切りキズ痕がある。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷第2ピート層出土。
火鉢口	1	AW10	<ul style="list-style-type: none"> 小破片であるが、幅3cmの細長い薄板であろうと思われる、2つの孔が認められる。孔は一方内からいすれもあけられており、孔の側面は火を受けてこげている。火鉢口の可能性が高い。 	<ul style="list-style-type: none"> III D区貝塚ピート層出土。
火鉢杆	1	AW9	<ul style="list-style-type: none"> 断面円形の丸棒で、先端部は丸くとがっており、先端より約5cmほどの間は全面に火を受けてこげている。 AW10の孔の大きさと棒の太さは対応する。 	<ul style="list-style-type: none"> III D区貝塚ピート層出土。
シャモジ形木棒	1	AW8	<ul style="list-style-type: none"> 現長27cmで、柄の端部と刃端部とも欠損する。刃端部の先端は刃のように薄くつくっているのかどうかわからぬ。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷黄褐色砂層出土。
木棒	3	AW14	<ul style="list-style-type: none"> AW14は土器の縁と全く同じ器形である。仕上げの削り痕が明瞭で、内外ともにII線部近くは水平方向に削り、外側の下部では新方向となり、この点に關しても、土器の調整方向と同じである。削り痕の当り幅は4mmである。圓盤を削出しして削ったものでない点に注目される。 	<ul style="list-style-type: none"> AW14はIII C区谷第2ピート層出土。 他の2片はIII D区貝塚ピート層出土。
漆塗木口容器	2	AW13 AW49	<ul style="list-style-type: none"> ボル形の木棒の口端部に七字文を刻み。内外の全面に朱漆を塗っている。 AW49ではははきりしないが、AW13の七字文は特異で、上段と下段の組み合せ方が異なっている。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷第2ピート層出土。 文様から漆質黒口かⅢに属する。
漆塗鉢口容器	1	AW51	<ul style="list-style-type: none"> 破片ではあるが、もとは内外の全面に朱漆を塗っている。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷第2ピート層出土。
漆塗鉢	1	AW12	<ul style="list-style-type: none"> 小枝を曲げて輪次に作ったものの断片である。接合部はないが、推定直径15cmほどの輪状のものとなる。全面に朱漆を一層塗っている。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷第2ピート層出土。
漆金輪	1	AW50	<ul style="list-style-type: none"> 小片で不明瞭が多いが、横の頭頂部かと思われる。 芯となっているのは、薄板か樹皮のようなものを編んでいるようだ。その上に朱漆を厚く塗つて固めている。 	<ul style="list-style-type: none"> III C区谷黄褐色砂層出土。
漆筋漆器片	1	AW52	<ul style="list-style-type: none"> 幅1mmと幅1.5mmの筋状の材を縦と横に約2mmの間隔を置いて組んだものに粗悪な朱漆を塗っている。 	<ul style="list-style-type: none"> III D区貝塚ピート層出土。
釣手	1	AW53	<ul style="list-style-type: none"> 樹皮を芯として同じ樹皮を10回以上巻きつけている。 	<ul style="list-style-type: none"> III D区貝塚ピート層出土。
矢柄材?	15以上		<ul style="list-style-type: none"> アンカゴンのまだ皮のついたものが、2群に分かれて束ねたような状態で出土した。いずれも弓の近くから出土した。一本として完全なもの 	<ul style="list-style-type: none"> III D区貝塚ピート層出土。

種類	個数	造物期	特徴	備考(算位)
			ではなく金長は不明であるが、現長の最大のものは73cmである。	
原材	43	AW23 AW47	<ul style="list-style-type: none"> ・丸木を一定の長さに切断した丸木材と、それを半割りした円筒材、更に四分円筒材。四分円筒材がある。 ・量的には四分円筒材が28例と多い。円筒材と一括したもの内には、単純に丸木材を半割りしたもののはむしろ少なくて、多くの場合は、丸木材の中心部に板材をとった両側の残りという方が適切である。従ってこの4分類はあくまで模式化したものである。 ・原材の長さは一定していないが、最小の材で全長65cm、最大の材で全長126cmあり、80cm~100cmあたりが一番多い。原材のものとの丸木材の大きさを換算すると、わかる限りで最小のものは直径約3.5cm、最大のもので約13cmである。 ・丸木から一定の長さに切断する時に、石斧を使って左右よりV字形に打ち込んで切断している。従って、原材の端間はななめになっており、石斧の刃痕がよく残っている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ⅢD区共撲ビート出土は36例。 (AW23~AW28) (AW30~AW35) ・ⅢC区斧黄褐色砂・第2ビート・黃灰色砂出土は7例。(AW29) ・コナラかクヌギ。

第17表 滋賀里遺跡出土の土製品・紡錘車の観察

種類	個数	遺物名	特徴	備考(層位)
土偶	4	A C 1	中空上偶片が3個体と中実土偶らしき破片がある。	A C 1はⅢ C区谷黃灰色砂出土。
		A C 2	A C 2は腹面左半分の破片で、目、鼻、耳が残っており、全間に朱を塗っている。3~5mmの大砂粒を含み、焼成はある。	A C 2, A C 4はⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。
		A C 4	・A C 1は肩部破片で、すり削し繩文技法を駆使した東北の影響を強く受けたもの。肩の縫線上に、刻み目をもつ2本の縫帶を走らせ、途中にコブを2つつけている。砂粒を含まず焼成は堅膜である。	A C 2は、Ⅲ C区墓址黒色泥砂出土。
		A C 28	・中空上偶片(A C 28)は不明の点が多い。	・中実土偶の例は、大阪府馬場川遺跡に多くみられる。
スタンプ形土製品	1	A C 3	・小円盤に平面三角形の輪部をのせたもので、腹部の頂半円弧と側面とに三角形のくり込み文を配し、円盤側面に刻文文をめぐらしている。 ・円盤底面には削除した痕跡がある。 ・砂粒少なく、焼成は堅膜良好である。	・A C 3はⅢ C区墓址内を流れる6世紀代の溝から出土しているが、縄文時代のものである。
有孔土製品	1	A C 5	・長径5cmの卵形の土製品で、中央に2孔貫通させている。この孔を中心に基本的には長軸、短軸とともに3本ずつ、へらないしは纖維状のものによる沈痕を配している。 ・仕上げの手元もあらう、胎土には砂粒・雲母片を含んでいる。	・A C 5はⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。
耳挖	2	A C 6 A C 7	・やや厚みのある円盤の両面を凹ませたもので、装飾はない。 ・大小の2種あり、A C 6は直径1.7cmで、つくりはあら。A C 7は直徑3.3cmで、雲母片を含み「耳」に仕上げている。	・A C 6, A C 7ともにⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。A C 6は貝ロック中から出土。
丸玉形土製品	2	A C 8	・完形品と破片があり、A C 8は長径1.5cmの不整球形で、中央にあらく孔を開けている。砂粒を含む。	・両面ともⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。
把手形土製品	1	A C 9	・断面は長径円形で、約3cmの長さがあり。刻離面があるので把手のようについていたものであろう。小砂粒・雲母片を含む。	・A C 9はⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。
粘土と漆の漆製品?	3	A C 10	・施成品ではなく、粘土と漆を練り固めた製品と思われる。 ・A C 10のように芯のあるものと、他の2例のように芯のない扁平なものがある。 ・A C 10は細長い木の皮を背状に付け、それを止めしばるよう細い樹枝を巻きつけたものを芯として、その芯の外側に粘土を漆で固めたものをはりつけている。表面に木を塗り最後に漆を一層塗って仕上げている。 ・Ⅲ C墓址の207号と81号上位より発見された2例は破片のため、残念ながら全体の形状がわからない。81号東谷葬中に残っているものの現状からは、イノシシ製腰飾のような形を土製品で扁平につくったものと考えられ、一緒にあわいでいる、いずれも表面には木を塗って	・A C 10はⅢ D区貝塚黒色砂混泥出土。 ・他の2例は、Ⅲ C区墓址81号と207号土塗内出土。 ・81号墓骨墓出土のものは、墓骨を分解していないので、取り出せていない。 ・成分分析は今後おこなって結果を得る予定である。

種類	個数	遺物No.	特徴	備考(層位)
土製範輪	7	A C11 ↓ A C14 ↓ A C27	いる。いずれも表面には朱を塗っている。 • 完形品ではなく、両端部がわかるものがないが、 様原遺跡で多量に出土しているものと同じよう に、新面長楕円形の半円弧形の土製品で、両端 部付近に孔があくものであろう。 • 断面の長径は1cm~3.8cmまで大小の各種があ る。 • 3~5mmの砂粒を含み、一般につくりはよくな いが、A C14は外表面を丁寧に研磨している。 また孔をあけた後に、孔の一端を切っているの も特徴的である。	• III D区貝塚灰褐色泥土 出土はAC12、他に1例。 • III D区貝塚黑色砂混泥 土出土はA C11、A C 14、AC27、他に1例。 • III C区谷黃褐色砂出土 はA C13。 • 奈良県橿原遺跡に類似 が多い。
土面形土製品	1	A C15	• 推定直径17.5cmの円盤で、上面はやや内凹みと なっている。 • 円盤上面に連続刺突文によって区画をつくり、 その間を櫛状のもので、円盤文を描いている。 円盤の側面にも櫛状のもので斜行文をつけてい る。 • 砂粒・雷母片を含む。	• A C15はIII C区轟坂黑 色泥土出土。 • 土器の口縁部ではない かとの疑いがもたらされた が、土器にしてはカーブ がおかしいので土製 品とした。
纺錐車	34	A C15 ↓ A C26 ↓ A C29 ↓ A C33	• 土器片を利用して、ほぼ円形となるように周囲 を打ち欠き、中央に孔をあけている。孔をあけ ていないものの5例(A C22)やあけかかってい るが貫通していないもの(A C16)1例も含め ている。 • 直径の最小例は2.4cm、最大は6.3cmで、平均3.8 cmとなる。完形品28例の重量は、最小3.5g、最 大34.9gで平均11.1gとなる。 • 黒色磨研土器を利用したものが2例あり(A C 20)、他は全て漆鉢か型を利用しておらず、有機物 の付着しているものもある。 • 周囲を打ち欠いて形成したにとどまるもののが逆 倒的に多く25例あり(A C17、A C19、A C20、 A C23)、これに対してその後更に円周端部をこ すって上げているものは9例しかない(A C16、A C18、 A C21、A C22、A C24、A C 25、A C26)。この内には、口縁部をとり込んだ ものが2例ある。(A C24、A C26) • もとの土器の内面の孔の周囲に、直徑にして1.2 cm~3.5cmの間に同心円状の擦痕が走るものが 4例あり、(A C17、A C19、A C20、A C23) その内のA C19は、内外両面にこの擦痕がある。	• III D区貝塚ビート出土 は2例。 (A C25、A C31) • 同上、灰褐色泥土出土 は11例。 (A C18、A C23、A C24、A C30、A C35) • 同上、黒色砂混泥土出 土は10例。 (A C16、A C19、A C20、A C22、A C26, A C29) • III C区谷黃褐色砂出土 は7例。 (A C17、A C21、A C32) • 同上、第2ビート・黄 灰色砂出土は2例。 • III C区轟坂51号土坑内 より1例出土。

第2章 弥生時代

1. 遺跡の調査

(1) 方形周溝墓 (図版9~11、第2・7~9図)

位 調 M F区北端より N B区にかけて、方形周溝墓群を検出した (第2図)。調査範囲が限定されていたために、墓域の全域を確認することはできなかったが、弥生時代中期前半より古墳時代前期にかけての方形周溝墓が、少なくとも 8基以上存在することが知られた。

方形周溝墓は、いずれも比叡山塊から琵琶湖の方向にむかってのびる複合扇状地の先端に近く立地する。各方形周溝墓は、後世の削平によって遺構の上半部はほとんど失なわれ、完存するものはない。

大津市北郊の地域では、すでに 1957 (昭和32) 年に、南渡賀遺跡において弥生時代の方形周溝墓と土墳墓群とが発見されているが、¹³⁾ 今回の調査でさらに新しい資料を加えることができ、当地の弥生時代から古墳時代にかけての墓制を明らかにする上で、有力な手掛りを把握することができたといえよう。

以下、今回の調査で検出した方形周溝墓について概述し、各方形周溝墓の提起する問題を若干検討することにしよう。

なお、今回の調査で検出した 8基の方形周溝墓のうち、古墳時代に属する 3基については、主として第3章で扱うこととした。

N B区 3号溝 (図版10、第9図) 1号方形周溝墓の北東約 9m の地点で、1辺の溝が検出された。溝は現長で 7.7m あり、黄灰色砂層を「U」字形に切り込んでつくられている。溝の方向は N-60°-W である。溝内には、上層に黒色泥砂層、下層に灰黑色泥砂層がレンズ状に堆積していた。この内、上層の黒色泥砂層中に、やや距離をおいて倒れた状態で 2個体の甕が検出された。溝の形状、溝内堆積土の状態、土器の出土状況から考えて、この溝は方形周溝墓の南辺にあたり、西辺は調査区域外にあり、北・東両辺は、2号

溝や現代の溝によって破壊されたものと思われる。出土した土器は畿内の第2様式に併行し、今回発見された方形周溝墓の中では最古の時期に属している。

NB区6号方形周溝墓（図版10、第7図） 西辺と南・北両辺の一部の計3辺が検出されたが、大半は発掘区東方の調査区域外にある。西辺は全長12.3mの規模を有し、その方向はN-21°-Eである。南辺は浅く、北辺は比較的深いが、溝は黄灰色砂層を鋸く「U」字形に切り込んでつくられている。各辺のコーナーでは溝底が若干浅くなる傾向があるが、いわゆる「陸橋部」²⁾はなかった。溝内には、上層に黒褐色泥砂層が、下層に灰黒色泥砂層がレンズ状に堆積していた。溝内からは縄文時代後期の土器片から弥生式土器、須恵器・土師器、中世土器までの小破片が出土したが、周溝内におけるこれらの土器が混合して含まれる土層は、肉眼によっては識別が不可能であった。しかし一応古墳時代以降の土器は、後世の削平攤乱による流入と考えられよう。調査範囲内では周溝以外の関連する遺構は検出されなかつた。³⁾

NB区11号方形周溝墓（図版11、第7・8図） 6号方形周溝墓の北に位置し、連結した状態の西辺と南辺との2辺が検出された。東辺と北辺とは、ともに後世の破壊を受けており、検出することはできなかつた。南辺は現長6.9mを測るが、本来はもう少し長いものであったと考えられる。南辺の方向はN-68°-Wである。溝は黄灰色砂層を「U」字形に切り込んでつくられ、溝内には、上層に黒褐色泥砂層、下層に灰黒色泥砂層がレンズ状に堆積していた。この内の灰黒色泥砂層から、保存の良い土器が8個体分出土した。南辺では畿内第4様式に併行する完形の壺2個体、下端部を欠く壺1個体、完形の壺1個体、脚の一部を欠く高杯1個体が出土した。また西辺では、近接した状態で第4様式の壺と壺各1個体が出土した。これらの土器はいずれも溝底からわずかに浮いた状態で出土している。なお、周溝以外の関連する遺構は検出されなかつた。

NB区12号方形周溝墓（図版10、第8図） 11号方形周溝墓の北西に位置し、南辺と西辺との2辺が検出された。東辺はすでに削平をうけて消失しており、北辺は調査範囲外に及んでいる。南辺の方向はS-56°-Wである。南辺と西辺とのコーナーに「陸橋部」が形成されているが、この地域が大幅に削平をうけていることから、本来存在したものかどうかは疑わしい。南辺の溝は「U」字形に、西辺の溝は比較的深い「V」字形に切り込んでつくられている。溝内の堆積土は、いずれも黒褐色泥砂一層のみである。西辺の溝底から浮いた状態で、第4様式併行と考えられる壺2個体がほぼ完形で出土したほか、小破片もみとめられた。また、西辺の外側に、東西1.8m、南北1.9mの円形土壙（5号土壙）が

検出された。境内からはほぼ同時期と思われる壺の破片が出土しているが、それがこの方形周溝墓と関係するものかどうかは不明である。またこの5号土壙が埋葬施設であるかどうかも判断しがたい。

NB区14号方形周溝墓（図版9・10、第9回） 6号方形周溝墓の西に位置し、断続しながらも四辺が全て検出された。東四にやや長い長方形の平面形態であり、長辺の全長は10m、短辺の全長は8.1mを測り、西辺の方向はN-23°-Eである。東北と東南との両コーナーで「隣接部」が認められたが、付近は後世の大幅な削平を受けていることから、本来「隣接部」が存在したかどうかは明らかでない。溝の横断面は「V」字形に近く、黄灰色砂層を切りこんでつくられている。溝内には、上層に黒褐色砂泥層、下層に黒褐色泥沙層がそれぞれレンズ状に堆積していた。東辺中央部の溝底にほとんど密着した状態で、第2様式の壺がほぼ完形で、また南辺の東端では口縁部を欠いた第2様式の壺が検出された。なおこの他に時期不明の小片が出土したが、方形周溝墓と関係するものかどうかは判定できない。周溝以外には関連する遺構は検出されなかった。

小結 今回の調査で検出した弥生時代の方形周溝墓は、すべてNB区の山側から湖の方向へ張りだす複合扇状地上に立地し、一群のものとすることができる。

遺跡の広がりは、調査範囲の關係で東西の限界をつかむことはできなかったが、南北限は、ともに浅い谷で区切られている。

5基の方形周溝墓は、先述のようにいずれも一部または大半が消失あるいは未確認で、その全貌を明らかにし得たものはないが、残存した溝はすべて断面がUないしV字形に整然と切りこまれ、溝内の土器出土状態も、方形周溝墓一般に特徴的な方を示していた。

この5基の方形周溝墓の所属年代は、NB3・12号が畿内第2様式に併行し、NB11・¹⁴14号は第4様式に併行する。¹²一応、弥生中期のうちに概括されるが、この方形周溝墓群を一群として把え、これに未発見、既破壊の方形周溝墓を考慮すれば、この墓址の存続期間は弥生中期の範囲を越えて、さらに延長するものと推測される。次章で述べるように、弥生時代方形周溝墓群の立地する扇状地と谷一つを隔てた南方の扇状地上とには、古墳時代の前半期に属する方形周溝墓3基が検出されており、この两者は、それぞれ長期にわたって連続する墓址の一部であり、一群として把えるべきものかもしれない。

なお、大津市北郊では、すでに南滋賀遺跡で弥生時代の方形周溝墓と土壙墓群とが発見されており、これと今回発掘した方形周溝墓群との関連を早急に明らかにしなくてはならない。NB方形周溝墓群の場合、土壙墓との併存は確認できなかったが、調査地点西方の

水田下には墓社の中心部が遺存していることは確実なので、今後の調査結果が待たれる。

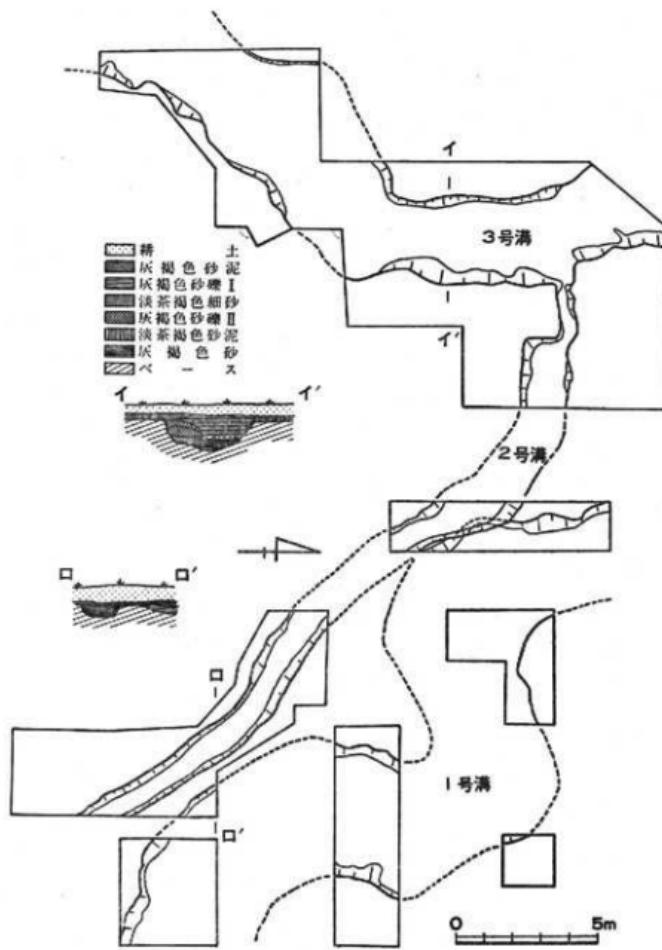
墓址と関連して、弥生時代集落址の所在が問題になるが、今回の調査ではその位置をつかむに至らなかった。しかし、後述のようにほぼ全地区から、多少の差はあれ弥生時代の遺物が出土しており、墓址に対応する集落址の所在を確定し、その内容や墓址との関連を考究できる日も、それほど遠いことではない。

(2) 溝跡・その他 (図版12)

I区の調査 (図版12) I区の調査範囲は柳川の南岸から湖西線北大津駅予定地の北端までである。我々が行った全調査区の最南端部にあたり、その範囲は南北500mにわたる。I区の北流である柳川は、もと琵琶湖に突出する柳ヶ崎にむかって流れているが、1940(昭和15)年、近江神宮造営にともなってその河川敷が埋立られた。その結果、現在の柳川は河口を北にふって琵琶湖にそいでいる。新路線は北大津駅を出発して、旧柳川等の流れによって形成された扇状地の裾部を走る。路線敷の海拔はおおよそ90m前後である。調査地点の内、扇状地中央部にあたるA・B・C各区は、現在大津市錦織の集落にあたり調査の対象から外さざるを得なかった。後日、このA・B・C区の掘削工事の所見では、泥土・砂土・砂礫からなる互層状の厚い流れ堆積が見られた。このような亦傍で、われわれが調査を実施したのは扇状地の南半部裾である(D区からF区まで)。扇状地の南半部裾は、現在宅地になっている部分以外は積土や削上を行って耕地化されている。後述するE・F両区で検出された弥生時代の溝以外は、基本的にはA・B・C各区と同様、流れ堆積砂土中に散在する土器片を含む所見が得られたのみで、何等の遺構も検出されなかった。ところで、調査を行った海拔90m等高線付近は縄文時代の湖岸線と考えられているが、D・E・F各区における土層の堆積状況から、新路線部分は湖岸に近い湿地帯か、もしくはそれに近接する地帯であると見られる。ちなみに1885(明治18)年測量の2万分の1地形図では、この部分が湿地に近接する地帯として表現されている。

北大津駅予定地に近接するE・F区からは弥生時代の溝が検出された。テストグリッドで溝の一角を確認した時点で、溝の周辺をくまなくボーリング調査を行ったが、溝以外の遺構を認めることはできなかった。この所見によって、発掘区を南北25m、東西35mに限定し、溝の平面的ひろがりを追究することに主眼をおいた。その結果図10に示したように3本の溝を検出した。発掘区の東側より、1号・2号・3号溝と命名した。各溝は現耕作面下40cm~50cm下に、広範囲に見られる暗茶褐色砂利混泥土層から切りこまれている。

溝の側壁・底部は花崗岩等砾土の流れ堆積砂からなる。上記泥土層は均質な有機泥土からなり、内に多くの植物纖維と微量の網文式土器片をはじめ、亦生第2・第3様式の土器



挿図10 I区1~3号溝実測図

細片を含む。各溝とも溝底までの深さは約1mで、溝底は南に序々に下ってゆく。しかし、溝の機能は扇状地の高みから大きく2段階にわかれれる流れ堆積によって、失なわれている。1号・3号溝は握りこぶし大の砾を含む砂礫の流入によって一時その機能を損じた。それからしばらくの間、流路として存続したようだが、更に激しい砂礫の流入によって完全に埋没してしまった。2号溝はこの埋没前後、砂土の流入によってその機能を終えたと考えられる。

1号溝の断面図から明らかなように、この砂礫の流入は相当急激な流れ堆積であったと見られる。さて、溝のプランに見られるように、2号溝と3号溝の接合する部分で2号溝が急にその幅を減げる。水の取入口のような性格をもった遺構と想定して精査したが、何等の施設も発見できなかった。又、この接合部での両溝底のレベル差はない。溝内出土の上器片から溝の年代を考定すれば、1号溝は弥生時代第2様式又は第3様式に併行する。2号・3号溝は弥生時代第5様式の時期と考えられる。両溝内からは縄文晩期末、弥生第1様式から第5様式までの上器細片が流れこんでいた。又、1号溝からは2号溝と切り合う部分の溝底から古いタイプの平銀1、九字朱製品1、加工木片1点が出土している。3号溝からは、溝を完全に埋めてしまった灰褐色砂礫1層から、研ぎ直した直後の磨製石斧2点、磨製石錐1点、石庖丁を加工した有孔円盤1点が出上した。これらの溝の性格であるが、1号溝に関してはそのプランが示す逆行ぶりから考えて自然流路と考えたほうが適当であろう。2号・3号溝については、規格性に乏しいが、人工の溝と考えられる。ボーリング調査によれば、この2つの溝にともなう泥構の存在は考えられない。調査の結果、10ないし20cmの厚みをもつ暗茶褐色砂利混紗上のほぼ水平に近い堆積が広範囲に確認された。さらに、この泥土層上部に2～3層のきわめて薄い鐵砂の堆積が確認されている。無遺物で、原元状態を呈する。加えてこの微砂層が2号・3号溝の内部に流れこんでいる状態が検出されている。この所見はすくなくとも、この一帯が始終冠水の状態にあったことを暗示している。明治18年代のこの地点付近の状況を加味して考えれば、これらの溝が湿地もしくは湿地に近接する位置にあることを示している。以上の事から、2号・3号溝が溝岸付近の湿地にともなって作られた排水機能をもった溝と考えられる。これらの所見からこの溝にともなう築造等の遺構は各溝からさほど遠くない扇状地の高みに位置すると思われる。研ぎ直し直後の磨製石斧や木製農具の出土はそれを示している。なお、本調査地点から北へ100mのグリッドでは、表土下2mの泥土層より、弥生第1様式(中)の土器片が微量出土した。それらの土器はあまり磨滅をうけておらず、生新の場がこれら扇状地の

器部からすぐ近くにあることを示している。

各区の調査 弥生時代の造構を確認した地区は、前記の通りⅣB区方形周溝墓群とⅠ区溝跡のみであったが、遺物はこの他の全地区で検出された。

まず、ⅢE区開析谷の各堆積土中より、畿内第1様式(新)に併行の土器片(青灰色砂層及び暗褐色泥土層)、弥生中・後期に属する土器片(灰褐色砂層)若干量が出土した(図版12、第14図)。いずれも土砂と共に流れ堆積したものである。これらの弥生式土器片と同一層中から検出した多量の植物遺体については、放射性炭素による年代測定を実施した。⁶⁾

また、ⅢE区開析谷とはほぼ同様の規模をもつⅣB区開析谷の堆積土中からも、若干量の弥生式土器片が出土した。

弥生式土器の小片は、このほか全区にわたって検出されたが、その多くは開析谷中に流れ堆積したもので、量的にも散少であった。しかし、今回調査した湖西の平野部には、二群の墓址があり、しかも微量とはいえ全地区にわたって遺物が点在する状況を考えれば、近くに各期の弥生時代集落が営まれていたことは確かであろう。

2 遺物の検討

(1) 方形周溝墓出土の土器 (図版59~61、第50図、第19表)

中期前半の土器 ⅣB区3号溝と14号方形周溝墓出土の土器は共に中期前半第2様式に属する。壺(B1)は唐古第2様式⁸⁾中に類品が見られ、(B2)は南濃型遺跡出土品中に類例が求められ、腰の高い器形である。(B2)は文縞帶の下部を欠いているため断定はできないが(B1, B2, B3)ともに直線文帯以外の横描文を施されていない事実は一応注意しておくべきであろう。壺(B4)は口端に押捺手法を有する近江、伊勢湾地方の地域的特色の濃い土器である。

中期後半の土器 ⅣB区11号方形周溝墓では西溝と南溝の2群に分かれて土器が出土したが、共通の特徴をもつ壺が両群から出土したことや、土器が接するように並んで倒れていたり、おり重なるように倒れて埋没している(図版11、第7・8図)出土状況から見て、全ての上器を同一時期の所産とした。壺(B13)の内面荒削りの手法は、近江地方、畿内地方には類例が少ない。壺(B5)は長浜市鴨田遺跡にも類例を見るが、第2様式の後半に出現する「近江型」の壺の系譜に含まれるものであり、この型の壺が確実に第4様式¹⁰⁾ま

で読くことを示す例として注意しておくべきであろう。

(2) 各地区出土の土器 (図版62・63、第51図、第20表)

土器の出土状態 前記の方形周溝墓以外からも弥生式土器は各地区で少量ずつ出土しているが、そのうちでも比較的まとまった資料を得たのはⅠ区とⅢ区であった。すなわちⅠ区の1～3号溝の各溝内と、ⅠD・ⅠE・ⅠF区と、ⅢE区包含層出土の土器群が観察の主たる対象となるのであるが、いずれも殆んどが小破片である上、各時期の土器が同一層内に混在しているという出土状況であり、その内容は必ずしも良好であるとはいがたい。しかしながらⅠD区、ⅢE区では、少量とはいえ前期の土器のみを出土する層も確認して¹⁴⁾いる。こうしたことから観察に際しては各地区出土の土器を一括した上で、大きく前期、中期、後期に分けてあつかった。なお、前削の土器は数量が極めて多く、同一器種のものについては細分を避け、全て一括してあつかった。

削り出し突帯土器の検出 ⅢE区の青灰色微砂屑中より、他の前期の土器片に混じって僅かに一例のみであるが、頭部に削り出し突帯を有する彫形上器を検出した。この削り出し突帯の技法は弥生時代前期の中頃まで遡り得る時期の所産であるとされ、滋賀県下では最古の弥生式土器の一つである。¹⁵⁾従来滋賀県下では前期の内では最も新しい段階の上器のみが南滋賀遺跡や米原町入江遺跡、安土町大中の湖南遺跡などからの出土品で知られていたのであるが、現在では削り出し突帯の段階のものが、長浜市川崎遺跡でも発見されて¹⁶⁾おり、今回の調査によって更に新たな一例をつけ加えることになったが、こうした事実は近江地方における弥生文化の開始時期を、畿内以西の諸地方のそれに従来よりもいっそう近づけることとなつたのである。

前期弥生式土器の出土地点 さて今回の調査で得た前期弥生式土器の出土地点をみると、Ⅰ区、ⅢC区、ⅢD区、ⅢE区、ⅣB区というふうに皇子山から滋賀県(第1図を参照)にかけて点々と分布し、主要な遺物出土地点の殆んどから前期弥生式土器を検出している。これらの多くは、より新しい時代の遺物群に混入した状態で出土しており、したがって本来どういう性格のどれくらいの規模の遺構に伴なっていたものかを知ることはできないが、たとえ小規模なものであれ、本地域で始まって間もない弥生文化が一地点に偏在することなく、かなり広域にわたって定着していたことが窺えるのである。

また、前期弥生式土器が検出された各地点から、縄文後・晩期の土器が例外なく検出されているが、これは文化相を全く異にしながらも、縄文後・晩期の生活圏を弥生前期まで

そのまま踏襲したことになり、縄文から弥生への移行期の様相を探る上で、一つの示唆を与えるものであろう。

中期壺形土器の一類型 今回の調査で方形周溝壺以外の地点から得た弥生式土器は、第20表のとおりであるが、これまでに気づいた点を問題として提起し今後の検討を待ちたいと思う。

従来、近江地方における中期前半、第2様式の壺形土器は佐原氏によってA・B2類に分類され、それぞれ畿内型、近江型の壺として理解されてきた。この内B類はより後出的であるとされ、最近調査された京都市山科の中臣遺跡では第2様式古段階の実体が明確となり、その中には近江型の壺は含まれていないという。さてこのB類として分類される土器には、口縁外端をおさえて幅広い端部をなすもの、明確に屈曲して立ち上がる口縁をなすもの、また波状口縁になるものとそうでないものが一括して含まれているようである。今回の調査で得た土器の内、B₁、B₂としたものや、Cの一部もこれに含まれるであろう。そしてこれらの土器群を細分し得ることについては既に「大辰巳遺跡のBは南滋賀のものに比べて装饰性に乏しく、両者の間に若干の地域差、あるいは年代差が介在する可能性があるが……」という指摘があり、その後においても琵琶湖南岸地域のBと北・東岸地域のBとの間の装饰性の差异について言及されている。¹⁹⁾

以上の研究を受けた上で、今回の調査で得たこの類の壺形土器は、B類、C類として分類した。その中でC₁は刷毛目の手法が縮薄になり、口縁内側や頸部に列点文を多用しており、他とかなり異なるが、C₁の発展形態であると考え、同類に加えた。またB類、C類中には、土器片がいずれも小片であるためでもあろうが、南滋賀遺跡や京都市深草遺跡で指摘されたような明確な波状口縁を復原できるものは一例もなかった。²⁰⁾

さて我々が分類したB類、C類土器について、その形態上の問題と年代的な問題について気づいた点を記しておこう。まず形態上の問題についてはB・C類の中間的形態ともいえるものが多く見られ、恐らく両者は一つの系譜で結ぶであろう。またA類の中にも口縁外端を軽くおさえ、その部分に横方向の刷毛目を加えるものがある(B33)ことは、そこにB類の発生的要因の一つを窺えることを指摘しておきたい。年代的な点では、今回の調査におけるⅢE区灰褐色砂層出土の土器を検討した結果、壺B・C類はかなり含まれているが、壺A類(第2様式畿内型の壺とされるもの)および第2様式壺は全く見あたらなかった。またⅣB区11号方形周溝壺ではC類の壺(B5)が第4様式の壺と共存していた。²¹⁾以上のことから従来第2様式の後出的形態である壺Bとして包括されていた土器群の内には

第3様式以降に降るものも含まれているのではないかと考えている。かくしてB・C類の型式的問題と年代的問題について、B・C類は第2様式のA類の要素をも受けて発生し、B・C類と発展過程をたどるが、それは第2様式後半に始まって第4様式まで系統につながるものであると理解し得るのである。いま、その細分とそれぞれの明確な年代的位置づけをなし得る資料はないが、いずれ我々が分類したB・C類をも含むいわゆる「近江型墓」の第2様式以降における変遷と地域性の問題が具体化されるであろう。

(3) 石器・木器

石 器 (図版64-2, 第18表) 弥生時代の石器は総数14点出土した。それぞれの出土地点と層位は第18表のとおりである。

石庖丁は破片であるが直刃のかなり大型品になるもよう、中期のものであろう。背には

第18表 弥生時代の石器一覧

種 別	番 号	出 土 層 位	石 材
磨製石包丁	B S 1	III E区黒色泥砂層	粘板岩
	B S 8	I E区3号溝 灰褐色砂疊I層	輝綠凝灰岩
	B S 9	I E区3号溝 灰褐色砂疊I層	層中の玄武岩質焼岩
打製石槍	B S 10	II G区灰色砂層	サスカイト
打製石劍	B S 11	I F区2号溝 暗茶褐色砂利混泥土層	サスカイト
	B S 12	III F区溝内黒色泥砂層	"
磨製石剣	B S 6	III E区灰褐色砂層	ホルンフェルス
	B S 7	III E区黒褐色砂泥層	"
磨製石鎌	B S 2	V D区東半2号溝 灰褐色砂層	ホルンフェルス
	B S 3	III E区灰褐色砂層	"
	B S 4	I E区3号溝 灰褐色砂層	"
磨製有孔円盤	B S 5	I F区3号溝 灰褐色砂層	"
	B S 13	I E区3号溝 灰褐色砂疊I層	ホルンフェルス

手すりによる磨滅が認められる。磨製石斧(B S 8, B S 9)は共に完形品であるが、B S 8はアックス、B S 9はアッズである。B S 8の刃部には数回の研ぎ直しが行なわれ、左右端部の損耗状態は不均衡である。また中央よりやや上方に帯状にめぐる敲打痕のような部分があるが、これについては柄の着装と関連づけようとする従来の見解に対し、否定的な意見が最近述べられた。²⁵⁾ B S 9は大型の片刃石斧で、この形態のものは小型扁平片刃石斧に比べ類例は少ない。出土層からみて共に中期のものである。重量はB S 8が510g、B S 9は290gである。打製石槍(B S 10)は基部を残す破片である。残存部の最大幅2.3cm、厚さ1.1cmを測り、畿内地方で見られる通有の石槍と変わることろがない。石槍は石庖丁と共に近江地方では類例の少ない石器である。打製石鎌は無茎四基式のもの(B S 11)と有茎凸基式のもの(B S 12)を各1点ずつ得た。重量はB S 11が0.8g、B S 12は2.9gである。磨製石剣は2点出土

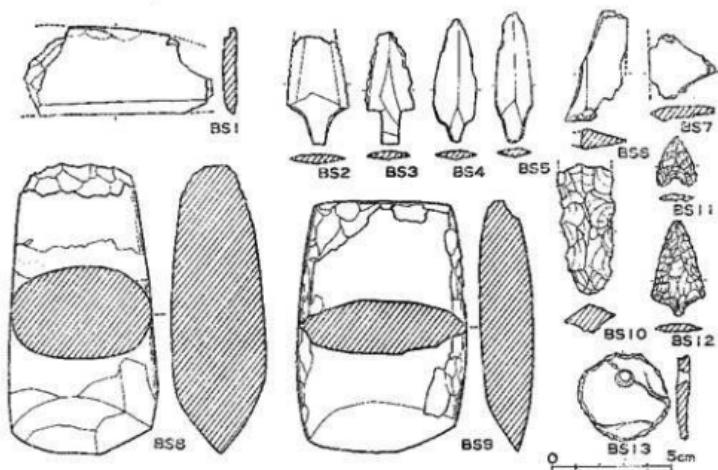
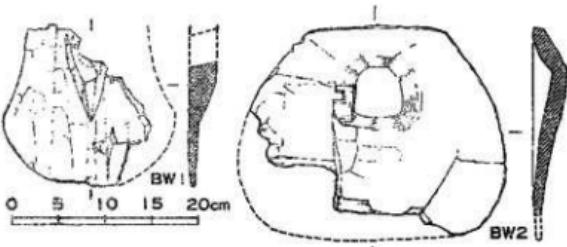


図11 各地区出土の石器実測図

している。いずれも小破片であるため、元の形状を窺い得ないが、BS 6は中央に鉢を作っており、残存部での復原幅3.4cm、厚さ8mmを測ることができる。出土層位からは時期を限定できないが中期後半に属するものであろうか。従来県下で発見されている磨製石剣については、西田弘、黒崎直の両氏によってまとめられたものがあるが、それによれば現在確認できるものは12点で、その内今回の調査地点に近いところでは、滋賀県東近江市茶山と鈴蘭町皇子山から各1点ずつ。いずれも鉄剣形のものが発見されている。今回さらに2点の資料を加えることとなったが、中期のある段階では本地域の各集落に1本以上の磨製石剣が所持されていたのではないかと考えている。磨製石鎌は4点出土し、いずれも茎を作り出しているが、鎌の形状が三角形をなすもの(BS 2・3)と、細長く柳葉形に近いもの(BS 4・5)とがある。磨製石鎌は中期中頃以降の「畿内北部を特徴づける石器」の一つともされ、近江地方にもその類例は数多い遺物であるが、近江の東・北半地域と、西・南半地域では少し様相が異なるようである。西・南半地域では有茎式のものが多いに対し、東・北半地域では最近調査された鳴田遺跡の出土例にも見られるように、無茎式のものが目立った存在となり、中部地方との強い関連性が窺われる。他に有孔円盤が1点出土している。あるいは石庖丁を再利用したものかもしれないが、その用途については不明である。

出土層位から中期のものと考えられる。²⁰⁾

木器 (図版64-1) 弥生時代の木器としては、I区1号溝より出土した広鎌と丸鎌各1点を見るのみである。広鎌 (BW1) は身の上部と片側を欠失して全形を窺い得ないが、身の側縁は刃部にむかって外びらきに彎曲する。刃部は弧状を呈する。着柄孔を穿つてある舟形の突起部は約3cmと厚くしっかりとしており、その先端部は長く延びない。着柄孔は、柄の角度が身の刃先に対して77°の角度をなすように穿孔されている。身の隆起部がある側の表面には、製作時の削り痕が一部に残っている。カシ材使用。丸鎌 (BW2) は下端部の一方を欠失しているが、ほぼ全形を復原できる。それによれば上下23cm弱、左右28cm余りの渦丸台形状をなす。着柄孔がとりつけられる部分に向って徐々に高くなり、裏面はそれに対応して中くぼみとなる。しかしながら、着柄孔は未だ穿たれておらず、本資料が未製品であることを示す。カシ材を使用。



図版12 I区1号溝出土の銅実測図

- 註 1) 田辺昭三『大阪市南滋賀遺跡調査報告』大阪市教育委員会 1969年
 2) 「陸橋部」という用語の命名は下記の論文でおこなわれた。しかし本来意図的に造られた施設かどうかが問題となる。
 大塚初重・井上裕弘「方形周溝墓の研究」(『歴史学』第24号) 1969年
 3) 同溝で囲まれた内区に遺体を埋葬した墓壙の確認された例がふえている。大阪府瓜生堂遺跡では封土をもつ方形周溝墓が発見され、封土中に木棺と火棺とが検出されている。
 『瓜生堂遺跡』中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会 1971年
 4) 方形周溝墓の最古例は現在のところ大阪府池上遺跡の例であり、畿内第1様式(新)の時期に属している。
 『池上・四ツ池』16・17 第2次全国道内遺跡調査会 1971年
 5) 一般に畿内では方形周溝墓と土壙墓とが単位をなして一つの墓址を構成する例が多い。滋賀県南滋賀遺跡(註1)、大阪府瓜生堂遺跡(註3)、同宮の前遺跡(宮内好久「考古学上に現わ

- れた池田「新版池田市史」概説編) 1971年。などに典型的にみられる。
- 6) III E区の測量谷の調査については第3章の「III E区の調査」で詳しく扱っている。
 - 7) 年代測定は、京都産業大学理学部助教授山田治氏におねがいした。測定資料は、暗青灰色微砂層～灰褐色粗砂層から出土した流木類である。これらの各層は、弥生前期の層と中・後期の土器片を含む層との間に位置する。
 - 8) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告16) 1943年
 - 9) 肥後和男「滋賀村出土弥生式土器」(『滋賀県史蹟調査報告』第3冊) 1931年
田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査略報』1959年
 - 10) 土器の型式学的検討の結果を過大評価するのは危険である。現状で型式学の成果が圧倒的に大きいのは、遺物学に対する遺跡学の立ち遅れに起因する。
 - 11) 佐原真氏より、表B13は技術的に西日本の影響を受けているという指摘を受けた。
 - 12) 川那辺正雄・中谷雅治他『長浜市鶴田遺跡発掘調査概要』(『滋賀県文化財調査概要』第8集) 1972年
 - 13) 佐原真「先史時代」(『彦根市史』) 1960年、「琵琶湖地方」(『弥生式土器集成』本編2) 1968年、「1971年の動向、弥生時代(下)」(『月刊考古学ジャーナル』No.74) 1972年
佐原真・田辺昭三「鶴冠井遺跡」(『東海道新幹線工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』) 1965年
『彦根市史』や『弥生式土器集成』本編2では、「近江独立の変形土器」あるいは「本地方に分布の中心をもつ、個性的な変」という表現であるが、「鶴冠井遺跡」や『月刊考古学ジャーナル』No.74では、「近江型の変」あるいは「佐原のいう近江端の変」という表現が行なわれており、両者の内容も同一と理解されるので、前2者の変も「近江型の変」として理解した。本章の(2)の記述においても同様である。
 - 14) I D-2ny98 (4×4) 黒灰色泥土層、I D-2pk48 (4×4) 黑灰色泥砂層、III E-2xw06 (1×6) 青灰色微砂層、暗褐色泥土層。
 - 15) 佐原真「山城における弥生式文化的な成立」(『史林』第50巻第5号) 1967年
 - 16) 肥後和男「滋賀村出土弥生式土器」(『滋賀県史蹟調査報告』第3冊) 1931年
田辺昭三『大津市南滋賀遺跡調査略報』1959年
佐原真「先史時代」(『彦根市史』) 1960年
 - 17) 丸山富平他『国道8号線長浜市・近江町バイパス遺跡分布調査報告』1968年
大江幸池『国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書』1971年
 - 18) 前掲註13
 - 19) 佐原真「1971年の動向、弥生時代(下)」(『月刊考古学ジャーナル』No.74) ニューサイエンス社 1972年

- 20) 佐原真『彦根市史』前掲註16
- 21) 佐原真『弥生式土器集成』本編2 前掲註13
- 22) 佐原真・辻邊昭三「鷺冠井遺跡」(『東海道新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』) 1965年
宇佐音一・小川敏夫・星野鉄二「深草遺跡」(『古代学研究』第39号) 1964年
- 23) したがって我々が分類したB・C類は佐原氏の分類による垂B(近江型)の内の一部であると考えられる。
- 24) (B 5) に類似する土器は長浜市鴨田遺跡でも出土しているが、報告書には他の土器との共併関係が明示されていないので、明確な年代的位置を知りたい。ただ中期後半以降の土器に伴うことは確かなようである。前掲註12
- 25) 佐原真「1971年の動向、弥生時代(上)」(『月刊考古学ジャーナル』No. 68) ニューサイエンス社 1972年
- 26) 西田弘・黒崎直「滋賀県下発見磨製石剣資料」(『滋賀文化財研究所月報』7, 8, 9) 1968年
- 27) 佐原真「大和川と淀川」(『古代の日本』5近畿) 角川書店 1970年
- 28) 前掲註12
- 29) 石材の鑑定は、京都大学理学部助教授石田志朗氏におねがいした。

第19表 方形周溝墓出土の弥生式土器觀察

器 形	土器名	形 态 の 特 殊	手 法 の 特 殊	備 考
壺	B1	・B1は球形の胴部に長い 頭部を有し、口縁部は胴 部最大径とほぼ同じくら い広くなる。	NB区 3号 漆 B1—・頭部から胴部上半にかけて1帯 6条からなる柳描直線文を9番 施し、口唇部にも同様の施文を行 なう。口唇部下端には同じ施 文式で刻み目を加える。直線文の 描かれる方向は土器に向って左 から右の方向である。 ・内外面とも一部に刷毛目を残す。	・B1は奈良県唐古 遺跡出土の第2様 式壺形土器に類似。
壺	B2	・B2は腰の高い胴部に余 り長くはない頭部と外反 する口縁部を有する土器 と考えられる。	B2—・頭部から胴部上半にかけて1帯 8条ないし9条からなる柳描直 線文帯を4帯以上配す。描かれた 方向は右から左か。 ・内外面の一部に刷毛目を残す。	・B2は大津市南滋 賀遺跡出土の第2 様式壺形土器に類似。
甌	B6 1 B10	・頭の中程で最大径をとる 卵形の胴部に粗い直口の 口縁部がとりつく。	・口縁部外側を軽く円錐風におさえる。 ・刷毛目調整を基本的な仕上げの技法と する。 ・B6・8・9は、胴部上半に叩き目を 残す。 ・B8～11は、胴部下半を直あるいは先 端が粗く鋭い工具で削る。 ・胴部の底下部をナデ仕上げするものも ある。 ・内面は原体の時に粗密の粗模はあるが いずれも平滑に仕上げられる。B8は 下半部をナデ仕上げされる。 ・B8は胴部上半に瓦による記号文様を 加える。	・B6・8・10には 焼の付着が認めら れる。
甌A	B13	・「く」字形に屈曲する口縁部 は、端部が上下に肥厚する。 ・大きく胴部が張り、最大 径は中間にある。	・口縁部は外表面横ナデ。 ・胴部外側および内面上部は刷毛目を 施し、内面下半部は裏削を加えている。	
甌B	B5	・甌Aに比べ小窓で、外反 する頭部に統く口縁部は 垂直に立ち上がる。	・口縁端部に刻み目を施す。 ・口頭部内面および外側全面に粗い刷毛 目を残す。 ・胴部上半にはそれぞれ平行沈線で区切 られた内を先端部の鋭い工具による刺 突穴で埋める文様帯を3番配し、その 間に平行沈線を入れる。	・長浜市鴨川遺跡か ら類似品が出土。
高杯	B14	・やや深い杯部の口縁端部 に内傾する降起部を統ら せる。外側の水平線の端 部は垂下しない。 ・脚部はラバ状に窪く。	・杯部内外面および脚部外側は複数の 磨研痕を残す。 ・脚部内面はナデ仕上げされる。	
甌A	B11	・11号方形周溝墓出土の甌と 同類であるが、本例の他 と異なる点は、口縁端部	・口縁部内外面は横ナデ仕上げされる。 ・胴部外側は刷毛目調整の他、下半部に は裏削りを加える。	
NB区 12号 方形周溝墓				

器 形	土器類	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
		をやや内傾させ、刷の張りも他に比べてやや大きい点である。	・内面は先端が幅く鈍い工具によってナデ仕上げされている。	
壺B	B12	・卵形に長い胴部に外反する口縁部がとりつく。 ・口縁部内側に2箇1対で向いあって2対の瘤状突起がはりつけられている。	・外面は全面にわたって縱方向の刷毛目を施し、内面の頸部以上にも横方向の刷毛目を加える。頸部以下はナデ仕上げされている。	・口縁内側の瘤状突起は近江、伊勢湾地方の地域的特色。
NB区 14号 方形凹溝器				
壺	B 3	・頸部以上に多く破片。 ・胴部は中央部が大きく張る算盤玉に似た器形をなす。	・頸部上半には1帯10条以上の横幅直線文帯を4番配し、文様帯の間は研磨している。 ・胴部外腹下半および内面には刷毛目を残す。	
壺	B 4	・外反する口縁部に純く刷部はあまり張らずに底部に移行する。	・外面は全面縱方向の粗い刷毛目を施し、口縁部内面にも横方向の刷毛目を加える。 ・口縁端部には刻み目を施す他、各々向いあう位置を1箇所ずつ押捺する。	・口縁端部を押捺する手法は、近江、伊勢湾地方の地域的特色。

第20表 各地区出土の弥生式土器觀察

器 形	土器類	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
壺	B22 5 B28 B73 B79	・口縁部は表面に外反し、端部は丸くおさめる。 ・頸部は突帯および平行する沈線あるいは両者を併用した文様で飾られるものが頗んどである。 ・胴部は中程あるいはや下のあたりで最大径をとり、上半部を突帯で飾られるものと無文のものがある。 ・底部は大きく厚い。	・外面は原則として、荒による研磨で仕上げられるが、口縁端部付近は横ナデ仕上げされるものがある。また頸部の文様帯の近くおよび底部のあたりでは刷毛目を残すもの認められる。 ・内面も研磨を原則とし、一部刷毛目を残すものもある。 ・突帯は削り出しによる幅広い突帯を作り、その内に2条の沈線を施したもの(B22)を缺き、全て貼り付け突帯である。突帯の構成は頸部の平行沈線帯の上に1帯のみを配するもの2片、上胴部に5cmの間隔を置いて各1帯を配するもの1片。頸部に2帯以上を平行して重ねるもの1片である。なお突帯には荒による刻み目を残すもの、指による押捺を加えるものがある。 ・沈線は頸部および胴部に施され、頸部と胴部の接合部に生じた段の上に施されるものもある。沈線の数は多いもので1帯に7条を数えるものがある。なお4条で1帯を構成し、それを3帯以上重ねるものもある。沈線間に刻み目	・胎土はいずれの土器においても粗い砂粒を含む。 ・色調は明るい灰褐色を呈するものが多い。 ・前期の層より出土した土器。 B22・26はIII E区青灰色砂、B24・79はIII E区暗褐色泥土。B27はIII E区青灰色微砂、B28はI D区黒灰色泥土。 以上のもの以外は新しい時期の層内への混入品である。

器形	土器No	形態の特徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
甌	B29 1 B32	・口縁部はゆるく外反して端部には全て刻み目が施されている。 ・頸部には沈線がめぐる。 ・頸部はそれほど張らず、そのまま底部に移行する。胴部最大径は口縁部よりも小さい。 ・底部は大きく安定している。厚さは底よりも薄い。	・刻み目は真で加えられ、幅広いものと細いものがある。 ・沈線は底によるもので、2条から5条のものまであり、それぞれ一帯のみ配されている。 ・外面は原則として、綫および斜目方向の刷毛目により仕上げられており、口縁部付近および内面はナデ仕上げされる。内面を磨擦するものもある。	・色調は明るい灰褐色を呈するものが多い。 ・底土には粗い砂粒を含む。 ・前期の層より出土した土器が1例あり、B31はⅢE区灰褐色泥土。 他の土器は全て新しい時期の層への遺品。
甌A	B35 B36 B97 B99	・やや長い頸部に続く口縁部は大きく外反する。 ・胴部は小片しかないとみたものと形態を窓、難いが球形あるいは算盤正形に近い球状を呈するであろう。	・B35は口唇部に網目を施す。頸部には直線直線文を数段重ねる。 ・B36は最下段に波状文を加える。 ・上胴部には直線文の上に肩形ないし、弧状の構造文を重ねて一種の流水文をしている。	・B35・36・97はⅠE区暗茶褐色泥混泥土、B97はⅠF区灰褐色微砂。 ・中期前半。
甌B	B37	・外反する口縁部の端部を肥厚させる。	・厚い口縁部の外側に波状文を、口縁内側には肩形文を配し、頸部には刷毛目の跡を残す。	・ⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃か。
甌C	B17 B38 B39	・口縁部の形態は甌Bと同様肥厚させたものと、B17のように端部を垂下させたものとがある。	・厚くした口縁部の外側に凹線を施す。 B17は凹線と直線文を6条の沈線を加え、口縁内側には刺突文と波状文を配している。	・B17はⅣB区腰折谷土壁器包含層。 B38はⅢE区灰褐色砂、B39はⅠ区1号溝上部砂層。 ・中期後半が中心。
甌D	B40 B41	・口縁部を徑に肥厚させる。	・B41は口縁部の一部に刺突文を加える。	・B40・41とともにⅢE区灰褐色砂。
甌E	B42	・直口する口縁部をなす。	・内外面に粗い刷毛目を残す。	・ⅢE区灰褐色砂。
甌F	B43	・口縁部はゆるく外反した後、端部は垂直に立ち上がる。	・外面は刷毛目、内面はナデによって仕上げる。	・ⅢE区2号溝灰褐色砂層Ⅰ。 ・甌D・E・Fとともに中期後半か。
甌G	B45 B46	・口縁部は一度外反した後、鋭く窪曲して立ち上がり口縁部を形成する。	・口縁の内外面は刷毛目調整が施される。口縁外側あるいは内面に刺突文を加えるものもある。	・B45・46はⅢE区灰褐色砂。 ・中期中頃ないし後半。
甌H	B85 1 B89 B96 B100 B102	・口縁部の形態が明らかでない難胴部の破片で文様のあるものを便宜的に一括した。	・頸部に突唇をめぐらす。 ・平行直線文帯を重ねる。 ・直線文と波状文を交互に配す。 ・直線文とそれに直交する半載竹筋による直線文とを重ねる。 ・斜格子文。あるいは斜格子文に肩形文	・B85～B89はⅢE区灰褐色砂、B96はⅠ区2号溝灰褐色砂、B100・102はⅠ区3号溝灰褐色砂層Ⅰ、B103は

器 形	土器種	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
	B103		を加える。 ・刺突文を羽状に配す。	I区3号溝灰褐色砂。
甌A	B19 B33 B47 B48	・頸部で屈曲した後、大きく外反して口縁端部へ移行し、端部は丸くおきめる。	・口縁端部に刷毛目を入れるものもある。 ・外面は縱方向の粗い刷毛目を残し、口縁内面は横方向の刷毛目を加える。口縁内間に波状文や列点文を施すものもある。	・B19はⅡ区2号溝、B33はI区3号溝灰褐色砂砾I、B47はI-E区暗茶褐色砂利混泥土、B48はI区1号溝灰褐色砂砾。 ・中期中頃が中心。
甌B ₁	B34 B49 I B55 B57 B104 B105	・頸部以下を殆んどぐくため全形を窪い難いが、頸部でゆるく大きく屈曲した後、口縁部へ移行する。 ・口縁部は端部をおさえたり、やや内傾させることにより、幅広い立ち上り部を形成する。 ・いずれも小破片であるため、全形は明らかでないが、波状口縁をなす可能性のあるものも含まれる。	・口縁部の立ち上がり部は横ないし斜方向の、以下は縱方向の粗い刷毛目で仕上げる。口縁内面にも横方向の刷毛目を施し波状文を加えるものもある。 ・口縁端部に刷毛目を入れるものもある。 ・頸部に直線文を配するものもある。 ・甌A・Bいずれに属するか不明であるがこの類の底部には木炭痕を残すものがある。	・B34・49・54はI-E区暗茶褐色砂砾混土、B50はIII-E区灰褐色砂、B51はII-E区黄褐色微砂、B53はI区3号溝底部直上砂砾、B55はI-E区褐色砂、B57はI区2号溝灰褐色砂砾、B104はI-E区暗茶褐色砂砾混土、B105はI区3号溝灰褐色砂砾I。 ・中期前半ないし中頃。
甌B ₂	B106 B107	・甌B ₁ 類に類似するが、本類の方がはるかに厚手大型である。	・内外面とも粗い刷毛目を施す他、口縁部に波状文や刺突文を加える。	・B106はI区2号溝灰褐色砂、B107はI区3号溝灰褐色砂砾I。 ・中期前半ないし中頃。
甌C ₁	B56 B58 I B65	・頸胴部の境で一度屈曲外反した後、再び明確に屈曲して垂直ないし、内傾して立ち上がり、口縁部を形成する。	・口縁内外の刷毛目の手法は甌B類と同様であるが、他に横ナデ仕上げが見だつ。	・B56・61・64はI区3号溝灰褐色砂、B58はI区2号溝灰褐色砂、B59はI区3号溝灰褐色砂砾I、B60はI区1号溝砂層、B62はI-E区黄褐色砂、B63はI区3

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
				円溝底灰色砂、 B65はⅠ区灰褐色砂。
甕C ₁	B66 B67	・甕C ₁ と同様である。	・横ナデの他、刺突文が多用される。	・中期中頃ないし後半。 ・B66はⅣ区灰褐色砂、 B67はⅠ区3号溝反面灰色砂。
甕D	B68 ・ ・B70	・頸部以下を欠く小片であるが、頸部で「く」字状に鋭く屈曲し、肩部はかなり張ると思われる。	・口縁端部に直あるいは衝撃状の原体による刺み目を加える。 ・外面には縱方向の内面には横方向の刷毛目を残す。	・B68はⅠ区1号溝青灰色砂、 B69・70はⅢ区灰褐色砂。 ・中期後半。
甕E	B21	・頸部で「く」字状に屈曲し、口縁端部は僅かに内側を突出させている。 ・胴部は中程よりやや上方で最大径をとり、口径よりも僅かながら大きい。	・口縁部と底部付近の内面はナテ仕上げをおこない、他は全面刷毛目を施す。	・ⅣB区15号土坑。 ・中期後半か。
甕F	B20	・頸部で「く」字状に屈曲し、口縁は上下に拡大して幅広い縦部を形成する。 ・胴部はかなり張るよう。	・幅広い口縁端部に凹線文を配する。 ・頸部外面剥離のため調整拭痕不明。内面はナテ仕上げされている。	・ⅣB区開折谷の上部層包含層。 ・中期後半。 ・変化なる可能性もある。
鉢	B76	・やや内輪気味で口縁端部に移行する。	・口縁上端面に波状文を配す。 ・外表面は刷毛目。内面はナテ仕上げされるが、内曲の一部にも刷毛目を残す。	・Ⅳ区1号溝。 ・中期後半か。
高杯A	B71 B72 B108	・直口型の杯部をなす。 ・B72は口縁を肥厚させる。	・内外磨研仕上げ。	・B71はⅣ区灰褐色砂、 B72はⅠ区1号溝反面灰色砂。 B108はⅠ区2号溝反面灰色砂Ⅰ。 ・中期中頃か。
高杯B	B73 B74 B108	・直口型の杯部をなす。	・凹線文を配す。	・B73はⅠ区3号溝砂、 B74・108はⅢ区灰褐色砂。 ・中期後半。
高杯C	B75	・杯部の外周に水平縁をめぐらせる。 ・小片のため水平縁の縫合が垂下するか否か不明。	・内外面ともに磨研仕上げ。 ・高杯A・B・Cいずれに属するか不明であるが底部片(B57)も出土。	・Ⅳ区2号・3号溝。 ・ⅢE区灰褐色砂。 B75は粗瓦区灰褐色砂。 ・中期中頃ないし後半。
器台	B15 B16	・口縁端部をやや肥厚させたり、垂下させる。	・垂下させて幅広くした口縁端部に凹線文をいれたり、あるいは凹線文の上に円形貼文を加える。	・B15はⅣB区湖折谷の上部層包含層。 B16はⅣB区2号

器 形	土基 No.	形 态 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (年代)
把手付 土器		・把手のみで器形を窺い難い。水滴形またはカップ形土器であろう。		露。 ・中期後半。
亞 A	B44	・細く長い口窓部をなす。	・表面の磨滅が強く、調査の痕を殆んど留めないが、口縁部には波状文を配しているのがわかる。	・I 区 3 号溝、III E 区灰褐色砂。
亞 B	B18	・大きく朝顔形に開く口縁の端部を上・下に拡大し、幅広い端頭をつくる。 ・腹部以下を欠くが、腹部では鋭く肩曲し、腰の低い球形に近い側面をなすであろう。	・口縁の幅広い端間に、羽状の刺突文を配し、3 本 1 単位の棒状貼文を數単位加える。貼文にも刺突文を施す。 ・外両は磨研、内側はナデ仕上げされている。	・IV B 区間折沿の上跡器包含層。 ・伊勢湾地方のパレススタイル土器の系統をひく。 ・後期ないしそれ以降。
鉢	B77	・腹部で屈曲した後、外反して口縁に移行する。	・脚部外側は粗い刷毛目調整、内面はナデ仕上げされている。	・II E 区灰褐色砂。 ・後期か。
手造形 土器	B93 B94	・B93は腹部の一部と鉢部の一部を残す。器形の決め手を欠くが手造形上器の可能性が強い。 ・B94は腹部の一部と鉢部との接合部を残す他、別に腹部口縁の小破片がある。	・腹部と鉢部の接合部外面には刻印を加え、刷毛目調整した腹部の下部は 3 条の横段平行沈線で両した 2 段の斜格子文帯である。 ・内面はナデ仕上げされている (B93)。 ・腹部はまず接合部との境に 1 条の沈線をめぐらし、それ以上は 2 本単位の横段の平行沈線で両された 3 段の文様帯を残す。下から 1 段目は幅の狭い段を複数の 2 本単位の沈線で面し、内部は空白のままとしている。2 段目は山形に彫された内をさらに斜行沈線で埋める横段の刻文帯を配す。3 段目は 1 段目と対応する位置に彫られた 2 本単位の横段の沈線で区画され、一方は空白のままとし、一方は斜行沈線で埋める。なお腹部の口縁部に沿って一帯、2 段目と向横の階級文帯がわぐる模様である。鉢部との接合部には段の割込み目が施される。内面はナデ仕上げされている。	・B93は IV E 区灰褐色砂、B94は IV B 区 2 号溝。 ・向例とも煤の付着は認められない。 ・後期。

第3章 古 墳 時 代

1 遺 跡 の 調 査

(1) 方形周溝墓（図版13、第10図）

立地 今回調査対象としたⅢ、Ⅳ区辺りは、後代の開発によってほとんど平地化しているが、もとは山麓から湖岸の方向にむかって張りだした複合扇状地の衝部にあたっており、かなりの起伏があった。

発掘調査の結果Ⅲ、Ⅳ区ではほぼ東西に走る扇状地の開析谷を四筋確認したが、方形周溝墓群はこの浅い谷に区切られた扇状地の高みに立地する（第1図）。

方形周溝墓群の所在地点は、北から三筋目の谷をさむ南北の扇状地上で、前章に述べた弥生時代の方形周溝墓群は、すべて谷の北側（北方群）にあり、この章で扱う古墳時代の方形周溝墓群は、谷の南側（南方群）と北側（北方群）とにまたがっている。

ⅢF区方形周溝墓（図版13、第10図） ⅢF地区の北端に近く、方形周溝墓の東辺、南辺に相当すると見られる二溝が発見された。東溝はN-26°-Eの方向に、南溝は内角115°の角度で東溝につながる。

この溝は、過去に大幅な削平を受けており、わずかに溝底の一部を残すのみであった。発掘調査によって確認した溝の延長は東溝10.5m、南溝5.2mで、もとよりこれは本来の規模を示す数字ではない。

溝はいずれも黄灰色砂層を切り込んでつくられ、溝内には黒色泥砂が堆積していた。なお、南溝では溝内堆積土が外方へ不整形に張り出しているが、この張り出しが本来南溝に付属していたものかどうかは明らかでない。

南北に延びる東溝のほぼ中央部では、溝底が一段深くなっており、その辺りから小型碗（C5）直口壺（C1）、甕（C4）各一個体分の土器が溝底より浮いた状態で出土した。これらの土器は、もともと周溝内に置かれていたものと考えてよいだろう。このほか、溝内より高杯脚部破片も出土している。

IV A区方形周溝墓（第10図）　Ⅲ F区方形周溝墓と、道路を隔てて北隣する地点で検出した。この遺構も過去に大幅な削平を受け、わずかに西北から東南方向に走る溝を確認しただけである。したがって、この溝を方形周溝の一辺と断するには根拠不足を否めないが、溝が黄灰色砂層をU字形に鋭く切り込んでつくられており、他の方形周溝墓の例ともよく似た状態が観察されたので、敢へて方形周溝墓の1つに加えた。

溝内には黒色砂土が堆積し、この土は若干周溝外の黄灰色砂層上部にも及んでいる。黒色砂土中から、若干の土器片、また搅乱された黒色砂上層中より碧玉製管玉（C S 17）1個を発見した（写真22）。なお、第10図でIV A区溝状遺構があるのが、これにあたる。

IV B区1号方形周溝墓（図版13-1、第10図）　IV A区方形周溝墓の北方約100mの地点にあり、四辺とも確認することができた。

その規模は南北辺10.4m、東西辺10.8mをはかり、ほぼ正方形に近く、南北辺の方向はN-33°-Eであった。四辺は完全に連続し、いわゆる陞橋部は存在しなかった。

溝は各辺とも黄灰色砂層をU字形に切り込んでつくられ、溝内には上層に黒褐色砂泥、下層に黒色泥砂の堆積がみられた。

周溝内より、土師器壺、甕、高杯などの破片が出土したが、いずれも小片で原位置を保つものではなかった。

小 結　今回調査した古墳時代の方形周溝墓は、3例とも後世の削平を受け、遺構の保存状態はよくなかった。したがって周溝内外に溝と関連した遺構を検出することはできなかつたが、遺存の状態が比較的良好であったIV B区の一例では、周溝の四辺がわずかに後世の削平を免れ、周溝本末の姿を推測する手がかりを残してくれた。

先に述べたように、方形周溝墓群の所在する扇状地は、なだらかな傾斜をもって西方の山麓から東方の湖岸にむかってひろがっている。今回は、この扇状地の裾部を10m前後の幅で南北に調査したにすぎない。したがって、原地形を考慮しながら方形周溝墓群のひろがりを復原すれば、今回の調査対象は荒城の東隣に近いごく一部の範囲で、むしろその中心は、現在水田及び住宅になっている西方の高みにあたっていると推定される。

最近近畿地方では、大阪府宮の前遺跡をはじめ古墳時代に属する方形周溝墓の発見が次いで報じられており、このたびの調査で更に新しい例を加える結果となつたが、今回の3例は、いずれも5世紀中葉以前の時期に属するものと思われる。¹⁾

まず、Ⅲ F区方形周溝墓の場合は、溝内出土の土器がいわゆる布帘式土器に併行する時期の所産と考えられる。次にIV A区方形周溝墓の場合は、明確な副葬土器が認め

られず、その所属年代は判然としないが、溝内より検出した土器片によって、ⅢF区方形周溝墓とほぼ同時期に属するものと考えられる。また、ⅣB区1号方形周溝墓の場合も、溝内発見の土器片中、年代の最も遡るものはいわゆる布留式土器に併行する時期のものであった。

古墳時代の方形周溝墓に伴う遺物は、土器のほかに、ⅣA区方形周溝墓より発見された細手の碧玉製管玉1個だけである。

この項で取りあげた古墳時代の方形周溝墓は、その所属年代と所在位置から推して一群のものと考えられる。そして、この3例の方形周溝墓が所属する一群の墓域の中心は、恐らくほんんど破壊を受けることなく現在なお地下に埋没しているものと推定される。今回の調査結果をふまえた隣接地の継続調査が望まれる。

なお、この方形周溝墓群に近く、5世紀代以前の古墳が存在するが、方形周溝墓群と同時代、同地域の今一つの墓誌である古墳との関連を明らかにすることは、今後の極めて重要な研究課題となるであろう。³⁾

(2) 壴穴住居址(図版14~16、第11・12図、第21表)

立地 古墳時代の竪穴住居址は、南からⅣB・C区、VA区、VD区、の3地点で検出した。

いずれも山麓から湖岸へ向って舌状にのびる扇状地の上に営まれた集落址の一部であり、その中心部は、竪穴住居址を検出した地点の西方にひろがる水田下に、なお良好な状態で遺存しているものと思われる。

各集落址の南・北限は、それぞれ浅い谷によって明確に区分されているが、東・西限特に西方へのひろがりについては、今後早急に調査を実施して確認する必要があろう。

Ⅳ区の竪穴住居址群(図版14・15、第11図) ⅣB区からⅣC区にかけて南北約40mの範囲で、竪穴住居址10戸を検出した。

個々の住居址に関するデータは、別表(第21表)の通りであるが、観察結果をまとめれば、以下の通りである。

a. 住居址はいざれも古墳時代前期(庄内期~布留期)に属するが、各住居址間には多少の時間的先後があり、集落そのものは数十年間にわたって営まれたことがわかる。

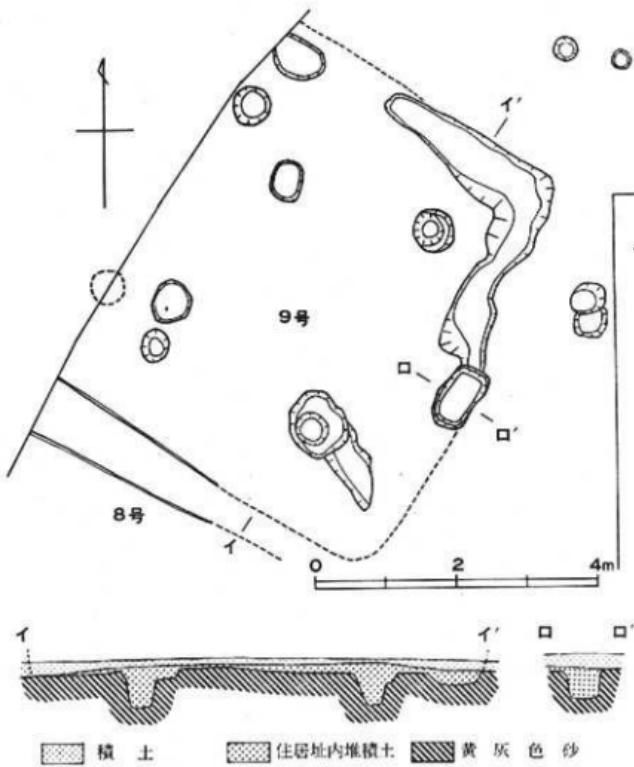
b. 10戸の竪穴住居址は、いざれも隅丸方形のプランを有し、著しい大小の差はない。

c. 各住居址とも四木柱で、柱穴の位置はほとんど重みのない方形に配置され、蓋然と

した家屋設計がうかがえる。

d. 竪穴中央または中央に近く、わずかに炭や灰が残る程度の跡が3例見つかっている。

e. 10戸中6戸の住居址内で、長方形または梢円形のピットが検出されている。このピットは、6例中1例を除いて、いずれも竪穴住居址内の西南壁中央部に位置する。二段掘りしたピットも2例あり、これは木蓋などを被せたものと想像される。ピットの機能については明らかでないが、住居の入口に設けられた何らかの施設であろうと考えられる。



摺図13 IV区9号住居址実測図

f. 3号住居址では、堅穴の内壁添いに幅約1mの溝をめぐらしたのち、再び溝内へ土を入れて床を平らにしている。どのような目的をもつ施設か明らかでないが、将来類例の発見をまって再検討したい。

V区の堅穴住居址（図版16、第12・14・15図） V区では、VA区、VD区東半の2地点で、それぞれ古墳時代後期（6世紀後半）の堅穴住居址を検出した。⁵⁾

まず、VA区の堅穴住居址1戸は、V区の堅穴住居址群が所在する扇状地から、浅い谷を隔てた北側の扇状地上に立地する。

砂層をベースとして建築したもので、床面はかなり凹凸がみられた。堅穴の東北壁中央部に、造りつけのカマドとみられる焼土塊の1ブロックがあり、また、堅穴の外側には、幅20~30cmの溝が、住居を囲むように弧状に走っていた。この地点には、7世紀以後の溝跡が縦横に走っており、遺構の検出には困難を極めたが、この堅穴住居が1戸だけ独立していたとは考え難いので、恐らく周辺の未調査地には、これと同時期の堅穴住居が群在して集落を形成していたものと推定される（図版19、第14図）。

次に、VD区の調査では、2戸の堅穴住居址を切り合いの状態で検出した。2戸とも全体を明らかにすることはできなかったが、堅穴住居の構造としては、VA区のそれとほぼ同じと考えてよいだろう。

VD区の調査地点付近は、もともと地形が南から北へ向って徐々に高くなっていたため、後世の数次にわたる削平を受け、当時の地形は甚しく損われている。検出した2戸の住居址も遺存状態が悪く、かろうじて床面の一部と堅穴の輪郭をたどれる程度であった（第15図）。しかし、1号住居址では2個の柱穴から径約12cmの柱根残欠を検出し、削平を免れた床面から屋根の構造材と思われる炭化木材と炭・灰とを検出した。また、この床面から砾石、鉄滓各1個の注目すべき遺物も発見されている。

次に、2号住居址では、堅穴の北西壁寄りに造りつけのカマド跡とみられる焼上を検出したが、その中から、ほぼ完形の土器壺（C230）と須恵器片とが出土した。

2号住居址は、1号住居址を切って建てられたものであるが、2戸とも古墳時代後期（6世紀後半）に属するものであり、一集落における住居の建て替えと存続期間の時間的な幅を示している。

なお、VD区については今回東半部で上記の通り2戸の堅穴住居址を発見したが、西半部にも古墳時代後期の遺物や炭・灰のブロック等が散乱状態で検出され、集落がこの地点にも及んでいたことを想定させる。

小 結 今回の調査で確認した竪穴住居址は、古墳時代前期に属するもの10戸、古墳時代後期に属するもの3戸であった。古墳時代前期の10戸は1集落址に属するもので、いずれも隅丸方形、四本柱で、竪穴内に炉を有し、また長方形又は椭円形ピットが設けられていたことがわかった。

古墳時代後期に属する3戸は2地点に分れており、それぞれの地点に発見した竪穴住居址の属する集落址の存在を想定した。この古墳時代後期に属する竪穴住居址も隅丸方形、四本柱であるが、古墳時代前期の例との差異は、竪穴内壁に造り付けのカマドを有している点である。造り付けのカマドの出現が何時かを限定することは、今回の調査で結論することはできなかったが、恐らくその時期は、5世紀後半から6世紀前半の数十年間に求めることができよう。

(3) 溝跡・その他

ⅢE区の調査（図版12・17、第13図） ⅢE区の調査は旧江若鉄道路線敷を対象に行った。旧路線敷は複合扇状地の裾部に位置する。地区全体にわたる試掘の結果にもとづき、発掘調査はⅢ区南端にしほって実施した。その結果、この地点では複合扇状地の接合部にできた浅い再開折谷に、花崗岩の導水土が、古くは縄文時代後期前半から以後中世に至るまでの遺物とともに次々と堆積していることが明らかとなった。この深い谷を走る自然流によって堆積した最下層は、旧路線敷土下より-2.7mを計り、花崗岩密閉粗砂よりなる無遺物層である。その平面的ひろがりは南北巾20mで依然深い谷地形を成している。以後この土層の上部に次々と堆積が行なわれた。

黒褐色泥土層は、植物繊維・茎を多量に含む有機質の泥土層である。縄文後期の土器片を主体に、微量の縄文晚期土器片を包含する。

茶褐色砂礫層は微量の縄文式土器を含む。径10cm前後の砾と粗砂とからなり、開折谷中央に堆積する。かなり急激な流水にともなって形成されたと見られる。この上部に3~4層の流れ堆積がある。總て無遺物である。断面図（第13図）に示されているように、これらの上層には、細砂を基本に粘土のブロックや微砂の間層が見られ、その堆積が一様の条件でなりたったものではないことがわかる。次いで、暗褐色泥上層が堆積した。微量の弥生前中期の土器片を含み、強い有機分をもつ。この土層は谷の中央で若干凹みながらもほぼ水平に堆積している。この上部に同時期の土器片を含む薄い青灰色微砂層が被る。おそらくこの両層は植物が繁茂していた段階とそれが冠水した段階の所産であろう。深い開折

谷はこの時点ではほぼ埋められてしまった。

その後、弥生時代後期に至る間、旧谷中央に幅約5mの自然流が形成された。断面図中央に記録されているように、多量の砂土と共に、径40cmを計る自然木・同大の木片、多量の雜木をともなっていることから、流れの激しさが想像される。(図版12) この流れ内に堆積したのが、灰褐色粗砂及び灰褐色砂で、微量の弥生式土器片が含まれていた。この段階以後、一帯は再び水を被ったようで、それにともなって灰褐色微砂層が堆積した。少量の庄内式土器を含む古墳時代初頭の土器群、建築材・木片群を一括包含する(図版17-2・3)。土質はきわめて細い粒子からなる砂土で、炭化物を微量含む。なお、建築材・木片群の一部が焼けこげているのが注意された。この微砂層の堆積は再びこの一帯を平坦にしたようである。黒色泥砂層がその上部に堆積した。この土層は基本的に攪乱されながらの流れ堆積である。この泥砂層は発掘区全面にはみられないものの、一層上位の堆積である黒褐色砂泥層下に広範囲にブロック状に残っていることから、もとはかなり広範囲に堆積していたものと見られる。5世紀後半から6世紀代にかけての土器群・須恵器を主体に、微量の古墳時代前期の土器が混在する。これらの土器群にともなって、木製鍬(CW1)・楕形木器(CW37)をはじめとする多種類の木器・木片類、子持勾玉・石製模造品(図版23)、手づくね七器(図版19)、管玉・ガラス小玉(図版22)等が検出された(図版17-4)。黒褐色砂泥層は6世紀末の土器を主体とし、平安時代にまで下る須恵器片をも含む。なお、一層上部の茶褐色砂泥は現代層である。一方、その後に実施した新路線部の調査では、均質な砂と微砂とからなる厚い互層状の水平堆積が見られ、現在の水田より発掘可能な2m下の深さまで無遺物であるという所見が得られた。この事実は、ⅢE区旧路線部で認められた遺物包含層出土の遺物が、量的に多く、それらが流れ堆積でありながら焼耗も少ないと、しかも生産用具や祭祀遺物等をともなっている事などから、調査地点の西方、複合扇状地の高みに相当大規模な複合集落地の存在を示していると言えるだろう。また、ⅢE区の調査地点から南方一帯に證實里縄文遺跡が所在するが、今回の調査で検出したⅢE区の谷は、證實里縄文集落が存在した当時、その北方を限るものであった。

IVB区南半の調査(第7回) IVB区南半の扇状地の高みには、弥生時代から古墳時代前期にかけての方形周溝墓群が検出されたが、それに重複して古墳時代後期以降の遺構も検出されている。しかしながら、付近一帯は現代の削平を受けており、遺構の残りは悪く、時期の決定も困難なものが多い。

▶ 2号溝・4号溝 4号溝はほぼ直角に曲る二辺が確認されているが、これと2号溝が

接続するものかどうかわからない。いずれも鋭く掘り込まれた人工の溝で、溝内には、方形周溝墓の周溝内と同様な土層の堆積が認められ、排水などの溝ではない。出土する土器は微少片ばかりであるが、縄文式土器～6世紀末のものがあり、溝底近くからも6世紀末の須恵器片が出土している。この溝の埋没年代は6世紀末と考えられる。

▶8号溝・9号溝 いずれも上半部を削平され底部が残存した溝で、人工の溝かどうかは不明。溝内には砂土が堆積し、その中から6世紀後半の土器片が出土している。

▶焼土・粘土・炭のブロック ほぼ「コ」字形の焼土のひらがりが検出され、その上に炭・粘土がのっており、柱穴住居址のカマドの残欠かとも思れるが、付近には柱穴らしきものも確認されておらず、その性格は明らかでない。一部は18号建物の柱穴の上におよんでおり、18号建物よりも新しいことがわかる。炭の中より6世紀後半の土器片が出土している。

▶13号・17号・18号建物 いづれも掘立柱の建物と考えられ、13号建物は3間×5間、17号・18号建物は2間×3間となっている。17号と18号建物は、その規模だけでなく、建築方位も同じであり、同一時期、同一性格の建物が推定される。いづれも、その柱穴の掘り方内に6世紀後半の須恵器片を含み、また、18号建物の柱穴上を覆う焼土・粘土・炭のブロックから6世紀後半の土器片が出土しているので、少なくとも、18号建物は6世紀後半にその年代を求めることができる。

IVB区北半の調査(図版17、第13回) IVB区北半の発掘調査地点は、北西から南東にむかって走る自然の流路であり、その流路の堆積土は、主に比叡山麓の花崗岩の雷礫土からなる砂疊層と泥砂層とから成り立っている。この土砂は、縄文後期から古墳時代終末期までの遺物を包含し、長期にわたって順次堆積したものである。流れの方向は年代が下にしたがって、次第に南により変っている。

流路の中のもっとも下層の堆積土は、こぶし大から大豆大までの礫を主体とした砂疊層で、砂疊に鉄分が付着して淡茶褐色を呈する。この層から縄文後期の土器片を微量検出した。次に砂疊層の上部を覆って、緑灰色泥砂層がある。この層は、時期不明の弥生式土器片を微量包含する。

緑灰色泥砂層の上部は灰白色砂疊層、更にその上部には灰白色粗砂層がのっている。粗砂から砂礫へ漸移しており、これは一層としてえることができよう。この堆積土中に含まれる遺物の中心は、いわゆる庄内式土器から布留式土器にいたる古式土器器の一層である。

ちょうどその頃、この流路は、北方の住居地域と南方の方形周溝墓地域とを隔する役目を果していた。遺物は、土器の他に各種木器、建築材、自然木なども多い（図版17-1）。

灰白色粗砂・砂疊層の上部には、庄内～布留期の遺物を含む暗灰色泥砂層があり、その上部に暗灰色粗砂層、茶褐色泥砂と褐色粗砂との互層、黒褐色泥砂層が重なっているが、これらの土層に包含される遺物の中心は6世紀後半代に属する。土器、木器は種類・量共に豊富である。この6世紀後半代の遺物を包含する土層は、その状態から推して、谷全面へ一挙に堆積したものであろう。

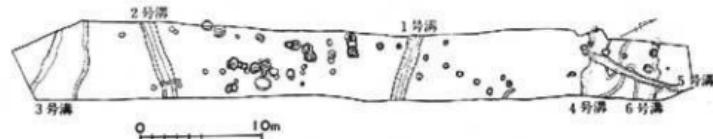
この流路の終末は、7世紀前半の頃である。最上層の堆積土である灰白色砂層がそれにあたる。遺物の量はすくない。

以上IVB区北半の調査地点における遺物包含層の形成過程を追ってきたが、概括すれば、この遺物包含層は縄文後期以来古墳時代終末期まで、複合扇状地の接合部にできた浅い側折谷を流れる小川の氾濫と緩やかな流れとが繰り返され、その都度、上流地域から日常生活用品が押し流された結果形成されたものであることがわかった。

この地点の調査結果によって明らかなことは、浅い谷をはさんで南・北にひろがる扇状地の高みに、縄文後期以来の人々の生活が展開していたことであり、しかもかっての生活舞台の中心は、調査地点よりも西方山麓よりの水田地帯にいまなお確実に遺存しているということである。

IVD区の調査（図版18） IVD区の北半部では、6条の溝跡を検出した。西南から東北の方向に、幅6m前後にわたって調査を実施したが、検出した6条の溝跡のうち、1・2・5号溝は人工の溝跡であり、3・4・6号溝は自然の流路であった。

まず、1・2・5号溝は、いずれも黒褐色泥砂層上面から切り込んでいる。溝の側壁は直線的に鋭く切ってあり、溝幅もほぼ一定であることから、人工の溝跡と判断した。2号溝では、厚板一枚が橋を思わせる状態で検出された（図版14）。



図版14 IVD区遺構実測図

人工の各溝からは、6世紀後半代の須恵器、土師器が出土しており、1号溝では、他に

枘穴を有する木器、下駄などが出土した。なお、2号溝内最上部の砂層からは7世紀後半に属する須恵器が一片検出されている。

次に、4号溝と6号溝とは、黒灰色泥沙層よりも下層から落ち込みの始まる溝で、両溝は逆N字形に連続している。溝が不整形で、幅や底の傾斜が一定でないところから、これを自然の流路と判断した。溝内堆積土中に含まれる遺物は極めて少量であったが、いずれもそれは6世紀後半に属する。

また、3号溝の場合も、やや末広がりの平面形で、側壁や底の凹凸が激しく、自然の流路と考えられる。

以上、ND区の自然流路とみられる溝跡は、いずれも西北から東南にむかって走るが、これは山側から湖岸の方向へ緩傾斜しているもともとの地形によるものである。なお、これらの各溝跡がその機能を果たしたのは、いずれも短期間であったと推測される。

ND区北半部では、上記溝跡のほかに掘立柱建築遺構の柱穴群が点々と検出され、中には柱根を残すもの、一定の間隔と方向とをもち一棟を想定できるものもあったが、その所属年代は、上限が溝跡の年代をさかのぼらず、その下限は、宋錢など中世の遺物を含む包含層が柱穴上を覆っていることから、中世以前に求められる。⁶⁾

VA区の調査（図版19、第14回） VA区の調査地点は新路線の変電所建設予定地になっていたため、東西約30mにわたって発掘した。この地点では、前項で述べた通り古墳時代後期の1号窓穴住居址のほか、人工の溝や自然流路多数を検出した。以下、各溝跡の調査結果を年代順に概述しよう。

▶26号溝 幅約3m、深さ1.2mの自然流路で、暗灰色泥沙層の下部の黄褐色粗砂層上面から落ち込んでいる。したがって、暗灰色泥沙層を切っている溝よりも年代が古い。溝内からは少量の土師器、鏡（CW2、CW3）などの木器が出土している。

▶18号窓溝（図版15） 暗灰色泥沙層からほぼ垂直に近く掘り込まれた人工の溝で、幅約1m、深さ約0.8mを測り、溝は1辺8m前後の方形にめぐるものと想定される。溝の内側の壁に添って溝底に杭列があり、杭の多くは抜取られて樹皮だけが遺存していた（図版15）。溝内の堆積は下部の3層を除けば種々の土が混合した埋土からなり、この窓溝が機能を了えたのち、埋め立てられたものと判断される。埋土からは6世紀末の土器が出土している。

▶25号溝 暗灰色泥沙層から垂直に近く掘り込まれた幅約0.5m、深さ約0.8mの人工溝であり、18号窓溝の東北隅辺りからはじまって東南方へ直線的に走る。あるいは18号窓



図15 VA区18号溝東北辺内の坑列



図16 VA区19号溝の溝内セクション

溝に関連する溝かも知れない。溝内の堆積は、最下層の黄褐色砂層を除けば埋土と考えられる混合土であり、18号開溝と同じ状態である。この25号溝を排水溝と考えた場合、それが機能した期間はかなり短かかったと推測される。埋土からは6世紀末の土器が出土している。

▶19号溝 青色砂層から切り込んだ人工の溝で、幅約1m、深さ約0.6mを測る。西北から東南に向って走るが、後代の12号溝によって切られている辺りから南は、25号溝と重複していた。溝内堆積の状態から排水溝として機能しながら埋没したと思われるが、溝底には手斧、鉈の削り屑とみられる木片が層をなして遺存していたことから、上流に木材加工または建築の現場が所在したことを想定させる（図16）。溝内堆積土層の各層から6世紀末の土器片が出土している。

▶13・14・17・24・27号溝 すべて暗灰色泥砂層を切って流れる自然流路で、かっては西北から東南へ

むかって走り、池状造構へ注いでいた。各溝の新旧関係は、24号溝→27号溝→13号溝→14号溝の順になるが、各溝内からは6世紀末の須恵器、土師器、各種木器が出土している。

▶12号溝 ほぼ東西に一直線に走る溝で、幅約1.5m、深さ約0.5mをはかる人工の溝である。18号開溝、25・19・22号溝および1号竪穴住居址を切っており、VA区の各溝の中では最も新しい時期に属する。溝内の堆積は茶褐色泥砂層と黄灰色砂層からなる。旧路

縁部分では、その上部へ更に青灰色粘土層がのっているが、この土層は整地の際のものと考えられる。この整地作業は、旧路線部分の溝の南側3mと18号溝北辺部までの間にみられ、整地層内からは奈良時代の土器が出土している。溝内より6世紀末の多くの土器と共に奈良時代の須恵器小片が1片出土している。

V A区各溝の調査結果は上記の通りだが、溝以外に、18号西溝、12号溝と重複して、3間×4間の掘立柱建築遺構が検出されている。その年代は明らかでないが、切り合の関係から12号溝よりも古く、18号西溝よりも新しい時期に属するものと思われる。

次に、18号西溝の問題だが、V D区西半部でも同じ性格の遺構と思われる2・4号方形西溝が検出されている(第15図)。18号西溝の場合は、その方向が1号竪穴住居址の方向とはほぼ一致していることから、同時期の遺構とも考えられる。この西溝の内区にはなんらの施設も発見されなかった。

また、12号溝の方向が、ほぼ東西線にのっていることから、古代の上地区画と何らかの関係をもつ溝と思われる。

V D区西半部の調査(図版16・18、第15図) V D区は全般にわたって後代の削平を受け、遺構はすべて上半部を失っていた。そのため、各遺構は表土の直下より検出され、しかも遺構につながる生活面が失われていたので、年代の確定がかなり難しかった。

V D区西半部では、溝跡、掘立柱建築遺構を検出したが、各遺構の調査結果は以下の通りであった。

▶ 1号溝 溝の大半は後代の削平を受けて消滅し、浅い皿状の溝底のみ残存する。溝内堆積土は黒色泥砂層で、排水用の溝とは考え難い。人工の溝と思われるが、性格は不明で、溝内より6世紀後半の須恵器・土師器片が出土している。

▶ 4号西溝(図版16-2) V A区18号西溝と全く同様の方形西溝で、溝の一辺約8m、幅約0.8m、残存する溝の深さ約0.3mを測る。西溝の東南辺の中央部に、約1mほど溝の断面があり、しかも溝の両端部溝内には径0.8m、深さ0.6mの柱穴と思われる小ビットがあった。この西溝の性格を考察する上で、重要な手掛りを与えるものであろう。溝内の堆積土は黒灰色泥砂層からなり、この土は水流による堆積土ではなく、何らかの理由で一時に埋められた不均質な土である(神戸17)。溝内堆積土中より、6世紀後半代の土師器・須恵器、焼土・灰・粘土塊などが出土しており、その状態から推測すれば、この方形西溝は、6世紀後半代の生活面を廃してつくられ、その後短期間のうちに再び埋め戻されたと考えられる。

▶ 2号西溝 4号西溝とはほぼ同規模、同方向の方形西溝で、約7mの間隔を置いて並



挿図17 VD区西半4号溝（方形溝）
東南辺と溝内セクション



挿図18 VD区西半5号遣構内の土縫出土状態
に、東西に走る大溝をはさんで南北両地点で、規則的な配置をもつ柱穴群を検出したが、その年代、規模などは不明である。なお、大溝北側の柱穴群中には、柱根を遺存するものが3例あった。

VD区西半の遣構は以上の通りであるが、注目されるのは2・4号圓溝である。その性格は明らかでないが、先述のVA区18号圓溝と同じ性格の遣構と考えられ、今後類例の発見を待ちたい。

ぶ。大溝や戦後の攪乱溝により大幅な破壊を受けているが、復原すれば、4号圓溝と同じ性格、同時期の遣構としてまちがいないだろう。溝内堆積土や遺物については、4号圓溝と全く同じである。

▶ 3号溝 4号圓溝北隅から東北方へのびる溝で、溝底は4号圓溝とレベル差なく連続する。この溝は、4号圓溝北隅から約4m東北よりの辺りから乱れており、その平面形は明らかでない。3号溝東南に5号遣構と名づけた地点があるが、これは堆積状態、方形圓溝との比較などから、明らかに溝跡であり、しかも一見3号溝に対応する位置にあるので、両者は相関連する可能性もある。3号溝の遺物や溝内堆積土は、2・4号圓溝と同じである。また、5号遣構の場合も同様で、遺物としては、土鍬が焼土塊とともに一括出土している（挿図18）。

VD区西半部では、この他に掘立柱建築遣構の柱穴が点在する。ことに、

柱穴群が点在する。こ

VD区東半部の調査（図版18・20、第15図）　VD区東半部は、今回調査した湖西線関係遺跡の最北端に当る。四半部と同様にここでも溝跡、掘立柱建築遺構や、竪穴住居址（前節VD東半1・2号住居址）を検出しが、各遺構の上半部は大幅な削平を受けていた。

▶ 8号溝　ほぼ南北に走る人工の溝で、現存幅約2m、深さ1mを測る。溝内には泥土と粗砂とが互層をなして堆積しており、最上層から数個体の古墳時代前期に属する土師器（C201、C203）が出土し、下層からも同時期の土師器片が微量出土した。

▶ 4号溝　垂直に近く掘り込まれた人工溝で、現存幅約0.5m、深さ約0.4mを測る。溝内堆積土は砂層で、その中から弥生式土器片と古墳時代前期に属する土師器片とが出土している。1・2号住居址と3号溝とによって切られている。

▶ 7号溝　溝の上半部は削平され、わずかに浅い皿状の溝底を残すだけで、人工かどうかは不明である。溝内砂層より、少量の土師器・須恵器片が出土した。

▶ 6号溝（図版20）　現存幅約3～4m、深さ約0.8mの溝である。溝内には護岸または建築のための石垣に用いたと思われる花崗岩の切石や杭・板材が出土した。この溝の下部堆積土（砂礫と灰褐色砂）からは5世紀末～6世紀末までの土師器、須恵器が出土し、花崗岩の切石を伴う上部の堆積土（灰褐色砂）からは7世紀前半までの須恵器、土師器が出土している。灰褐色砂層からは、他に下駄、浮子状木製品、曲物、建築材など多量の木製品が出土した。溝内の花崗岩切石群は護岸用の石材と考えれば、6号溝は6世紀末ごろまで自然の流路であり、その後護岸工事によって整備され、7世紀前半ごろには人工の溝として機能していたものと考えることができる。また、この石材を建物の建築に伴う用材とすれば、至近地点に7世紀代の人規模な建造物の存在を推定することができよう。

▶ 3号溝・5号溝　両溝は西北から東南へむかって、ほぼ平行して走っているが、溝の大半は後代の削平によって失われ、わずかに溝底のみを残している。溝内砂層からは、6世紀後半から7世紀前半までの須恵器、土師器が出土しており、6号溝とはほぼ同時に共存していたものと思われる。人工の溝かどうかは不明である。

▶ 1号溝　溝の西側壁と溝底の一部を明らかにし得ただけであるが、かなり幅の広い自然流路である。溝内からは6世紀後半の須恵器、土師器が多量出土した。

▶ 2号溝　溝底の一部が遺存しており、人工の溝かどうか明らかでない。溝内砂層から奈良時代の須恵器が出土しており、VD区東半部では最も新しい時期の溝跡である。

上記の溝跡の他に、VD区東半部ではほぼ全域にわたって柱穴状の小ビットが検出されたが、そのうち1・2号住居址西南では、3間×4間（5間か？）の掘立柱建築遺構が確

認できた。上部が削半されていたため、この建築遺構の年代は不明であるが、溝跡、住居址などとの切合い関係から7世紀前半以降のものと推定される。

2. 遺物の検討

(1) 方形周溝墓出土の土器 (図版65., 第52図, 第23表)

Ⅲ F 区方形周溝墓、Ⅳ B 区 1 号方形周溝墓、および方形周溝墓と考えられるⅣ A 区溝状遺構からは、いわゆる布留式に併行する土師器が出土している。この内、Ⅲ F 区方形周溝墓からは良好な資料が得られた。一部に搅乱を受けているが、本来は完形に近い状態で溝内に埋没していたと考えられる壺・甕・椀が、Ⅳ B 区で検出された弥生時代の方形周溝墓と同じ状況で周溝内より出土した (図版13)。この出土状況や土器自身の型式学的検討から、これらの土師器は同時期の所産と考えて誤りはない。⁷⁾ 壺 (C 4) は小岩江北遺跡出土の甕と基本的な点で類似性が認められるが、体部上半部外面を横方向に刷毛目調整する一般的特徴に反して、C 4 では全て縱方向に刷毛目調整するという差異がある。壺 (C 1) にみられる頸部突帯は、当地方のいわゆる古式土師器甕によくみられる装飾法であり、弥生時代後期以来の伝統とみるとことができよう。

Ⅳ A 区溝状遺構出土の壺に、その大半が破損していて全体の形態が明らかでないが、Ⅲ F 区方形周溝墓出土の甕 (C 1) と同様のものであろう。

Ⅳ B 区 1 号方形周溝墓の周溝内からは、Ⅲ F 区方形周溝墓にみられたような完形に近い土器の一括出土が認められなかった。そのため、出土した小片の土器が方形周溝墓に伴なうものかどうか明らかではないが、甕 (C 9) のように小岩江北遺跡出土のものに類似するものが認められる。

(2) 穹穴住居址出土の土器 (図版65. 第52図, 第24表)

穹穴住居址出土の土器は、その多くが小片であり、充分な検討の対象となり得ない。また、少しでもその形態のわかる土器に関しては、住居址の床面に密着して出土したものは、Ⅳ 区 1 号住居址の甕 (C 23)、Ⅳ 区 4 号住居址の甕 (C 30)、Ⅴ D 区東半 2 号住居址カマド内出土の甕 (C 230) など少數にすぎず、多くのものが覆土内などの出土になるため、明確な

一括資料としてとらえることはできなかった。しかしながら、第24表に観察したように、IV区の堅穴住居址出土の土器は庄内式～布留式併行と認めることができ、VA区1号住居址、VD区1・2号住居址出土の土器は、6世紀後半代のものである。

IV区の堅穴住居址出土の土器は、布留式併行のものを主体とするが、庄内式併行と考えられるものも少量含まれている。1)毎の一括資料としてはとらえきれないで全体をまとめて扱うこととした。庄内式併行の時期に考えられる上簡器には壺がある。この内壺A (C18～C21) は「S字状口縁」で、壺B (C30) は外反する口縁部をもつ。これらの壺は、次項で述べるⅢE区下層の土器に類似している。この他にも、壺 (C15)、鉢 (C38) が同時期のものとなる可能性がある。

布留式に併行する時期のものには、壺 (C11～14・C16)、壺 (C22～C29・C33・C39・C40)、高杯 (C43)、鉢 (C31・C32)、小型杯 (C41・C42)、小型丸底壺 (C17)、小型器台 (C34～C37) がある。この内、壺は小若江北遺跡出土のものに類似し、また、小型杯、小型丸底壺、小型器台は小型三種の土器と称され、布留式の指標となるものである。²⁾

(3) 各地区出土の土器 (図版66～75、第53～66頁、第25表)

前項において方形周溝墓および堅穴住居址出土の土器を扱ったが、それ以外に各地区より多くの古墳時代の土器が出土している。その内、出土量の多い6世紀後半の土器と、それ以前の土器とに大きく二分して扱った。6世紀後半の土器は、各地区で検出された溝、自然流路などから多量に出土し、特に6世紀末の土器がその主体を占めている。一方、6世紀後半以前の土器は、主にⅢE区およびIVB区の開折谷から出土し、これを整理の段階で古い順にⅢE区下層、IVB区下層、ⅢE区上層、IVB区上層の4群に分類した。この内、ⅢE区下層に分類したものはⅢE区灰褐色微砂層出土の一括土器であるが、IVB区下層(灰白色砂層、灰白色粗砂層、暗青灰色泥砂層)、ⅢE区上層(黒色泥砂層)、IVB区上層(暗灰色粗砂層、紫褐色泥砂層など)に分類したものは、それぞれ各層の主体をなす土器を抽出したもので、時期の異なる混入土器は除外した。

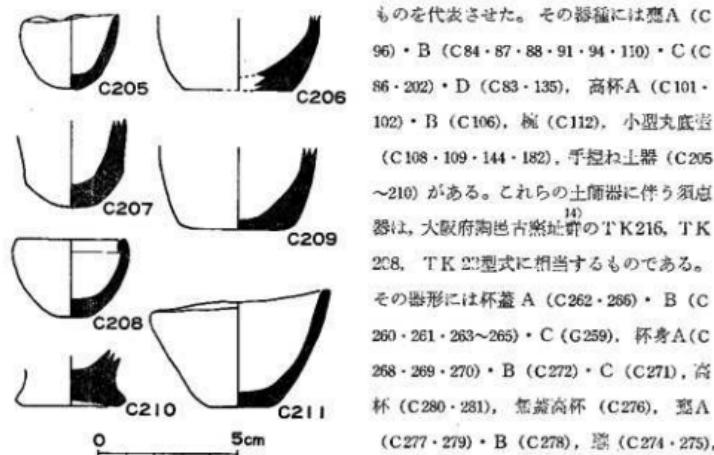
ⅢE区下層の土器 (図版66～70、第53～59頁) ⅢE区灰褐色微砂層出土の一括土器について、以下のところこれを時期的に細分する積極的根拠はなく、同時期のセットとして扱えた。第25表に示したようにその器種には、壺A (C44)・B₁ (C46)・B₂ (C49)・C₁ (C78)・C₂ (C82・181)・D (C45・56・151)・E₁ (C48)・E₂ (C50)、壺A (C51・52・54・57・124)・B (C53・55・58・115・116・150・153・180・193・201)・C₁ (C69・90・136)・C₂ (C

63・65・67・70・122・154)・D (C59・64・92・129・131・132)・E (C60・137)・F (C61・62・97)・G (C117), 鉢A (C47)・B (C183)・C (C111・141), 壺 (C158), 器台 (C100), 高杯A (C66)・B (C73・74・164), 手握り形土器がある。壺, 壺類の底部は, 壺D類が尖り気味の丸底と考えられる以外は, 全て平底ないし上げ底である。壺Aは近江地方の弥生第5様式の壺から直接系譜を引くものであり, 鉢Aの施文も近江。伊勢湾地方における弥生式以来の伝統を引くものであろう。壺Eはやや小型で北陸地方の特徴をもった土器であり, 器台 (C100) は鼓形器台で, 同じく北陸地方の特徴をもつたものである。壺D類は, 手法・胎土・色調とともに, 嵌内の庄内式の壺と全く似似し, 嵌内からの搬入品である可能性が強い。¹¹⁾ 壺C₁・C₂類は「S字状口縁」であるが, 文様で飾るC₁類は琵琶湖地方独特のものと思われる。C₁・C₂類は全て平底で, 台の付くものは1例もないことは注目すべきことである。本型式の内容を要約すれば, 在地の弥生式土器の伝統を強く残した土器群に, 少量の北陸的土器, および嵌内からの搬入品と思える土器を含んでいると言える。

IV B区下層の土器 (図版68~70, 第54~59図) IV B区の開拓谷では, 下層の灰白色砂礫, 灰白色粗砂, 暗青灰色泥砂の3層から, 布留式 (この場合, 小若江北遺跡の土器をもって代表させる) を最も新しい時期とする須恵器出現以前の上簡器が多量に出土した。この3層の内容は時期的に分けられない状態にあるので, IV B区下層式として, 布留式併行期のセットを摘出し, これに他地点出土のものを加えた。その器種には壺A₁ (C79)・A₂ (C168)・B (C80・133・134・149)・C (C89・C138)・D (C125)・E₁ (C81・85)・E₂ (C126・165・167)・F (C77・119)・G (C98), 壺A (C113・166)・B₁ (C93・95・99・127・128・130・155・156・169・199)・B₂ (C176)・C (C152)・D (C123・160・177・178・179)・E (C114・203)・F (C184)・G (C142・157), 小型丸底壺 (C197), 小型杯 (C139・140), 高杯A (C145・161・175・196)・B (C187), 小型器台A (C120・162・186)・B (C172), 鉢A (C143・159)・B (C118), 手握ね土器 (C211)がある。このうち壺A₂ (C168)と壺B₂ (C176)はこの型式よりやや古い時期に位置づけられる可能性がある。壺E₁類は頸部突帯の手法が当地方の特色を示しているが, III F区の方形周溝壺からこの型式と類似した壺 (C4) とセットで出土しているので, この型式に入れたが, 次の初期須恵器に併行する時期まで続くものかどうか明らかでない。壺B・E₂類, 高杯A類, 小型丸底壺, 小型器台, 小型杯は嵌内中央部における布留式のセットであり, 壺B₂・D類は近江・伊勢湾地方から東日本に多い土器である。壺D類は「S字状口縁」の台付壺で, 口縁部以外の全外面に, 粗い刷毛目ないしキャラクタリティの調整を行なっている。これは, III E区下層の壺C₂類 (C63・65・67・70・122・154)

に比べてかなり整然とした調整である。この台付壺はⅢ E区灰褐色微砂層には1例も出土しなかったもので、布留式に入り初めて出現するものであろう。当地域では、古い時期の「S字状口縁」の壺が全て平底であったように、一般に台付きの土器は稀である。台付きの上器は、尾張以東に多く見られ、近江地方では、湖北・湖東に多い。したがって壺D類は、Ⅲ E区下層の壺C₁・C₂類と直接つながるものではなく、より東方地域の影響下にあった土器と言える。この時期の壺の中で壺D類が占める割合は僅かであり、袋内の壺B₁類が圧倒的優位にある。

Ⅲ E区上層の土器（図版67～70・73、第54～59・63図） Ⅲ E区開折谷の黒色泥砂層は、時期的にかなりの幅のある土器を含んでいて、これを型式分類すれば、須恵器出現以前、初期須恵器併行期、6世紀代と大きく3期に分けられる。このうち、質・量ともに中心を占めるものは、初期須恵器併行期のものであるので、Ⅲ E区上層は、初期須恵器に併行する



図版19 Ⅲ E - IV B区出土の手づくね土器実測図 筒型器台（C202）がある。

Ⅳ B区上層の土器（図版68～70・73、第54～59・63図） Ⅳ B区開折谷の暗灰色粗砂層、茶褐色泥砂層には、6世紀後半を最も新しい時期とする時期がある土器が含まれていた。この内、他にあまり出土しなかった6世紀前半～中頃の土器をもって、Ⅳ B区上層の代表とした。土器には、当地域で6世紀代には定型化する大壺（C170・188・191）・中壺（C189・192）・小壺（C198・200）の三種類の壺、把手付鉢（C195）、瓶（C190）、鍋（C204）

ものを代表させた。その器種には壺A（C96）・B（C84・87・88・91・94・110）・C（C86・202）・D（C83・135）、高杯A（C101・102）・B（C106）、椀（C112）、小型丸底盃（C108・109・144・182）、手捏ね土器（C205～210）がある。これらの土器に伴う須恵器は、大阪府鶴見古窯址群のTK216、TK208、TK23型式に相当するものである。¹⁴⁾ その器形には杯蓋A（C262・266）・B（C260・261・263～265）・C（G259）、杯身A（C268・269・270）・B（C272）・C（C271）、高杯（C280・281）、無蓋高杯（C276）、壺A（C277・279）・B（C278）、壺（C274・275），

があり、須恵器には、杯、甕、碗、壺などがある。古墳時代の土器の内、今回の調査では最も資料に乏しい時期である。

6世紀後半の土器（図版71・72・74・75、第60～62・64～66図） 6世紀後半の土器は各地区から多量に出土しているが、そのほとんどが溝ないし自然流路内から検出されたものである。従って6世紀後半の内でも時期差のある土器が混在して出土しているが、量的に主体を占めるものは6世紀末の土器である。特にⅡH区黒色ビート層からは良好な資料が豊富に得られたので、この層出土の土器を中心に検討することとした。

須恵器には杯、碗、高杯、甕、短頸甕、平瓶、壺、器台がみられ、他地区出土の例で補足すると長頸甕、横瓶、提瓶、壺が加わる。杯は全体に浅く扁平な形態で、立ちあがりは矮少化し内傾の度合いが強い。底部の箇削りはおこなわれなくなり、また杯蓋の天井部にも箇削りをおこなわないものが現われている。高杯（C334～337）は長脚二段三方透しが主流を占めている。中型甕（C344）は例外なく甕成が悪く、口縁部の端部を上方もしくは内方につまみ上げている。この口縁端部の特徴は、肥厚の度合いこそ違え大型甕（C349）にも認められる。

土師器には、杯、碗、甕、壺形土器、瓶、壺がみられ、他地区出土のものを補足すると高杯、鍋などが加わる。杯（C216）は全体を横ナデ調整し、碗（C212～215）は外面を箇削りし、内面は刷毛による調整が顕著である。甕（C224）は内面の細かい箇削りに手法の特徴がみられる。甕は大きさによって3種類に分けられるが、その大小を問わず口縁部のつくりに当地域の特徴があらわれている。口縁部はやや内凹気味に外傾し、特に大型甕においてより顕著に認められる。口縁端部のおさめ方には大きく2種類のタイプがあり、一つは端部をつまみ上げるもの（例えばC222・231・258など）、一つは端部上端面が内傾し平らなもの（例えばC249・251・255など）である。一方この様な特徴を示さない甕も少数ながら存在する。小型甕のC220・221・227は外反する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。C228も外反こそ顕著ではないが、端部を丸くおさめている。この中で、C249、C251、C255に代表される甕は当地域の獨特の特徴を示すことによることに加えて、この特徴をもつ甕に限って、器形の大小を問わず口縁部の内面に箇記号がしばしばみられることが注目される。¹⁵⁾

小 結 古墳時代の土器の内、6世紀後半以前の土器を分類して古い順にⅢE区下層→ⅣB区下層→ⅢE区上層→ⅣB区上層とした。これを從来の畿内の土器型式との関連からみるならば、それぞれ、庄内式併行期（小苦江北遺跡で代表させる）→布留式併行期→船橋

O II・O III併行期（5世紀後半）→船橋O IV・O V併行期（6世紀前半～中頃）となる。III E区下層の土器とIV B区下層の土器とを検討すると、その内容が一変していることが認められる。すなわち、庄内式に併行するIII E区下層では、弥生時代以来の伝統を継ぐ在地性の強い土器が主体をなし、そこに少量の北陸的土器や畿内中央部からの搬入土器が認められた。しかし布留式に併行するIV B区下層では、畿内的土器が主体を占め、前代から系譜をひく在地性の強い土器が極端に少くなっている。この現象は当地域に限られることではなく、布留式の影響力は質的・量的にも、また距離的にも庄内式のそれをはるかに越えている。¹⁷⁾

布留式以後、当地域では畿内の影響を強く受けた土器が認められ、5世紀後半（陶邑のTK216型式）には須恵器もみられるようになる。こうした中にあって、6世紀後半の土師器には近江型とともに得る強い地方的特徴が現われてくる。土師器底の口縁部のつくりに認められるこの特徴は、7世紀前半の滋賀県孤栗古墳群出土の甕や¹⁸⁾7世紀後半のVD区大溝出土の鍋（D115）にもみられ、また時代は下って8世紀の例であるが、大津市中保町遺跡や平城宮跡出土の甕などにもみられ、かなり長期間におよぶ近江独特の土師器の存在が考えられる。6世紀後半のこの特徴をもつ土師器底に筆記号がよくみられることは、合わせて注目する必要がある。

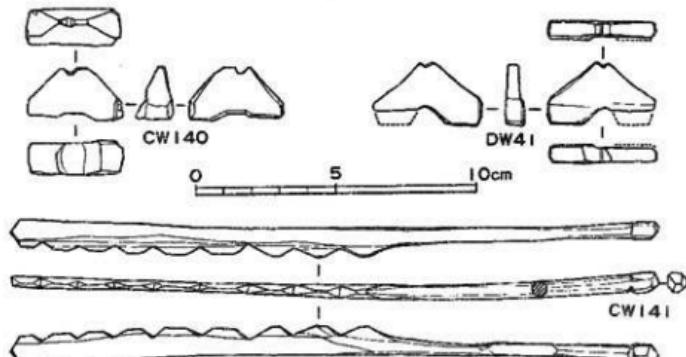
(4) 木器・その他

木器（図版76～83・90・91、第67～74図、第26表）　今回の調査によって、各地区から古墳時代の遺物を含む多くの溝・自然流路・開析谷が発見された。扇状地の裾部に立地するため地下水位が高く、これらの溝や開析谷の堆積内には、木器や加工木・自然木が保存の良い状態で多数発見され、今回の調査の一つの成果となった。特に、II H区の旧鹿川河道、III E区開析谷、IV B区開析谷、V A区の各溝、VD区東半6号溝からは多くの木器が出土して注目された。²¹⁾

木器に関しては、溝や流路の堆積の性格上年代の確定はできないが、内に含まれる土器の検討により、大半のものが6世紀後半（特に終末）に属すると考えられる。しかし、それよりも下限を古くおさえられるものも発見されている。III E区灰褐色微砂層出土の箱底板（CW40）、梯子（CW75）、組材（CW77）、板材、柱材などは庄内式併行の時期のものと考えられ、IV B区の灰白色粗砂層と暗青灰色泥砂層出土の鍔（CW4）、鍔（CW7）、斧柄（CW12）、轡（CW36）、鉢（CW50）、鉢形木器（CW49）、桶（CW41）、棒状木器（CW

70・CW74)などは庄内式～布留式の時期に属している。

各地区出土の6世紀後半の木器には豊富な種類がみられる。農具には鋤、鋤、鎌柄、代搔き、田舟、杵、砧などがあり、工具には手斧柄がある。各種の生産活動に使われたものには、うき状木器、糸車、木鍤などがあげられ、日常用具としては案、下駄、桶があり、容器類には、盤、箱、鉢、桶、曲物がある。組材、板材などはⅣB区の開拓谷から特に集中して出土している。祭祀に使われたと思われる斎中も出土している。その他に多くの用途不明の木器があるが、特殊なものとして、VA区1号住居址内から出土した琴柱(CW140)と不明木製品(CW141)が注目される(挿図20)。



挿図20 VA区1号住居址出土の琴柱・用途不明木器とVA区出土の琴柱実測図

出土した木器の内、多くの下駄が発見されたことは注目される。下駄の起源に関しては現在明らかでない。²²⁾弥生時代の田下駄や大足を別にして、現在知られている最古の下駄に関する資料は、京都市鏡山古墳などの古墳出土滑石製模造品である。²³⁾これらの模造品では、台板の形は不整形であり、前ツボは一方に偏している。歯は前・後に開き、後孔が後歯の後側にあけられている。5世紀代と考えられているこれらの模造品と今回の調査による6世紀末の下駄とをくらべると、台板の形態や後孔と後歯の位置関係に差異が認められる。一方新しい時代の下駄は、第4章で扱っているが、前ツボが中央にくる点や、台板幅よりも歯幅が大きくなる点などの差異がある。²⁴⁾

古墳時代には、下駄は一般的な履物ではない。しかし、今回の調査地区からは小供用と思われる小形の下駄を含む多くの下駄が出土したことは注目される。下駄がどの程度普及

していたものか、あるいはどのような人々がどのような時に覆物として利用したものか明らかではないが、当地域の山裾に渡来者の残した墓と考えられている群集墳が数多く存在することは、考慮する必要があろう。

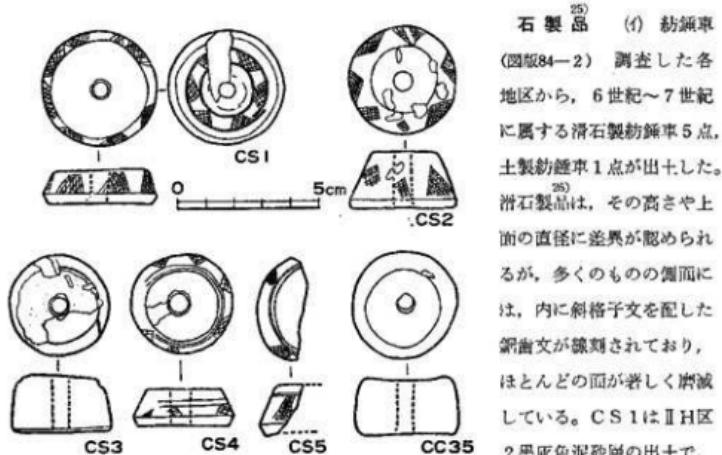


図21 各地区出土の劔輪車実測図

また高さも低い。側面のみならず、底面にも文様が刻まれている。重量は38g。CS2はVA区14号溝内の出土で、上面径は小さく、高さは逆に大きい。側面に文様が刻まれており、重量は40g。CS3はVA区暗灰色泥砂層の出土で、底径と上面径との大きさの差があまりなく、高さも大きい。文様は認められず、重量は40g。CS4はVD区西半黒色泥砂層の出土で、やや小型であり、重量は25g。側面に文様が刻まれている。CS5はVA区18号溝内の出土であるが、小破片である。側面に文様が刻まれている。土製品(CC35)はVD区東半6号溝内の出土で、堅硬な土師質のつくりで、重量は30g。重量や形態から判断して、劔輪車と考えた。CS1とCC35は6世紀後半～7世紀に、CS2～CS5は6世紀後半にそれぞれ比定される。

(d) 砧石(図版85-3) 各地区より多くの砧石ないしはそれに類するものが出土しているが、時期の測定できるものは5点あり、全て安山岩を使用している。CS11はⅤ区1号住居址の出土で、相対する2長側面が使用によって凹んでいる。一部欠損するがほぼ完形品である。CS7はⅣ区5号住居址の出土で、細い条痕が多数認められる。CS8・10

石製品 (f) 劔輪車

(図版84-2) 調査した各地区から、6世紀～7世紀に属する滑石製劔輪車5点、土製劔輪車1点が出土した。

²⁵⁾ 滑石製品は、その高さや上面の直径に差異が認められるが、多くのものの側面には、内に斜格子文を配した網目文が彫刻されており、ほとんどの面が著しく磨滅している。CS1はⅡH区2黒灰色泥砂層の出土で、上面径が他に比して大きく、

とともにⅢE区黒色泥砂層の出土で、CS10は一端に孔のある携帯用の砥石の断片であろう。

CS9はVD区東半1号住居址の出土で、2長側面に細い条痕が認められる。CS7・11は4世紀末～5世紀に、CS8・10は4世紀～6世紀に、CS9は6世紀後半にそれぞれ比定される。

(iv) 玉類(図版85—2) 各地区からガラス小玉、管玉、勾玉などの玉類が出土しているが、この内、ⅢE区出土のガラス小玉、管玉は、滑石製模造品や手捏ね土器などと、本来セットであった可能性がある。また、ⅣB区の硬玉製の勾玉未製品は、玉類の生産のあり方の一端を示しており、注目されよう。

ガラス小玉は2点あり、CS12はⅢE区黒色泥砂層の出土で、トルコ石の青色を呈する。CS13はVA区茶褐色砂泥層の出土で、紫色を呈している。管玉は4点あり、内1点(CS14)は破損品である。CS14・15はⅢE区黒色泥砂層の出土で、CS14は淡緑色の珪質灰岩製品、CS15は両面穿孔の蛇紋岩製品である。CS16はⅡH区黒灰色泥砂層の出土で、両面穿孔の蛇紋岩製品である。CS17はVA区黒色砂層上部の擾乱土中よりの出土で、両面穿孔された濃緑色の碧玉製品である。本例は、方形周溝蓋になる可能性があるVA区の溝状遺構付近の擾乱土中より出土しており、この遺構に伴ったものと考えられる。

勾玉は2点あり、CS18はⅣB区灰白色砂礫層の出土で、硬玉製の未製品である。硬玉の品質は悪く、わずかに緑色の部分があるだけで穿孔はしておらず、一部には表皮さえ残している。CS19はⅢD区耕土の出土で、片面穿孔による濃緑色の碧玉製品である。CS20はⅢD区青灰色砂泥層の出土で、中央部に溝がめぐり、両面穿孔の結晶片岩製品である。

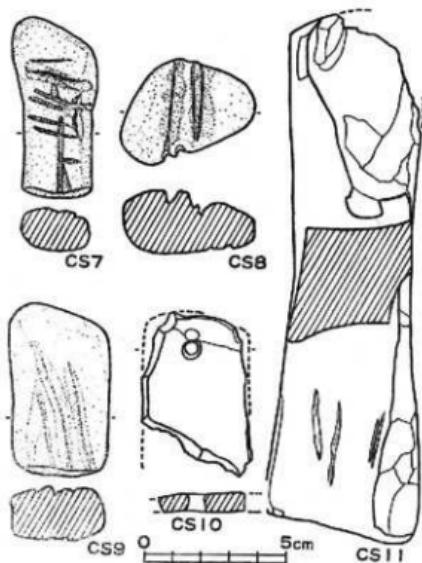


図22 各地区出土の砥石実測図

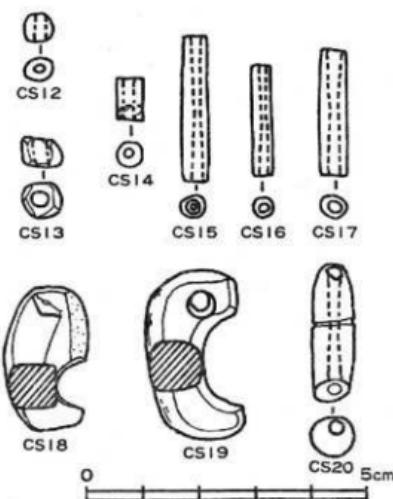


図23 各地区出土の玉類実測図



図24 III E 区出土の石製模造品・子持勾玉実測図

C S 17・18は4世紀～5世紀に、C S 12・15・16は4世紀～6世紀に、C S 13は6世紀後半に、C S 16は6世紀～7世紀にそれぞれ比定され、C S 19・20は少なくとも古墳時代のものと考えられるが、C S 20は網文時代に属する可能性もある。

(2) 石製模造品(図版85-1) III E 区の黒色泥砂層から、滑石製の子持勾玉、有孔円板、剣形模造品、勾玉形模造品が出土した。これらは同層出土の手捏ね土器とセットをなしたものと考えられる。黒色泥砂層には4世紀～6世紀の土器が含まれているが、これらの祭祀用品類は5世紀代のものであろう。

調査地点より西方のいずれかの地にこの時代の祭祀の場が存在することとは確実であり、比叡山の前山か、琵琶湖に注ぐ小河川の水に対する信仰と関連するものではないだろうか。

土 錘(図版84-1) 調査地区的各地点から総数約240個の土錘が出土したが、その年代を確定できるもののみを扱うこととし、また7世紀以降の土錘もここに一括して扱った。さらに、土錘は網漁法との関連を念頭において理解すべき遺物であるが、CC 5やDC 2～4のように土

鍤かどうか判断のつかないものもここに含めて扱っている。

i) 分類 ここでは土鍤を5種類に分類した。Aタイプは軟質の焼きで横長の棒状を呈し、重量の平均値によって、48gを中心とする大型(A-1), 8gを中心とする中型(A-2), 5gを中心とする小型(A-3)の3種に細分できる。Bタイプは軟質の焼きの球形のもので、9gを平均重量としている。この内、ソロバン玉形をしたDC3は特異な存在であるが破片のため不明な点が多い。Cタイプは須恵質のものを一括したが、形態上はAタイプのものと同じである。表面採集のものを含めてもわずか3例しか出土しておらず、当地における古墳時代後期以後の土鍤の主体は、軟質のものといえよう。

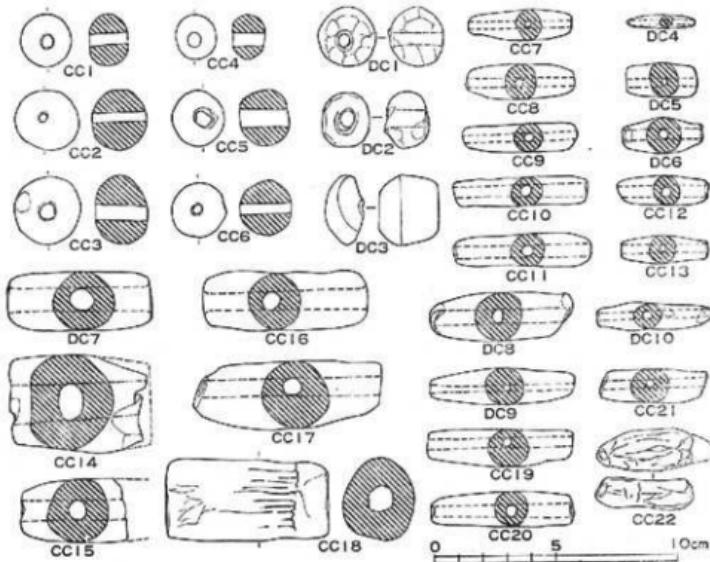


図25 各地区出土の土鍤実測図

ii) 使用痕 VD区西半の5号遺構からは、総数79個の土鍤が一括して出土した。この5号遺構は土鍤を焼いた施設が壊わされて溝内に二次堆積したものと推定され、土鍤は全て生焼けの様相を帶び、外面には全く傷がなく、未使用の土鍤と考えて誤りはなかろう。この他にもCC22は焼成中につぶれたものらしく、5号遺構出土例と同様の外観的特徴を

示している。これらの観察から、土錠のなかで未使用のものと使用されたものの区別ができる。A-1 タイプのCC16やDC7 の観察によれば、長軸に沿う側面のはほとんどが激しく磨滅しているなかで、わずかの幅をもって一長側面だけは磨滅していない。この磨滅痕

第22表 土錠の分類

地区	層位名	年代	個数				遺物番号
			A-1	A-2	A-3	B	
IIH	墨灰色泥砂層	7C		2(9.3g)	3(5.4g)	1	DC5 DC6 DC12
	暗青灰色泥砂層	7C		1(23.9g)			DC8
	I 砂層	7C				1	DC3
	黒色ビート層	6C末		8(11.3g)			CC13
III E	黒色泥砂層	6C末				9(9.4g)	CC5 CC24
IV A	溝内黒色泥砂層	4C				1(15g)	CC2
IVB	灰白色粗砂層	4~5C				1(5.3g)	CC1
	茶褐色泥砂と砂の互層	6C	1(53g)	3(14g)		5(8.9g) 1(12.5g)	CC3 CC20 CC17 CC19
	5号住居址床面	4~5C	1(30.4g)				CC15
IV区	6号住居址床面	4~5C	1(73.8g)				CC14
IVD	黄褐色砂礫層	6C		1(7g)			
VA	下部黒褐色泥砂層	平安~中世		1(7.9g)	1(0.7g) 1(4.6g)		DC4
	12号溝内奈良~			1(12.5g)			
VD	暗灰色泥砂層	6C後半			1(4.5g) 1(3.2g)		CC4 CC12
	黒色泥砂層	6C後半	1(83.5g) 10(43.5g)	2(12.6g)		1(10.8g)	CC16 CC18
	5号遺構	6C後半		79(7.9g)			CC7~CC11 CC23~CC33
西半	大溝上部黒褐色泥砂層	7C末	8(52g)	7(6.5g)			DC10 DC11
	下部黒灰色泥砂層	7C末	8(44.6g)	4(8.7g)		7(7.4g)	DC1 DC13 DC2 DC14
	大溝灰褐色泥砂層	7C末	1(46.4g)	1		2(10.2g)	
	下部茶褐色泥砂層	7C末	3(40.3g)	5(12.2g)			DC7 DC9
VD	1号溝粗砂層	6C後半				1(9.6g)	
東半	6号溝灰褐色砂層	6C末~ 7C	1	2(9.6g)		3(12.9g)	CC6 CC21

*個数の後の()内の数値は、完形品の平均重量を示す。ただし、IV区住居址出土の2例は現存重量である。

を土錠の使用痕と考えるならば、使用した網の種類を考える上で手がかりとなる可能性がある。²⁸⁾

iii) 製作技法 土錠の成形法の一つに、棒状のものを芯としてのり巻きを作るように粘土を巻き込み、成形後芯を引き抜く技法が考えられる。大瀬のA-1タイプの土錠の孔の断面が梢円形になっている例の多いことは、難に粘土を巻き込んだ結果と考えられ、孔の内面には擦痕も認められる。両短側面は軽くととのえられているが、CC21のようにへラ状のもので切っている例は、単なる調整法ではなく、長いのり巻き状のものから複数個体を切り取る技法が存在したことを見定せる。

球形のBタイプの成形法は明らかでないが、粗製で孔の大きいCC5やDC2では、粘土で球状に成形のち棒状のものを突きさして孔を開けているものと、棒状の芯に粘土を巻きつけて成形したのち芯を引き抜いたものと認められる。つくりの粗雑さと、孔の大きい点とを考え合わせると、この種の例は前述のように土錠かどうかが疑わしい。

iv) 小結 雜器湖を前面にひかえ、かつ小河川の多いこの地域では、各種の網漁がおこなわれたことが推測される。IV区の畠穴住居址の床面に廃棄されていた例や各地区からの土錠の出土がそのことを物語っている。当地域では軟質の焼きの土錠が主体をしめているが、VD区西半5号遺構から考えられるように、これらの土錠は当地域で製作されたものである。CC18のように外側を刷毛で調整している例からは、土器の製作との関連が認められよう。一方、須恵質の土錠が6世紀後半代になって使用されていることは、産地の問題と考え合わせて興味深いものがある。²⁹⁾

註 1) 肖の前遺跡の他に和歌山県北田井遺跡にも例がある。

四代克己「近畿地方における展開」(『日本考古学協会昭和46年度大会研究発表要旨』) 1971年。富岡好久「考古学に現われた池田」(『新版池田市史』概説編 1971年)

藤九郎八郎・笠井伸夫『和歌山市北田井遺跡発掘調査概報』II 和歌山県教育委員会 1971年

2) ここで布留式と呼ぶものは、大阪府小若江北遺跡の一括土器で代表させている。

3) 大津市北郊における前期古墳の分布は以下のとおりである(第1図参照)。本遺跡から北方4kmの大津市下坂本には木岡山古墳群がある。前方後円墳2基、帆立貝式古墳1基、円墳数基からなり、5世紀代の造営と考えられている。

方形周溝墓群の立地する扇状地の西方、丘陵端部に赤堀古墳がある。前方後円墳と考えられるが前方部は消失しており、現存する後円部は径約34mあり、内部主体は竪穴式石室らしい。

独立丘「皇子山」の丘頂には前方後方墳と2基の円墳からなる皇子山古墳群がある。1号墳

は全長60mの前方後方墳で、前方部を南にむけて南北方向に築造されている。後方部に土塙墓4基、前方部に粘土塚1基が検出されている。4世紀後半頃の築造と考えられている。2号墳は周溝をもつ径約20mの円墳で、時期は明らかでないが、塚丘の裾からは畿内第5様式の土器が出土している。3号墳は径約15mの円墳で、詳細は不明。

大津市南方の山頂には膳所茶臼山古墳がある。全長120mの前方後円墳で埴輪をもつ。内部主体は不明であるが、4世紀後半から5世紀前半に比定されている。また南側には小茶臼山古墳と呼ばれる小円墳がある。

- 『大津市皇子山古墳群調査概要』(滋賀県文化財調査概要)7集 滋賀県教育委員会 1971年
- 4) 方形周溝墓の被葬者を単位集団との関係で位置づけたものに、次の論文がある。
 - 都出比呂志「農業共同体と首長権」(講座日本史1) 東京大学出版会 1970年
 - 水野正好「古墳発生の論理」(考古学研究)72号 1972年
 - 5) 各々の堀穴住居址が立地するVAD区、VD区東半では、溝やその他の遺構も検出されている。後述の「VA区の調査」、「VD区東半の調査」を参照されたい。
 - 6) このIVD区の茶褐色砂泥層からは、宋鏡が集中して出土した。遺構や施設に伴うものではなくバラバラの状態での出土であった。その種類などは第4章で扱っている。
 - 7) 坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』笠岡市教育委員会 1956年
 - 8) 田辺昭三編『船橋II』平安学園考古学クラブ 1961年
 - 9) 佐原真「琵琶湖地方」(弥生式土器集成)本編2 1968年
 - 10) 田中琢「布留式以前」(考古学研究)46 1965年
 - 原口正三『大阪府松原市上田町遺跡の報告』(大阪府立島上高校研究報告) 1965年
 - 11) 畿内からの搬入品と考えられるものは、特にその胎土・色調が特徴的であり、他の土器とは著しく異質である。この現象は他の遺跡でも認められている。以下、この土器について、東北大学院清水芳裕氏に胎土分析をおねがいしている。
 - 12) 滋賀県下物出土に同じものがある。註9と同じ。
 - 13) 平城京跡においても、布留式に伴って出土している。
 - 安達厚三「古墳時代溝出土の遺物」(奈良国立文化財研究所年報) 1969年
 - 14) 田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966年
 - 15) この種の杯の下限は、地域によっては7世紀中葉前後まで下るものもあり、今後とも十分検討する必要がある。
 - 16) 笠記号には「×」「/」「//」「///」「#」などがある。次の第4章で扱っている7世紀後半の土器が出土したVII区大溝出土の壇内風の壺には、笠記号は認められない。なお、このタイプの壺は、以後8世紀代まで続くが、他地域には見られず、近江型の壺と考えてよいだろう。
 - 17) 最近調査された大津市北大津駅遺跡、長浜市鴨田遺跡でも同時期の土器が出土しており、整理の結果が待たれる。

- 18) 『甲賀郡甲西町葛栗古墳群調査概要』(『滋賀県文化財調査概要』6集) 滋賀県教育委員会
1968年
- 19) 西田弘「大津市中保町遺跡」(『滋賀県文化財研究所月報』6) 1968年
- 20) 平城京の朱雀門下層より出土している。
- 21) VD区東半6号溝の溝内堆積土には、6世紀後半～7世紀前半の土器が含まれている。この溝内から出土した土器は便宜的に第3章で扱っているが、7世紀前半のものを含むと考えるべきであろう。
- 22) 後藤守一は下駄を我國独自の履物と考えていた。
後藤守一『日本古代文化研究』河出書房 1942年
一方、中国の河南地方には、木製の台板に麻縄を装着した履物や、麻縄はないが下駄のように齒をつくり出した履物が史料にあらわされている。宮本勝太郎『かぶりもの・きもの・はきもの』(『民族・民芸双書』24) 岩崎美術社。に引用されている『本草綱目』「三才図鑑」にみられる。
- 23) 滑石製の下駄模造品の資料には以下のものがある。
 京都市鏡山古墳 3足
 奈良県加瀬出土 1足
 大阪府道明寺沢田出土 1足
 " 岸和田付近出土 1足
 東京都等々力大塚古墳 1足
 福島県蔵原古墳 1足
 " 白石種荷山古墳 1足
- 高橋健自「古墳発見石製模造器具の研究」(『帝室博物館学報』1) 1921年
- 24) 『顛面古字経』、「伴大納言絵詞」、「法然上人行状絵巻」には下駄をはいた人物が描かれている。『顛面古字経』における僧侶の下駄は、前ツボが一方に偏し、歯が前後左右に開いている。「伴大納言絵詞」では、歯は著しく高く、極端な銀杏歯である。「法然上人行状絵巻」では、前鼻緒のない引っかけ式のものである。
- 25) 石材の鑑定は京都大学理学部石田忠朗氏に、また玉類の分析・鑑定は京都教育大学井本伸広氏にそれぞれおねがいした。
- 26) 滑石という用語は、滑石(Talc)、綠泥片岩(Chlorite-shist)、蛇紋岩(Serpentine)など、暗灰色や緑灰色の軟らかい石の総称として用いている。
- 27) 報告書作成の方針で7世紀以降を第4章扱いとしたが、土鏡に関しては、6世紀～7世紀にかけて形態上全く変化が認められないもので、一括して扱うこととした。
- 28) A-1タイプの土鏡の使用痕の検討から考えられることは、磨滅のない一長側面が、網に土鏡を着装した際に上方にきており、他の長側面がこすられて磨滅してもこの上方の部分だけは

こすられることがない。すなわち、地引網か網の底が湖底につくような定置網が推定される。

- 29) 現在までに判明している限りでは、当地域に近い須恵器窯は湖東の龍山古窯跡群で、6世紀後半代に土鍊を生産していることが確認されている。

第21表 古墳時代の堅穴住居址

地点記	形態	規 模	方 位	施 設	遺 物	備 考
W区 1号	溝 丸 方 形	5.08×5.56m	N-25°W	・柱穴4。 柱間2.68m。 ・東邊壁際に住居に附属する土塙あり。 ・壁の内側に沿って周溝をめぐらす。	・土塙内から倒立状態で、土師器(C18, 土塙内および周溝内より土師器(C40), 床面に密着して、土師器(C23), 覆土中の土師器(C12, C19, C32, 他)。東邊周溝内より磁石(CS11)。	・W区2号と重複し、2号よりも新しい。 ・後世の削平甚しい。 ・布留式併行。
W区 2号	溝 丸 方 形	5.6×5.6m	N-35°W	・柱穴2本のみ検出。木米4本か。柱間2.9m。 ・東邊に幅広形の土塙。	・土師器(C18, C31)。	・W区1号と重複し、1号より古い。 ・後世の削平が美しい。 ・布留式併行。
W区 3号	溝 丸 方 形	6.1×6.1m	N-45°W	・柱穴4。柱間2.0-2.2m。 ・四壁に内接する内部に床面と同じ高さまで土を充填した頗広い周溝をめぐらす。 ・中央に炉場。内に炭、灰、角礫が残存。	・土師器(C14, C22, C26, C33, C37, C38, C43)。 ・他に床面密着の土師器小片あり。	・W区4号と重複し、4号より新しい。 ・後世の削平甚しい。 ・庄内式併行。
W区 4号	溝 丸 方 形	5.7×5.7m	N-60°W	・柱穴4。 柱間3.2m。 ・周溝は東南を除く三壁をめぐる。西南隅には外方へづく細い溝がつながる。 ・東南壁に2段掘りの長方形の土塙あり。 ・中央に洗くくはんだれ性。内に炭、灰の層。	・床面に密着して土師器(C30)。 ・他に土師器(C24, 他)。	・W区3号より古い。 ・庄内式併行。
W区 5号	溝 丸 方 形	4.4×4.9m	N-45°W	・柱穴4。 柱間2.4m。 ・他皆内に周溝	・雨脚ビットより磁石(CS7)。	・土塙とが址の間に は踏み固められたと思われる堅い部

地点番	形態	規模	方位	施設	遺物	備考
				<p>は壁からやや離れてめぐる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 東南壁に横円形の土塗。 南側にビット。 中央部よりに炉址、炭・灰。 東北側にも1箇所ビットがあるが、住居址に伴なうものかどうか不明。 	<ul style="list-style-type: none"> 土師器(C13, C15, C25, C34, C39) 土鏡(CC15), 	<p>分あり。</p> <ul style="list-style-type: none"> N区6号・7号と重複。6号より古い。7号との先後関係不明。 布留式併行。
N区 6号	隅丸方形		N-40°W	<ul style="list-style-type: none"> 柱穴4。 柱間2.4m。 西側にビットがあるが、住居址との関係不明。 	<ul style="list-style-type: none"> 土師器(C35, 他)。 土鏡(CC14)。 西側ビット内より土製品。 	<ul style="list-style-type: none"> 西南隅を残すだけ。形は推定。 N区5号が廃絶した後、部分的に土塗をして6号を構築。 布留式併行。
N区 7号			N-30°W	高溝状の溝が一辺と少し残存。	土師器(C29)。	<ul style="list-style-type: none"> N区5号・6号と重複。6号よりも古く、5号との先後関係不明。 柱穴が確認されず、住居址と断定することは困難。 布留式併行。
N区 8号			N-55°E	北壁が残存するだけ。	土師器片。	<ul style="list-style-type: none"> 住居址と断定はできない。 布留式併行。
N区 9号	隅丸方形?	6.1×6.1m	N-35°W	<ul style="list-style-type: none"> 柱穴3本のみ検出。本末4本か。 柱間3.2m。 隅丸長方形の2段掘り土塗。 高溝状の造構。 他に柱穴状ビットがあるが、住居址との関係は不明。 	<ul style="list-style-type: none"> 柱穴、土塗等から土師器。(C11, C17, C20, C27, C28, C36, C41, C42, 他) 	<ul style="list-style-type: none"> 形態、規模は推定。 一部調査区域外におよぶ。 周辺に他の住居址の存在も考えられる。 布留式併行。
N区 10号	隅丸方形		N-50°W	柱穴状のビット3本のみ検出。本末4本か。他の1本が推定される部分は推定を受けている。	土師器片。(C21, 他)	<ul style="list-style-type: none"> 一部激しい亂を受ける。 N区4号と5号との間に位置する。 布留式併行。

地点番号	形態	規模	方位	施設	遺物	備考
V D 区 東半 1号	隅丸方形?	6.3×5.3m?	N-40°W	・柱間2.2m。 ・楕円形の土壇。	・径12cmの柱孔 残存。 ・炭化木材、灰、 灰が床面に残 存。 ・砾石(CS9)、 土師器小片、 瓦等。	・形態、規模は推定。 ・V D 区東半 2 号住 居址と重複し、2 号よりも古い。 ・6世紀後半。
V D 区 東半 2号	隅丸長方形?	6.4×4.4m?	N-45°W	・柱穴4。柱間 1.9~2.8mと 3.6mで、柱穴 の位置はやや 不整形で、台 形を呈する。 ・西北辺の中央 に踏跡がある。	・窓内から上師 器(C230)。 ・他に須恵器片。	・形態、規模は推定。 ・1号住居址と重複 し、1号よりも新 しい。 ・6世紀後半。
V A 区 1号	隅丸方形	4.6×4.6m	N-45°W	・柱穴3本のみ 検出。他の1 本は12号溝に よって破壊さ れている。 ・柱間2.2~2.3m。 ・東北辺の中央 に踏跡。 ・住居址を囲む ように22号溝 が半円形にめ ぐらっている。	・須恵器杯(C 298)、土師器 (C249)、その 他の小片。 ・琴柱(CW140)、 用途不明木器 (CW141)、う き状木器(C WI8,CW25)。	・遺物は全て床面か ら浮いている。 ・遺跡の付近に遺物 は多いが、住居址 の北半部は12号溝 によって破壊され ている。 ・6世紀後半。

※ IV 区の堅穴住居址の年代推定の内、IV 区3号・4号は庄内式併行したが、これは床面密着
の土器が庄内式併行であることによる。しかし周溝や柱穴内からは古留式土器が出土
しており、住居址の残存度と考え合わせて、この床面密着土器が本来密着していたか
どうかによって住居址の年代は下ることもあり得る。

※ 床面密着土器のない住居址は、周溝あるいは柱穴内の土器を検討の対象とし、それも
ない場合は復土中の土器を検討した。

※ 住居址の方では、四壁の内で北を中心とする壁の方針であらわした。

第23表 方形周溝墓出土の土器器観察

遺 構	器 形	上器輪	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
III F区 方形周溝墓	壺	C 1	・球形の胴部に外反する口縁部がとりつく。 ・頸部は一条のはりつけ突帯である。	・口縁外端を軽くおさえて両取りする。 ・胴部は輻方向の旋削研を施すが、ところどころ削り残された刷毛目が見られる。 ・内側は磨削面。	・頸部の突帯は、この地方でよく見られる装飾法である。弥生時代後期以来の伝統を引くものか。
	壺	C 4	・球形の胴部と、頸部で「く」の字状に屈曲して外開きする口縁を持つ。 ・口縁端部は内方に僅かにつまみ出す。 ・底部は欠いているが丸底であろう。	・口縁内面および、胴部外面に刷毛目を残す。 ・口縁外面はナデ仕上げし、胴部内面は磨削面を加え、壁を薄く仕上げている。	・小若江北遺跡の壺に近い。
	壺	C 5	・小形の壺で、丸底の胴部に、頸部でやや屈曲した後、垂直に立ち上がる口縁をなす。	・口縁内面と胴部外面に刷毛目を加える。 ・口縁外面と胴部内面はナデ仕上げをおこなう。	・これ以外に弥生式土器の小片を若干出土。
IV A区 溝状造構	壺		・口縁部と、底部を欠き、全形は不明であるが、おそらく、球形の胴部に外開きの口縁部がとりつくのであろう。	・外面は荒研磨を施し、内面はナデ仕上げしている。	・これ以外に弥生式土器片を若干出土。
IV B区 1号方形周溝墓	壺	C 2	・口縁部のみを残す底片で、二重口縁をなす。	・本体は明確な屈曲をせず、屈曲点外面に断面三角形の突帯を貼り付けることにより、二重口縁の形状をなす。 ・内外面とも磨削面を加える。	
	無頸壺	C 3	・やや偏球形の胴部につづいて、僅かに立ちあがる口縁部をなす。	・内外面とも磨削面を加える。	・弥生式土器かもしれない。
	壺 A I C 6 C 8		・頸部を屈曲して外反した後、再び内方に屈曲して、口縁部をなすもの。 ・「S字状」口縁をなすものと、そのまま直立に立ちあがるものがある。	・C 6、C 7のように口縁部や肩部に列立文や、行直線文を施すものが見られる。C 7のように窓による刮み目を加えるものもある。C 6のように粗い刷毛目を残すものもある。	・C 7は弥生後期まで遡る可能性がある。
壺 B	C 9		・小片だが、球形の胴部にやや内凹口縁に外方に聞く口縁部がつく器形。 ・口縁端部を僅かに肥厚させる。	・口縁部は外表面とともにナデ仕上げしている。 ・底部は外表面に輻方向の刷毛目を残し、内面には磨削面を施す。	・小若江北遺跡の壺に類似。
	C 10		・口縁部および脚部を欠く。 ・杯部には段を有する。 ・脚部は大きく広がるか。	・内外面ともに磨削面を加える。	・これ以外にも弥生式土器片が若干出土。

第24表 窒穴住居出土の土器觀察

器 形	土器類	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
壺 A	C12 1. C15	・全形の判明する破片はないが、球形の胴部に外反気味に開く口縁部がありつ形状をなすであろう。底部は小さな平底か。 ・頭部に割み付のある突帯をめぐらす破片(C15)には直口に近い口縁部がありつ形状をなすであろう。	・口縁の内外面をよく荒削研する。C14は内面に一部刷毛目を残す。 ・C15の胴部外面にも荒削研の痕が顕著である。	・C12はN区1号住居址。C13、C15はN区5号住居址。C14はN区3号住居址。	・C15は他よりも時期がやや遅る可能性がある。
壺 B	C11	・明確に弧曲して二重口縁をなす。 ・胴部を欠くが、球形のものであろう。	・内外面ナデ仕上げをおこなう。	・C11はN区9号住居址。	
小 型 壺	C16	・球形の胴部にやや内反気味に外上方へ開く口縁部がありつ形。	・極めて薄手の作りで、外表面はごく軽い刷毛目を残し、内面は平滑なナデ仕上げをおこなう。	・C16はN区1号住居址。	
壺 A	C18 1. C21	・「S字状口縁」をなす。 ・口縁端部はやや厚みをもつ。 ・口縁部だけの破片であるが、おそらく脚台のつかない平底の器形であろう。	・内外面ナデ仕上げをおこない、一部に刷毛目見られるものもある。	・C18はN区2号住居址。C19はN区1号住居址。C20はN区9号住居址。C21はN区10号住居址。	・ⅢE区灰褐色微沙層出土のものに類似。
壺 B	C30	・外反する口縁に、頭部で若干の幅をもって、胴部に移行する。	・口縁部はナデ仕上げをおこない、胴部は内外とも軽い刷毛目(あるいは通常の刷毛目と区別して櫛状工具によるナデツケと言うべきか)を残す。	・C30はN区4号住居址。	・ⅢE区灰褐色微沙層出土のものに類似。
壺 C	C22 1. C29	・いずれも口縁部だけの小片であるが、球形の胴部に、頭部で「く」字形に弧曲して外開きする口縁部がありつ形。 ・口縁端部を内側へ僅かに肥厚させるものもある。	・口縁の内外面はナデ仕上げをおこない、胴部外面には刷毛目を施し、内面は例外なく荒削りを加える。 ・器底は極めて薄く、底部内面には指頭圧痕が顯著である。	・C22、C26はN区3号住居址。C23はN区1号住居址。C24はN区4号住居址。C25はN区5号住居址。C27、C28はN区9号住居址。C29はN区7号住居址。	・NB区下層式小若江北遺跡出土のものに類似。
小 型 壺	C33 C39 C40	・C33はやや長口の器形。 ・C40は球形に近い胴部から、頭部であまりくびれずにそのまま長い口縁部に移行	・外面上には刷毛目を施す。内面はナデ仕上げ。	・C33はN区3号住居址。C39はN区5号住居址。C40はN区1号住居址。	

器 形	子器類	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	出 土 地 点	備 考
杯	C31	する。			
	C32	・C38は頸部で殆ど屈曲せずに胴部に移行する。 ・他の浅い胴部に外側縁をなす。	・C38は外面に叩き目を施す。 ・他は刷毛目調整の痕を残す。 ・内面はナデ。	・C31はN区2号住居址。C32はN区1号住居跡。C38はN区3号住居跡。	・C38はその他のものよりも時期の遅るものであろう。
	C38				
高 杯	C43	あまり大きくなない杯部に短かい脚部がとりつく。	内外面とも磨擦研を施す。	・C43はN区3号住居址。	
小 型 杯	C41 C42	浅い胴部から、2段に屈曲して外上方に開く口縁をなす。	内外面とも磨擦研を施す。	・C41、C42はN区9号住居址。	・小型杯、小型丸底盃、小型脚台はいわゆる小型三種の上器として、古留式（小若江北遺跡の土器で代表させる）に属するものである。
小 型 丸 底 盃	C17	小さな胴部に大きく開く口縁部がとりつく。	内外面とも磨擦研を施す。	・C17はN区9号住居址。	
小 型 器 台	C34 C37	口縁端部を丸くおさめるものの（C34）とやや立ち上がり気味に作るもの（C35）がある。	内外面に磨擦研を施すが、脚部内面に刷毛目を残すのがみられる。	・C34はN区5号住居址。C35はN区6号住居址。C36はN区9号住居址。C37はN区3号住居址。	・C34はN区5号住居址。C35はN区6号住居址。C36はN区9号住居址。C37はN区3号住居址。
小 形 瓶	C20	口縁部は外傾し、その端部を上方に突出している。 ・体部は球形である。	内外面とも刷毛目調整の後、口縁部の内外面を擦ナシ調整し、体部下半外面を磨削りしている。	・C230はV D区東半2号住居址カマド内。	・6世紀後半。
中 形 瓶	C29	やや縱長気味の球形 体部に、近く外傾する口縁部がつく。口縁部は平らにつくられている。	内外面とも刷毛目調整の後、口縁部の内外面を擦ナシ調整し、体部下半外面を磨削りしている。	・C249はVA区1号住居址。	・6世紀後半。
杯	C28	須恵器の杯で、全体に縦少化し蓋受けの立ち上がりは極めて低く内傾している。	つくりは粗雑であり、底部の荒削りの範囲も狭い。	・C298はVA区1号住居址。	・6世紀後半 ・陶邑TK28に相当する。

第25表 各地区出土の古墳時代の土器観察

III E 区下層式の土器

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
壹 A	C44	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部はわざかに外に開き、端部は内側に小さな段があり、内外両面に小さなぎみ目を施す。 頸部外面に切り目を施した突部を、条めぐらす。 体部は最大径が中央よりやや上にあり、肩部が張り、胴部下半はすぼまる。 上げ底。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部内外面は横ナデ。内面の下半には、縦の擦磨研を施す。 体部外面は縦の擦磨研をなし、内面は底部から螺旋状に深い刷毛目調整した後、上半部をナデによって刷毛目を消す。 肩部外面には、横曲状施文具による平行線文、波状文と縦により小さな割目文を施す。 	<ul style="list-style-type: none"> III E 区灰褐色微砂。 黄褐色、粘土良好、焼成良好。
壹 B ₁	C46	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は強く外反して開き、更に途中で内側に段をもつて直立する。端部はわざかに外側につまみ出す。 体部は最大径が中央にあり大きく張り出す。体部の大きな張りに比べ、縫部は細く、その為体部の形は算盤玉形をなす。 上げ底。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外表面横ナデ。 体部外面は刷毛目調整後に縦の擦磨研をする。内面は横の刷毛目調整。 	<ul style="list-style-type: none"> III E 区黄褐色砂。 黄褐色、粘土良好、焼成良好。
壹 B ₂	C49	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は C46 とほぼ同様であるが、端部のつくりが丸くなる。 体部は張りが C46 に比べ小さくなり、全体に球形に近い。 上げ底。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内外面横ナデ。 体部外面は上半と下半が逆向きの 2 段の斜方向の刷毛目調整。内面は刷毛目調整後ナデ仕上げ。 	<ul style="list-style-type: none"> III E 区灰褐色微砂。 全体に溶滲が激しい。粘土に砂粒を含む。
壹 C ₁	C78	<ul style="list-style-type: none"> 直立する縫部は長く、口縁部は一度外反して開き、更に直立する。 体部は最大径が下位にあり、圓球形をなす。 平底。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外表面横ナデ。 縫部から体部最大径部までの外面は、縦の擦磨研で、縫部内面は横曲状具による横方向の調整である。 体部内面下半は 2 段の縦ナデ（縦縞みの単位に一致している）。上半はナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> III E 区黑色泥砂。 黄褐色、粘土良好、焼成良好。
壹 C ₂	C82 C181	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は長くわざかに外に開く。 体部最大径が口縁部ほどよりわざかに大きい (C181)。 平底。 	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は内外面横ナデ。C181 の内面は刷毛目調整痕がはっきり残り、ナデは認められない。 体部内面は横方向の刷毛目調整。 体部外面は刷毛目調整後、縦の擦磨研を行なう。 	<ul style="list-style-type: none"> C82 は III E 区黑色泥砂、C181 は IV B 区黑褐色泥砂。 いずれも褐色、粘土中に微砂を含む。
壹 D	C45 C56 C151	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は外上方に直線的に長くのびる。 縫部が特に細くすぼまるもの (C45) がある。 	<ul style="list-style-type: none"> C45 は内外面擦研を行なう。 C56 は外面が粗い擦磨研で、内面はナデ調整である。 	<ul style="list-style-type: none"> C45・56 は III E 区灰褐色微砂、C151 は IV B 区暗青灰色泥砂。 全般に胎土・焼成は良好。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
			・C151は外面が荒削研で、内面はナデ調整である。	・C45は内外面ともに光沢のある黒灰色を呈す。 ・C56は本類に入るものの、
壺E ₄	C48	・口縁部は外反して直線的に開く。 ・平底か。	・口縁部内面は横の刷毛目調整。外面は縦の刷毛目調整後撥ナデ。 ・体部内面は下→上方向のナデ。外面は縦の刷毛目調整の上を極く縮文風の荒削研を施す。	III E区灰褐色微砂。
壺E ₅	C50	・口縁部は外折して開く。 ・平底か。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は先ナデ。内面はナデで平滑に仕上げる。	III E区灰褐色微砂。 ・暗褐色。
廣A	C51 C52 C54 C57 C1N	・口縁部は短く外反する。 ・体部は球形に近いもの(C51, 57)とそうでないものがある。 ・平底ないし上げ底	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は細いササラ状の条痕を残すもの(C52・57)と荒によろとと思われる擦痕を残すもの(C51)とがある。 ・体部内面はC51では荒削りを行ない、C52では刷毛目調整を行なう。C54・57には擦痕が見られ荒削りの一種かも知れない。 ・C52は全体に調整、仕上げが不完全で器面に凹凸が見られる。 ・口縁部と体部の接合部外面を露の先端でナデつけた跡が見られるものが多い。	・C51・52・54・57はIII E区灰褐色微砂。C124はIV B区灰白色粗砂。 ・C124は異質なもの。
廣B	C53 C55 C58 C115 C116 C120 C133 C138 C139 C201	・口縁部は短く外反する。 ・体部は張りが小さくやや瓶長である。C116は体部の張りが強い。 ・平底か。	・口縁部内外面は刷毛目調整後撥ナデを行なう。 ・体部外面は刷毛目調整。 ・体部内面はC53は荒削りを行なう。C115・201は刷毛調整。C55・58・153・180・193は刷毛目調整後ナデ仕上げを行なう。 ・C116は磨減が著しく手法ははっきりしないが、外面に砂粒の大きな移動が見られる。	・C53・55・58はIII E区灰褐色微砂。C115・116はIV B区灰白色砂砾。C150・153はIV B区暗青灰色泥砂。C180はIV B区茶褐色泥砂と砂の互層。C193・201はV D区東半8号溝。 ・胎土中に砂粒を含む。
壺C ₁	C69 C90 C135	・「S字口縁」 ・体部は最大径がほぼ中央にあり、綫長の杏円形である。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は擦痕状原体によって擦方向の調整を行なう。 ・体部内面はナデによって器壁を薄く仕上げる。 ・口縁部外面には擦痕状具による刮点文を施すものが多い。	・C69はIII E区灰褐色微砂。C90はIII E区黑色泥砂。C136はIV B区灰白色粗砂。 ・暗褐色。胎土中に粗砂を含む。 ・外圍にはスス付着。

器形	T:器No	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
			く。肩部外面には同じく鈎 曲状具によって平行線文。 列点文や毬による浅い沈線 を施し。胴部にも鈎曲状具 によって平行線文。波状文 を施し。更に突窓をめぐら し。突窓の中央に沈線を施 して、毬に割り目を入れる。	
表C ₂	C63 C65 C67 C70 C122 C154	・「S字口縁」。 ・体部は肩部が強く振り球形 となるもの(C70)と振り が弱く短長のもの(C67, 154)がある。 ・平底。	・口縁部は内外面横毛目調整 後横ナデ。 ・体部外面は鈎曲状具による 調整を行なう。C70では縱 方向に調整した後、横方向 に彫目を入れる。 ・体部内面はナデ調整。	・C63・65・67・70はⅢ E 区灰褐色微砂、C122はN B区灰白色砂礫、C154は N B区暗青灰色微砂。 ・褐色。胎土中に粗砂を含 む。
表D	C59 C64 C92 C129 C131 C132	・口縁部は「く」字窓以外 反し、端部は上方につまみ 上げる。 ・体部は最大径が中央より上 にあり丸味があるが、下 半はやすやすまる。 ・尖り気味の小さな丸底か。	・口縁部は内外面刷毛目調整 後横ナデ。内面に横方向の 刷毛目を残すものがある。 ・体部外面は肩部から腹部最 大径部まで斜めの印き跡めを 行ない。その間に細い縱方 向の刷毛目を細くつける。 印き目幅は2mm内外で幅1。 下半は印き目は残らず縱方 向の刷毛目である。下半の刷 毛目は浅く太くて、上半の 印き目上のそれとは異なる ものと思われる。 ・体部内面は入念な荒削りで 器壁を一定にして薄く仕上げ (3mm程度)、口縁部との境 には明瞭な棱をつくる。	・C59・64はⅢ E区灰褐色 微砂、C92はⅢ E区黑色 泥砂、C129はN B区灰 白色砂礫、C131・132は N B区灰白色粗砂。 ・C59・64・92・129は暗茶 褐色、C131・132は褐色。 ・胎土、焼成は良好。 ・外面にスス付着するもの がある。
表E	C60 C137	・「二重口縁」で颈部は短い。 ・体部の張りが小さい小型の 器形か。 ・平底か。	・口縁部は内外面刷毛目調整後 横ナデ。C60の内面には刷 毛目がはっきり残る。C137 の口縁外面には鈎曲状具に よる平行線文を施す。 ・体部外面は横ナデ。内面は 荒削り。	・C60はⅢ E区灰褐色微砂、 C137はN B区灰白色粗砂。 ・外面にスス付着。
表F	C61 C62 C97	・口縁部は外反して聞く。 ・体部は肩部が小さく、胴部 は張らずに底部に向かって すぼまる。体部径は口径よ りわずかに小さい。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は内外面刷毛目調整。	・C61・62はⅢ E区灰褐色 微砂、C97はⅢ E区黑色 泥砂。 ・外面にスス付着。
表G	C117	・外反する口縁部は先端が内 側に折れ曲がる。 ・体部は肩部の張りがほとんど ない。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は縱の刷毛目調整 内面はナデ。	・N B区灰白色砂礫。

器形	上器名	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
鉢 A	C47	・口縁部は小さく外反する。 ・体部は最大径がほぼより小さく、最大径部以下は底部に向けて急にすこまる。 ・上部底。	・口縁部外側は横ナデ、内面は横方向の刷毛目調整。口縁端部外側に小さな割込みを施す。 ・体部外面はナデ調整を行ない、上半部には撫突状具による平行撇文と列点文を施す。 ・体部内面はナデ調整。	・Ⅲ E 区灰褐色微砂。 ・赤褐色。粘土中に粗砂を含む。 ・外面にスス付着。
鉢 B	C18	・口縁部は僅めて小さく外反する。 ・体部は口縁部との接合部から下り下し、下半部で丸味をもつて底部につづく。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は横方向の窓い叩き織めを行なう。内面はナデ調整。	・Ⅳ B 区暗青灰色泥砂。 ・赤褐色。粘土中に砂粒を含む。
鉢 C	C111 C141	・口縁部は外反して開き、更に段をつくって直立する。 C111の端部は外方につまり出され、C141は丸くつくる。 ・体部は肩部、胴部の区別がなく、張りも全くない。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は横方向の刷毛目調整後ナデ仕上げ。内面はナデ調整。	・C111は Ⅲ E 区黒色泥砂、 C141は Ⅳ B 区灰白色粗砂。 ・C111の大きな平底は古い要素か。
瓶	C188	・口縁部は欠損している。 ・小さな平底。底部穿孔。	・外面は横方向の窓い叩き織めを行なう。 ・内面は窓割り(下半は下→上、上半は右→左方向)後ナデ仕上げを行なう。	・Ⅳ B 区暗青灰色泥砂。 ・底部穿孔は焼成後である。
器台	C106	・脚部のみ残存する。	・内外面荒削りする。 ・上部に小さな刻み目と稍曲状見による平行撇文を施す。	・Ⅲ E 区黒色泥砂。 ・赤褐色。粘土良好。
高杯 A	C66	・杯部は底部から外に小さく鋸い縫をつくり、外方に直線的に開く。 ・脚部は比較的短い柱部に大きく開く接點がつく。	・内外面横方向の窓割れ。	・Ⅲ E 区灰褐色微砂。 ・赤褐色。粘土良好。
高杯 B	C73 C74 C164	・脚部のみ残存する。 ・脚部は柱部から段をつくって広かる。C164の脚端部は上・下に肥厚する。 ・棒状の柱部で杯部につながるものであろう。	・内外面荒削り。 ・C74は昭和天井井に 4 個の円孔を、C164では中央部に溝丸・三角形の孔を 4 孔ずつ。	・C73・74は Ⅲ E 区灰褐色微砂、 C164は Ⅳ B 区暗青灰色泥砂。
手縫り 形土器	C76	・蓋部の一部のみ残存する。 ・口縁部は更厚する。	・外面は窓い刷毛目その他、刺突文で開けられた足焼きの継衫文帯を配する。 ・内面はナデ調整。	・Ⅲ E 区灰褐色微砂。

NB 区下層式の土師器

器 形	土器No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
壺 A ₁	C79	・大きく開く口縁部の外面に貼付け浮文を施す。(浮文は2個1組で4対か)	・内外面皆ナデ。浮文の部分は概方向にナデつける。	・III E区黑色泥砂。
壺 A ₂	C188	・直立する頸部から、口縁部は大きく外反して開く。 ・頸部に沈線をめぐらし、浮文を施す。(浮文は4箇所)	・内外面皆ナデ。	・IV B区暗灰色粗砂。
壺 B	C80 C133 C134 C149	・「二重口縁」、C80-133-134は外側に棱をつくるが、筋曲がほとんどない。 C134の口縁部は内外に肥厚する。	・C80の口縁部外面は荒削りし、内面は機ナデ。C133-134-149は内外面皆ナデ。 ・体部内面は、C80-133-149では鋸削りしている。	・C80は III E区黑色泥砂、C133-134-149は NB 区灰白色粗砂。 ・C80は赤褐色、C133-134-149は墨色。 ・C80の外面はスス付着。 ・C149は古い時期のものか。
壺 C	C89 C138	・「直口縁」、一味外反して開いた口頭部は外側に鈍い棱を、内側に凹をつけて上方に折れ曲がる。	・内外面皆ナデ。	・C89は III E区黑色泥砂、C138は NB 区灰白色粗砂。 ・C138の口縁部上端面をも含めた全周に光沢のある黒色の薄い皮膜がついている。
壺 D	C145	・口縁部は「く」の字状に外反する。 ・体部は球形になる。	・口縁部は横方向の箇磨研。 ・体部外表面は横方向の逆磨研、肩部には一部鋸削り痕が見られる。 ・体部内面は下半を下→上方向の鋸削りした後、上半を左→右方向に箇削りする。	・NB 区灰白色砂埋。 ・赤褐色、粘土、焼成とともに良好。
壺 E ₁	C81 C85	・口縁部は「く」字状に外反して直線的にのびる。輪削はわずかに肥厚する。 ・口縁部と体部との接合部に断面三角形の突帯が貼りつけられる。	・口縁部は内外面皆ナデ。C81の外表面は一部輪削痕が見られる。 ・体部外表面は刷毛目調整後、丸く箇磨研するが、刷毛目が多く残る。 ・体部内面は、肩部の粘土紐つなぎ付を除きナデつけた後、横ナデを行なう。胴部は左→右方向の箇削り。	・III E区黑色泥砂。
壺 E ₂	C126 C165 C167	・口縁部は長く「く」字状に外反する。	・口縁部は内外面刷毛目調整後、横ナデを行なう。 ・体部外表面は刷毛目調整後横ナデを行なう。体部内面はC165が下→上方向のナデ調整し、C167は箇削り。	・C126は NB 区灰白色砂埋、C165・167は NB 区暗灰色粗砂。 ・C165の外表面にはスス付着。 ・C126はやや異質。
壺 F	C77 C119	・口縁部は外上方に直線的に長くのびる。	・C77は内外面箇磨研。 ・C119は内外両人念にナデ調整し、内面には暗文氣に細い箇磨研を縱方向に施す。	・C77は III E区黑色泥砂、C119は NB 区灰白色砂埋。

器 形	土器名	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
壺G	C98	・口縁部はわずかに外反する ・肩部が強く膨る。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面はナデ調整し、内面は荒削り。	・ⅣE区黒色泥砂
壺A	C113 C166	・『二重口縁』。剖面部外向に小さな後をつくる。稜折部以下が窓かく、端部はわずかに肥厚する。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は横ナデ、内面は荒削り。	・C113はⅣB区灰白色砂砾、C166はⅣB区暗灰色砂砾。 ・赤褐色、外面にスス付着。
壺B ₁	C93 C95 C99 C127 C128 C130 C155 C156 C169 C199	・口縁部は「く」字状に外反し、端部は肥厚する。 ・体部は球形に近い。 ・丸底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は主に横方向の規則性のある刷毛目調整し、肩部はその上を横ナデする。 ・体部内面は荒削りにより、器壁を薄くつくり、口縁部と体部の境には縫をつくる。	・C93・95・99はⅢE区灰色泥砂、C127・128はⅣB区灰白色砂砾、C130はⅣB区灰白色粗砂、C155・156はⅣB区暗青灰色泥砂、C169はⅣB区暗灰色粗砂、C199はⅣB区茶褐色泥砂。 ・胎土、焼成良好。外面にスス付着。 ・C156は完形品で、底部内面に粒状の有機物が付着している。
壺B ₂	C176	・口縁部は外反して開く。 ・体部は最大径が中央より下位にあり、下が丸味をおびる。 ・平底。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は、縱方向の刷毛目調整後、前後に調磨研する。内面は刷毛目調整後、右下→左上の方向にナデ仕上げをする。	・ⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・体部外面にはスス付着。
壺C	C132	・口縁部は外反し、端部は丸くつくる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は平滑であるが、縱方向の細かい堆積を残す。 ・体部内面は右→左方向の荒削り。	・ⅣB区暗青灰色泥砂。 ・赤褐色。外面にスス付着。
壺D	C129 C160 C177 C178 C179	・『S字口縁』。 ・体部の最大径が中央よりやや上にあり、無花果形につくる。 ・脚台付。脚部は内側に折り返し肥厚させる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は櫛歯状具による縱方向の調整後、肩部に同じ原体により平行線文を施す。 ・体部内面はナデ調整。器壁は薄い。 ・脚台部外面は櫛歯状具による縱方向の調整。内面はナデ調整。	・C129はⅣB区灰白色砂砾、C160はⅣB区暗青灰色泥砂。C177~179はⅣB区暗灰色泥砂。 ・胎土中に砂粒を含む。外面にスス付着。
壺E	C114 C203	・口縁部は外反した後、弧曲して立上がる。 ・体部は下がはそくすばまる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は高い刷毛目調整。内面は刷毛目調整後ナデ仕上げ。	・C114はⅣB区灰白色砂砾、C203はⅣD区東半号溝。
壺F	C181	・口縁部は外反し、端部は丸くつくる。 ・体部は最大径が口縁より小さく、肩部は強烈が小さく半球形になるか。	・全体に外面は横方向に荒削り研する。内面はナデ調整。 ・口縁部内面の脚部の観察から、口縁部内面は高い刷毛目をつけた上に粘土を貼り付け	・ⅣB区茶褐色泥砂。 ・褐色。胎土・焼成とも良好。

器 形	土器No	形 態 の 特 徵	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
廣 G	C142 C157	・口縁部はわずかに外反する。 ・C157は口径が脚部径より大きい。	・厚くしている事がわかる ・外面は縱方向の刷毛目調整の上を軽くナデる。 内面はナデ調整し、C142の口縁部内面には刷毛目を残す。	・C142はⅣB区灰白色粗砂、C157はⅣB区暗青灰色泥砂。
小型丸 底突	C197	・口縁部は長く、外上方に開き、口径は脚部径よりも大きい。 ・体部は口縁部との接合部から垂下し、脚部の張り出しが全くない。直線的な腹部は内に稍曲し、半環気味の底部をつくる。	・口縁部は内外面ナデ調整、体部外面はナデ調整し、底部外面は荒削り。体部内面はナデ調整。	・ⅣB区茶褐色泥砂。
小型杯	C139 C140	・口縁部に段がつく。	・C139は内外面入念なナデ調整で平滑に仕上げる。底部外面に刷毛目残る。 ・C140は外面ナデ調整、内面は横方向の荒削研する。	・ⅣB区灰白色粗砂。 ・赤褐色、粘土良好。
高杯 A	C145 C161 C175 C196	・杯部は口縁部が外方に開き、端部は丸くつくる。 C145はやや深い杯部をつくる。C175は底部と体部の境にさすかに波を残す。 ・脚部は比較的長い柱部に素が広がるものか。	・C145・161は内外面荒削研する。 C175・196は内外面入念なナデ調整である。	・C145はⅣB区灰白色粗砂、C161はⅣB区暗青灰色泥砂、C175はⅣB区暗灰色粗砂、C196はⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・C145はやや古い要素を、C196は新しい要素をもつか。
高杯 B	C187	・杯部と脚部は「く」字状に屈曲する。 ・杯部は底部が小さく、体部は直線的に開く。 ・脚部は小さく、杯底部から直線的に開き、底部は更に外に向く。	・杯部は内外面荒削研。 ・脚部は外表面荒削研、内面は入念なナデ調整。	・ⅣB区茶褐色泥砂と砂の互層。 ・綜合との区別は困難。
高杯脚 部	C68 C71 C72 C75 C165 C177 C147 C148 C185	・柱部と脚部が明瞭に別れず、常に脚部が開くもの(C68、72・75・105・147・148)と柱部をつくり、それから脚部が屈折して大きく開くものの(C107・105)がある。	・C72・75の内面は荒削り後柱部を刷毛目調整し、外面は縱方向の荒削研を行なう。 ・C107・185の柱部内面は荒削り、脚部内面は横ナデ。柱部外面に荒削研するもの(C185)がある。 ・C147・148は内面荒削り後ナサ上げし、外面はナデ調整。 ・C68・105は内面上部に絞り波を残し、外面は刷毛目の上をナデ調整する。	・C68・71・72・75はⅢE区灰褐色微砂、C105・107はⅢE区黒色陶砂、C147・148はⅣB区灰白色粗砂、C185はⅣB区茶褐色泥砂。 ・灰褐色微砂のものもここに含めたが、時期的には古いものと新しいものを含む。
小型器 台 A	C120 C133 C186	・杯部は浅く、内壁するものと外反するものがあり、端部は丸くつくる。 ・C120・162は杯部と脚部の	・杯部は内外面荒削研。 C120の外面はナデ調整し、底部に2本の細い沈線がめぐる。	・C120はⅣB区灰白色砂理、C162はⅣB区暗青灰色泥砂、C186はⅣB区茶褐色泥砂。

器形	上器部	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
		間に貫通孔を穿つ。		
小型器 台B	C102	・杯部の口縁端部は直立する。 ・脚部との間に貫通孔を穿つ。	・杯部内面は磨痕研、外面はナ ゲ調整。口縁端部は横ナデ。	・NB区暗灰色粗砂。
小型器 台脚部	C103 C104 C121 C146 C163 C174 C191	・脚部のみ現存する。 ・杯部と脚部は「く」字状に 外反して開く。 ・C174以外は杯部との間に 貫通孔を穿つ。	・脚部外面は縱方向に跑密研 し。内面は横ナデ。 C104・146は内面は刷毛目 を残す。	・C103・104はⅢE区黒色 泥砂、C121はNB区灰 白色砂壁、C146はNB区 灰白色粗砂、C163はNB 区暗青灰色泥砂、C174は NB区暗灰色粗砂、C194 はVD区東半8号洞。 ・C174は異質。
鉢A	C143 C159	・口縁部は短く外反する。 ・体部は半球形で、口径が体 部径より大きい。	・内外面ナデ調整。	・C143はNB区灰白色粗 砂、C159はNB区暗青 灰色泥砂。
鉢B	C118	・口縁部は極く小さく、体部 と明瞭な境をつくらない。 ・体部は半球形。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外面は刷毛目調整の上を ナデ仕上げする。内面はナデ調整。	・NB区灰白色砂壁。
手捏ね 土器	C211	・外上方に大きく聞く。	・ナデ調整。	・NB区灰白色粗砂。

III E区上層の土器群

表A	C96	・口縁部は外反し、端部は内 間に折り曲げ肥厚する。	・口縁部内外面横ナデ。	・ⅢE区黒色泥砂。
表B	C84 C87 C88 C91 C94 C110	・口縁部は大きく外反して開 く。端部はC91が外反りに 開きえくつくる。C88・94- 110の端部は内側から薄く 削る。C84・87の端部は肥 厚し、端面に深い沈線風の 押えを行なう。 ・体部は肩部の張りが小さい 長窓。(C94は異質)。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部はC91で見ると、幅2 ~3cmの粘土紐の輪積みで 成形し、外側は輪積みの2 段部に刷毛目調整を行なう。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・外間にスス付着。 ・一部6世紀に降るものあ るか。
表C	C86 C202	・「波口縁」、縫部はわずか に肥厚する。 ・体部は最大径が上位にあり, やや被長になる。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部外縁は荒い刷毛目調整。 内面は荒削し、さらに上部 を横ナデ。	・C86はⅢE区黒色泥砂、 C202はNB区茶褐色泥 砂。 ・外間にスス付着。
表D	C83 C135	・口縁部はわずかに外に開く。 端部は外につまり出す。	・内外面ナデ調整。C83の口 縁内面には荒い刷毛目が残 る。	・C83はⅢE区黒色泥砂、 C135はNB区灰白色粗 砂。
小型丸 底盤	C108 C109 C144 C182	・口縁部はやや長く外反する。 ・体部は脚部と口径がほぼ 等しく球形になる。C144は 翼球形。	・口縁部は内外面刷毛目調整 の上を横ナデ。 ・体部外面は刷毛目調整後ナ デ仕上げ。(C144は下半の みを刷毛目調整)。 ・体部内面はC108・109が荒削 りでC144・182はナデ調整。	・C108・109はⅢE区黒色 泥砂、C144はNB区灰 白色粗砂、C182はNB区 茶褐色泥砂。
高杯A	C101 C102	・杯部は凹板状の底盤から外 上方に開く口縁部をとりつ	・杯部内面は口縁部が横ナデ で底部は不定方向の刷毛目	・ⅢE区黒色泥砂。

器 形	器形No.	形 異 の 特 横	手 法 の 特 横	備 考 (等位)
		<p>けた形態をなす。底部と体部との境には明瞭な段をつくる。口縁部はわずかに肥厚する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脚部は柱部から裾部が大きく屈折して聞く。裾端部は上方に肥厚する。 	<p>を残す。柱部外面は口縁部は横ナデで、底部はC101が刷毛調整で、C102は範削りを行なう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・脚柱部内面は範削りし、外側はナデ調整。 ・底部は内外面横ナデ。 	
高杯B 柄	C105 C112	<ul style="list-style-type: none"> ・体部から口縁部は内凹する。 ・口縁部と体部は区別されず、わずかに外に向く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内外面横ナデ。 ・幅1.5cm内外の粘土紐を左まわりに巻き上げて成形する。 ・内外面とも入念なナデで平滑につくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・Ⅲ E区黒色泥砂。 ・Ⅲ E区黑色泥砂。 ・赤褐色。
手捏ね 土器	C205 I C210	<ul style="list-style-type: none"> ・体・口縁部は内凹気味に聞く。(C 205・209) ・底部は丸底と平底がある。 ・C210はくぼみ底の底盤から一度彫刻したのち外上方に聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・内面を削りのままのもの(C 206・208・209)とナデ調整を行なうものの(C 205・207・210)がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・C205はⅢ E区灰褐色微砂、C206・210はⅢ E区黑色泥砂。 ・C210は製造土器に類似。

NB区上層の土器類

甌A	C170 C188 C191	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は外反して聞く。C 170の端部は外に肥厚し、上端面に浅い沈線風の押えを行なう。 ・体部は張りがほとんどない長颈である。 ・C188は光形品。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部は内外面刷毛目調整。 ・C188の内面は刷毛日の上をドー上方向に削る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・C170はNB区暗灰色粗砂、C188はNB区黒褐色泥砂、C191はNB区茶褐色泥砂。 ・外面にスス付着。
甌B	C171 C189 C192 C198 C200	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部はわずかに外に向く。 ・体部は球形(C 189・192)、下にくびれ(C 198)、細長(C 200)と様々である。 ・C192は中型で、C171は小型品である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は内外面横ナデ。C 171には刷毛目が残る。 ・体部外面は上半を刷毛目調整し、下半は範削りする。 ・体部内面は横方向の刷毛目調整し、C198はその上をナデ仕上げする。 ・C198は幅1.5cm内外の粘土紐を巻き上げて成形する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・C171はNB区暗灰色粗砂、C189はNB区黒褐色泥砂、C192はNB区灰白色砂、C198・200はNB区茶褐色泥砂。
鍋	C204	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は外反し、端部上面に沈線風の浅い押えが1本めぐる。 ・刷毛の張りは小さいが、その最大部に相対する把手をつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部外面は横ナデ、内面は横方向の刷毛目調整を行なう。 ・体部外面は把手とりつけ部位までを縱方向2段の刷毛目調整し、以下は範削りする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NB区茶褐色泥砂。
瓶	C190	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は体部と区別されず、口縁端部の内側に小さな段をつくる。 ・体部は張りがなく把手とり 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は内外面横ナデ。 ・体部内外面は長い単位の縱方向の刷毛目調整する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・NB区茶褐色泥砂。

器 形	上段Ku	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
把手付 体	C195	・半球形の体部から、口縁部はわずかに内凹する。口縁端部は薄くつくる。 ・体部中央よりやや上に、把手のついた孔がある。	・底部外周は荒削りし、他はナナ調整。	・IV B 区灰白色砂。 ・赤褐色、粘土良好。
脚台	C178		・外面ナナ調整、内面荒い刷毛目調整。	・IV B 区暗灰色粗砂。

6世紀後半の土師器

柄 A	C212 1 C215	・半円形の体部をつくり、口縁部は丸くおさめる。	・外面は荒による細かい面取りが見られる。 ・内面は刷毛目調整を原則とし、後に横ナナ調整をするものもある。	・C212～C215はII H区黒色ビート。 ・粘土紐の巻き上げ痕が明瞭にみられる。
柄 B	C236 C237	・半円形の体部。C236の器壁は厚い。 ・C236の口縁部は丸くおさめ、C237の口縁端部は上方につまみ上げる。	・内面は平滑な横ナナ。 ・C237の外周には刷毛ナナの後、ヘラ削りと横ナナををおこなう。	・C236はV A区18号溝、 C237はV D区東半6号溝。
杯	C236	・平らな底部から直線的に外傾する体部を作り、口縁部を外反させる。口縁端部の内面に条線を施す。	・全体に横ナナ。	・II H区黒色ビート。
蓋形土器	C219	・小形でやや内凹気味につくる。	・内外面共に刷毛目調整して外周は極く削る。	・II H区黒色ビート。
高杯	C217	・平らな底部からやや外反気味に口縁部にいたる。口縁端部は丸くおさめる。	・杯部は内外面共に横ナナ。 ・脚部の接合部を指押さえする。	・V D区東半6号溝。
鉢	C238	・底盤は小さく、体部は外上方に大きく開き、口縁部を直立させている。	・外周は底部から体部の中ほどまで刷毛目調整。 ・内面は大きな荒による横ナナ調整。	・V D区西半茶褐色泥砂。 ・粘土に砂粒が多い。
小型丸底壺	C239	・小形のまろい体部。 ・口縁部は内凹し、内面に一条の沈線を施す。	・全体に横ナナ。	・II H区黒色ビート。
瓶	C224 C240	・体部と口縁部とが直線的に外傾し、C224の口縁端部は丸くおさめる。C240の口縁端部は外方につまみ上げる。	・内外面共に刷毛目調整し、口縁部は軽く横ナナをおこなう。C224の内面は荒かき上げをおこなう。	・C224はII H区黒色ビート、C240はV D区東半黒灰色砂。
釜	C243 C247	・胴部に比して口縁部が大きく、胴部は直線的に下降させている。	・体部は刷毛目調整し、口縁部はその上を横ナナ。	・C243はV A区18号溝、 C247はV A区16号溝。 ・C247には荒記号がある。
鍋	C241 C242	・口縁部はやや内凹し、頭部上面に浅い沈線風の押えがある。 ・体部の最大径部に把手が一つつく。	・内外面共に刷毛目調整し、口縁部は横ナナ。	・C241はV A区14号溝、 C242はV D区東半6号溝。

器形	上部No	形態の特徴	手法の特徴	備考(部位)
小型鏡	C220 ↓ C222	・口縁部は外側しているが、C220・221のように外側丸味のものもある。口縁底部は丸くおさめているが、C225・226のように、端部を上方につまみ出しているものもある。	・内外面ともに刷毛目調整の後、口縁部は横ナデ調整。 ・体部下半を荒削りする例もある。	・C220・221・372はII H区黒色ビード、C222はV A区13号溝、C223はV D区東半3号溝、C225・226・227はV A区18号溝、C228はV A区27号溝、C271はII H区3号溝。 ・外面にスス付着するもの多い。荒記号のつくるものもある。
	C225 ↓ C228	・体部はおむね球形につくるが、やや細長いもの(C223)とひしゃげた様な球形のものとにわかれる。		
	C229			
	C231			
	C232			
	C245 ↓ C246 C248	・小型鏡とおおむね同様の形態であるが、口縁底部のつくりにはC245のようにつまみ上げるものと、C248のように平らにナゲるものとがある。	・体部は内外面ともに刷毛目調整をおこなう。体部下半の外面を更に荒削りするものもある。 ・口縁部は内外面とも横ナデ。	・C245はV D区東半6号溝、C246はV A区暗灰色泥砂、C248はV A区21号溝。 ・C248は「X」の荒記号があり、二次的に火を受けている。
	C251 ↓ C255 C259 C261 C268	・口縁部はやや内側気味に作る。 ・口縁底部のつくりに変化があり、丸くおさめるもの(C253)、つまみ上げるもの(C231・232・235・239・250・252・256~258)、外方につまみ出するもの(C233)、平らにナゲるもの(C251・255)などが認められる。 ・C257・258は完形品で、軸弾形の体部をもつ。	・体部は刷毛目調整をおこなう。 ・口縁部は横ナデする。この際に、口縁部内面を全く横ナデせずに刷毛目を残すものもある。	・C231はV D区西半茶褐色泥砂、C232・233・235・251はV A区18号溝、C234・254はV A区暗灰色泥砂、C239・244はV A区14号溝、C252はV A区16号溝、C250・253・255・256はV D区東半6号溝、C257・258はIII C区構内灰白色砂。 ・C231・235・239には荒記号がある。 ・多くのものの外面にススが付着している。
大型鏡	C231 ↓ C235 C239 C244 C250 C251 C258			

III E上層式～IV B上層式の須恵器

杯蓋A	C202 C206	・体部はわずかに外開きで、口縁底部は丸くつく。 ・体部と天井部は突出した小さな鋸い枝で飾す。 ・天井部は丸いものと平らなものとがある。	・天井部はほぼ全面を荒削りする。内面は横ナデ調整。	・III E区黒色泥砂。 ・陶邑TK216の要素をもつ。
杯蓋B	C260 C261 C263 C264 C265	・体部はほぼ垂直に立ち、口縁部はわずかに外に開くタイプと内側するタイプとがある。端部は外側につまみ出し鋸い。C263の体部は外開きで低い。 ・体部と天井部は突出した小さな鋸い枝で飾す。	・天井部はほぼ全面を荒削りする。内面は横ナデ調整。	・III E区黒色泥砂。 ・陶邑TK208に相当する。C263はTK216に近い。

器 形	上器 No	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
		• C264・C265の天井部は尖り気味で中央が高い。		
杯壺 C	C29	• 口縁底部の内側に段をつくる。 • 体部と天井部とは突出した様で両す。	• 天井部は 5 分の 4 を窪削りする。内面は横ナナ子調整。	• III E 区黒色泥砂。 • 陶邑 TK23 に相当か。
杯壺 D	C28	• 口縁底部の内側に小さな段をつくる。 • 体部と天井部の境は後をつくらず、わずかに沈線を施すことと側す。	• 天井部は 5 分の 4 を窪削りする。内面は横ナナ子調整。	• IV B 区暗灰色粗砂。
杯 A	C26 C29 C29 C22	• たちあがりは内傾し、端部は丸くつくる。 • 受部は直く、先端は丸くつくる。	• 体・底面部外側はその 3 分の 2 を窪削りする。C269は体部をかきさげ調整する。内面は横ナナ子調整。	• III E 区黒色泥砂。 • 陶邑 TK208 に相当する。 C268 は T K 216 の要素をもつ。
杯 B	C21	• たちあがりは内傾するが、杯 A より烈く。喉部内側に段をつくる。	• 体・底面部外側の 5 分の 4 を窪削りする。内面は横ナナ子調整。	• III E 区黒色泥砂。
杯 C	C28	• たちあがりはわずかに内傾し、端部内側に段をつくる。	• 端部等にシャープさがなくなる。 • 体・底面部外側の 3 分の 1 を窪削りし、残りの部分と内面は後ナナ子調整。	• IV B 区茶褐色泥砂。
杯 D	C26	• たちあがりは直く内傾し、端部は丸くつくる。	• 全体にシャープさを欠き丸くつくる。 • 体・底面部の 2 分の 1 を窪削りし、残りの部分と内面は横ナナ子調整。	• IV B 区暗灰色粗砂。
碗	C26	• 平らな底部から、体・口縁部は直立し、口縁部・体部・底部はそれぞれ外に小さな段をつけて盛る。	• 底部外側は全面窪削りする。 • 体部外側に窪による刻み目を施す。	• IV B 区灰白色粗砂。 • 製作当初から碗として立図されていたか不明。
高杯脚部	C28 C29	• いずれも脚のみ残存。 • 脚高は低く、C280 の脚底部は肥厚し、C281 の脚部は外に段をつくる。 • C280 は台形の 4 方透し、C281 は長方形の 3 方透しを入れる。	• C281 の外側はかき目調整。 • C280 の脚底部は粘土を内外に巻きつけて肥厚させている。	• III E 区黒色泥砂。
無蓋高杯	C28	• 口縁部はわずかに外反し、端部は丸くつくる。 • 体部外側に 2 本の長い棱をつくり、その下に波状文を施す。	• 内外面ともに横ナナ子調整。	• III E 区黒色泥砂。 • 陶邑 T K 23 に相当する。
筒形器 直	C28	• 内筒部の上 3 段と脚部上半とを現存する。 • 同筒部には細い長方形の 4 方透しと波状文を各段に施す。 • 脚部は内筒部から水平に広		• III E 区黒色泥砂。 • 同筒部の復元は 5 段にしたが、島根県金崎古墳出土例のように、最下段にもう 1 段小さな段がつくかも知れない。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
		がり小さな天井部をつくり、更に鋸い棱をつくって簡折し外周きになる。 ・脚天井部には列点文を施し、円孔を4個穿つ。脚部には列点文・割み目・波状文を施し、三角形の4方透しを入れる。		
脚	C284 C285	・口縁部は一度外張してから段をつくり外上方にのびる。口縁部と頭部の境にわずかな棱をつまみ出す。口縁部、颈部に各1段づつ波状文を施す。 ・体部は肩部が強く張り、尖り気味の丸い齊部につづき、全体に無花果実形をつくる。 ・脚部最大径部に円孔を穿ち、2本の沈線をめぐらし、沈線間に波状文を施す。	・口縁部は内外面横ナデ。 ・肩部から脚部の外側はかき目調整の上を軽く擦ナデする。脚部下半から底部はナデ調整。 ・底部内面に棒状具による上からの押え板が残る。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶色TK208に相当する。
甕 A	C278 C279	・口縁部は大きく外反して開く。端部は平らにつくり、外面に断面三角形の突帯をめぐらす。C279では更に下方に2本の突帯と波状文をめぐらす。	・内外面とも横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。 ・陶色TK208に相当する。
甕 B	C280	・口縁部は外反して開く。端部は上方に肥厚し、上端面を幅広くつくる。端部外面に2本の断面三角形の突帯をめぐらし、その下に2段の波状文を施す。	・端部や突帯のつくりにおいて甕A類に比へシャープさがなくなる。 ・内外面とも横ナデ調整。	・ⅢE区黒色泥砂。
甕 C	C289	・口縁部は外反し、端部は上方に肥厚し下方に垂れ下がり、幅広い頭をつくる。 ・体部は肩部の張りが小さく、などらかに脚部につながる。	・口縁部外側はかき目調整。 ・体部外面は平行線文の叩きの上をかき目調整し、内面の同心円は消さずそのまま残す。	・ⅣB区暗灰色粗砂。

6世紀後半の須恵器

杯蓋A	C284 C321 C322	・天井部と口縁部とは純い稜線で区別されている。 ・口縁端部は丸くおさめられている。	・天井部の2分の1ほどの範囲をヘラ削りする。 ・内面中央の仕上げナデは、單一方向に刷式的におこなわれている。	・C284はⅣB区茶褐色泥砂、C321・322はⅡH区黒色ビート。 ・陶色TK43に相当する。
杯蓋B ₁	C267 C317 3 C320	・天井部と口縁部との境界はほとんどなく、全体に浅く扁平な形態である。	・天井部の箇削りは2分の1以下の範囲にせばまっている。	・C267はⅢE区黒色泥砂、他の全てⅡH区黒色ビート。 ・陶色TK209に相当する。

器 形	土器No	形 状 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (解 位)
	C25 C34	・口縁端部は丸くおさめられている。	・内面中央の仕上げナメは、單一方向に型式的におこなわれている。	・C318は型頭底となるかもしれない。
杯 壺 B ₁	C29 1 C26	・天井部と口縁部との境界はなく、口縁端部を垂直からやや内傾気味に押さえている。全体に浅く扁平な形態である。	・全般に粗陋なつくりで、天井部の凹削りの範囲は狭く、未調整のものもある。	・C291・293はII H区1号砂、C292・294・295はII H区黒灰色泥砂。 ・陶色TK209~TK217に相当する。
杯 A	C30 C32	・大型であるが、蓋受けの立ちあがりは低く内傾している。	・C302の底部は荒削り、底部内面中央には同心円文のスタンプが認められる。	・C301はII H区白色砂、C302はII H区3号砂。 ・陶色TK43に相当する。
杯 B	C27 C26 C28 C29 C30 1 C31	・全体に縮少化し、浅く扁平な形態であり、蓋受けの立ちあがりは極めて低く、内傾するものが大半を占める。	・全般に粗陋なつくりであり、底部の凹削りの範囲は狭く、未調整のものもある。	・C296・300はII H区1号砂、C297はV D区東半6号砂、C299はII H区黒灰色泥砂、C325・331はII H区黒色ビート、C273はIII E区黒色泥砂。 ・陶色TK209に相当する。
楕	C33	・無蓋高杯の杯部と同様の形態をもち、口縁部と底部との間に櫛目割立点を施す。	・底部は荒削り、他は横ナメ調整し、丁寧をつくり。	・II H区2号黒灰色泥砂。 ・製作当初よりこの器形が意図されていたかは明らかでない。
有蓋高杯	C33 1 C37	・C33は杯部のみ、他は脚部のみ残す。 ・C333の杯は縮少化している。 ・脚部は細長い脚柱部と大きく外に向く脚部からなる。	・握部は、C336が内側につまむ型は外につまみ出す。 ・脚柱部内面に絞り目が顯著に残る。	・全てII H区黒色ビート。
高杯蓋	C32 C36 C35	・C350は天井部と口縁部が純い接線で曲されているが、C332・351ではその境界がなくなっている。 ・いずれにも内凹のつまみがつく。	・天井部の凹削りの範囲は広まっている。	・C332はII H区黒色ビート、C350はII H区1号砂、C351はV D区東半6号砂。
無 蓋 高杯A	C32 C34	・杯部の口縁部と底部との境に、沈線と波状文を施す。 ・脚部は余りながらない。 ・二段二方の透し。		・C352はIV B区茶褐色泥砂、C354はII H区2号黒灰色泥砂。
無 蓋 高杯B	C33	・通有の高杯ではなく、杯蓋に低い脚部をつけたもの。	・杯底部は荒削り、他は横ナメ調整。	・V D区東半6号砂。
器 台	C38 C36	・C338の脚部は細い筒脚部とぞんぐりと張る脚部からなり、三方に三角形の透しがある。	・C338の筒脚部内面は未調整。筒脚部の外表面を細い鉛でカキ目調節している。 ・C346の外表面はカキ目調節され、内面は横ナメ調整。	・いずれもII H区黒色ビート。
K	C28 C30 1 C36	・C304は明らかでないが、能は全てI脚部がウッパ状に開き、脚部径よりも口径の方が大きい。	・C288の外表面は横ナメ調節、内面は底部を荒削りしたのち横ナメ調整。	・C288はIV B区暗灰色泥砂、C304はII H区青灰色泥砂、C305・306はV D区東半6号砂。

器形	土器No.	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
		<ul style="list-style-type: none"> C304は肩部が強く張り出し、体部の最大径部に2本の沈線を入れ、その間に凹による文様を施す。 C288は、頭部中央と体部最大径部にそれぞれ2本の沈線を施す。 C306は、頭部中央に1本、体部中央に2本それぞれ沈線を施し、体部の2本の沈線間に凹による新夷文を配す。 	<ul style="list-style-type: none"> C304の体部外面は、凹削りの後横ナナ調整。 C305の外側は横ナナ調整、底部外面にはカキ目調整がおこなわれている。 C306の底部外側は不定方向の凹削りをおこない、他は横ナナ調整されるが、頭部中央の沈線より上の部分に縱方向のカキ目調整がみられる。 	<ul style="list-style-type: none"> C306は7世紀に下る可能性がある。
拵瓶	C311 C312	<ul style="list-style-type: none"> C311の口縁部は鋭く、端部が内側に、耳は形式化しているがなお脚状瘤をみるとみる。 C312の口縁部は粗糲く、体部の前・背兩のふくらみは同じ位置である。耳は小円盤を貼りつけている。 	<ul style="list-style-type: none"> C311の口縁部は横ナナ調整、体部はカキ目調整。 C312の口縁部外面には若干の綫り目が見られる。体部前面はカキ目調整し、背面から前面は凹削りをおこなう。 	<ul style="list-style-type: none"> C311はⅣ C区溝、C312はⅤ D区西半黑色泥砂。
烈頭壺	C307 C308 C309 C310 C312	<ul style="list-style-type: none"> 烈いよ頭部は直立気味におさめられているが、C341はやや内側している。C342は口径も口縁形の高さも他と異なっている。 体部は、一般に肩部形であるが、C308はなで肩となっている。C340・341の肩部には沈線がめぐっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 底部付近は凹削りをおこない、他は全て横ナナ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> C307・308はⅣ H区2黑灰色泥砂、C340～C342はⅡ H区黒色ビート。
烈頭壺蓋	C290 C316	<ul style="list-style-type: none"> いずれも口縁部は厚手のつくりで、C290では斜めの、C316では水平の平坦面をそれぞれもっている。 	<ul style="list-style-type: none"> C290の天井部は丁寧な凹削りがおこなわれ、C316の天井部は複数のナナ調整によって仕上げられている。 	<ul style="list-style-type: none"> C290はⅡ H区黒灰色泥砂、C316はⅡ H区黒色ビート。
長頭壺	C309 C343	<ul style="list-style-type: none"> 肩部はなで肩で、体部の最大径部に2本の沈線がめぐる。C309ではこの沈線間に側による刺突列点文を配する。 いずれも脚部がつく。 	<ul style="list-style-type: none"> 体部の下半は凹削りをおこない、上半部から頭部は横ナナ調整、C309の底部から脚部は横ナナ調整で、C343の底部は凹削り。 	<ul style="list-style-type: none"> C309はⅣ C区溝、C343はⅤ D区東半3号溝。
壺	C313 C314 C339 C361	<ul style="list-style-type: none"> C313は口縁部をわざかに外反し、端部が直立している。口縁部の中央に2本の沈線をめぐらしている。 C314は口縁部が外反し、端部は外側に肥厚している。体部は丸く、肩部に1本の沈線をめぐらしている。 	<ul style="list-style-type: none"> C313の体部下半は凹削りをおこない、他は全て横ナナ調整。 C314の端部は凹削りをおこない、他は全て横ナナ調整。 C339・361とともに横ナナ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> C313・314はⅡ D区東半6号溝、C339・361はⅡ H区黒色ビート。 C314の体部は磨滅が激しい。
平壺	C310	肩部は強く張るが張り出しがつくらない。底部は平らである。	底部下半は不定方向の凹削りをおこない、他は全て横ナナ調整。	Ⅱ H区1号。

沿 形	土器No	形 異 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
横 弧	C345 C348	<ul style="list-style-type: none"> ・C345は小型であり、口縁部は頗る直立気味におさめ、底部は外側に折り曲げられて配置している。体部中央に縱方向の6本の沈線があがぐる。 ・C348の口縁部は外反し、底部は外側に折り曲げられて配置している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・C345の体部は叩き締められた後、中央の沈線のめぐら範囲はナシ調整されている。 ・C348の体部は叩き締められた後、体部中央はカキ目調整されている。 	・C345はV D区西小黒色泥沙、C348はW C区泥。
中 端 頭	C315 C346 C347 C355 1 C359 C362 1 C368	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁端部は外側に折り曲げて配置させるものが全般的な特徴であるが、C315・355・364・366のように肥厚部の低いものと、C365・367・368のように高いものとがある。またC344・347・356・362のように肥厚させた後、端部を内側につまみ上げるものもある。 ・C359・360・362・363は口径が小さく、蓋などになる可能性もある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部は稍ナラ調整をおこない、体部は叩き締めてつくっているが、C315・365の体部外表は更にカキ目調整している。C368は体部の内外面を更にナシ調整している。 	・C315・357・364・365・367・368はV D区東半6号溝、C344・347はII H区黒色ビート、C355はV A区16号溝、C356はV D区東半型灰色泥沙、C358～360・362・363・366はII H区1号溝。
大型 頭	C38 C38 C38	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁端部のつくりに特徴があり、C369は底厚させていないが、C349・370は折り曲げて底厚させ、端部をつまみあげている。 ・口縁部外側には文様がほどこされ、更に沈線がめぐつていて、C349では把による突点文が、C369では底による波状文が、C370では底による網状文がほどこされている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・口縁部の内外面とも底ナラ調整。 	・C349はII H区黑色ビート、C369・370はV D区東半6号溝。

第26表 古墳時代の木器観察

種類	遺物No.	形態の特徴	備考(解説)
広歯	CW1	・CW1は現存長23.4cm、幅16cm、厚さ1.4cmあり、頭部・両部は厚さが0.4cmと薄くなっている。形態はやや特異で身部中央のやや上方で両側がくびれ、なで肩状をなして刃部に移行している。着柄部の隆起は長さ9cm、幅5.6cm、厚さ2.5cmあり、着柄角度は身に対して70°である。隆起部のある面の反対の面には、幅2.5cm、深さ0.3cmの透孔のくり込みがある。	・CW1はⅢE区黒色泥砂、CW2はⅤA区26号溝出土。
	CW2	・CW2は現存長19.6cm、現存幅14.4cm、厚さ1.1cmあり、約5%が残存している。隆起部の厚さは3.2cmあり、着柄角度は身に対して75°である。刃先の残りは良くないが、片面を削って刃状につくっている。	・CW2は弥生時代に属する可能性がある。
歯	CW3	・CW3は現存長14cm、現存幅25cm、厚さ0.6cmあり、両面とも平滑に仕上げられている。身部中央が残存しており、頭部・刃部の形態は明らかでないが、着柄部には跡跡をつくり出さず、着柄孔は横円形を呈し、磨滅度は認められない。	・CW3はⅤA区26号溝、CW4はⅦB区暗灰色泥砂出土。
	CW4	・CW4は現存長6cm、現存幅12cmあり、同じくつくりの小破片であろう。	・CW4は6世紀後半か。
鋸	CW5 I CW8	・CW5、CW6は「二又状」の形態となる歯と考えられる。CW5は現存長26cm、現存幅5cmあり、刃先は削くつくもれ痕跡には刃がつけられている。CW6は現存長19cm、現存幅5cmあり、「L」字状のくびれによって頭部と体部とを区別しているが、原形では左右対称の形態につくられていたものであろう。	・CW5、CW8はⅦB区暗褐色泥砂と砂の互層、CW6はⅡH区黒色ピート、CW7はⅨB区灰白色粗砂出土。
	CW7	・CW7は両部の形態が明らかではないが、現存長24.4cm、現存幅14.6cm、厚さ1cmあり、刃先は片刃状につくられている。	・CW7は庄内一布留式伴行窓、性は6世紀後半か。
鍔柄	CW10 CW11	・CW10は現存長62cmのスコップ形の歯で、柄と歯先は一本でつくられている。柄の現存長は37.4cm、直径約4cmの円形断面であるが、歯先付近に厚みが残えて長方形の断面となっている。歯先部は歯先に向って徐々に厚みが減っている。歯先部中央に不整形を孔と認めるが、二次的なものと思われる。	・CW10はⅣA区19号溝、CW11はⅡH区黒色ピート出土。
	CW9	・現存長20cm、幅1.7~2.8cm、厚さ1.3cmあり、着装孔のある部分は欠損する。柄の端部には丸く突起をつくり出し、各箇所ともに丸く削り痕を残している。	・6世紀後半か。
代櫛き	CW14 CW86	・CW14は舟形に近く、CW86は平円形に近い形態である。いずれも長辺を削って薄く仕上げ、刃付けをおこなっている。鍔柄孔は方形ないし長方形で、身に対してもほぼ直角にあけられている。いずれも加工は荒く、CW86には加工痕がよく残っている。	・CW14はⅦB区暗灰色粗砂、CW86はⅢC区浦内灰白色砂出土。
			・6世紀後半か。

種類	遺物No	形態の特徴	備考(層位)
		<ul style="list-style-type: none"> CW86はII区完形品であり、現存長辺50cm、対辺16.4cm、厚さ4cmである。 	
舟	CW15 CW16	<ul style="list-style-type: none"> CW15は内部をくり抜いてつくった把手付舟の断片で、把手は両辺部につけられ、現存長2cm、直徑4~4.4cmの円形断面である。 CW16も内部をくり抜いてつくった舟の残存したもので、全長107cm、現存幅30cm、高さ12cm、深さ8.2cmを計る。周縁には、短辺部で7.6cm、長辺部で2.8cm幅の平退線がある。 	<ul style="list-style-type: none"> CW15はIVB区茶褐色泥砂と砂の互層。CW16はIII-C区溝内灰白色砂出土。 6世紀後半。
杵	CW33	<ul style="list-style-type: none"> 全長64cmの完形品で、断面円形の舟部と、断面方形の柄部とからなり、ともに丁寧に削られて面取り整形されている。 舟部の先端より22cmまでの範囲には磨滅痕が激しく、また柄の上端面にも磨滅痕が確認された。 	<ul style="list-style-type: none"> IVB区茶褐色泥砂と砂の互層。 6世紀後半。
砧	CW34	<ul style="list-style-type: none"> 全長37.2cmの完形品であり、舟部は断面圓形で長辺7.2cm、対辺6.6cmを計り、柄部は断面円形で径3.2cmを計る。 柄部は激しく磨滅している。 	<ul style="list-style-type: none"> III-C区溝内灰白色砂出土。 6世紀後半。
斧柄	CW12	<ul style="list-style-type: none"> 木の斧部をうまく利用してつくられた全長57.6cmの完形品である。舟部の長さは15.4cm、幅3.4cmあり、斧を着装する部分は平らに削られ、先端部には突起をつくり出している。 柄の断面は偏円形である。 柄全体で磨滅痕が認められる。 	<ul style="list-style-type: none"> IVB区灰白色砂出土。 床内~布依式併用期か。
手斧柄	CW13	<ul style="list-style-type: none"> 木の斧部をうまく利用してつくられ、柄部の大半は破損している。舟部と柄部のなす角度は120°を計り、舟部は長さ13cm、幅4.1cmあり、舟部の着装部は設をつけて区別している。 	<ul style="list-style-type: none"> IVB区黒褐色泥砂出土。 6世紀後半。
木鍬	CW31 CW32	<ul style="list-style-type: none"> 2例とも全長14cmと16cmの完形品で、片面を平治につくり断面が偏円形を呈する。長辺の中央に方形の孔があげられている。 表面は平滑に仕上げられている。 	<ul style="list-style-type: none"> いずれもIIH区黒色ビート出土。 5世紀後半。 鍬物を作る時に使われる鍛冶であろう。
糸車	CW95 CW97	<ul style="list-style-type: none"> 3例ともほぼ同じ大きさに作られ、全長約24cm、幅約2cmである。両端近くに柄穴があり、軸を受けて目釘が打ち込まれている。 表面は丸みを帯びて仕上げられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 3例ともIII-E区黒色泥砂出土。
うき状木器	CW17 CW18 CW29 CW19 CW20 CW26 CW28 CW29 CW16	<ul style="list-style-type: none"> 最大例で全長25cm、最小例で全長17cmあり、体部の下端部には円形か方形かの孔が空たれている。 形態にはバラエティーがあり、体部が幅広く扁平なタイプ(CW17~CW20, CW26, CW28, CW29)と、体部の幅がせまく断面円形に近い細長いタイプ(CW21~CW25, CW27)とがある。 製作手法からみると、体部の一側面を原材から削りたままあるいは若干加工するだけにとどめ、他の残りの側面を加工しているものがある(CW19, CW20, CW28, CW29)。一般的には四側面を全て加工しているものが多い。 CW17の対する両側面にはえぐりが入れられている。 	<ul style="list-style-type: none"> 漁網につけられるうきと思われる。 CW17はVA区14号溝、CW18, CW25はVA区1号仕立て、CW19はVA区13号溝、CW20, CW14はVDM寺6号溝、CW21はIVB区茶褐色泥砂、CW22, CW26, CW27はIIH区黒色ビート、CW23はVA区19号溝、CW24はIIH区3号溝、CW28はIII-E区黑色泥砂、CW29はVA区暗灰色泥砂、CW145, CW146はIIH区3号灰色泥砂出土。

種類	遺物名	形態の特徴	備考(層位)
			<ul style="list-style-type: none"> 6世紀後半に属すと考えられるが、CW20、CW144は飛鳥時代に下る可能性もある。
チキリ 状木器	CW78	・全長54.4cm、幅5.6cmの宍形品で、両端部に柄状のものをつくり出しているが、底面にみられる柄とは形態が異っている。厚さは全面が一定につくられている。	<ul style="list-style-type: none"> III E区黒色泥砂出土。
案	CW51	・全长77cm、幅31.4cmあり、両端がやや広がり気味の長方形を呈する。厚さは2.6cmであるが、裏面の両端部に脚を受けける隆起部を削り出し、この隆起部の中央に長方形の孔がそれぞれあけられている。	<ul style="list-style-type: none"> III E区黒色泥砂出土。 裏にみられるような切り抜きは全く認められない。
下駄	CW53 CW67 CW142	<ul style="list-style-type: none"> 各地区より大型品13例、小型品5例、計18例の下駄が出土した。 ・小型品は、全长15~17.5cm、幅7.8cm~8.5cmで、大型品は全长22cm~26cm、幅10cm~11.7cmあり、CW65は形態も規模も特殊である。 ・合板の形態には4種類認められ、前部・後部ともに尖がり気味につくるもの(CW56)、前部幅が後部幅よりやや広い小判形のもの(CW53、CW58~CW61、CW64、CW66 CW67)、前部幅と後部幅がほぼ等しい隅丸の長方形のもの(CW62、CW63、CW142)、特殊なもの(CW65)とがある。 ・界縫孔は前歯・後歯の前方にそれぞれ穿たれ、また前ツボは中軸より左右にいずれかに偏っている。円孔のもの(CW53、CW54、CW56、CW57、CW60、CW65、CW142)の他に、方孔のもの(CW61、CW67)があり、他のものは判別がつかない。CW61のようにやや斜方向に孔が穿たれる例は少なく(CW60、CW64、CW142)、多くは合板に対して垂直方向に孔が穿たれている。 ・歯は削り出してつくられ、一番残りのよい下駄(CW59)の現高は3.9cmである。一般に歯は合板の幅と等しくつくられているが、CW59の前歯の一側はやや強張り出しており、CW55では内板の幅より狭くなっている。CW63、CW64 CW65の歯のつくりは特殊である。 	<ul style="list-style-type: none"> 小型品は子供用、大型品は大人用と考えられるが、大型品の内、CW58とCW59の界縫孔の間隔は小形品のそれに近く、女性用とも考えられる。 ・CW53、CW54、CW60 CW62の前ツボ付近には指痕が、CW67の後部には踵痕が認められる。 ・CW53はII H区1秒、CW54はII H区黒色ビード、CW55はV A区19号溝、CW56~CW58、CW64 CW67、CW142はIV B区茶褐色泥砂と砂の互層、CW59、CW66はIV D区1号溝、CW60はV A区暗灰色泥砂、CW61、CW63はIV D区東字6号溝、CW62はIV B区黒褐色泥砂、CW65はV A区21号溝出土。 ・6世紀後半に属すと考えられるが、CW53、CW61、CW63は飛鳥時代に下る可能性もある。 ・京都府鍬山古墳や群馬県白石郡箱山古墳出土の滑石製模造品では、合板の形は不整形であり、歯は前後に開き、縫孔が後歯の後方にあけられている。前ツボが一方に偏していいる点は同じである。
笠 A	CW35 CW36	<ul style="list-style-type: none"> ・いずれも周縁に平坦面を残して内部をくり抜いてつくられた笠で、底面には脚のつくり出しがみられない。 ・CW35は長辺23.8cm、現存短辺9.4cm、高さ2.6cmの破損品 	<ul style="list-style-type: none"> CW35はIII C区溝内灰白色砂、CW36はIV B区灰白色粗砂出土。

種類	遺物No.	形態の特徴	備考(層位)
		であり、CW36は現存長辺12cm、現存短辺7cm、高さ2cmの破片である。	・CW36は庄内一帯発見。 CW35は6世紀後半か。
盤B	CW37	・いずれも周縁に平坦面を残し、内部をくり抜いてつくられたもので、裏面には脚部をつくり出している。	・CW37はⅢE区黒色泥砂
	CW38	・CW37は長辺32.6cm、幅辺13.4cm、高さ4.2cmの完形品で、底面の両足脚部には、内側に開く「コ」字形の脚台部をつくり出している。 ・CW38は長辺40.2cm、現存底辺13.6cmあり、約2号の破損品で、底面の中央に、内側をくり抜いた偏円形の脚台がつくり出されている。破損辺の両端には、補修孔と思われる孔があけられている。	・CW38はⅢE区暗灰色粗砂出土。 ・CW38は6世紀後半か。
箱	CW40	・長辺40.2cm、対辺14.8cm、厚さ1cmの底板の完形品で、周縁の計6ヶ所に日釘跡があり、その内の3ヶ所には、一辺0.2cmの日釘が残っている。これとは別に一長辺の中央には孔があけられている。	・ⅢE区灰褐色粗砂出土。 ・庄内式併行期。
杯	CW50	・推定直径50cm、高さ13.7cmの偏円形の大鉢の約半残存したもので、内部はくり抜いてつくられ、厚さは約3cmを計る。破損辺の周縁平底面には補修乳しき孔があけられている。	・ⅣB区灰白色粗砂出土。 ・庄内一帯発行期。
鉢形木器	CW49	・長辺21.6cm、幅辺19.8cmの偏円形を呈し、高さは7.4cmで平底をもつ。中央よりやや一方に偏して、一辺約8.6cmの隅丸方形容形にくり抜かれている。	・ⅣB区灰白色粗砂出土。 ・庄内～布留式併行期か。
桶	CW41	・桶の側板の約4周残存したもので、底部の復原径は32cm、現存高は28cmである。側板が底部から口縁にかけて内側する桶の形態が復原され、底板を受けるために、内面に段をつくり出している。	・ⅣB区灰褐色泥砂庄土。 ・6世紀後半か。
曲物蓋	CW42 CW43 CW48	・復原径はCW42、CW48で約25cm、CW43では約36cmあり、いずれも周縁部を残って、段をつくり出している。 ・CW42では、樹脂漆を充填した目釘が2ヶ所に認められ、目釘は斜方向に打ち込まれている。	・CW42はⅤD区東半6号溝、CW43、CW48はⅣB区暗灰色粗砂出土。 ・CW42は飛鳥時代に下る可能性がある。
曲物底	CW29 CW44 1 CW47 他3例	・破損死ばかりであるが、復原径は15cm～35cmまで各種のものがある。 ・CW39、CW46には周縁端部より水平に打ち込まれた目釘がある。 ・CW44には補修孔と思われる孔が2ヶ所あけられている。	・CW39、CW44はⅤD区東半6号溝、CW45はⅣB区暗青灰色泥砂、CW46はⅤD区茶色泥砂、CW47はⅤA区13号溝出土。 ・全て6世紀後半か。CW39、CW44、CW46は飛鳥時代に下る可能性がある。
樽	CW98 1 CW100	・CW98は立構の破損品で、現存長11.3cm、幅8.1cmあり、厚さは頭部で0.9cmを計り両先の方へ次第に薄くなっている。曲数は10本で、曲幅は0.4～0.6cmである。 ・CW99は横構の破損品で、現存長4.3cm、現存幅8.1cmあり、厚みは頭部で0.7cmを計り、頭部は極めて薄い。曲数は明らかでないが、曲幅は0.15cmである。 ・CW100も横構の破片で、現存長3.1cm、現存幅5cmあり、曲幅は0.1～0.15cmである。	・CW98はⅤD区東半6号溝、CW99はⅣB区暗灰褐色粗砂、CW100はⅡH区黑色ビート出土。 ・6世紀後半か。CW98は飛鳥時代に下る可能性もある。
樽子	CW75	・現存長104.8cm、幅13cm、厚さ3.2cmの破損品で、残存している錆み台部は1ヶ所しかないが、剝離した跡からみて、	・ⅢE区灰褐色粗砂出土。 ・庄内式併行期。

種類	遺物No.	形態の特徴	備考(層位)
		約18cmの間隔に踏み台部がつくり出されていたことがわかる。踏み台部は残りが悪く、白基底部の長さ13cm、厚さ6.8cmを計る。	
組材	CW77 CW79 CW80 CW84 CW85	<ul style="list-style-type: none"> CW84は、現在長48.5cm、幅10cm、厚さ6cmの角材に3.6cm×5.6cmの枘穴をもうけ、現在長94.5cm、幅7cm、厚さ5cmの角材の一端に枘をつくり出して組み合わせたものである。両方の角材の端部はともに焼損している。 CW85は、現存長89cm、幅12.5cm、厚さ7.2cmの角材の二面に7.6×6cm、7.4×4.4cmの枘穴をそれぞれもうけ。他の角材を組み合せている。端部近くの枘穴に組み合わされる角材はほか破壊しているが、他のものは、全長35cm、幅9~12cmのやや末広がりの堅かい角材が組み合わされている。枘穴のある角材の一端は焼損し、反対側の端部は荒い切断面を残している。 CW77は現存長50.4cm、幅8.3cm、厚さ4.1cmあり、一方の端を欠損している。端部寄りの位置に、長さ16.2cm、深さ1.6cmのくり込みをもうけている。 CW79は現存長55.8cm、幅10.6cm、厚さ3.6cmあり、一端に長さ7.6cm、幅4.3cmの枘をつくり出している。 CW80は現存長49cm、幅6cm、厚さ2.8cmあり、一端に長さ6.2cm、幅2.4cmの枘をつくり出している。 	<ul style="list-style-type: none"> CW77はⅢ E区灰褐色砂、CW79はⅢ E区黒色泥砂、CW80はⅢ C区溝、内灰白色砂、CW84、CW85はⅢ N B区茶褐色泥砂と砂の互層の出土。 CW77は庄内式併用型、CW80、CW84、CW85は6世紀後半か。
板材	CW76 CW81 CW82 CW87 CW91	<ul style="list-style-type: none"> CW76は現存長93cm、幅23.7cm、厚さは中央部で9.7cmあり、端部でやや薄くなる。片面を平頭に仕上げて断面は正鉛形を呈し、一面の左石と一概焼端間にそれぞれくり込みがあり、裏面には深部で結合する2個の小穴が穿たれています。 CW81は全長65.4cm、幅27.6cm、厚さ2.5cmあり、両端部が「L」字形に削りとられている。 CW82は全長82cm、幅24cm、厚さ4cmあり、両端辺とも荒く切削されたままである。中央に径約10cmの孔が縦に穿たれている。 CW87は現存長94cm、幅18.4cm、厚さ約8cmを計る。 CW88は現存長110cm、幅12cmあり、一方の短辺部に向って兩は狹くなっている。一端に長さ2.8cmの枘が3個つくり出され、また一面には、この枘の基部に大きさの異なる3個の枘穴が穿たれている。 CW89は現存長115cm、幅18cm、厚さ11.6cmの角材で、ほぼ全面が焼けている。両端部付近に径6cmの円孔が貫通して穿たれ、その間に深さ約4cmの2つの凹穴とも方穴とも決めがたい穴が3個穿たれている。 CW90は全長75cm、幅約16cm、厚さ約3.4~3.9cmを計り、端部付近に14×7.6cmの長方孔が穿たれている。 CW91は全長69cm、幅10.2cm、厚さ4.8cmを計り、両端部とも削りによる擦形が認められる。両端部付近に6.6×6cm、4×6cmの方孔が穿たれている。 	<ul style="list-style-type: none"> CW76、CW81はⅢ B区暗灰色粗砂、CW82はⅢ E区黄褐色砂、CW87、CW89はⅢ C区溝内灰白色砂、CW88、CW90、CW91はV D区京半6号溝出土。 CW82は庄内式併用型、他は6世紀後半か。 CW88、CW90、CW91は飛鳥時代に下る可能性もある。
棒状木器	CW68 CW74 CW75	<ul style="list-style-type: none"> CW68は全長153cm、幅約4.6cmの完形品で、両端部より40~50cmの間は四面加工されているが、中央部は丸く仕上げられている。両端部に各々2本ずつ刻みが認められる。 CW69は現存長113.4cm、径3.8~4.2cmあり、両端とも欠 	<ul style="list-style-type: none"> CW68、CW69、CW71~CW73はⅢ N B区暗灰色粗砂、CW76はⅢ B区灰白色粗砂、CW74はⅢ N B区灰

種類	遺物No.	形 慎 の 特 徴	備考(層位)
		<p>模している。一部に長さ9cm、深さ1.4cmのえぐりが認められる。</p> <ul style="list-style-type: none"> CW70は現存長80.4cm、幅4.6cm、厚さ1.8cmの偏平なもので、一端にはコブ状の突起をつくり出している。 CW71は全長117.4cm、径2.2~3.7cmの完形品で、両端部は丸く加工している。 CW72は現存長88cm、幅4cm、厚さ2.2cmの偏平なもので、一端の側面をえぐって突起をつくり出している。 CW73は現存長30cm、径3cmあり、一端が尖があり、全面に削り痕が残る。 CW74は全長50cmの完形品で、一端に長さ3.9cm、幅3.6cmの突起をつくり出し、以下の部分を刃状につけた先端は尖らしている。 CW126は全長22.5cmの小型品で、一端を尖らしている。全面に削り痕が明瞭に認められ、中央にえぐりを入れている。 	<p>区暗青灰色泥砂、CW126はⅢ C区溝内灰白色砂出土。</p> <ul style="list-style-type: none"> CW70は庄内一布留式併行期、他は6世紀後半。
小型木器	CW102 CW106 ↓ CW125 CW147 CW148 他11例	<ul style="list-style-type: none"> CW102を除いて、他の全ては括出品である。 各種のものがみられるが、CW105は杖を、CW108は刀子を明らかに模倣しており、CW117がCW127と、CW119がCW103やCW104とそれぞれ大きさこそ違え、相似していることなどから、これらの小型木器は、それぞれ各様の小形模造品ではないと思われる。 	<ul style="list-style-type: none"> CW102はNB区暗灰色粗砂、他は全てII H区黒色ビート出土。 6世紀後半。
齊串	CW130 ↓ CW138 CW152 CW153 他10例	<ul style="list-style-type: none"> CW139は全長8.6cmの最小例で、CW132は全長22.8cmあるが、CW130は現存長で26cmあり、最大の例となるか。 形態上4種類が認められる。端部が刺先状に尖るタイプ(CW130、CW135、CW152)、CW153など計7例)、端部が刺先状で側面に切り込みを入れているタイプ(CW133、CW134、CW139の3例)、端部を斜めに削っているタイプ(CW131、CW132など計9例)、端部を斜めに削り側面に多くの切り込みを入れているタイプ(CW136~CW138の3例)である。 	<ul style="list-style-type: none"> CW130~CW132、CW134、CW139、CW152、CW153はNB区茶褐色泥砂と砂の互層、CW133、CW136はVD区東半6号溝、CW135はII H区黒色ビート、CW137はVA区19号溝、CW138はII H区3黑色泥砂出土。 CW133、CW136は飛鳥時代に下る可能性もある。
刺先状木器	CW92 ↓ CW94 CW146 ↓ CW151 他3例	<ul style="list-style-type: none"> 完形品はないが、一端を刺先状に尖がらせ、先端より約20cmのところに両側よりえぐりを入れている。CW92のように偏平なつくりのものもあるが、他は断面変形の刺身状につくっている。 	<ul style="list-style-type: none"> 全てⅢ C区溝内灰白色砂出土。 6世紀後半。
用途不明木器	CW30 CW101 CW103 CW104 CW127 CW128 CW129 CW143	<ul style="list-style-type: none"> CW30は全長16.8cm、幅11cm、厚さ5.6cmの完形品で、平面八角形をなし、中央に5.6×6.5cmの方形の孔がある。 CW101は直径6.6cm、高さ8.4cmの円柱形をなし、内部を深さ4.4cmの円形にくり抜いている。側面には一对の突起がつくり出されているが、破損のため明らかではない。また側面には日釘孔がやや斜方向に貫通している。外側には墨跡が薄く残されている。 CW103は直径約6.8cm、CW104は直径約9cmの円形品で 	<ul style="list-style-type: none"> CW30はVA区13号溝、CW101、CW103、CW104はVA区14号溝、CW127、CW143はNB区暗灰色粗砂、CW128はIII E区黒色泥砂、CW129はIV C区溝出土。 CW128を除いて6世紀後半。

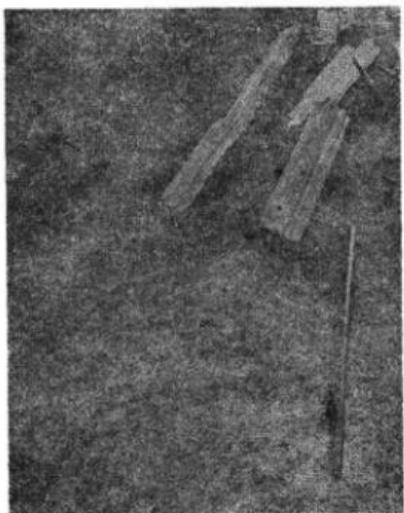
種類	遺物No.	形態の特徴	備考(層位)
		<p>中央にはいすれも孔がある。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・CW127は、全長12.4cmの偏平なつくりの光形品で、大型の鉤状を呈する。 ・CW128は、現存長14.4cmの被損品で、端部近くに一辺4cmの方形孔が穿たれ、その下方に一辺1.2cmの方形の孔があげられている。 ・CW129は現存長12.8cmの被損品で、端部は荒く削ったままであり、同じく荒くえぐる所があり、柄のようなものの未製品と思われる。 ・CW143は全長20cm、幅2.1cmの光形品で、片面を平坦に仕上げ断面曲輪形を呈し、その平坦面上に長さ12.3cm、幅1.2cmの長方形のえぐりを入れている。 	<p>半か。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・C W30は、地引き網のロープが分岐する所に使用されるものに類似する。 ・CW101は袖瓶のようなものであろうか。 ・CW103、CW104は紡錘車であろうか。 ・CW128と類似のものが静岡県立呂道跡にみられる。
琴柱	CW140	<ul style="list-style-type: none"> ・高さ1.9cm、幅3.4cmの完形品で、側面は三角形をなし、脚部の厚さは1.3cmあり安定した形態である。頭部には中心よりややずれて切り込みがあり、脚底部の切り込みは浅い。 	<ul style="list-style-type: none"> ・V A区1号住居址出土。 ・CW141と併出する。 ・6世紀後半か。
尾端不明木器	CW111	<ul style="list-style-type: none"> ・全長23cm、最大幅1.1cmの完形品で、断面円形の柄部と、幅0.7~1.2cmの不揃いな切り込みを8ヶ所にもつ偏平な部分とからなっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・V A区1号住居址出土。 ・琴柱(CW140)と併出した点と、材質が同じ点とから判断して、楽器となる可能性がある。

第4章 飛鳥時代以降

1. 遺構の調査

(1) 溝跡・掘立柱建物の調査 (図版18~21, 第7・11・14~16図)

¹⁾ **VD区大溝** (図版20-1・21, 第15・16図) 東西方向にのって造られた人工の溝で、東流する。最小幅約2m、最大幅約4mを計り、深さは約1.2mある。堆積土は上から上部黒灰色泥砂層、ピート層、下部黒灰色泥砂層、灰白色砂礫層とに分かれる (第16図)。上部黒灰色泥砂層から下部黒灰色泥砂層に至る間には、出土遺物からみて大きな時期差はなく7世紀後半に属する。最下部の砂礫層からは6世紀末の土器が少量出土している。この



挿図26 VD区西半大溝内の板・杭材の出土状態

溝は一度修復しており、その為の杭列、板材が発見された (挿図26)。しかし、その修復は大規模なものではなく、下部黒灰色泥砂層が堆積した時点で、杭と板とで部分的に補修した程度のものである。大溝内からは須恵器、土師器、土鍬、瓦、木器など多種多様の遺物が発見されている。須恵器には円面鏡、杯、鉢、瓶などがあり、土師器には高杯、杯、椀、盤、甕などがある。木器としては、櫛、横櫛、殊特下駄、曲物などが出土し、瓦も少量であるが細かい布目痕のある平瓦が出土している。暗文を施した土師器、硯、瓦などの出土することや、溝の造成のあり方など

から、この大溝は官衙もしくは寺院などの付属施設と考えられよう。²⁾

VD区東半2号溝（第15図） ほぼ東西方向に走る溝で、東流する。現存幅40～50cmで、溝底の一部が遺存したものである。溝内からは奈良時代の須恵器（D75）、土器が少量出土している。なお、この遺構については、第3章でも触れている。

V A区12号溝（図版19-1、第12図） 東西方向にのって造られた人工の溝で、東流する。最小幅1.2m、最大幅1.5m、深さ約0.5mあり、西側に幅広く、東側に向かって漸次幅を狭めている。溝内には流れによる砂の堆積がみられ、下部の黄灰色砂層からは6世紀末の土器、磁石などが発見され、上部の茶褐色泥砂層からは8世紀の土器片が1片発見されている。この遺構についても、第3章でも触れている。

VC区溝（第11図） 古墳時代前期の竪穴住居址が立地するIV区の扇状地上にあり、2号住居址と3号住居址との間に発見された。発掘した範囲は極めて狭く、溝の北肩の一部を確認したにすぎないが、深さは0.7mあり、恐らく東西方向にのって造られた人工の溝ではないかと思われる。溝の堆積は主に砂層からなり、下部の堆積層からは6世紀後半の土器が発見され、上部の堆積層からは8世紀の土器が発見されている。また、この溝は現在の畦畔と重なっている。

掘立柱建物（図版18-3、第7・15図） V D区西半・東半、V D区、V B区の各地区で掘立柱建物が検出されているが、それについて第3章1節(3)の各項に記載している。

(2) II H区の調査（図版18・19、第16図）

東西方向に走る現在の際川から南へ60mの間を調査した。旧地形では、この地区は旧際川の蛇行する流路内にあたっている。この流路内からは6世紀後半～平安時代の間の遺物が発見された。しかしながら、本調査区の最北端部（現在の際川に最も近いところ）は比較的安定した微高地となっており、ここに竪穴遺構とピット群が検出された。

竪穴遺構（図版18-4、第16図） 旧際川の一方の肩部を形成する微高地に立地し、一辺約6mの方形プランの竪穴で、壁高は約25cmあり、床面は東側に向かってやや傾斜している。内部施設としては、竈などの施設は認められず、4個の柱穴が対応する位置に認められる他に、多くのピットが検出されている。これらのピットがこの竪穴遺構に付属するものかどうか明らかではなく、竪穴遺構の埋没後につくられた可能性もある。内部に堆積した黒灰色泥砂層からは7世紀を最新の時期とする土器が出土している。またこの竪穴遺構の西辺と南辺とに平行して溝と柱列が検出されたが、これは竪穴遺構に伴う可能性がある。

溝は竪穴造構の西辺から1.2mの間隔をおき、幅20cm、深さ5cmを計る。柱列は竪穴造構の南辺にほぼ平行して認められ、痕跡で検出されたものを含めると6本を数えた。両端の2木は板柱を、内の4木はほとんど加工していない丸太杭を打ち込んでいる。また西端の板柱には丸太杭が副えられており、両者とも焼けている。

ピット群（図版93） 竪穴造構の内やその周間に多くのピットが検出された。竪穴造構との関連については明らかでないが、ピット内の堆積は竪穴造構内のものと基本的には同じ黒灰色泥砂層である。ただし、竪穴造構の西辺より西方には青灰色粘土、木炭、焼土などの薄い層が堆積しており、この混合土がピット内に堆積しているものもある。しかし、この混合土層からも7世紀を最も新しい時期とする土器が出土しており、黒灰色泥砂層との時期差はない。また、この混合土層中より、銅鋤、鉄鋤、櫛羽口（図版93）、金銅製止め具（挿図28）などの遺物が出土していることは注目される。

自然流路の調査（図版18-4） 微高地に立地する竪穴造構から南方8mの間は自然傾斜面を形成し、その南方は北西から東南方向の大きな自然流路となっている。現地表面より-5mまで調査したが、花崗岩の礫層からなる砂層と砂泥層との互層堆積からなり、時代が下るに従って流路も南方に移動している。下層には6世紀後半の遺物を含む層がみられるが、多くは6世紀後半～9世紀後半の遺物を含み、最終的には大規模な洪水による砂礫層が堆積し、流路は埋没している。この砂礫層の厚さは1mにもおよび、内に巨岩をも含み洪水の規模がいかに大きいかを示している。この砂礫層には遺物が多く、須恵器、土師器、灰釉・二彩・綠釉陶器、瓦など、6世紀後半～9世紀後半までの遺物が出土している。流路埋没後、この地域は湿地の状態にあったらしく、黒褐色砂泥層が全域にわたって堆積している。この層からは12世紀後半代の土師器、木器が多量に出土した。VA区やND区などにおいても同じ内容をもつ土層が確認されており、12世紀末頃には湖岸線の伸長と関連して、生活の場が山寄りに移ったのであろう。

なお、この自然流路の肩部に堆積した黒色ピート層からは、多量の6世紀末の土器、木器が発見されている。

2. 遺物の検討

(1) 土器 (図版86~89, 第75~78, 第28表)

出土地点 7世紀以降の土器は調査区の全域から少量であるが出土している。このうち、やや、まとまって得られたのが、ⅡH区とVD区大溝から出土した7世紀代の土器である。このうち大溝からは、溝という性格上、あるいは溝の使用目的が不明である等の制約があるが、ある程度まとまりのある土器が得られた。ここでは大溝の出土品を中心にして土器の形態、手法等を明らかにしつつ、当地域でのこれらの土器の時期、土器の持つ意義について検討する。

須恵器 (図版86・87, 第75・76図) 杯C (D8~16) は12cm前後の口径に作られており、底部はへら切りのままで未調整である。体部は口縁部に向けて外傾させ、口縁部をわずかに外反させているものが多い。杯D (D25~28・30~32) は高台の形態に二種類がある。一はやや外方に張る低い高台をそのまま付したもの、他は高台を付け、その外縁を底部に強く押しつけたもので、端面が外方に向いている。いずれも杯部内面に丁寧な仕上げナデを行なっている。杯蓋 (D38~43) は全て宝珠形のつまみを付けており、大井部の頂部付近を削るか、カキ目を施している。内面にかえりを付けるもの〔杯蓋C (D39~41)〕と、付かないもの〔杯蓋D (D38・42・43)〕とがある。鉢 (D46) は平底で底部は未調整である。体部には整形時の横ナデ痕跡が顯著である。口縁部は内側に曲げて、やや肥厚する。円面鏡 (D48・49) の内、D48は器壁が厚く、脚部に大柄の方形の透しを施している。D49は脚部を二段に分け、各段に長方形の透しを上下交互に施している。いずれも鏡面を下に向けて焼成している。

土師器 (図版88・89, 第77・78図) VD区大溝からは、杯A (D89~98・100), 杯C (D101), 片口瓶 (D103), 盤 (D108~109), 高杯 (D104~106), 鍋 (D115), 壺 (D111~114) が出土している。杯Aには小型のものとやや大型のものとがある。小型のものの底部は未調整であり、体部は籠みがきをおこなうものとおこなわないものとがある。形態は体部からやや内燃気味に外傾させたものを口縁部で外反させて作る。内面には放射と螺旋の暗文を施しているが、暗文を施さないものもある。盤は口縁の形態や手法の上で杯と同様であるが、底部は底削りをおこない、籠みがきはみられない。高杯Aはやや大型の杯に、低く小

さな脚部をついている。この脚部には指による整形痕が顕著にみられる。高杯にはこの他に、極めて浅い直線的な杯部をもつ高杯B(D106)がある。壺類は口縁部の形態に特徴がある。外反させた口縁部の端部を上方につまみ上げるものと、丸くおさめるものとがある。この他に、丹塗りの杯(D101)があり、やや高い台をつけ、内面には粗い放射状の暗文を施している。また、大溝の出土品ではないが、II区より出土した同時期と考えられる蓋(D107)は注目される。足の長い扁平なつまみをつけ、そのつまみの上面には螺旋の暗文を施している。天井部の頂部付近は、つまみを団む様に三方向の籠みがきをおこない、外周は横方向に籠みがきをおこなっている。この蓋の天井部外面に、「有」「徳」「海」「兔」「魚」「大」などの横書体の墨書きがみられる。「有」「海」「徳」などの文字が繰り返して一列に書かれていることや、重複して書いていることなどから、習書したものかも知れない。

大溝の土器とその年代 今回の調査で、飛鳥時代以降の土器は調査範囲のかなり多くの地点で検出されたが、その大半は二次堆積したものであった。

遺構に伴う土器としては、V D区大溝の一括出土品が特に注目される。大溝出土の土器は、概して7世紀後半代に属するもので、7世紀中葉以前に属すると考えられる若干の資料を除けば、ほぼ一型式の土器と認定できる。

大溝出土の土器中もっとも個体数の多いのは、須恵器杯類である。杯身には高台付と無高台とがあり、前者は比較的大型で、口径の大きさも大小2~3種にわかれ。無高台の杯身は、口径がほぼ11~12cm内外で、すべて小型である。

この器形は、陶邑古窯址群のTK-217号窯出土の一例を標式とするTK-217型式に初まり⁵⁾、以後8・9世紀まで続くが、大溝出土の杯身は高台の有無や大小とは関係なく、TK-217型式の例と比べて全般に浅く、体・口縁部の外傾度が大きい。小型杯身の多くは、口縁端部のみわずかに外反するが、この傾向は時期的な特徴と考えてよい。また、小型杯身にやや器形の個体差があるのも、7世紀前半代にはみられない新しい傾向である。

なお、高台付杯身の高台には、D28に代表される踏んぱりのよいものと、D27やD29のように高台が低く端面が外向きのものとの2種がある。後者は前者と比べて型式的には新しい段階の特徴と考えられるが、ここでは両者が共存したものとすることができるよう。

杯蓋は前記の杯身に対応して各種認められるが、蓋の内面にかえりを有するものが大半で、かえりが無く端部を単に折り上げたものも若干例ある。いずれも宝珠形のつまみを有するがD38の一例はやや特殊である。

杯蓋のかえりの有無は、土器型式の認定上顕著な指標となるが、藤原宮跡の出土例では両者が共存しており、飛鳥淨御原宮跡推定地の場合も両者の共存が知られている。⁶⁾ 大溝の土器の年代決定にあたって、この事実は有力な根拠となろう。

次に、大溝出土の土師器について概観すると、最も出土個体数の多いのが内面に暗文を有する杯類で、器形、大きさ、手法とも飛鳥淨御原宮跡推定地の出土品に近似している。D104の高杯は、脚柱部を窓で縱方向に削っているが、これは断面円形の脚柱部をもつ高杯から、10~12角柱の高杯へ移行する過渡期の產物である。

杯類に次いで出土例の多い器種は甕類である。大小各種あり、その特徴も一様ではないが、概括すれば、ここでは前章で指摘したいわゆる近江タイプの甕がほとんど認められず、代って畿内各地で普遍的にみられるタイプの甕が支配的であるという事実は注目される。

口縁部が外脣気味に外上方へのび、その端面が内傾する近江型の甕は、すでに述べた通り6世紀末から8世紀代まで存続することが確認されているが、何故か大溝出土品中にその例を見ず、畿内型が支配的であるということは、単なる偶然とみるとよりも、大溝とそれに関連する当地の遺構の性格を示唆するものであると考えるべきであろう。なお、北大津駅構内遺跡から出土した7世紀中葉の土師器甕の場合も、畿内型が支配的である。新説にいえば、こうした土器のあり方の特徴は、湖西のこの地が大津宮跡推定地であり、大溝をはじめ各地点から検出した7世紀後半代の土器が、大津宮と何らかの関連を有するものであり、今後の大津宮跡研究に一つの手掛りを与えるものであることはまちがいないだろう。

記述が前後するが、大溝出土の一括土器は、全般に飛鳥淨御原宮跡の出土品に、もっとも近似している。そして藤原宮跡の土器より古く、また7世紀中葉以前の畿内各地の土器よりも型式的に新しい。⁷⁾ 大溝出土の土器群のもつ諸特徴は、まさにこの土器の年代を大津宮時代(668~672)に比定するにふさわしいといえよう。

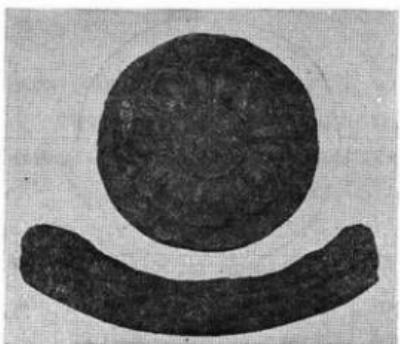
大津宮時代に属すると考えられる土器は、大溝の他にⅡH区からも若干例出土している。たとえば墨書きのある土師器盤の蓋(D107)も、大溝出土土器と同一時期に考えてよいものである。

大溝出土の土器中、特殊なものとして須恵器円面碗(D48・49)、土師器丹塗杯(D101)などがあるが、碗は装飾的要素が簡明で、器高が低く安定感があり、全体に洗練されている。D49の碗面は明瞭に磨耗が認められ、使用されていたことがわかる。なお、ⅡH区では、大溝出土杯蓋(かえりの無いタイプ)と同型式の杯蓋碗がD107の土師器と共に検出されている。

(2) 瓦・木器、その他(図版90~94、第71・79・80図)

瓦(図版94-1、第80図) 調査区域内で瓦が出土したのは、II H区とV D区大溝の2カ所である。大溝内の瓦は少量で、細かい布目を有する平瓦の小片である。伴出した土器や瓦の作りから7世紀後半のものと考えられる。II H区出土の瓦は自然流路の9世紀後半の土器を含む層からの出土品である。全体に摩耗が激しいが、軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、丸瓦、

等が出土している。軒丸瓦は大型の中房と複弁の連弁文であり、軒平瓦は三重弧文である。他に軒丸瓦には単弁の例もある。これらの文様から、7世紀後半代の瓦である事が窺知出来る。平瓦、丸瓦ともに小片で摩耗している為、製法等については不明である。これらの瓦を観察すると、南滋賀町庵守出土の瓦と全く同一の内容を持っており、恐らく、そこから流されて来たものであろう。(挿図27)



挿図27 南滋賀町庵守出土の瓦

木器(図版83・90~92、第71・79図、挿図20、第29表) 7世紀以降の木器の内、V D区大溝から出土した木器が注目される。7世紀後半に最終的に埋没したこの東西溝からは、櫛(DW1)、特殊下駄(DW2)、コテ状木器(DW3)、うき(DW29)、曲物(DW10・11)、櫛(DW14)、齊串(DW30・36)が出土し、この他にも杭・柱・板や多くの加工木・自然木が得られた。特殊下駄やコテ状木器などのように従米例のないものを含むこれらの木器・木製品は、7世紀後半にその年代を限定することのできる好資料である。

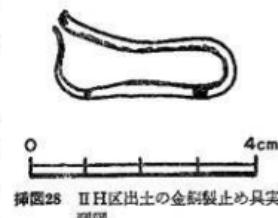
V D区大溝の出土品を除けば、木器で遺構にともなうものではなく、II H・IV D・VA区の平安時代~中世の遺物を含む各包含層から出土したものである。曲物(DW6~8)・籠底板(DW9)・高杯(DW13)・盆(DW12)・漆器(DW15・16)などの容器、下駄(DW4・5)、琴柱(DW41)、留めぐし、男根状木製品(DW37~39)などがある。

錢貨(図版93-1、第80図) 本調査で出土した錢貨は第27表の通りであるが、このうち大多数はIV D区北半部の一括資料であり、数値、種類等が直ちに調査区域全体の傾向ではない。開元通宝は背文を欠いており、又、他の錢貨についても、かなりの粗悪品がみ

られる事から、国内生産の品も混在しているものと考えられるが、中世の銅貨の流通状況の一端を窺知出来る。

金銅製止め具 (図版93-2) II H区のピット内から出土した。銅を丸く彫形し、一方の端を中途から平らたく延ばし、それをピン風に曲げて製品化し、それに鍍金を施している。これは併出した土器から、7世紀後半のものである。

鉄滓・銅滓・櫛羽口 (図版93) II H区のピット等に流入する焼土、粘土を含む黒灰色泥砂層から出土している。櫛羽口は小片で全体を窺知出来ない。この羽口には鉄の施着するものと、銅の施着するものがある。先の金銅製品と関連があるものと考えられる。時期は金銅製品と同様、7世紀後半のものと考えられる。



図版28 II H区出土の金銅製止め具実測図

第27表 古銭一覧

銭貨名	枚数	No.	王朝	皇帝	初鑄年代	銭貨名	枚数	No.	王朝	皇帝	初鑄年代
開元通宝	6	DM1 DM2	唐	高祖	621	元符通宝	1	DM18	北宋	哲宗	1098
至道元宝	2	DM9 DM10	北宋	太宗	995	聖宋元宝	2	DM4 DM5	北宋	徽宗	1101
景德元宝	1	DM17	北宋	真宗	1003	淳熙元宝	1	DM20	南宋	孝宗	1174
天聖元宝	3	DM15	北宋	仁宗	1023	開禧通宝	1	DM3	南宋	寧宗	1205
皇宋通宝	4	DM11 DM12	北宋	仁宗	1039	淳祐元宝	1	DM19	南宋	理宗	1241
至和元宝	1	DM6	北宋	仁宗	1054	嘉祐元宝	1	DM21	南宋	度宗	1265
嘉祐通宝	2	DM16 DM25	北宋	仁宗	1056	永樂通宝	1	DM22	明	成祖	1408
元豐通宝	7	DM13 DM14	北宋	神宗	1078	寛永通宝	5	DM23			
元祐通宝	4	DM7 DM8	北宋	哲宗	1086	文久永宝	1	DM24			

註 1) VD区の調査区域の概略等については第3章1節(3)の各項を参照されたい。以下のVA区等についても同様である。

2) VD調査区の北方の水田に、南滋賀町庵寺出土のものと同型の瓦を出土する穴太南遺跡（仮称）がある。⁸⁰³

3) 須恵器の各部分の名称は、田辺昭三『陶邑古窯址群I』平安学園考古学クラブ 1966年 p.35 の「須恵器各部の名称」に掲載した。

4) 阿部義平・山沢義貴『水びき成形技法における「ヘラ切り」と「糸切り』』（「日本考古学協

会第36回総会研究発表要旨』) 1970年

- 5) 前出『陶邑古窯址群Ⅰ』
- 6) 奈良県教育委員会編『藤原宮』1969年
- 7) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原発掘調査概報3』(1973年) 及び前出『藤原宮』など参照。なお、飛鳥淨御原宮跡推定地の出土品については奈良国立文化財研究所飛鳥藤原発掘調査部で実見の機会を得たが、詳細についてはいずれ同所より報告がなされる筈である。なお、その折に小瀬田宮跡推定地、板蓋宮跡推定地の出土品を合わせて実見したが、大溝出土の土器を検討する際に大変参考になった。所員の皆さんに感謝したい。

その他本章関係の参考文献

- ・原口正三編『船橋Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1957年
- ・中尾芳治「難波宮造営前の遺跡調査報告」(『難波宮址の研究』5冊の2) 1966年
- ・水野正好『甲賀郡甲西町孤栗古墳群調査概要』滋賀県教育委員会 1968年
- ・西田弘「大津市中保町遺跡」(『滋賀文化財研究所月報』6) 滋賀文化財研究所 1968年
- ・出雲國庁跡発掘調査団『出雲國庁跡発掘調査概報』松江市教育委員会 1970年
- ・伊場遺跡調査團『伊場』第4次調査月報1~6 1971年
- ・『音正寺』石川考古学研究会 1971年
- ・田辺昭三「飛鳥・奈良期の須恵器」(『日本美術工芸』393号) 1972年
- ・『昭和46年度(第39次・第40次)難波宮跡調査報告書』大阪市教育委員会 1973年

第28表 飛鳥時代以降の土器・陶磁器觀察

須恵器・陶磁器

器形	土器No	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
杯蓋A	D 1	・古墳時代以来の杯蓋の極めて矮少化したもの。	・D 1 - 17の大井部は荒削りされているが、D 20の大井部は未調整である。	・全てII H区2黒灰色泥砂。
	D 17		・D 1の内面中央部には丁寧な仕上げナデが認められる。	・D 34 - 36の蓋と組み合わせて杯身となる可能性もある。
	D 20			・陶色TK 217に相当する。
杯蓋B	D 34 35 D 37	・宝珠つまみのつく杯蓋で、口縁端部内面には身を受けるかえりがあり、D 34 - 36では口縁端部とかえりの高さが等しい。 ・杯蓋Cにくらべて小型である。	・天井部は荒削りし、他は全て横ナデ調整。 ・内面中央には仕上げナデが認められる。	・D 34 - 36はV D区大溝、D 35はII H区2黒灰色泥砂、D 37はI E区茶褐色泥砂。 ・陶色TK 217 - TK 46に相当する。
	D 39 39 D 41 D 44 D 45	・杯蓋Bを大型化した形態をとり、宝珠つまみには変形が生じている。D 44の口縁端部内面のかえりは退化しており、かえりをもつ杯蓋の終末の好例であろう。	・D 39 - 44は天井部を荒削りし、D 45は天井部の周辺部付近を荒削りしている。D 40 - 41の天井部はカキ目調整されている。 ・D 39 - 44の内面中央には仕上げナデが認められる。	・D 39 - 41はV D区大溝、D 44はII H区1号溝、D 45はII H区黒灰色泥砂。 ・陶色TK 48に相当する。 ・杯蓋Dと併存する。
杯蓋D	D 38 D 42 D 43	・杯蓋Cと形態はよく似るが、身を受ける口縁端部内面のかえりがなく、口縁端部を直角に折り返している。 ・天井部中央につまみがない。D 42では宝珠形のおもかげを残しているが、D 38では扁平なつまみとなっている。	・D 42 - 43は天井部を荒削りしている。 ・3例とも内面中央に仕上げナデが認められる。	・3例ともV D区大溝。 ・陶色TK 48に相当する。 ・杯蓋Cと併存する。
杯蓋E	D 60	・天井部が平らな極めて扁平な形態をとり、口縁端部は断面二角形におさめている。	・内外面とともに横ナデ調整。	・II H区黒褐色泥砂。 ・奈良末～平安初。
杯 A	D 2 D 18 D 19 D 21 D 22	・古墳時代以来の杯の矮少化したもので、たちあがりは極めて小さく、受け部の端部と窓が位置が等しい。	・底部の荒削りは省略され木調整である。 ・内面中央の仕上げナデはない。	・D 2 - 22はV D区東半6号溝、D 18はII H区黒灰色泥砂、D 19 - 21はV D区西半茶褐色泥砂。 ・杯蓋A(D 17 - 20など)とセットになると考えられる。 ・陶色TK 217に相当する。
杯 B	D 3 3 D 7	・口径が小さく身の深い形態で、D 3 - 7では体部・口縁部をやや内側させ、他のものは直立気味に少し外傾させている。	・D 3の底面部外面は未調整で、D 4 - 7の底部は荒削りの後、ナデ調整している。 ・内面中央の仕上げナデはない。	・D 3はV D区東半6号溝、D 4 - 7はII H区黒灰色泥砂。 ・杯蓋Bとセットになる。 ・陶色TK 217 - TK 46に相当する。
杯 C	D 8 9 D 16	・杯Bにくらべて身が浅くなり、体部・口縁部の外傾度が強くなる。口縁端部をD 15のように外につまみ出す	・底部は荒削りのままで未調整のものが多く、一部にナデ調整を加えるものがある。 ・底部以外は内外面とともに横	・D 8はV D区東半黒灰色泥砂、D 9はII H区黒灰色泥砂、D 10 - 16はV D区大溝。

器 形	千 號 No	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
		ものと、D13のように丸くおさめるものがある。	ナテ調整。 ・内面中央に仕上げナテが認められる。	・器形にゆがみのあるものが多い。 ・陶邑TK48に相当か。
杯 D	D23 5 D32	・高台の付く杯で、口縁は大小の差があるが、体部・口縁部は直線的に外傾する。 ・高台は底く外にふんばるものが多いが、D30のようにふんばりのない例もある。注目されるのはD25・27・29の高台で、高台の下端面を斜めにナテで、端面は外方に向いている。このタイプは型式学的には後出的なものであろう。	・底部外面は未調整で、他は全て横ナテ調整。 ・内面中央に丁寧な仕上げナテが認められる。	・D23・25~28・30~32はVD区大溝、D24はIIH区6黒褐色砂泥。D29はIIH区1秒。 ・D25は底部外面に墨痕あり。 ・陶邑TK48に相当か。
杯 E	D50 D51 D55 D56 D63 5 D66 D68 D69	・光形品ではなく全体の形態がつかみにくいが、高台はより低くなり、かつ外へのふんばりが弱くなり。高台の付く位置が底部の平坦面の周縁に近い。	・底部以外は内外面とも横ナテ調整しているが、D55は底部外面を荒削りしている。 ・D64~66・68・69の内面中央に仕上げナテが認められる。	・D50・51はVD区東半風灰褐色泥砂。D55・56・64・65・68・69はIIH区灰褐色砂。D63・66はIIH区黒褐色砂泥。 ・奈良末~平安初。
高 杯	D71 D72	・D71の脚部はラッパ状に大きく開き、拵端部は外方につまみ出されている。 ・D72は欠損部が多いが、脚部は糸巻き状に作り、すぐに終るものか。	・全体に横ナテ調整。	・D71はVD区西半茶褐色泥砂。D72はIIH区黑灰色泥砂。 ・7世紀。
鉢	D46	・底部は平底で、口縁部は内凹する。口縁から底部に向って徐々に器體が厚くなっている。	・底部外面は未調整。他は全て横ナテ調整。 ・内面中央に仕上げナテが認められる。	・VD区大溝。
盤	D33	・厚手のつくりで、高台は外方にふんばっている。	・底部外面は未調整で、その他は全て横ナテ調整。 ・内面中央に丁寧な仕上げナテが認められる。	・IIH区1秒。 ・VD区大溝出土のものと同時期のものであろう。
皿	D73	・小型の矮少化した形態か。	・底部の内面には絞り痕が顯著である。	・VD区大溝。
円筒壺	D48 D49	・D48は器壁厚く、周縁は腹の面よりも高い。縁帶は大きく、断面三角形につくり、その下部から幅広い透しを入れている。透しは7~8孔か。 ・D49は、腹が周縁より高く海の部分は深い。断面三角形の縁帶を上・下2本つく	・全体に横ナテ調整。D48の腹の面は指で平滑に仕上げられている。	・ともにVD区大溝。 ・D49は、陸の部分に墨が付着し、自然釉のかかり具合から判断して倒立位で焼成されている。

器 形	土器No.	形 異 な る 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
		り、下の縁部をはさんで、6方造しが右横様に入れられている。 ・肩端部は折り曲げて肥厚さしている。		
平瓶A	D74	・肩部は純い棱をなす。	・底部外側は荒削り、他は横ナナ調整。	・VD区火溝。
平瓶B	D75	・肩部は羽根模様をなし、底部下半の棱線は鋭く底部に移行する。	・瓶底から底部下半の外側を荒削りし、他は横ナナ調整。	・VD又東半2号溝。 ・奈良時代。
横 瓶	D76	・瓶部は直線的に外傾し、底部で内傾する。	・横ナナ調整。	・VD又大溝。
短颈壺A	D79	・口縁部は直立気味に外反し、端部上端面を平らにこくる。	・横ナナ調整。	・VD区火溝。
短颈壺B	D82	・口縁部は極めて短かく、腹部は丸くおさめる。肩部はなどらかにつくる。	・横ナナ調整。	・VA区8号溝。 ・平安時代。
長颈壺	D47 D78	・いずれも体部の破片であり、肩部と体部の境には明瞭な縫合つくり。D47では肩接部のやや上方に一条の沈統がめぐる。	・D47は横ナナ調整。D78の体部下半は荒削りをおこない、他は全て横ナナ調整。	・D47はVD又東半黒灰色泥砂、D78はVD区火溝。
弦 A	D77	・口縁部は短かく外傾し、底部は折り曲げて肥厚させ、上方につぶみ上げている。	・横ナナ調整。	・VD区火溝。
壺 B	D54 D59 D61 D62 D67	・全て底部の破片で、高台がつく。 ・D54・61は小腹である。 ・D54・62とともに灰釉陶。 ・D59は褐色、緑色の二彩釉陶。	・D54・61は底部に素切り底。	・D54・61・62・67はIIH区灰色砂、D59はIIH区黒褐色砂泥。 ・奈良～平安時代。
中型壺	D80 D81	・口縁部は外反し、底部はD80ではなくおさめ、D81では直面に折り曲げている。	・口縁部は内外面とも横ナナ調整しているが、D81の口縁部下半には叩き目が残る。	・いずれもVD区火溝。 ・D80にはススが付着。
大型壺	D83 D84	・口縁部は外反し、底部を尾引させて上端を内側につぶみ出す。	・口縁部は内外面とも横ナナ調整し、体部は叩き縮めた後、外側をカキ目調査する。	・いずれもVD区火溝。
碗 A	D58	・底部のみの破片。内側する体部は無底の高台をつくる。 ・縁脚有。		・IIH区緑土。 ・底部外側に「一」のヘラ記号。
碗 B	D85 D86 D88	・D85・87・88は青磁、D86は白磁の破片。 ・D86の口縁部は折り返している。	・D85の外側に通弁文、D87の内側とD88の外側とにヘルによる文様がある。	・D85・86はVA区「丁形黑褐色泥砂、D87・88はVD区茶褐色泥砂。
皿	D52 D53 D57	・D52は青磁。口縁部に削りによる装飾がある。 ・D53は内側の邊中に段を作る。		・D52はWC区緑土、D53はIII C区緑土、D57はII H区緑土。

器形	土器名	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
		・D57は縁輪転脚。		・D52は中世、D53・57は平安時代。 ・D53は施設製品か。
淨瓶	D70	・底輪脚。		・II H区純土。

土器器

杯 A	D89 ↓ D98 D10 D108	・口徑には大小の差がある。 口縁端部のおさめ方には、 D89・91・92・94・96・98 ・100のように外方につまみ 出すもの、D90・97のように 巻直につまみ上げるもの、 D93のように内背気味のもの、 D95・144のように自然 におさめるものなどが認め られる。	・D89・91・93・95は内外面 ともに横ナテ調整。D90・ 144は内外面ともに横ナテ調 整後に荒みがき。内面 は横ナテ調整。D92の底部 外面はおさめている。D96 ・100は体部下半外周を鉗削 りし。他は全て荒みがき。 ・調整後、内面に唯文をつけ るものが多い。D89・90・ 91・97は一段の放射状文、 D92・94は一段の放射状文 と螺旋状文、D100は二段の 放射状文と螺旋状文、D98は 連弧文と一段の放射状文と 二段の螺旋状文とをそれぞ れもつ。	・D89~98・100はⅤ D区大 溝、D144はII H区黒褐色 砂泥。 ・7世紀後半。
杯 B	D135 ↓ D138	・口縁端部は丸くおさめてい る。	・内外面ともに横ナテ調整し、 底部外面には指押痕が認め られる。	・II H区黒褐色砂泥。 ・平安時代~中世。
杯 C	D101 D111 D115	・高台のつく形態である。口 縁端部はいずれも外方につ まみ出している。 ・D101の内外面に芳を塗る。	・内外面ともに横ナテ調整。 ・内面には調整後、一段の放射 状文をつける。D141は粗 V。	・D101はⅤ D区大溝、D141 はⅤ D区西半茶褐色泥砂、 D145はⅤ A区下部黒褐色 砂泥。 ・7世紀後半。
碗	D99 D102	・口縁端部はD99では上方に つまみ出し、D102では外方 につまみ出している。	・D99は内外面ともに荒みが き。D102は底部下半外周を 鉗削りし。他は全て荒みが き。	・II H区2 黒褐色泥砂。 ・7世紀。
片口瓶	D103	・口縁端部は内方につまみ出 している。	・休部外周は第ナテ調整し、 口縁部外面は横ナテ調整。 内面は刷毛目調整。	・Ⅴ D区大溝。 ・7世紀後半。
盤	D108 ↓ D110 D142	・大小の差はあるが、口縁端 部を丸くおさめている。	・D108・110は内外面ともに 横ナテ調整。D109は底部外 面を鉗削りし。他は全て横 ナテ調整。D142は外周を荒 みがきし。内面は横ナテ調 整。	・D108・109はⅤ D区大溝、 D110はII H区黒褐色泥砂、 D142はⅤ D区西半茶褐色 泥砂。 ・7世紀後半。

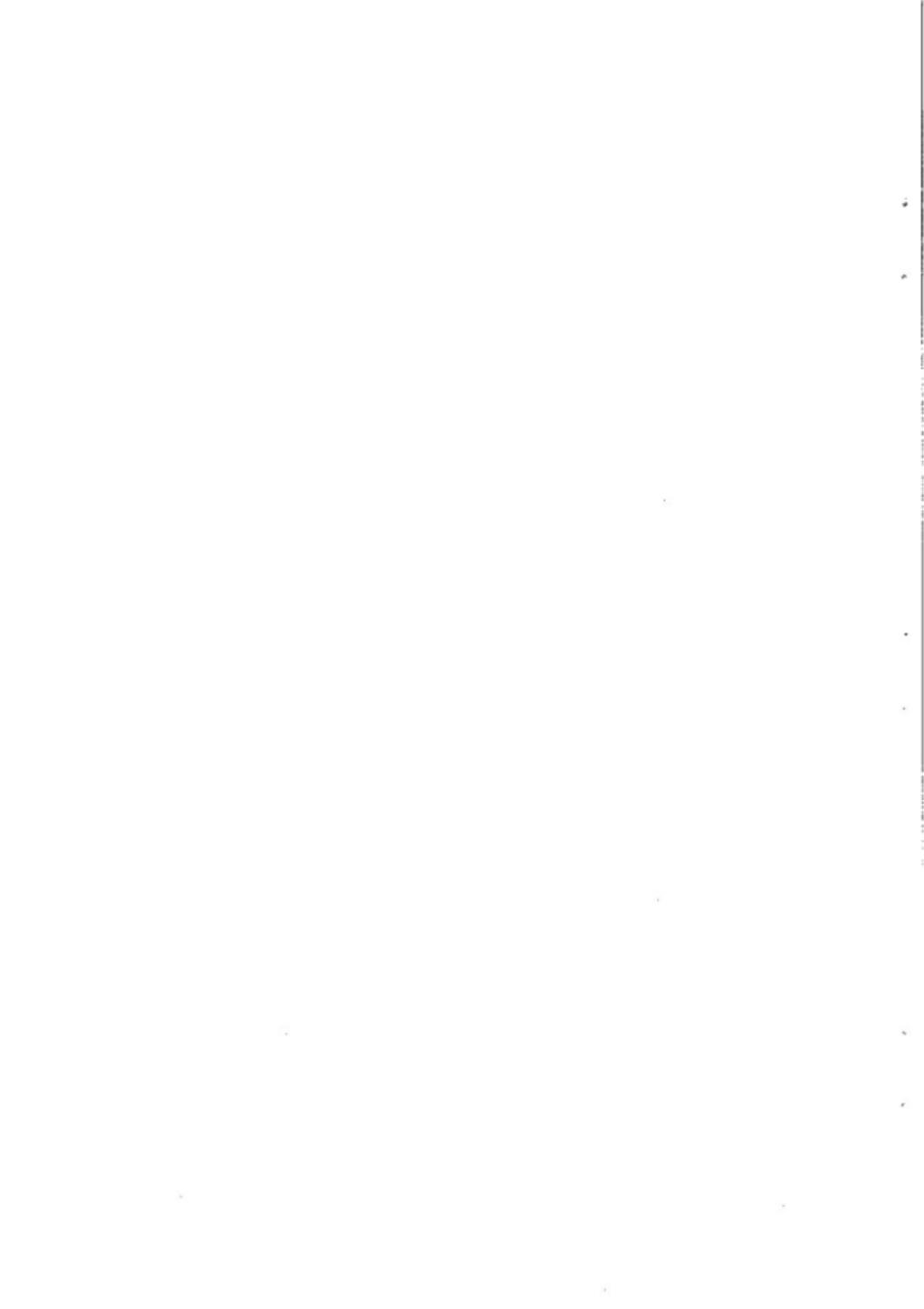
器形	土器No	形態の特徴	手法の特徴	備考(層位)
高杯A	D104 D105	・浅い杯部に円筒部をもつ低い脚がつく。口縁端部は外方につまみ出されている。	・内面にはD110を基いて暗文をつける。D108では放射状文、D109では放射状文と螺旋状文、D142では大柄な螺旋状文である。	
高杯B	D106 D143	・ごく浅い盤形に脚がつく。脚部の形態は不明。D106は直線的に外に向く器形である。	・柳内筒部外面は指おさえするのみで、円筒部内面を除いて他の全て横ナナメ調整。脚内筒部内面には絞り痕が顯著である。 ・杯部内面には、D105では放射状、D104では放射状と螺旋状の暗文がつく。	・V D区大溝。 ・7世紀後半。
高杯C	D139 D140	・楕円形に近い深い杯部に、円筒部のほとんどない低い脚のつく小型の高杯。	・底部外面を掘削りする他の全て横ナナメ調整。	・D106はV D区大溝、D143はV D区西半茶褐色泥砂。 ・7世紀後半。
盃	D107	・済子のつくりで大型の器形。口縁端部は丸くおさめる。 ・高く肩平なつまみがつく。	・外側のつまみ付近は、つまみを回む様に三方向に彫りがきし。他の部分は横に彫りがきをす。内面は横ナナメ調整。 ・つまみの頂部には螺旋状の暗文をつける。	・II H区黒灰色泥砂。 ・7世紀後半。 ・外側に墨書きあり。
碗 A	D115	・口縁部は外傾し、中央で直立させている。体部は細長の球形で、中央部に最大径があり、その部分に平面三角形の把手を一对つけている。	・口縁部内外面とも横ナナメ調整。体部内外面とも細かい刷毛目調整。	・V D区大溝。 ・7世紀後半。
碗 B	D116	・体部下半から底部は欠損しているが、底部と口縁端とは境がない、口縁端部を外側上方につまみ出している。	・内外面ともに刷毛目調整。口縁部には横ナナメ調整を加えている。	・II H区2 黒灰色泥砂。 ・7世紀。 ・外側にスヌ付着。
小型甌	D112	・口縁部は外傾し、底部は丸くおさめる。体部は球形。	・口縁部内外面とも横ナナメ調整。体部は内外面ともに刷毛目調整。	・V D区大溝。 ・7世紀後半。
中型甌	D111 D113 D114	・体部が瓶形になる中型の甌形で、口縁部は外傾しないし外反し、底部をD113では内方に、D114では上方につまみ出している。	・口縁部は内外面ともに横ナナメ調整。体部は内外面ともに刷毛目調整しているが、D111の内面は削削りしている。	・V D区大溝。 ・7世紀後半。

器 形	土器No.	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考 (層位)
大型罐	D192	・体部が著しく縱長になる器形で、外反する口縁部の端部を上方につまみあげている。	・口縁部は内外面ともに横ナナ子調整。体部外側は上から下に順次引毛目調整を行う。体部内面は体部の半ばまで斜めにカキ上げ、それより上部は水平方向に箆ナナ子している。	・II H 区 6 黒褐色砂泥。
壺	D166	・体部下半の破片であるが、肩部にひしやげた把手がつくる。	・外面は凹みがき、内面は箆ナナ子調整。	・II H 区 1 砂。 ・器形には不明の点が多く検討の余地が多い。時期に関しては不明。
III	D117 I D134	・大きく見て大小の 2 種類が認められる。	・内外面ともにナナ子調整。	・D117・122・123・133・134は V A 区下部黒褐色砂泥、D118・121・124・132は II H 区黒褐色砂泥。 ・平安時代～中世。
釜	D147 I D151	・口縁部の内側するタイプ (D147～149) と直立するタイプ (D151) とがあり、それぞれにつばが付くが D150はつばがなく、口縁部が外に張り出す形態をとる。		・V A 区下部黒褐色砂泥。 ・平安時代～中世。 ・外面にススが付着。

第29表 球島時代以降の木器調査

種類	近畿地	形態の特徴	備考(解説)
櫛	DW 1	・現存長72.5cmで柄部が欠損する。木かき部は長さ54cm、幅約12cm、厚さ約2.6cmを計り、先端部は削られて厚さが薄くなっている。片面は木かき部の基部と先端部を除いて、細部の加工がなされていない。	・VD区大溝出土。
うき	DW 28. 29	・DW28は全長12cm、DW29は全長10cmあり。いずれも両端を尖らせる筋彫形を呈す。DW28の一端は現代の筋うきの棒にやや細身につくられている。DW29は荒い加工が認められ、恐らく半製品であろう。	・DW28はVD区東半Pit51、DW29はVD区大溝出土。
棹性下駄	DW 2	・形態上は苦追の下駄と大した差異はないが、曲がる不容易と大きさとから普通の下駄と区別される。 ・全長30.9cm、幅14.6cmの小判形の変形品で、右板は縦に2分されており、これを結合させるための孔が3ヶ所に穿たれている。裏面にはこの統合孔を含めて長方形のえぐりが認められ、結合部が實際によって切れる为了避免している。右板はともと一枚の同じ材を使っており、補修のためにこなされたものか。あるいはある目的をもって元来このように半折されて作られたもののか。興味ある点であるが明らかではない。 ・而ソビは右に備よっており、付近には指印痕がよく残り、特に親指に力が強く加わったことが観察される。	・VD区大溝出土。 ・台板に残る削痕痕から判断して相当強く前にふみ込む動作が保原され、工具や農具として使われたことが考えられる。
コチ 伏木 器	DW 3	・長辺25.8cm、短辺8.4cmの変形品で、上面にはくり抜きによって握り柄を作り出し、裏面は長軸・短軸の両方向に弯曲している。裏面は擦痕によるのか磨滅が激しい。	・VD区大溝出土。
舟物	DW 6-8 DW 10- 11 生5例	・7世紀後半のものはDW10・DW11など計4例ある。直径は18cmほどで、DW10、DW11にはいずれも3ヶ所に目釘穴がみられる。 ・平安末～中世のものはDW6～DW8など計6例ある。直徑16～17cmのものが多いが、DW8のように大きい例もみられる。	・DW6はIIH区茶褐色砂泥、DW7はIIH区黒褐色砂泥、DW8はVA区下部黒褐色砂泥、DW10、DW11はDV区大溝出土。 ・DW11の一面には切り落が認められる。
帆張	DW 9	・直徑15cmあり、中央に円孔が穿たれている。周縁の2ヶ所に目釘穴が残っており、舟物の底板を接合したものか。	・IIH区茶褐色砂泥出土。 ・平安時代か。
高杯	DW 13	・組み合せ式高杯の脚部充形品で、全長22.2cm、最大幅5.4cmあり、断面は方形を呈する。両端部に方形と長方形の柄をつくり出している。	・IIH区灰色砂泥出土。 ・平安時代か。
盆	DW 12	・推定直徑19.2cmの破損品で、ロクロ引きによってつくられている。底盤外側には削跡困難な墨書きが残っている。	・IIH区黒褐色砂泥出土。 ・平安時代か。
漆器 皿	DW 15	・直徑9.2cm、高さ1.4cmの皿で、黒漆が塗られている。	・IVD区茶褐色砂泥出土。 ・平安末～中世か。
漆器 椀	DW 16	・推定直徑9cm、現在高4cmの破片で、黒漆が塗されている。	・VA区暗青灰色砂泥出土。 ・中世か。
下駄	DW 4-5 -42	・古墳時代の下駄とくらべて、前ソボの位置が中央にくる点や、曲がる板よりも張り出す点などに差異がみられる。 ・DW4は全長21cmの破損品で、前ソボは中央に位置し、やや高い處は右板よりも張り出し。特に後面に著しい鼻格孔は円孔。	・DW4はIIH区下部黒褐色砂泥。 DW5はIIH区黒褐色砂泥、DW42はIIH区3黒褐色砂泥出土。

種類	品物	形 態 の 特 徴	備 考(層位)
		<ul style="list-style-type: none"> DW5は全長17.7cm、幅8.4cmあり、前ツボは中央に位置し、歯は台板よりも張り出している。鼻緒孔は円孔。 DW42は全長15.9cmの小型品で、前ツボは左に偏している。齒のつくりが特異で、台板の中央部をくり抜いて、その前・後をそれぞれ歯としたものである。そのため、前ツボは前歯の前側にあけられる通例をとらず、前歯の後側にあけられている。台板の形が前よりも後の幅が広くなっている点も、通例の下駄と異なっている。鼻緒孔は方孔。 	<ul style="list-style-type: none"> 全て平安時代の遺物を最も新しいものとする層の出土であるが、DW42は形態上古くなる可能性がある。
柳	DW14	<ul style="list-style-type: none"> 全長5.3cm、現存幅6cmの横椭の破損品で、頭部の厚さは1cmあり、歯先にむかってしたいに薄くなっている。 	・V D区大溝出土。
青串	DW30~36	<ul style="list-style-type: none"> 古墳時代のものと差異ではなく、形態上滑石を剣先に削るもの（DW30~32）と、同じ雄部のつくりで剣刃に切り込みのあるもの（DW33~DW36）がある。 完形品の長さは19cm前後であるが、DW30の現存長は31.5cmである。 	・全てV D区大溝出土。
男根 状木 製品	DW37~39	<ul style="list-style-type: none"> DW37は全長15.3cm、長径2.9cmの精円形表面を呈し、亀頭部のつくりは荒いながらもリアルである。 DW38は全長14cm、長径2.7cmの精円形を呈し、亀頭部のつくりは簡略である。 DW39は全長14.2cm、長径2.5cmの精円形を呈し、亀頭部の精工を終えていない未製品である。 	<ul style="list-style-type: none"> DW37はII H区黒褐色砂泥、DW38はV D区茶褐色砂泥、DW39はV A区下部黒褐色砂泥出土。 平安時代～中世。
小形 木器	DW26~40	<ul style="list-style-type: none"> DW26は全長2.8cm、幅2.3cmの光形品で、孔が一对あけられている。 DW27は破損品で、もともとは直径6cmほどの円盤状のものであろうか。 DW40は現存長14cm、幅2.1cmのほぼ完形品で、形態はさじ形を呈し、身部の断面は三角形、底部断面は方形である。 	<ul style="list-style-type: none"> DW26、DW27はV A区下部黒褐色砂泥、DW40はII H区2層灰色砂泥出土。 DW26は平安末～中世、DW40は7世纪。
とめ ぐし	DW17~25他 多數	DW17、DW18は未製品であるが、完形品は全長16cm前後で、側面を削って6~7面に面取りしており、両端を尖がらせている。	II H区黒褐色砂泥・V D区茶褐色砂泥、V A区下部黒褐色砂泥などの平安末～中世の遺物を含む層より多数出土。
竿柱	DW41	高さ2.2cm、幅3.9cmあり、脚の一部を欠損している。厚さは上部で0.4cm、脚部で0.6cmとやや厚いが、古墳時代の竿柱（CW140）にくらべて無骨なつくりである。	<ul style="list-style-type: none"> V A区下部黒褐色砂泥出土。 平安末～中世。



終 章 発掘調査の成果と課題

—総括にかえて—

はじめに 湖西の平野部は、東に琵琶湖、西に比叡山系の山なみをひかえて南北に細ながく続く。この平野部には、長い年月にわたって山側から押し流されてきた土砂が堆積し、複合扇状地を形成した。現在は耕地化されて平坦に見えるが、もとは扇状地の高みや谷が東西方向にはしり、起伏の多い地形であった。

今回われわれが調査対象とした湖西線予定地は、この湖西の平野部を南北に縱断する。扇状地の高みや谷はほぼ東西にはしりてるので、はからずもわれわれはこれを直角に切って調査する結果となり、地形の起伏をたしかめる上で大変好都合であった。

扇状地の高みは、縄文以来各期にわたる生活の場であり、集落、墓地などが営まれた。



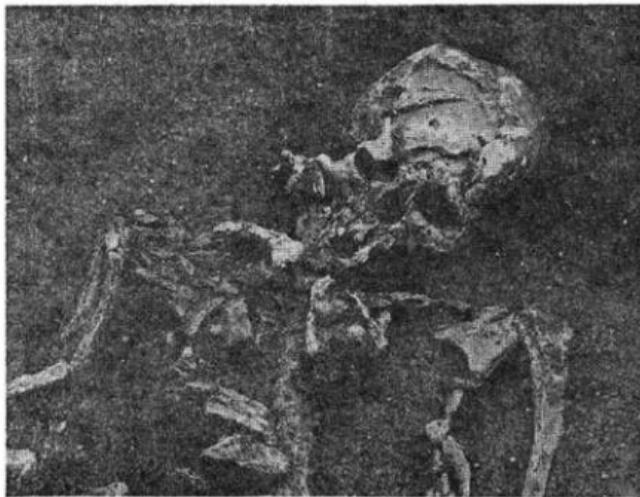
插図29 比叡山中腹より「大津京」推定地付近を遠望

われわれは、それらの遺構群を各地区にわたって検出し、遺跡の南北限については明確に把握することができたが、調査範囲の東西幅が10~15mに限定されていたため、東西限をたしかめることはできなかった。したがって、報告書の各章で取りあげた遺構群は遺跡全体の一部にすぎず、各遺跡の西への拡張については、今後特に注意を払う必要があろう。

この報告書では調査範囲の全域で検出した造構、遺物を、あらためて時代別にまとめたが、ここでも本文各章に対応して、以下の各項で発掘調査成果の要約と今後の課題を、それぞれ時代別に取りあげることにしたい。

縄文時代 (1)遺跡の範囲 これまでに近畿地方で縄文晩期の遺跡を発掘調査した例はきわめて少く、その知見も断片的であった。滋賀里遺跡の場合も、縄文晩期初頭の標識遺跡として周知の存在であったが、これまでの調査では遺構も検出されず、その範囲も明らかではなかった。したがって、滋賀里人の生活文化相全般についてはほとんど未知であったといってよい。

今回の発掘調査では、従来の研究成果を再確認するに止まつたことも多かったが、新資料、新事実の発見に加えて若干の問題点を抱むことができた。



擇図30 抽出人骨（III C 163号土塙墓）

まず滋賀里遺跡の範囲については、南北を浅い谷で区切られた扇状地上に立地することが明らかになった。扇状地の幅は南北110m余りで、北限にセタシジミを主体とする小貝塚があり、南限に近く大規模な墓址が存在する。小貝塚と墓址との間に遺構の検出されないところがあったが、ここはもともと扇状地の最も高い部分に当っており、後世の削平によって遺構は消滅したものと思われる。もし集落址の所在を想定するなら、この扇状地の最高所である削平部が最もふさわしい位置であるように思う。今回の発掘調査では、遺跡の南北限を明らかにすることはできたが、東西については、わずかに幅10~15mの範囲を発掘したにすぎず、そのひろがりを明確にすることはできなかった。遺跡の東限については、昭和23年の調査における知見や地形の復原的観察の結果、扇状地の末端はほぼ発掘地点の東方30m辺りであり、遺跡の範囲がそれより東へ延びているとは考え難い。しかし、発掘地点より西方へのひろがりについては今後の調査をまつはかない。ただ、遺跡の中心は今回の調査地点よりもむしろその西方にあったと考えられ、西方一帯は後世の削平も少なく、遺構を検出し得る可能性は非常に大きい。発掘地点に西隣する旧江若鉄道敷を調査した際にも、広範囲にわたって縄文時代の遺物包含層が存在したことは、滋賀里遺跡の西方へのひろがりをもの語る証左である。今後、今回調査した地点の西方一帯の地については、綿密な調査の実施と十分な遺跡の保存対策を行なう必要があろう。

(2) 墓址と貝塚 滋賀里遺跡における墓址の発見は、今回の発掘調査における大きな成果の一つであった。土壙墓38例、斎棺27例以上を確認したが、墓址の北端部は後世の削平によってすでに消失した埋葬遺構もあったと思われる。また、東西限については、前述のように未確認のため、墓址の規模を明らかにすることはできなかったが、すくなくとも既発見数の数倍からなるものであったと考えられる。

土壙墓中の入骨はほとんど屈葬であったが、他に遺体を固く紐で縛ったか或いは木棺の存在を想定させるような埋葬の一例、数体分の遺骨を集めて再埋葬した集骨の一例など、特殊な埋葬例もあった。

斎棺中には人骨の遺存した例もあり、その中の一例は、斎棺内に一体分の嬰児または胎児の骨が検出され、遺体をそのまま斎棺に収納したことがわかる。しかし、成年または少年の頭骨や四肢骨のみを納めた例もあり、再葬の可能性が大きく、洗骨などの存在をも想定せる。

土壙墓と斎棺とを問わず、副葬品とみられるものは全く発見されず、また、個々の埋葬についても規模、施設などの差異は認められなかった。なお、比較的残存状態の良好な



插図31 弓（AW18）の出土状態

163、214号土壙墓については、土壙ごとこれを取りあげることに成功した。取上げにあたって、奈良国立文化財研究所沢田正昭技官の全面的指導を受けた。

墓址の内容についてはすでに第1章で詳述した通りであるが、滋賀里における縄文晩期の埋葬のあり方は決して単純ではない。今後、墓址の全域にわたる調査が実現すれば、單に葬法のバラエティをつかむだけではなく、個々の人骨の年令、性別とその所属年代を数的に問題にすることも可能であり、縄文晩期の葬制を明らかにする上で大きな役割を果すことは間違いない。

遺跡の北を限る谷の斜面に、90m²ほどの小貝塚があったが、この貝塚中から土器、石器のほかに各種の骨角器を検出した。この骨角器の発見は、後述の木器群の発見とともに、滋賀里人の生活文化相を明らかにする上で、重要な意味をもっている。遺跡の一部を発掘調査したにとどまつたにも拘らず、このように各種の材質にわたる遺物を一遺跡で検出された例は、決して多くない。縄文晩期の生活文化全般を把握する上で、有意義であった。

(3) 木器の発見 遺跡の立地する扇状地の南北を限る浅い谷は、それが土砂に埋没した後も伏流水が絶えず、縄文晩期の多くの木器、漆器、植物遺体などを腐蝕させることな

く、今まで遺存させた。

これまで、縄文時代の植物性遺物は青森県是川、岩手県沼津、埼玉県真福寺など、東日本の各遺跡から出土しており、最近では福井県鳥浜遺跡で縄文前期にさかのぼる木器類を検出し注目された。こうして縄文時代の木器に関する資料は漸増しつつあり、その評価も固定してきたが、従来の出土地域が東日本に偏っていたこと、量的にお貧弱であることなどから、縄文時代における木器の生産・使用の実態や、縄文社会の生活全般に占める木器の比重については、まだ正当な評価を受けていないとはいえないようだ。

滋賀県遺跡では、土壤条件にも恵まれ、今回の調査で多数の木器を検出したが、その中には石斧の柄、弓、矢柄？、櫛などの生産用具類、容器類、建築材などがあり、縄文木器の多様性をうかがうに十分であった。また、これらの完成品と共に、原材、未製品が大量に出土して、製作工程を復原することができたことは、大きな収穫であった。

容器類には、朱漆塗口木器、同椀形木器など、漆塗りが目立つ。刃にも朱漆と黒漆とが併用されており、装飾品とみられる骨角器にも墨漆塗りの一例がある。なお、木器の製作技法について、奈良県唐古遺跡出土の高杯形木器や筒形木器を例として、弥生時代に横軸ロクロを使用したとする説が有力であるが、滋賀県出土の椀形木器が横軸ロクロを用いて製作されたものとすれば、弥生時代の前記木器類を、必ずしも横軸ロクロの使用によるものと考えなくてよいのではないか。むしろ、弥生時代の木工技術は、船作農耕文化の一要素として渡米した新技術と考えるよりも、縄文以来の伝統技法の継承を強調すべきであろうと思う。そして、このように考えるとすれば、弥生時代の鉄製工具の評価にも影響があり、その点でも重要な問題を内包しているといえよう。

(4) 縄文晩期の評価 滋賀県遺跡の出土資料を整理、検討する段階で、われわれは滋賀県出土の縄文晩期に属する土器を5型式に分類した。滋賀県I～Vの各型式と從来の編年における諸型式との対応関係は、第1章、1節、(4)項に述べた通りである。

土器の変遷については、従来の研究すでに明らかにされている諸点を再確認したことにも多々あったが、各型式の土器セットを明確にし得たこと、手法の特徴に関する知見を整理し得たこと、各型式に共存する東北・北陸系土器について岩石学的検討の結果を得たことなど、若干の新知見を加えることができた。

西日本の縄文後・晩期については、はやくから弥生文化の成立との係りにおいて注目されてきた。この観点から土器に関する検討結果をみると、縄文後・晩期における画期点を、後期末の宮施式と晩期後半の滋賀県IVの段階の、二点に求めることができる。前者は、黒

色磨研の精製土器と粗製の条痕文土器のセットが確立し、土器以外の諸要素についても新しい様相が表われる時点であり、従来の研究で明らかにされている通りである。後者は、黒色磨研土器の量的減少、器形・文様・技法における従来の規制の後退に対応し、もっとも顕著な現象として突帯文の出現を挙げることができるが、この第2の両期には、はやく滋賀里Ⅱの段階にはじまり、滋賀里Ⅲを過渡期として滋賀里Ⅳ、Ⅴに到る。

滋賀里Ⅳ、Ⅴは、晩期後半の時期に、多少の地域差をもちらがらも西日本一帯から東部の一部にまでひろがる土器の一様であり、弥生文化成立の基盤を明らかにする上で、特に注目される。ただ、今回の調査では滋賀里Ⅳ、Ⅴを層位的につかむことができなかつたので、必ずしも他の遺物との共伴関係が明らかでなく、文化相全般について論ずることはできないが、この段階に有茎縁が出現するという事実は注目されよう。そして、この傾向は西日本全体に共通するものと思われる。

最近、縄文農耕あるいは縄文稻作について新しい資料や見解がさかんに発表されているが、今回の調査では、滋賀里Ⅰ～Ⅴを通じて縄文農耕の存在に否定的な結果を得た。花粉分析の結果や石器、骨角器、木器などの生産用具の組成をみても、それは明らかである。ただし、前述の様に最も問題となる滋賀里Ⅳ、Ⅴの段階の資料が断片的であることは、縄文農耕の存否論に関しても、最終的には今後の調査を待つかないといわざるを得ない。

われわれは、調査結果を整理・検討するに当って、稻作前夜としての縄文晩期の生活文化相を歴史的に把えることを目指した。しかし現実に提起できた問題は、およそ目標にはほど遠いものに終った感があるが、それは、まだ手をつけていない多くの資料の検討と、まだ試みていない方法による資料の検討結果をまって、再論する機会をもちたいと考えている。

弥生時代 今回の調査で検出した弥生時代の遺構は、NB区の方形周溝墓群とI区の溝跡のみであった。

方形周溝墓は弥生中期の各段階にわたるもので、検出した5基だけでも相当な時間的な幅をもっている。その所在地点からみても、5基の方形周溝墓は同一墓域内的一群のものであったことは明らかであり、その墓域は西方へ大きくひろがっているものと考えられる。墓址の存続期間についても、この地点の周辺で前期にさかのばるものや後期に下るものか、今後発見される可能性は大きい。

すでに第2章で述べたように、今回その一部を検出したNB区の墓址と、南滋賀遺跡との関連を探り、さらにそれらの墓址とかかわる集落址の調査が実現すれば、単に湖西一帯

の弥生文化の研究に寄与するばかりでなく、弥生時代の集落論や墓制の研究を大きく前進させることになろう。IVB区の方形周溝墓群を含む瀬西の弥生時代遺跡は、こうした研究に至便な条件を多々持っている。

検出し得た遺構は少なかったが、弥生時代の遺物はI区からV区まで、少量ながらほとんど各地点で出土している。

東西を瀬と山地とで限られた当地の立地条件を考慮すれば、この南北に長く点々と発見される弥生時代遺物の散布状態は、なお多くの未発見遺跡が所在することを明示するものであり、今後の調査に期待するところ大である。

なお、弥生式土器に関する問題として、中期の瘤形土器について第2章で詳述したような新知見を得たことは特筆される。また、I区およびIII区で確實に弥生前期中段階にまでさかのぼる土器片が出土しており、近江における弥生文化の成立と伝播の問題を考えるための資料を加えることができた。このほか、11号、14号方形周溝墓より出土した土器群は、一括資料として、今後の縦年研究のための良好な資料となろう。

古墳時代 古墳時代に属する遺構としては、IV区とV区とに住居址群、III区からIV区



插図32 6世紀後半の建築材出土状態 (IVB区開析谷中の褐色粗砂層)

にかけて方形周溝墓群、Ⅱ区からV区までの各地点に溝跡多数が検出された。

竪穴住居址群のうち、Ⅳ区の10戸はいずれも5世紀前半以前の時期に属し、そこに古墳時代前半期の一集落が存在したことを立証した。また、V区ではVA区に1戸、VD区に2戸の竪穴住居址が存在したが、いずれも6世紀後半代のものであった。VA区からVD区までは約700mの距離があり、2つの集落があったものと考えられる。古墳時代の方形周溝墓は、弥生時代の方形周溝墓群の南端部に近接し、そこから南方へ3基が点在する。

上記の遺構群のほかに多数の溝跡を検出したが、その所属年代はほとんど6世紀末前後の時期に集中する。なお、6世紀末前後の遺物は、これらの遺構と関係なく、調査範囲の全域から出土しており、往時の盛況をしのぶに十分である。

さて、弥生時代に引きつづきこの地が人々の生活舞台として活況を呈していたことは、

古墳時代全期間にわたる遺構・遺物の発見された事をみても明らかであるが、わけても、6世紀末前後の時期は一つの頂点であったと思われる。西方の山麓には、6世紀後半以後の大規模な群集墳が点在し、また、平野部には生活の痕跡を点々と残しているのである。

われわれは、6世紀末前後の遺跡・遺物のあり方にうかがわれるこの地の繁栄を、大津宮の造営に



挿図33 溝の護岸用石材と建築材（7世紀前半、VD区東半6号溝）

つながる歴史的展開の前提と考える。その具体的な内容についてはほとんど今後の調査をまつはかないが、この湖西の一帯に大津宮が営まれることになる必然性は、その前段階における繁栄の歴史をぬきにして考えることはできない。今後、平野部における集落址の調査と、当地に点在する群集墳の調査とを統一的に把握する研究が必要であろう。

次に、今回の調査結果の中で個別に問題とすべき 2、3について述べる。

まず、古墳時代の方形周溝墓に関して、同一地域の同一時期に古墳が存在するにも拘らず、依然として弥生時代以来の墓制の一つである方形周溝墓が営まれているという事実に注目する必要がある。湖西地域の場合、この両者の関係を明らかにする上での諸条件に恵まれている。最近、方形周溝墓の性格論が説かれはじめているが、当地のように恵まれた条件をもつ一定の地域内で、古墳や集落址との有機的関連を追究するような、具体的な資料にもとづく実証的研究が、何よりもまず必要であろう。

次にⅢ E 区の谷で検出した一括土器について、われわれはこれを近江における土師器の最古型式とした。この一括土器中に、当地の製品とは思えない庄内式の壺形土器（C59, 64, 131, 132）を含んでおり、この発見は古墳時代初頭の畿内と近江とを結ぶ環として、大きな意義をもつものと考える。

このほか、5世紀中葉から後半にかけて大阪・陶邑古墳群で生産されたとみられる初期須恵器の一群が検出されたこと、6世紀後半以後に現れる近江タイプの土師器について新知見を得たことなど、古墳時代の土器に関する成果もすくなくなかった。

Ⅲ E 区の谷では、5世紀後半を中心とする遺物群の中に、子持勾玉、石製模造品、玉類、手鏡ね土器など、祭祀品と目される遺物が含まれていた。これらの祭祀遺物は、比叡山の前山を対象とした神奈備信仰か、あるいは谷を流れる水に関する信仰にかかるものか、いずれにしてもⅢ E 谷の至近点に祭祀の場があったことを想定させる。

なお、Ⅲ E, N B の谷から、古墳時代各期にわたる多量の木器が出土したが、用途不明のものが多く、今後、他例を参考にして検討を繼續したい。

飛鳥時代以降　　今回の発掘調査における主要な課題の一つは、大津宮関係の遺跡を明らかにすることであった。

「日本書紀」によれば、大津宮の存続期間は667年から672年までの足かけ 6 年間で、壬申の乱の際、宮はことごとく焼失して、以後廢都と化したという。

この大津宮の所在については、これまで多くの研究があり、大津市街地、同聚津、同旧滋賀村などにその位置を求める。このうち、旧滋賀村地内に宮都を求める説が有力だ

が、内裏推定地についての見解は一致していない。

われわれの調査した湖西線敷設予定地は、ちょうど從来の大津宮推定地の中の旧滋賀村説にもとづく推定京城のどこかを、ほぼ南北に横切っている。したがってこの調査範囲内における大津宮時代の遺構や遺物は、長い間にわたる大津宮所在論にとって重大な意味をもつことは明らかである。

発掘調査の結果、大津宮時代と確定できる遺構は、ⅤD区の大溝のみであったが、遺物についてはⅡH区の一括品をはじめ、少量ではあるが各地区にわたって検出することができた。

ⅤD区大溝の所在地は、現大津市穴太の一角にあたる。大溝の所在地は、山側から琵琶湖の方向に張りだしたかなり広い扇状地上に当っており、附近の水田面よりもかなり高い。

大溝は幅4m深さ1.2mで、ほぼ東西方向に走る。溝底は西から東へわずかに傾斜しており、溝内からは大津宮時代を中心とする相当量の遺物を検出した。溝内の遺物は精巧な陶器、特殊な形態の丹塗土師器類をはじめ、大津宮時代に比定できる須恵器、土師器の良好な一括資料であり、大溝の性格を考える上でも重要な発見であった。第4章でも述べたように、この大溝出土の土師器類には、他地区の情況と異り、近江タイプと考えられる壺が認められず、畿内に一般的にみられる壺がその主体をなしている。この壺形土器のあり方は、前記の出土遺物と共に、大溝が単なる集落址などに付随するものではなく、むしろ地域性を離れて中央との接触が強い官衙、寺院などにかかわる遺構であることを物語るものではないだろうか。

次に、ⅡH区の出土品であるが、ここは際川のすぐ南にあたっており、遺物の大半は各期にわたって西側の山側から押し流されて再堆積したものであった。

ⅡH区西方の山裾には、著名な南滋賀庵寺、弥生時代の南滋賀遺跡があり、ⅡH区の出土遺物も、弥生時代から奈良、平安時代までの各時代にわたっている。しかし、この中最も注目されるのは墨書きのある土師器盤蓋を含む大津宮時代前後の土器群である。ⅡI区に遺構そのものは存在しなかったが、この比較的まとまった資料は、大津宮にかかわる何らかの遺構が存在することを想定させるに十分である。

このⅡH区の土器群は、先述したⅤD区大溝の出土品と共に、ほぼ大津宮時代に比定することができ、土器編年に基準を与えることになろう。この土器群の編年的位置については、飛鳥における宮跡、寺院址関係の土器との年代関係とも矛盾しない。

最近、大津宮推定地周辺における発掘調査が盛んに行なわれている。われわれの調査が

終了した後にも、大津宮関係の重要な発見は2、3にとどまらない。瀬西線の開通とともにあって、当地の開発が急速に進行することは目に見えているが、この重大な局面での発掘調査には、今後一層の系統性と組織的取組みが要求されよう。次々に実施されていく調査が、前回の調査成果を正しく踏まえることなく、個人的な経験のいたずらな積み重ねに終るなら、調査に注ぎ込んだ貴重な労力や費用は卓なる浪費にすぎなくなろう。

われわれの今回の調査は、大津宮研究に関する成果としては微少なものかも知れない。しかし、遺構や遺物の検出以外に実施した旧地形の復原的研究や、大津宮前代に関する調査など、すくなくとも今後の研究に生かすことのできる幾つかの結果を得たことは、大きな収穫であったと信じている。

「大津京」関係文献目録

『近江奥地誌略』江戸時代

木田 幸「滋賀都址」(『史海』5) 1891年

木村 一郎「大津皇宮御跡尊重保存資料」1901年

中田 審信「弘文天皇御陵考」(『古蹟』3の4) 1904年

作 偕友「長等の山風」(『洋信友全集』第4, 国書刊行会) 1907年

喜田 貞吉「上代帝都の所在に就いて」(『歴史地理』10-1) 1907年

喜田 貞吉「歷代帝都沿革図」(『歴史地理』10-1) 1907年

星野 一恒「上代源朝遷都の理由」(『歴史地理』10-5) 1907年

喜田 貞吉「大津京遺都考」(『歴史地理』15-1, 2, 近江号) 1910年, 1912年

吉田 東伍「大日本地名辞書」(富山房) 1911年

喜田 貞吉「本邦都城の制」(『歴史地理』17-1, 2, 5, 6, 18-2, 4, 5, 6) 1911年

『大津市志』上 1911年

久米 邦武「志賀の都と湖水との関係」(『歴史地理』近江号) 1912年

三浦 四行「歴史上より見たる近江」(『歴史地理』近江号) 1912年

大西 源一「壬申乱地理考」(『歴史地理』21-3, 4, 6) 1913年

喜田 貞吉「帝都」(日本学術普及会) 1915年8月

喜田 貞吉「梵祇寺と其寺址参考地」(『歴史地理』27-4, 5) 1916年

喜田 貞吉「木邦古代の都市について」(『歴史地理』27-5) 1916年

喜田 貞吉「帝都」1921年

太田 光「近江」(『日本国跡資料叢書』巻部甲陽堂) 1925年

牧野信之助「滋賀県史第2卷」1928年

浅海 正三「地中の皇都」(『歴史教育』4-4) 1929年

肥後 和男「大津京跡の研究」(『滋賀県史蹟調査報告』第2冊, 滋賀県保護会) 1929年

肥後 和男「大津京跡の研究補遺」(『滋賀県史蹟調査報告』第3冊, 滋賀県保護会) 1931年

中川 泉三「近江の地理と交通」(『歴史地理』57-4) 1931年

川上 多助「都についての考察」(『史学』11-1) 1932年

肥後 和男「崇福寺に関する延藤善蔵の記事」(『滋賀県史蹟調査報告』第5冊, 滋賀県保護会) 1933年

田村 吉永「大津京址に関する一私見」(『大阪朝日新聞』滋賀版) 1933年

国松 久弥「日本上古の都市」(『地理学』2-1) 1934年

米倉 二郎「条里より見たる大津京」(『歴史と地理』34-1) 1934年

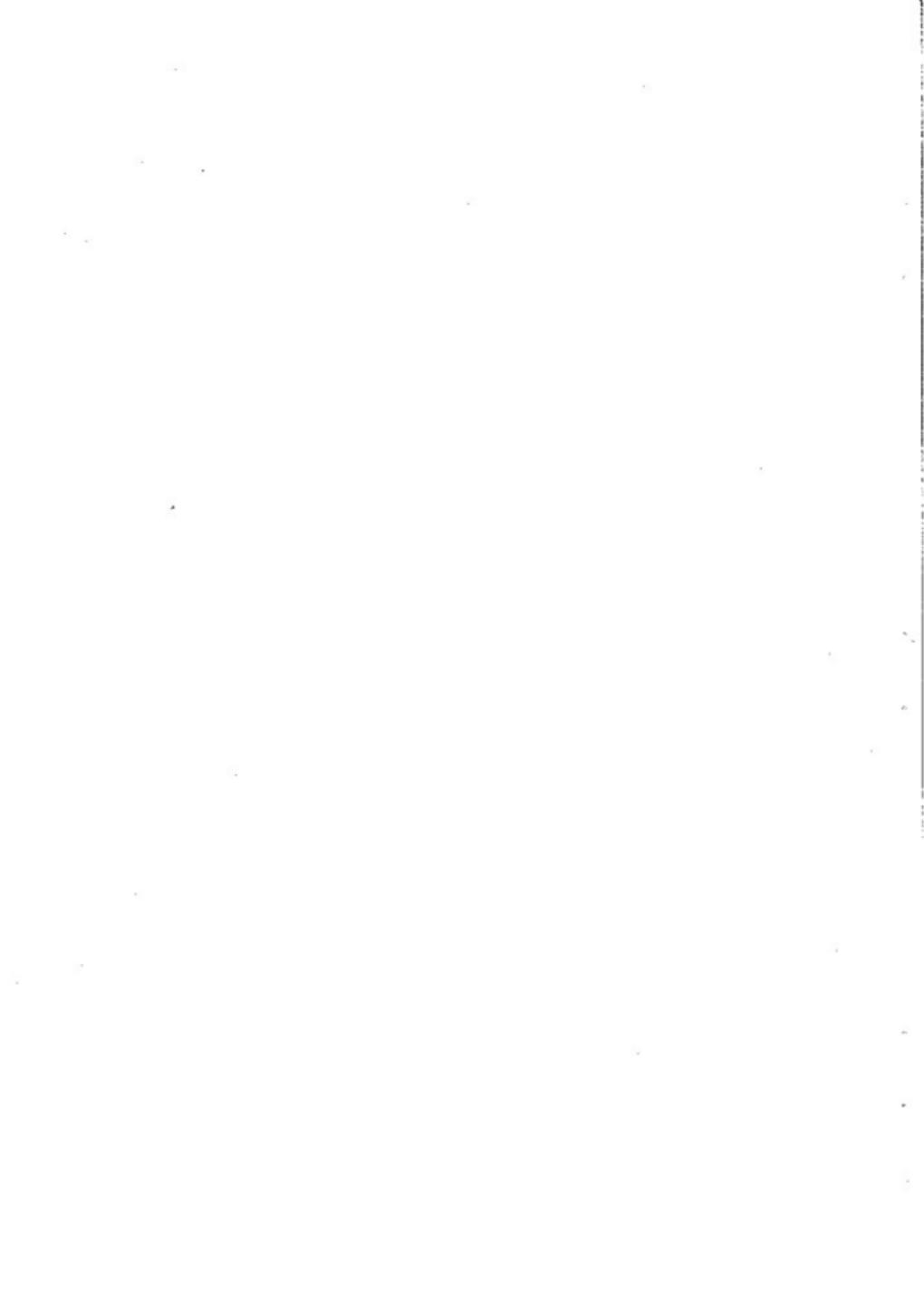
佐竹 純耳「南滋賀出土方形瓦の文様について」(『史迹と美術』51) 1935年

- 熊田 寿城「近江志賀宮址」(『日本史蹟大系』2) 1935年
『滋賀県史蹟名勝天然記念物摘要』1936年
- 足立 康「志賀寺の「内塔」に就て」(『史迹と美術』7—13) 1936年
- 田村 吉永「大津京考」(『大和志』4—8) 1937年
伊福部隆彦「日本帝都史考」(『都市問題』27—4) 1938年
- 園松 久弥「本邦都市形態の歴史的展望」(『都市問題』30—2) 1940年
- 足立 康「大津京の位置について」(『建築史』2—5) 1940年
- 柴田 実「大津京址」上、下(『滋賀県史蹟調査報告』第9、10冊) 1940年、1941年
肥後 和男「大津京」(『歴史教育』14—11) 1940年
- 足立 康「大津京址の位置—南滋賀境守は宮址にあらず」(『新風土記』2—1) 1941年
- 足立 康「大津京延評」(『建築史』3—2) 1941年
- 森口泰良吉「大津京における春日神社」(『大和志』8—4) 1941年
- 足立 康「大津宮跡と鈍学堂院寺址」(『史迹と美術』12—7) 1941年
- 石田 茂作「香様の起源とその發展」(『考古学雑誌』31—7、8) 1941年
- 大井重二郎「上代の御都」(『立命館出版部』) 1944年
- 梅原 実治「近江滋賀里崇福寺の塔址」上、下(『宝鏡』33、34) 1945年
- 福山 敏男「梵祇寺について」(『史迹と美術』16—1) 1946年
- 敷田嘉一郎「近江大津宮の位置」(『史迹と美術』16—3) 1946年
敷田嘉一郎「大津宮重論」(『史迹と美術』16—6) 1946年
- 梅原 実治「崇福寺問題とその経緯」(『史迹と美術』16—7) 1946年
- 田中 重久「崇福寺址と梵祇寺址に関する研究」(『史迹と美術』16—8) 1946年
- 石田 茂作「崇福寺の遺跡について 附梵祇寺址」(『史迹と美術』17—1) 1947年
- 石田 茂作「崇福寺問題について梅原博士の示教に答ふ」(『史迹と美術』17—3) 1947年
- 敷田嘉一郎「山川考(大津京余論)」(『史迹と美術』17—3) 1947年
- 石田 茂作「近江崇福寺址考証」(『仏教考古学の研究』1 美術社) 1948年
- 毛利 久「合利容器について」(『史迹と美術』200) 1950年
- 梅原 実治「大和法隆寺杏葉草文軒平瓦一類の復原」(『史迹と美術』203) 1950年
- 岩崎小弥太「天智天皇の立て給ひし常の典」(『日本學上院紀要』9—1) 1951年
- 石田 茂作「國宝紹介 崇福寺塔心礎の置品」(『ミュージアム』24) 1953年
- 青木 和夫「淨御原令と古代官僚制」(『古代学』3—2) 1954年
- 林 陸朗「近江令と淨御原律令」(『同史学』63) 1954年
- 高橋 亮「天智天皇と天武天皇」(『統日本紀研究』1—9) 1954年
- 滝川政次郎「保良京考」(『史学雑誌』64—4) 1955年
- 直木孝次郎「天智天皇と皇位繼承法」(『人文研究』6—9) 1955年

- 坂本 太郎「天智紀の史料批判」(『日本学士院記要』13—3) 1955年。
- 大井重二郎「都城の經營について」(『統日本紀研究』3—9) 1956年。
- 景山 春樹「大津京関係遺跡の出土品解説」(『近江古美術大觀考古篇』第1輯, 近江古美術大觀刊行会) 1960年。
- 景山 春樹「大津京とその関係遺跡について」(『近江古美術大觀考古篇第1輯, 近江古美術大觀刊行会』) 1960年。
- 田中 卓「天智天皇と近江令」(『神道史研究』8—6) 1960年。
- 山本 栄吾「近江神宮藏の所謂鐵瓦について—その研究と私見—」(『神道史研究』8—6) 1960年。
- 吉井 良隆「天智天皇と近江國」(『神道史研究』8—6) 1960年。
- 樋口 清之「上代官邸伝説地の一研究」(『国学院雑誌』62—9) 1961年。
- 水野 正好「滋賀県大津市南滋賀町庭寺跡」(『日本考古学年報』昭和48年度)
- 杉山 信三「古代都城跡および宮殿建築」(『建築雑誌』907) 1962年。
- 堅田 修「桓武天皇の菟佐寺について」(『古代文化』9—2) 1962年。
- 岸 俊男「古代帝都概観」(『仏教藝術』51) 1963年。
- 田村 円澄「古代遷宮考」(『史洲』92) 1964年。
- 福山 敏男「近江大津京」(『岩波古典文学大系 日本書紀下』岩波書店) 1965年。
- 藤岡謙二郎「歴史的景観の美」(河原書店) 1965年。
- 西田 弘『大津市南滋賀町焼光調査報告』1966年。
- 福山 敏男「大津の宮」(『滋賀県の自然と文化財』滋賀県文化財懇話会) 1966年。
- 藤岡謙二郎「大津京と付近の地割」(『滋賀県の自然と文化財』滋賀県文化財懇話会) 1966年。
- 鶴川政次郎「大津紀行」(『史迹と美術』365, 366, 367, 368.) 1966年。
- 鶴川政次郎「大津京考」(『法制史論叢』第2冊, 角川書店) 1967年。
- 鶴川政次郎「大津京余論」(『法制史論叢』第4冊, 角川書店) 1967年。
- 山田 弘道「御守は長く天足したり——主として万葉地理の立場から——」(『国語と国文学』) 1968年。
- 西田 弘「大津京難考」(『民族文化』53, 54, 56, 60) 1968年。
- 久尾 芳久「律令の編纂」(『日本古代法の研究』法律文化社) 1969年。
- * * *
- 鶴岡 良助『日本地理誌料』
- 西田直二郎「崇福寺跡の発掘を見る」(『竜谷史報』1) 1928年。
- 福島 成行「天智天皇御陵伝説考」(『史学普及会報誌』6)
- 足立 康「人麻の歌と大津宮趾」(『月光』2—7)
- 福尾延市郎「大津京条坊に関する一試見」
- 坂詰 秀一「宮殿跡研究の現状」(『歴史教育』10—3)

付 篇

- 1 繩文式土器の岩石学的分析 清水芳裕
- 2 玉・石器類の鉱物・岩石について 石田志朗・井本伸広
- 3 滋賀里遺跡の花粉および植物遺体 那須孝悌
- 4 滋賀里遺跡より出土した獸骨類について 亀井節夫
- 5 滋賀里遺跡出土の魚類遺存体 金子浩昌
- 6 湖西線建設の際に出土した古代遺物の年代測定 山田治・富永信成



付 篇 1

縄文式土器の岩石学的分析

——滋賀里遺跡出土の北陸・東北系土器について——

清 水 芳 裕*

本遺跡出土の晩期縄文式土器の構成が、滋賀里式土器に加えて、少量ながら北陸地方にその分布圏をもつ型式の土器と亀ヶ岡式土器とからなっていることは從来から注目されてきている。この近畿地方中央部は、亀ヶ岡式土器の強い影響のもとに独自の地域圏を形成する中部地方以東とくらべ様相を異にして、少なくとも後期後半以降、全体的に四日本の文化圏に属する。この地域において亀ヶ岡式土器が散在的に認められるという事実は、單なる異質の型式土器が混在するという問題だけなく、縄文時代晩期の近畿地方に現われる地域的特性を理解する上でも重要な意味を内包している。

以前から、この亀ヶ岡式土器は搬入品であるのか、あるいはそれぞれの発見地域で製作されたものか、という点についてはさまざまな解釈がなされてきたが、客観的事実を示すにいたらば、問題を残してきている。このことは北陸系土器に関しても同様である。

今回、この二種の型式の土器が本遺跡から出土する現象を具体的な形で捉える一手段として、滋賀里式土器をも含めて個々の土器の製作地を検討することになった。

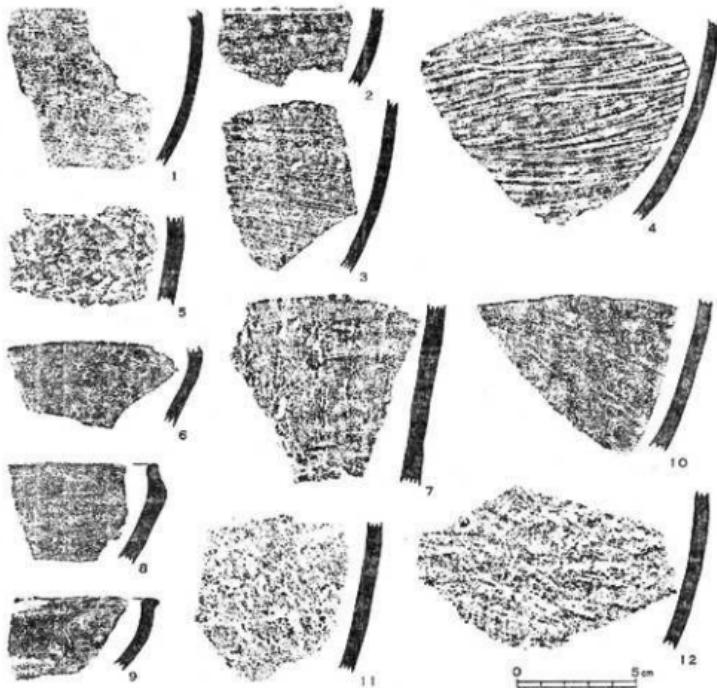
方法としては、土器の薄片をもとに含有する岩石鉱物を偏光顕微鏡によって鑑定し、その結果からいざれの地域の地質構造に基づくものであるかを比較検討することにした。ただこの方法に限らず、埋化学的試料処理に共通の問題であるが、試料とされる土器片は一個体中きわめて小部分であるという難点がある。したがってここでは、一試料の結果を可能な限り多數の薄片から導くよう努めるとともに、薄片中に存在する岩石鉱物を積極的事実として捉えることにした。今後、土器一個体中における岩石鉱物偏在の存否の問題が解決されれば、方法上さらに前進するであろう。

試 料

対象とした試料は（付図1・2、付表1）に示した北陸系土器12片、亀ヶ岡式土器25片と

* 東北大大学院考古学専攻生

滋賀里式土器12片である。滋賀里式土器のうち、試料番号①～④は滋賀里Ⅱ、⑤～⑧は滋賀里Ⅲ、⑨～⑫は滋賀里Ⅳ～Vとそれぞれ分類されているものである。



付図1 分析資料（滋賀里式土器）

土器中の岩石鉱物

各土器中の岩石鉱物は（付図3・4）に示したとおりである。分類上、単一結晶として存在するものを鉱物とし、個々の鉱物に分解せず複数の鉱物によって結晶をなすものを岩石として大別した。また、石英、カリ長石についてはその成因による形状の差異によってさらに細分した。

地質条件

滋賀里遺跡を中心として、その周辺地域の地質構造について概観しておく。

遺跡は花崗岩からなる比叡山の山麓に形成された扇状地末端部に位置する。また、この地域を含めた琵琶湖周辺部は、かなり広い範囲にわたって形成されている粘板岩、砂岩を中心とする堆積岩類と花崗岩を主体とする。

琵琶湖北端から約50km以北の地域には、安山岩および火山噴出物の堆積からなる凝灰岩など、火山岩類に属する地質構造が広く現われる。この北陸地方の地質は、内陸部と海岸部地域の2つに大きく区分される。内陸部地域は第三紀深成岩を主体とし、部分的に飛騨変成岩がみられる。いっぽう、海岸部地域は、内陸部の地質が形成されたのち、新しい時期の火山活動に伴なり火山碎屑物によって形成されている。したがって、その中間地域には両地質構造が複雑に交錯する部分が存在する。こうした地質構造から明らかなように、現在の海岸部沖積地には両地質の構成物が混在している事がわかる。

土器製作地の検討

① 滋賀里式土器

各土器片とも、バーサイト構造のカリ長石、微斜長石、花崗岩という花崗岩質の地質構造に特徴的な岩石鉱物のいずれかを含有している。この構成は比叡山をはじめとする琵琶湖周辺部の花崗岩、および堆積岩類からなる地質条件と一致する。したがってその製作地を琵琶湖周辺部の沖積地に求めてよいと思われる。さらに、本遺跡が比叡山山麓の扇状地末端部に立地することから、この地を製作地とする想定を否定する材料は全くない。しかしまた、こうした小地域に限定する積極的根拠もないのでここではひろく琵琶湖周辺部の沖積地という結論に留めておきたい。

② 北陸系土器

(付表1) 中の試料⑬～⑯、⑰～⑲、㉓、㉔は、融食形石英(付図3-3)と安山岩(付図4-10)のいずれかを含有している。この点で滋賀里式各土器にみられた岩石鉱物の構成とは明らかに異なる。融食形石英と安山岩は火山岩類に属するもので、琵琶湖周辺部の地質構造からは、導き出し得ないものである。本遺跡を中心として周辺地域に安山岩を含み得る地質構造を求めるならば、福井県北半部から石川県にいたる海岸部を中心とする地域と、大阪府、奈良県の境に位置する二上山一帯があげられる。しかし、この土器群が北陸地方にその型式分布画をもつことから、その製作地を北陸地方に求めるのが妥当である。

さらに、この二種の火山岩類の岩石鉱物以外に、バーサイト構造のカリ長石(付図3-4)、微斜長石(付図3-5)、花崗岩(付図4-9)のいずれかを同時に含んでいる。こうした構成のあり方から、北陸地方の沖積地、もしくは火山岩質、花崗岩質の両地質構造が交錯す



付図2 分析資料(北陸系土器13~24、亀ヶ岡系土器25~49)

る。やや内陸部にいたる地域の河川流域をその製作地とみなすことができる。

以上の事実は、これらの土器がその中心的な型式分布圏にあたる北陸地方で製作され、本遺跡へ搬入された事を証明するものである。

いっぽう、そのほかの⑩～⑬、⑭の試料中にはさきに挙げた融食形石英、安山岩も、それ以外の火山岩類に属する岩石鉱物も存在しない。したがって⑩～⑬、⑭～⑯、⑰、⑲の各試料の場合と同様の製作地とみることはできない。あるいは一個体中に岩石鉱物の偏在があり、薄片中に現われなかったことも考えられるが、ここでは不明としておく。

③ 亀ヶ岡式土器

いづれの土器片にも北陸系土器にみられた火山岩質の岩石鉱物は全く存在しない。この結果から北陸地方での製作を想定することはできない。またいっぽう、多くの試料において、岩石鉱物の構成のあり方、堆積岩類の形状および多量性などの点で滋賀里式土器との共通点を見出すことができる。⑩、⑪～⑬、⑭、⑮、⑯、⑰～⑲、⑳、㉑の各土器がこれにあたる。この結果にしたがって判断するならば、その製作地は滋賀里式土器の場合と同様の地域と考えることができる。しかし、さらに明確な結果を得るために、今後上記の試料番号以外の土器片の結果とともに、中部地方を含めた周辺部地域の土器との比較などをとおして、より積極的根拠となるべき事実を捉える必要がある。

限られた試料から一定の問題に対して断定し得る結果を導き出すことは容易でない。ここで検討した結果も、一遺跡の試料のみからであるため、消極的な結論に終った面も多い。

しかし、今回の試みによって、滋賀里式土器はいづれも本遺跡を含めた琵琶湖周辺地域という範囲にその製作地を求めることができ、また北陸系土器の大半は明らかに北陸地方から本遺跡へ搬入されたものであるという事実が明らかになった。北陸系土器のこの現象は、北陸地方とこの近畿中央部の遺跡集団との間に直接的な交流が存在したことを示すものである。

参考文献

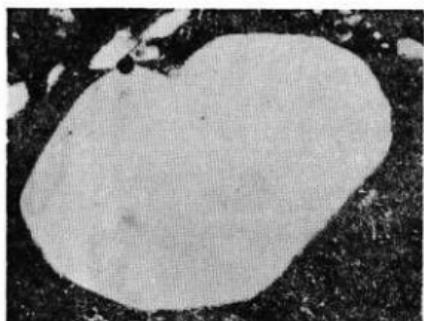
- ① 坪井清足「滋賀県大津市滋賀里遺跡」『日本考古学年報』1 1948年
- ② 地質図「金沢」「京都」(50万分の1)工業技術院地質調査所発行 1958年
- ③ 各県地質図「石川」「福井」「京都」「滋賀」「岐阜」「大阪」「奈良」(20万分の1)
- ④ 市川浩一郎、藤田至則、島津光央編『日本列島地質構造発達史』築地書館 1971年

結果を導くにあたり、東北大学理学部・加藤祐三先生から御指導、御助言を仰いだ。記して感謝する。

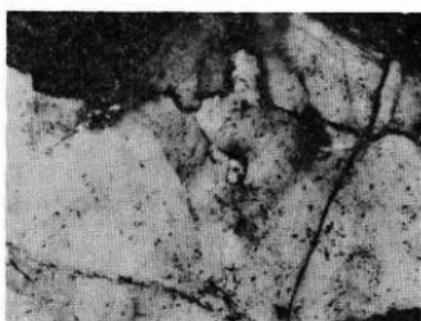
付表I. 土盤中の岩石鉱物分類表

	石英 融 動 消 食 形 形	カリ長石 長 石 ナ イ ル 石	斜 長 石 ナ イ ル 石	微 斜 長 石 ナ イ ル 石	角 閃 石 ナ イ ル 石	輝 青 石 ナ イ ル 石	白 雲 石 ナ イ ル 石	ジ ル コ ン ク ル ス ナ イ ル 石	綠 簾 石 ナ イ ル 石	大 花 崗 岩 ナ イ ル 石	火 成 岩 ナ イ ル 石	堆 積 岩 ナ イ ル 石	變 成 岩 ナ イ ル 石
游 質 里 式 土 器	1	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	4	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	5	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	6	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	7	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	8	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	9	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	10	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	11	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	12	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
北 海 系 土 器	13	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	14	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	15	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	16	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	17	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	18	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	19	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	20	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	21	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	22	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	23	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	24	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
地 質 形 式 土 器	25	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	26	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	27	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	28	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	29	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	30	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	31	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	32	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	33	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	34	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	35	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	36	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	37	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	38	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	39	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	40	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	41	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	42	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	43	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	44	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	45	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	46	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	47	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	48	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	49	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

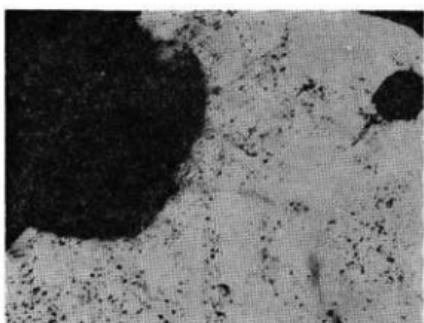
(○は薄片中に「ある」)
(○は薄片中に「多量にある」)



1



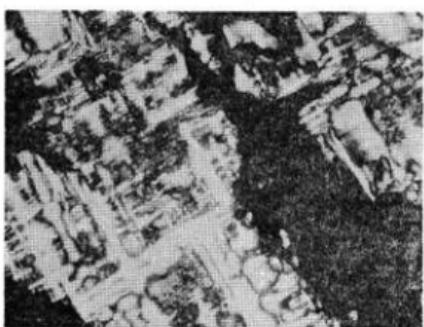
2



3



4



5



6

付図3 土器薄片中の岩石鉱物 ($\times 100$, 直行ニコル)

1 一般形の石英 (亀ヶ岡式土器-27)

2 波動消光を示す石英 (北陸系土器-20)

3 磨耗形石英 (北陸系土器-20)

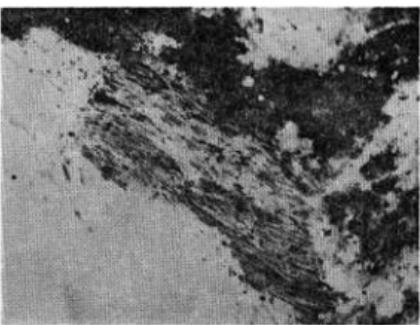
4 カリ長石のペーサイト構造 (亀ヶ岡式土器-28)

5 微斜長石 (北陸系土器-14)

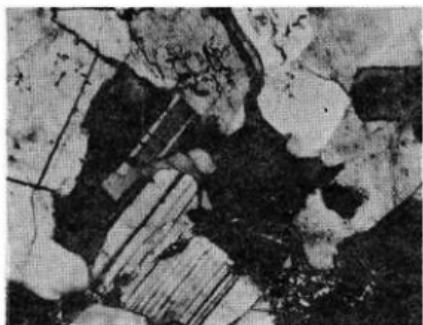
6 斜長石 (亀ヶ岡式土器-29)



7



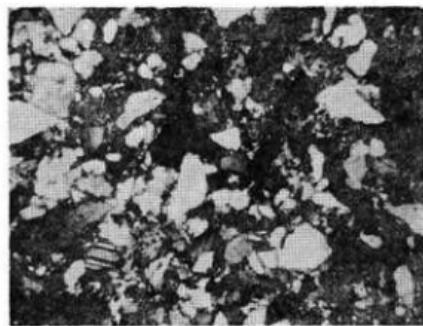
8



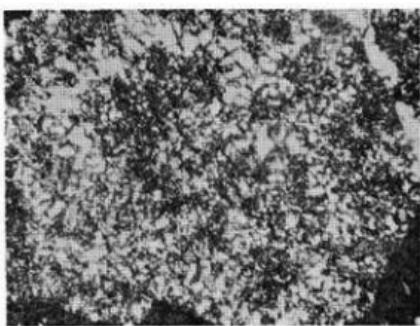
9



10



11



12

付図4 土器薄片中の岩石鉱物 ($\times 100$ 8・10平行ニコル, 7・9・11・12直行ニコル)

- | | |
|-------------------|-------------------|
| 7 黒雲母 (亀ヶ岡式土器-44) | 8 白雲母 (亀ヶ岡式土器-44) |
| 9 花崗岩 (北陸系土器-17) | 10 安山岩 (北陸系土器-13) |
| 11 砂岩 (亀ヶ岡式土器-30) | 12 泥岩 (亀ヶ岡式土器-36) |

付篇 2

玉・石器類の鉱物・岩石について

石田 忠朗・井本 伸広

滋賀里遺跡および各地区的各層準から産した鉱物・岩石名は考古学的記載にある。ここでは鉱物・岩石の鑑定の経過と、玉類ならびにサスカイトといわれる岩石について簡単に述べる。層準や石器の種類と岩質とを考慮した考察は考古学的記載にゆずる。

岩石の内眼鑑定は石田が行ない、一部について中山勇氏の教えをこうた。またサスカイトについて河添正宏氏に教えをうけた。玉類については、井本が実体顕微鏡およびX線回折法により鑑定し、一部益富寿之助氏と中山勇氏のご意見をうかがった。鑑定にご協力いただいたこれらの方々に厚くお礼申し上げます。

I 玉類

9試料の玉類の鑑定結果は付表1に示すとおりである。すなわち、試料番号01, 08が碧玉、02がひすい、05, 06, 011が緑閃石を含む結晶片岩、07, 09は蛇紋岩、010は珪質火山岩石基か珪質凝灰岩である。

益富寿之助氏によれば、碧玉(01, 08)は島根県玉造が産地と考えられ、このような質のものは他の地域ではしられていないといふ。またひすい(02)は新潟県小瀬産といいきれるものではないが、結晶度のよい点を考慮して、必ずしも小瀬が産地として可能性があるといふ。中山勇氏は鳥取県若桜産のひすいにもこのようなものはあり、その他関東地方でもこの程度の質のものは産出が考えられるといふ。

試料05, 06, 011はX線回折図では白雲母しか検定されないが、内眼鑑定であきらかに緑閃石(陽起石, actinolite), 緑れん石類(epidote group), 緑泥石類(chlorite group)からなり、片状構造をもつ。産地の可能性としては三波川帯の結晶片岩であるが、その他の変成帶でも可能性はある。

試料010は珪質火山岩石基または珪質凝灰岩と考えられるが、益富氏は玉造の碧玉の風化部の可能性があるといふ。この点は十分検討する必要がある。

II 石器類(滋賀里遺跡川土)

石器類は層準あるいは用途により、岩質が異なるようであるが、それらは考古学的記載

* 京都大学理学部地質学鉱物学教室 ** 京都教育大学

付表1 玉類鑑定結果

井本伸広

'73.3.12

試料番号	形態	X線回折図にあらわれた 鉱物	材質	造物番号
01	マガタマ (淡緑)	石英	碧玉 (jasper), 岐阜県玉造付近 に産するものに酷似する	C S 19
02	マガタマ (淡緑)	ひすい輝石, 長石? 不明線 (明瞭) 2本	ひすい輝石を含む苦長岩, 新潟県 小瀬川のものに似る	C S 18
05	偏平管状 (緑)	白雲母	緑閃石を含む粘晶片岩 緑閃石は粗粒のため回折線があら われていないものと考えられる	A S 216
06	管状 (緑) 半分に欠損	白雲母	"	A S 215
07	管状 (+) (緑黒)	蛇紋石 (antigorite)	蛇紋岩	C S 15
08	管状 (濃緑)	石英	01に同じ	C S 17
09	管状 (短) (緑黒)	蛇紋石 (antigorite)	07に同じ	C S 16
010	管状 (淡緑)	石英, 長石類?	珪質火山岩石基または珪質凝灰岩 (鶴飛坂下で黑雲母が認められる)	C S 14
011	管状 (緑)	白雲母	05, 06に同じ	C S 20

X線回折条件 Cu k α , Ni フィルター
30KV, 10mA
Sc, Sp. 2°/min
Chatt Sp 20mm/min
Time Conet. 1 sec
Melt 200 C.P.S.
1°-1°-0.3

にゆずる。鑑定した岩質はかなりの種類があるが、多いのはいわゆるサヌカイトとよばれる岩石と粘板岩のホルンフェルスである。他に古生層の砂岩・粘板岩・チャート・輝緑凝灰岩 (塩基性火山岩類) や花崗岩類、玢岩、輝綠岩、アブライト (半花崗岩)、粘晶片岩などがあり、また明らかに中生代末酸性火山岩類や新第三系の砂岩・安山岩・凝灰岩などもある。

古生層の岩石、とくにホルンフェルスや花崗岩は遺跡の近くで手に入るが、その他の岩石は他地域から持ちこまれたものである。中生代末火山岩類は湖東でしられ、湖西でも北部にその疊層はある。新生代の岩石は瀬戸内のものがあるが、裏日本のグリーンタフ地域のものも含まれている可能性がある。

結晶片岩は三波川帯と考えるのが妥当なところであり、とくに点紋帶の岩石はその北帯

にある。領家帶北縁の岩石といえるものもあるが、三波川帶の岩石と同様東西に長く伸びる変成帯のものなので、その帶のどの地域であるかは限定できない。

肉眼鑑定で不明なものもいくつかあり、また鑑定したうちでも不確実なものがある。とくに古生層の輝緑凝灰岩のうちの玄武岩質熔岩については、異論がある。これらのうちのやや粗粒なものは、丹波帶の輝緑凝灰岩中には見掛けないもので、貫入岩体である輝緑岩あるいは麁動岩である可能性がある。またホルンフェルスと粘板岩の区別も一部に混同があるおそれがある。しかしこれは熱変質の程度の問題であり、わずかに熱変質をうけたものを『熱変質をうけた粘板岩』として分離した方がよかったと考えている。今回それらはホルンフェルスと粘板岩としたものの両方に含まれている可能性がある。

「サヌカイト」について

サヌカイト（讃岐岩, Sanukite）は Weinschenk (1891) の命名・記載した岩石で、香川県高松市白峰の頂部から採集したものである。黒色緻密で鉄鉢でたたけば金属音を発する。岩石学的には、斜方輝石とくに古銅輝石の小針状結晶に富み、ハリ質石英を有する古銅輝石安山岩 (Bronzite Andesite) の熔岩である。斜長石の小針状結晶が方向性をもち、またテミナ構造をもつ。風化すると表面が白色となる。

白峰のサヌカイトはほぼ水平にある熔岩流であるが、この上・下の熔岩流はサヌカイトとよく似ているが、構成鉱物がやや異なるものである。これらを讃岐岩質安山岩 (Sanuki-toid andesite), 讳岐岩質玄武岩 (Sanukitoid basalt) とよぶ。すなわち前者は普通輝石と單斜輝石をもつ阿輝石安山岩であり、後者は微體石をもつ玄武岩である。

阿部正宏氏によれば、二上山のいわゆるサヌカイトといわれる岩石は讃岐岩質安山岩に含まれ、無斑晶安山岩とよぶべきもので、古銅輝石を多く含まないことでサヌカイトと区別できるという。

今回、発掘担当者がサヌカイトと思ったもののうち14個をえらんで岩石顕微鏡で観察した。うち9個はいわゆる『サヌカイト』であり、残り5個のうち3個は粘板岩のホルンフェルス、1個が粘板岩、1個が斑晶をもつ輝石安山岩であった。ホルンフェルスや粘板岩、斑晶をもつ安山岩などはよく洗えば、肉眼またはルーペによる観察で、『サヌカイト』と混同するおそれはないと考えられる。実体顕微鏡をつかい、十分拡大して表面を観察すればより確かである。

いわゆる『サヌカイト』がサヌカイトかサヌキトイド岩石かを区別することは簡単ではない。今のところ薄片をつくり、岩石顕微鏡下で小針状の斜方輝石が古銅輝石か紫蘇輝石

かを、その屈折率または光軸角の違いにより判定している。今回はその作業を行なっていないので、斜方輝石による同定はできなかったが、X線回折法によりサスカイトとの違いがあらわれた。

模式地のサスカイト3試料と前記のいわゆる「サスカイト」9個のうち3試料とのX線回折図は、いずれも斜長石のピークがあらわれた。しかし両者でその斜長石が明らかに異なり、また各々3個の中では違いが殆んど認められない。この違いを鉱物・岩石学的に検討しなければならないが、現段階ではこの遺跡の「サスカイト」は模式地のサスカイトでない可能性が大きい。

将来、四国あるいは二上山などのサスカイトとサスキトイド岩石を、野外・室内で十分研究すれば、X線回折その他の方法で試料をこわさずに識別することができ石器の产地をかなり限定して推定できるようになる可能性があると考えられる。

Ⅲ D-2yw42 黒色砂混泥土層

1. ホルンフェルス
- 2,3,4,5. サスキトイド安山岩
- Ⅲ D-2yo42 黒色砂混泥土層
- 6,8,12,13,14. サスキトイド安山岩
7. 普通輝石安山岩
- 9,11. ホルンフェルス
10. 粘板岩

(1~11はフレーク、12~14は石錐)

Ⅲ D-2yw42-2 と Ⅲ D-2yo42-12, -14とをX線回折法によりしらべた。

文 献

- Koto, B. (1916) On the Volcanoes of Japan V Jour. Geol. Soc. Tokyo vol. 23, [pp. 95-127]
 久野 久 (1935) 「瀬戸内海周辺における熔岩の噴出順序について」 地質誌42巻, 505号, 653
 -655頁。
 松本 隆 (1950) 「瀬戸内系火山岩における混生現象」 地質誌56巻, 663号, 529-535頁。
 稲本良平他 (1953) 「二上山の地質」 地球科学 11号, 1-12頁。
 Weinschenk, E. (1891) Beitrage zur Petrographie Japans Neues Jahrb. Min.,
 Petro., Paleont., B-Bd. VII. S. 133-151.

付 篇 3

滋賀里遺跡の花粉および植物遺体

那須孝悌*

I 試料および処理方法

試料は滋賀里遺跡発掘現場内の4地点(Ⅲ C-2xu-39, Ⅲ C-2xu-43, Ⅲ C-2xy-31・25, Ⅲ D-2xs-42・30)から採取した縄文時代晚期のもの9個と、それより新しい時代のもの5個、およびⅢ D-2xs-46・50地点より採取した縄文時代後期のもの2個を扱った。試料採取日は1972年5月17・18日である。

トレンチの側壁から採取した試料は、塊状のまま持ち帰り、植物遺体については、5%のNaOH水溶液に一晝夜浸し、さらにHClで中和したのち、水にとかして、タイラー標準筋で115メッシュ(0.125mm)以上の大きさの遺体はすべて捕集した。

花粉分析は、現生花粉の混入をさけるよう試料の表面を削り取ったのち、10%KOH(室温24時間)→水洗→ZnCl₂(800~1000rpm, 60分)→水洗→HF(室温24時間)→水洗→封入(グリセリンゼリー)の順に行ない、400~1000倍の鏡下で木本花粉250個以上を同定した。

II 植物 遺 体

今までに同定できた遺体の種類およびその相対的な産出量は付表1にまとめて示した。縄文時代晚期の遺物包含層には、アラカシ、トチノキ、ヒシがきわめて多く、イヌザンシュウ、ノブドウ、エゴノキ、オニグルミ、クリ、アカメガシワなども多い。

これらのうち食用に供したためと思われる破膜の跡がみられるものは、ヒシ、クリおよびオニグルミのみであり、そのうち、ヒシとクリは焼いたあとがある。多量に産出するアラカシのドングリとトチノキの実は、つぶれたような破片も多いが、完形のものも多いため、食用に供したかどうかはわからない。

ヒシの実は非常に多いが、すべて細かく研かれており、全体の形を復元することは困難であるが、前川文夫氏が千葉県加茂遺跡から報告記載したアズマヒシ(*Trapa matsumotoi* F. Maekawa)(前川, 1952)とは異なり、シリブトヒシ(*T. macropoda* Miki)にきわめて

* 大阪市立自然科學博物館(1973年4月より大阪市立自然史博物館)

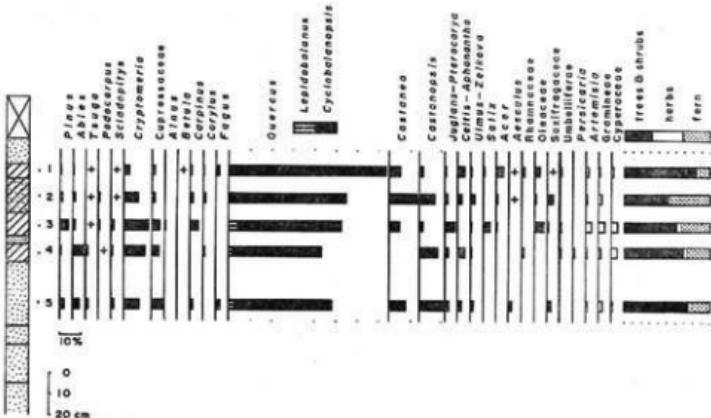
近い形態を示す。ただし、洪積世の化石や兵庫県昆陽池に現生するシリブトビシにくらべると果皮がきわめて厚い。焼けこげた跡と割れ口のようすから考えると、適度に焼いたのち果皮を削って子葉部分を取り出したものと思われる。

縄文時代後期の遺物包含層から産出する植物遺体は、縄文時代晩期の遺体群集と基本的には同じであるが、ヒロハノエビモヤスゲ属など、水中または水辺の植物の種子が多い。

III 花粉分析結果

扱った試料の花粉群集（一部は付図1に示した）は、いずれも常緑のアカガシ亞属、シイノキ属およびクリ属、スギによって優占され、モミ属やエノキムクノキ属、ヒノキ科も多い。しかし、マツ属やコナラ亞属、草本花粉がきわめて少い。このような花粉構成は、滋賀里周辺や後背地の北白川花崗岩山地における現在の植生が成立する以前の植生、いいかえれば、人間による植生破壊が進行する以前の植生を反映したものと思われる。その点では焼畑農耕の存在は、すくなくとも滋賀里遺跡周辺については肯定しがたい。また、焼畑農耕の対象となったといわれる植物の花粉も検出できなかった。

遺体の多産するトチノキ属の花粉がきわめて少いのは、もともとトチノキの花粉生産量が少いためであり、トチノキが沢沿いの地域に生育していたため遺体が集積しやすかった



付図 1 III C-2xy-31.25地点の花粉ダイアグラム

木本（木本を含む）花粉の百分率は木本花粉のみを基数とし、草本花粉の百分率は花粉総数（木本および草本花粉）を基数として示してある。

ためと思われる。

縄文時代晩期遺物包含層のイネ科花粉は、花粉全体の3%未満であり、粒径の最頻値は31~32 μ である。しかし、なかには粒径40 μ 以上53 μ までの大きさのものが、イネ科花粉の25%まで含まれている。現在のイネ (*Oryza sativa*) の花粉は、①粒径40~52 μ (つぶれると53~57 μ に達する; 尚 NAKAMURA (1969) によると粒径のもっと小さなものもあるという) ②孔の内径1.2~3 μ ③孔縁隆起が著しく、隆起の外縁線は明瞭である。④孔縁隆起の外径5.4~7.3 μ ⑤花粉膜は厚く、光学的には2層に分れ、内層も厚い。⑥孔縁隆起は花粉膜外層の肥厚によるだけではなく、どうじに内層の肥厚によっても表現されるが、内層は花粉粒の内側方向に肥厚する。ただし、内層の肥厚部は周囲と漸移的であるため外縁線はやや不明瞭で、その外径も外層の隆起外径よりやや小さい。⑦花粉膜の表面はほとんど平滑か、もしくは細かな点状紋がある。しかし不定形の波状隆起紋や低い丘状隆起紋は無い、という特徴がある。しかし、滋賀里遺跡の縄文時代の遺物包含層から産出するイネ科花粉は、個々の花粉粒によって特徴に差はあるが、上記の諸特徴にくらべると3ないし4点の明瞭な相違がみられるため、イネ (*Oryza sativa*) の花粉は存在しないと判断した。

IV おわりに

滋賀里遺跡の植物遺体および花粉を扱うにあたり、京都大学の加藤修氏には発掘現場での試料採取地点の指示をしていただき、また京都女子大学の田中伸子さんには試料の処理およびデータ整理を手伝っていただいた。また京都大学の石川忠朗氏、東山高校の池田頑氏には数々の御便宜をはかっていただいた。報文を終るにあたって深く感謝する次第である。

文 献

- 前川文夫 (1952) 「加茂遺跡から出た小形の植物性遺物について」:『加茂遺跡』, p.125~130。
 NAKAMURA, J. (1969) Palynological Evidence for Recent Destruction of Natural Vegetation
 II: Ishizuchi-ike: Annual Rep. JIBP-CT(P), Fis. Y. 1969, p.102~107;

Part of remain	III-C-2xy					III-C-2xa			III-D-2xa				
	1	2	3	4*	5*	1	2	3*	4*	3*	4*	5**	6**
C ₆ , L				R		C	R		R	C			
N						R	C		R	R			
F											C		
F, L, If				C		R	A	vA	C	C	C		
F, L						R	C		R				
N									vR				
S			R						R		vR		
Zanthoxylum schinifolium						C	C	C	R	C	R	A	
Phellodendron amurense						R	R		R		R		
Mallotus japonicus						R	C	A	vR	vR	C		
Acer sp.						R	R		R	vR			
Asplenium trichomanes						R	R		R		R		
Anuplophorus brevipedunculata						vA	A		C	A	vR		
Tropaeolum macrophyllum						C	vR	R	C		vA		
Cornus controversia						R	C	A	R	A			
C. brachypoda						R	R	R	R		C		
Syringa japonica						vR	R		R		R		
Hippophae ?						C	vA	C	vR	C	C		
Unbilliferae						R	R		R		R		
Polygonaceae													
Potamogeton cf. perfoliatus						S							
Gramineae						R							
Scirpus sp. ハタチバ属						S							
Carex sp. カヤツリグサ属						S							
Musci 蕨類						G							

C: 常綠樹木, L: 素, N: 壓木, F: 常葉, If: 雄蕊花序, S: 地下莖, R: 穗, vR: 藤管。
VA: 植多, A: 多, C: 少, R: 稀, vA: 稀。

付 篇 4

滋賀里遺跡より出土した獸骨類について (図版57, 58)

亀 井 節 夫 *

滋賀里遺跡の発掘により出土した骨類は多様なものである。そのほとんどは骨片であり、人為加工の骨器・角器も多數存在する。これらから、當時、その地域に生息し、狩猟・加工・食糧の対象となった獸類について概観することとする。

まず、もっとも量的にも、また、個体数においても多いものは、イノシシとシカであり、これらにスッポン、サカナが次ぎ、さらにトリ、ウサギ、アナグマ、タヌキ、カエルがあり、まれにクマ、サル、オオカミ(?)が混在している。この傾向は黒色砂混泥土層においても灰褐色泥土層においても、同様に認められるが、とくに前者が量的にも種類においても勝っている。

イノシシは、ニホンイノシシ *Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK であり、頭蓋部、下顎、脊椎骨、牙、臼歯などで代表され、四肢骨は、末端骨を除いて骨片化し、関節部付近のみ残存している。これらのものの大さから判断して、現生のものよりやや大型であり、成獣、老獣、幼獣が含まれる (図版58-10~13)。

シカはニホンシカ *Cervus nippon* TEMMINCK であり、イノシシと同様に、頭蓋、下顎、脊椎骨、臼歯などで代表される。四肢骨、肋骨はいずれも骨片化している。角も、一個の完全なものを除いて、細片化して人為加工はあきらかである (図版58-1~7・9)。

イノシシ、シカともに、その長骨はあきらかに人工的に割られたものであろう。また、スッポン *Amyda japonica* (TEMMINCK et SCHLEGEL) (図版57-16) やトリ(おそらくキジなど) (図版57-13・14) の骨とともに加熱されたものがあり、食用に供せられたものであろう。これらの底状は密集状態であり、各骨が同一個体に属するものもあり、おそらく一頭分をまとめてその場で処理したものであろう。

このほか、ノウサギ *Lepus brachyrurus* TEMMINCK の骨もかなり普遍的に見られる。 (図版57-18) また、食肉類も数種類が認められる。タヌキ *Nyctereutes Procyonoides* GRAY、アナグマ *Meles meles anakuma* TEMMINCK、イタチ *Mustela sibirica* PALLAS

* 京都大学理学部地質学植物学教室

が含まれるようである（図版57—12・17・19）。「これらは主として歯や下顎、長骨の一部で代表されているが、長骨は骨片化することなく、そのままのものがある。

食肉類として、ニホンツキノワグマ *Selenarctos thibetanus japonicus* SCHLEGEL が見られる（図版58—8）。牙玉としても、この上顎犬歯が用いられているが、頭骨や四肢骨の一部も見られることから、遺跡の周辺で生息していたものであろう。また、オオカミ *Canis lupus* LINNAEUS のものと思われる臼歯 2 個と上腕骨 1 個が出土している（図版57—11）。このものがニホンオオカミあるいはエゾオオカミの何れに属するかは興味があるが、臼歯の形状からみて、かなり大型のものであったことが予想される。

なお、齧歯類、食虫類と思われるものの骨片も認められた。前者にはムササビ *Pteropus leucogenys* TEMMINCK と思われるものが含まれるほか、ヤチネズミの骨片らしいものも認められた。靈長類として、ヒトの歯（ミシ歯のものも一個あり）や骨片のほか、ニホンザル *Macaca fuscata* BLYTH の切歯と臼歯が得られている（図版57—9・10）。

以上のように、滋賀里遺跡出土の獸骨類から判断される獸類の種類はきわめて多種類である。多くは骨片化して、概観の段階では同定できないものも多数あるので、その種類は更に増加する可能性がある。また、資料が豊富であるので、イノシシ、シカについてはその群構成、たとえば年令、性別に関する量比などを求めるこどもできよう。

骨の同定に関して、梅野博幸、田中正昭の両氏に協力を得た。ここに記して謝意を表する。

付 著 5

滋賀里遺跡出土の魚類遺存体

金 子 浩 目*

I. 魚類遺存体の種類

脊椎動物 VERTEBRATA

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

真口亜綱 TELEOSTOMI

1. サケ科の一種 ? *Salmonidae gen. et sp. indet.*
2. ウグイ *Tsibololdon hakonensis*
3. コイ *Cyprinus carpio*
4. フナ *Carassius carassius*
5. ナマズ *Parasilurus sp.*
6. ギギ科の一種 *Bagridae gen. et sp. indet.*
7. スズキ *Lateolabrax japonicus*

II. 魚類遺存体の概要

上記の魚種は、Ⅲ D-2yv41 (1×1) 灰褐色泥土 (-20cm) よりブロックサンプリングした砂土中より検出された骨を査定したものである。全標本は13cm径シャーレに3個分位の量であり、その大部分は、コイ、フナなどの輻鰓、鰓蓋骨などの頭部諸骨、それに肋骨、椎骨であった。しかし、折れて破片になっている標本が多く、そのすべてが同定されたわけではないが、ほぼ種類の上では、上記したものが、遺存骨の大部分であったと思うのである。次にのべる各種魚骨の数量的な面は、このようなわけで、標本のすべてではないことをあらかじめお断りしておかねばならない。

下記のうち、数字は標本の数、計測値は特に記してない限りmmである

1. サケ科の一種

椎骨 4

椎体横径 3.4~4.2、椎体長 2.7~3.0

* 早稲田大学考古学研究室

採集されたのはいずれも小さいものばかりである。

2. ウグイ

咽頭歯 右2, 左1, 他に咽頭歯破片1.

鰓蓋骨 右2, 左2

標本は完全なものはない。大小の個体が含まれ、大きいので体長30cm弱に達する。

3. コイ

歯骨 右3, 左2

咽頭歯 右3, 左6

鰓蓋骨 右3+(1), 左3+(2) () 中は破片

フナとともに魚骨の主体をなす種類である。鰓蓋骨は一個の完存標本を除いて他はすべて破損。咽頭歯の保存がよい。咽頭歯でみると9個体分（咽頭歯の左右はいずれも異個体である）であり、鰓蓋骨標本も大きさの点ではこれとほぼ一致するものである。咽頭歯の中で、体（全）長が70cmに達する大きさの咽頭歯1個、35~45cm位の体（全）長をもつのが7個、30cm弱のもの1個であった。

4. フナ

歯骨 右8, 左7

咽頭歯 破片のみ4

鰓蓋骨 右11+(4) 左7+(3) () 中は破片

おそらく本遺跡で最も多くの遺骸をのこしていた種類であろう。歯骨と鰓蓋骨が多いのに対して、咽頭歯の少ないのは、フナの咽頭歯がコイに比べて極めて脆弱であるからである。出土した標本から復原される個体の体長は、鰓蓋骨からみて標準体長（河部宗明：原色魚類検索図鑑、北隆館、昭和38年3月）17cm位の大きさのものが最も小さいが、その大きさの鰓蓋骨は僅か2個のみで、他は体長20~25cm位のが7個、他は30~40cm位になる3個体のものであったと考えられる。この他にコイ、フナ類の小椎骨があり、それらは10cmに満たぬ小さな個体のものであった。そのような小椎骨の数はあまり多くないので、漁獲の主

* 加藤竹一郎：丹波から出土したコイの咽頭歯、「採集と飼育」Vol. 19, No. 10, 昭和32年10月
コイの計測統計は主としてこの報文による。

** コイ・フナの遺存骨には、上述したものの他に、大形の基底後頭骨5個と、大小の椎骨がある。
椎骨中にはコイ・フナの他の種類も含まれるので、なお精査に時間を要するのでここでは詳しく述べられない。大きさによるおおよその数量は、椎骨長5.5~6.5前後のもの216個、3.5~4.5
前後のもの162個、それよりさらに小さく椎骨長2.0前後までのもの約100個があった。

対象とはされなかつたようである。

5. ナマズ類

歯 骨 右1
関節骨 左1
頸 骨 右4 左2
前顎骨 (2)
第1胸鱗 右3 左2

標本はフナ、コイに次いで多い。標本のいずれも大形のもので、特にひときわ大きい1個の鱗骨は体長が70cm位に達するかも知れず、他の4個も40cmにはなる個体のものであつたろう。関節骨もおそらくこの最大級の個体に属するものであろう。

6. ギギ科の一種

鰓蓋骨 右1
頸 骨 右1 左1
胸 鰭 右2 左3

出土量は少ない。体長22~23cm位の大きさになる個体のものである。

7. スズキ

椎骨 2+(2) ()は破片

椎骨の大形のは椎体横径15.3、同長10.7、小形での椎体横径8.6、同長7.0である。大形の椎骨は充分に成長したスズキのであり、小形のはフッコとよばれる体長30cm位の若い個体のものである。

III. 滋賀里遺跡で知られた魚類相の特徴

滋賀里遺跡で知られた魚類の遺存体はすべて淡水底産であって、純粋の海魚とされるものは含んでいなかった。そのいずれもが琵琶湖水系において捕獲されたものと思われる。琵琶湖岸遺跡として知られるものには、早くに発掘調査された大津市石山貝塚があり、ここでは縄文早期の貝層中より、滋賀里遺跡と同じコイ、フナ、ナマズ、ギギ類の遺骸が検出されている。いずれ機会をあらためて、石山貝塚の出土標本とも詳しく比較してみたいと思っているが、おそらくかなり共通した様相がみられるのではないかと思っている。なお、石山貝塚では、エイ類の尾鱗が出土しているが、これなどは意図的に運ばれたものな

のであったろう。尾棘のみ運ばれたのか、魚体ごとであったのかは、出土する魚骨を今少し調べてみなければならないことであろう。

ところで、わが国では河口あるいは内湾の奥にヤマトシジミを主体とする汽水系貝塚が形成され、コイ、スズキなどの魚骨を出土する貝塚例は関東以西の処々で知られるが、純淡水系貝塚は極めて少ない。その一つは、東北地方宮城県北部から岩手県最南部の北上川中流域、つまり仙台平野北部の伊豆沼、長沼という湖沼水域の周辺に分布する淡水貝塚群である。筆者らは、そのうちの一つ岩手県花巻町貝島貝塚を昭和45年に発掘調査して、淡水貝塚にみる魚類組の特徴を報告した。そこで知られたのは、大形のフナを主体として、それにウナギがかなり含まれ、さらにギギ類、サケ類、ニゴイなどを含むものであった。東北地方の貝塚にコイの遺骸を全く含まないのも興味深いが、この貝島貝塚も同じ後期から晩期にかけて形成された貝塚である。今、両貝塚の諸特徴を詳しく比較する余裕をもたないが、漁撈、狩猟の諸活動面でいろいろ共通点が存在するようである。このようなところから、両遺跡の文化がさらに明らかにされてくるのではないかと考えている。

付録 6

湖西線建設の際に出土した古代遺物の年代測定

山田 治 富永信成^{**}

1. 年代測定の原理について

空気中には約8割の窒素、2割の酸素の他に、いろいろの気体が少しづつ混じっているが、植物の生育に必要な炭酸ガスも0.04%の割合で含まれている。この中の炭素は大部分が質量数12の¹²Cで、ほかに約1%くらい¹³Cが存在し、放射能をもつ¹⁴Cは全体の約1兆分の1くらいの微量で存在する。この放射性炭素¹⁴Cが年代測定の主役をするわけである。

¹⁴Cはもともと空気中にあるものではなく、地球大気の上層部の成層圏で宇宙線によって作られ、その生成の割合は長年月にわたってほぼ一定であったと考えられる。しかし¹⁴Cは半減期約5700年でベータ線を出して崩壊していくので、生成と崩壊の釣合った状態で空気中の¹⁴Cの存在比は長い間ずっと一定に保たれていたものと推定される。この期間は相当長いもので、数百万年位は大した変化がなかったであろうとされている。炭素年代測定の限界は高々10万年くらいのものであるから、年代測定の可能な範囲ではほとんど変化がなかったとみなしてよいわけである。しかし、完全に一定であったわけではなく、何万年かの間には数%くらいの変動はあったらしいと考えられる。1%のゆらぎは約80年に相当するので、何万年もの古い試料については問題でないが、数千年くらいうち近い時代では1%のゆらぎのもつ意味は大きい。したがって、測定精度の上昇と共に、この微少のゆらぎも問題になって来ている。

さて、植物は生きている間は炭素同化作用を営んで空気中の炭酸ガスから炭素を取りこんで炭素をはき出しているので、植物体中の¹⁴C濃度は空気中の¹⁴Cの濃度と平衡状態にあるが、一旦枯死してしまうと炭素の吸収は止まるので、¹⁴Cの濃度は崩壊によって時間の経過と共に減少する一方になる。そこで最初は現代の植物中の濃度に等しかったと仮定すれば、古代植物中の¹⁴C濃度を測定することにより経過した時間が推定できるはずである。ただし、ここで測定できるのは出土した有機物が枯死した年代であって、場合によつてはそれを利用して生活していた人間の活動時期とずれることもありうるので注意を要す

^{*} 京都産業大学理学部助教授^{**} 京都産業大学理学部学生

る。多くの年輪を持つ大木の場合などではその一番外側の年輪の値が枯死の時点に相当し、中心に近づくにつれ、その年輪数だけのずれが生ずる。

年代測定の試料としては、木材のほかに炭、草根、貝殻などが適当なものである。ただし、試料は特徴かれてしまうので、保存したい貴重なものを用いるわけにはいかない。

2. 測定の方法

年代測定用試料から取り出した放射性炭素を測るには非常に精密な装置がいる。現在用いられている装置には大別して2通りがあり、一つは試料からの炭素を炭酸ガス、アセチレン、メタンなどの気体にし、大容積の比例計数管内に充填して放射線を計数するもので、もう一つは試料からの炭素をベンゼンやアルコール等の液体にして液体シンチレーションカウンターで測定する方式である。

気体比例計数管では、試料の量はふつう1リットルないし2リットルで、特別な目的のために10リットル近いものも作られている。測定時間は1000分間程度(約1昼夜)で、それ以上の測定は異常計数が増していくので不正確になりやすい。この方式での測定誤差は統計誤差だけで1%くらいがふつうで、年数に換算して約80年である。10リットルの計数管では0.3%まで統計誤差を小さくできる。

液体シンチレーション方式では、試料を液体にすることによって体積は気体に比し数百分の1に減るので試料の量をもっと増すことができる。測定時間もずっと大きくとることができ。筆者らはこの方法で統計誤差0.3%くらいまでの測定を行なって来たが、今年の秋から0.1%の統計誤差(年数にして8年)にすることを目指している。液体シンチレーション法の長所のもう一つは、試料をいつまでも同一状態で容易に保存できることである。疑わしい測定値が生じたときでも、何回もくりかえして測定することにより不慮の事故による測定誤差を除き、厳密かつ容易に再現性を確認できるので、科学における普遍性、信頼性という点でも大きな意義を持つ。一見異様に見えた測定値でも、それが真的ものであるか、器械の故障等によるものか、それとも試料の採取の上で疑問点があるのかということが再測定、再検討をくりかえすことによって明らかにできるであろう。

3. 測定とその誤差について

測定値には必ず誤差が伴なう。誤差という言葉はまちがわれやすいが、これは誤りの意味ではない。自然科学的測定においてどこまで測定値が正しいかという目安を示すために

用いる量であって、誤差を持たない測定はない。歴史的にはっきりしている事実でも、某年某月某日の何時何分という表現をすれば正確な時点を示すことができるが、たいてい某年とか、某年某月くらいまでで止まるのと似ている。自然科学では測定できない限界の部分を誤差と称する。したがって、誤差が小さければ小さいほど測定の精度が高いということになる。

ところで、年代測定の場合、この誤差の表現をするのに、数学的な統計誤差だけを一般に誤差として用いているので、この受取られ方が問題である。現在の表記法では、この統計誤差の中に真の値が含まれる確率は約67%しかない。つまり、どんなに正確な測定をしたとしても、表記された誤差の範囲から真の値がはみだしている確率が33%もあるのである。もし、測定値に付加された統計誤差の2倍の値を誤差と考えれば95%の信頼度があることになるし、3倍を取れば99.5%の信頼性があることになるのである。例えばある遺跡の炭素年代測定値が 2000 ± 100 B. P. と表記されたとしよう。この遺跡から出土した遺物からの考古学的推定が仮に1800年前とされるとき、一般には測定値が合わないと見るのはなかろうか。実は、このくらいなら考古学的推定値と、炭素年代測定値はかなりよく合っていると見なければならないのである。つまり、統計誤差100年の範囲では約67%の確率でしか真の値が含まれないのであるから、200年ずれることがあっても何等ふしぎではないのである。別の言い方をすれば、ある測定機関が真の値を統計誤差範囲に捕えうる割合は100回当り67回しかなく、33回は必ずはずれるというわけである。したがって、統計誤差とはこのようなものであることを受取る側が理解してかかるべきことを痛感するのである。

しかし、一方では、1000年や2000年の年代測定が誤差200年も300年も出でて意味をなさないという声も当然出でてであろう。すなわち、弥生時代で25年きざみの縄年ができるといふとするなら、自然科学的方法ではせめて統計誤差10年という測定をしなければならないのである。それでやっと20年ないし30年の幅のうちに真の値が95%位ははいってくることになる。

ようやく今年の秋から筆者らの実験室で1万年以内のものなら統計誤差10年の線で測定できることになったので、今後は考古学からの期待にかなり応じられるであろう。

4. 精密な年代測定のための問題点

現在、炭素年代測定を精密にしたいというときの最大の問題点は、かなり大量の試料が

必要であるということである。大量といつても炭素にして約2モル、すなわち24グラムくらいの試料があればよい。これは乾燥木材で約5倍くらい、120グラム程度に相当し、貝殻なら200~300グラムである。湿った木材では大部分が水と泥であるので更にこの数倍がいるであろう。そしてできればもっと多いほどよい。試料が少なくても測定できなくはないが精度は落ちる。日本では弥生時代の木材や、縄文時代の貝殻などはかなり大量に出土するので、この要求はそれほど過大ではないであろう。しかし、今後の方針としては、重要な遺跡で炭素試料が多量に得られるところを徹底的に測定しておき、中間を土器の編年で内挿してもらう方がよいであろう。

測定精度があがると、今まで気にしなくてよかった程度のもろもろの誤差の原因を考慮していくなくてはならなくなる。空気中の¹⁴C濃度の変動がどの程度存在するか、地域的差はないか、試料の種類によって違いがないか、その他いろいろな測定原理の基礎的问题をひとつひとつ解決していくことが必要になる。それらの問題がかなり明らかにされるまでは、炭素年代測定法を余り過信して頂かない方がよいのかもしれない。

5. 試料について

(1) 採取地点Ⅲ E区・08 開拓谷内（大津市滋賀里）

135°1'15" N

35°51'50" E

(2) 山土状態

流木、自然倒木のごとき木材、

年代測定試料は、いずれも一旦洗浄、化学的処理ののち、メタノールに合成され、液体シンチレーションカウンターAloka601型によって測定された。

6. 測定結果

(1) 流木A 2260±90 B.P.

310 B.C

(2) 同上 2280±90 B.P.

330 B.C

(3) 流木B 2450±90 B.P.

500 B.C

- (4) 同上 2300 ± 130 B.P.
350 B.C.
- (5) 自然倒木 2260 ± 100 B.P.
310 B.C.
- (6) 同上 2240 ± 100 B.P.
290 B.C.
- (7) 同上 2100 ± 85 B.P.
150 B.C.
- (8) 同上 2290 ± 85 B.P.
340 B.C.

註：B.P. は Before Present の略で、1950ADを0として計算する。現代の標準はアメリカの
国立標準局より国際的標準として販売されているNBS^{14C}標準を用いた。半減期としては5730±30(年)
を用いた。

7. おわりに

この報告は、まだあまり精度のよくない装置で測定したものであるので、かなり大きな誤差を持っており、あくまでも中間報告的なものである。したがって今後はもっと信頼性の高い測定値が得られるはずで、この値に疑念を持たれる方は次の報告を待って頂きたい。
なお、これから測定すべき試料のうち、III C・III D区滋賀里遺跡（縄文時代）の木器の原材および貝殻などがあることを付記する。

昭和48年3月20日 印刷
昭和48年3月31日 発行

湖西線関係遺跡調査報告書(本文編)

編集 財団法人 滋賀県文化財保護協会
湖西線関係遺跡発掘調査団
口辺昭三
発行 滋賀県教育委員会
印刷 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL 075 (351) 6034



特別史跡安土城跡平面図

(1976年測量)

0 50 100 200m

史跡観音寺城跡平面図

(1980年測量)

0 50 100 200m

